

識別名：リーパー

兔秤

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気が付くと少女はクレーターの中心に立っていた。それから少女は空間震の裏で起こっていた物語に巻き込まれていく。

少女は物語の中心に居る幼馴染を影からサポートしたり、その過程で自分の失われた記憶と過去に向き合ったりしながら、幼馴染とその周りの精霊達と日々を過ごす。

今、存在しなかったはずの精霊が誕生し、新たな戦争が始まる

デート

目次

設定：能力等が分からない場合ここにへ

(ネタバレ) (変更の可能性アリ)

1

十香デッドエンド

少女は魂と霊力の精霊となった

8

少女は肉体を取り戻した

16

少女は彼らの後をつけた

20

死神は封印を目撃した

24

四糸乃パペット

死神は魂を込めた

28

少女は弱気な隠者を助けた

35

少女は少年を問い詰めた

43

少女は司令官から情報を得た

51

死神は後処理をした

58

狂三キラ

死神は悪夢と衝突した

63

少女は重複した約束を見た

69

少女は自身の謎に触れた

72

死神は屋上を目指した

78

琴里シスター

死神は少年と悪夢を救った

82

少女は謎の想いに困惑した

86

少女は謎の想いに結論を出した

少女は清掃に勤しんだ

99

凜祢ユートピア

少女は日常に違和感を感じた

108

少女は驚かせようと策を生じた

119

少女は球技祭を写真に収めた

124

少女は異常の中心を見つけた

130

少女は日々を繰り返した

135

少女は虫相手に気絶をした

139

少女は少年にお詫びをした

145

少女は家の中を整理した

149

少女はまた日々を繰り返した

153

少女はまた日常に違和感を感じた

158

死神は繰り返される日々を終わらせた

165

千夜サマーバケーション

少女は夏休みが楽しみだった

176

少女は短冊に願いを乗せた

180

少女は最凶の最恐の最狂と戦った

188

少女は島への旅行を楽しんだ

194

少女はサバイバル生活を始めた

200

少女はサバイバル生活を満喫した

206

少女はアイドルの曲を作曲した

211

少女は誕生日を祝った

218

少女は灯籠を燃え上がらせた

227

少女は他の人と間違えられた

234

死神は煩惱の多い修道女を助けた

239

少女は夏祭りを楽しんだ

246

八舞テンペスト

少女は或美島に修学旅行で向かった

253

少女は枕投げで大暴れした

257

少女はビーチバレーをした

262

死神は世界最強の魔術師と戦った

265

少女は購買戦争へ向かった

273

美九リリイ

少女は天央祭の準備を始めた

284

少女は少年に女装をさせた

288

少女はステージで演奏をした

291

死神はウィザードを蹴散らした

297

死神は悪夢と協力することにした

301

美九トウルース

死神は女神と隠者の記憶を弄った

307

死神は悪夢に置いてかれた | | 312

死神はウィザードに苦戦した | | 315

死神は反転を感じた | | 320

少女はミスコンに参加した | | 325

精霊キングゲーム

少女は王様ゲームをした | | 333

少女は無表情少女の無双を見た

342

少女は無表情少女の反則を見た

353

少女は王様ゲームに参加しなかった

362

万由里ジャッジメント

少女は謎の球体を見た | | 373

少女は謎の少女との接触を図った

379

少女は悪夢に情報提供を求めた

385

少女はまたもや悪役を演じた | | 390

或守インストール

少女は仮想世界に少年を助けに向かった

た

少女は少女達との愛を論じた | | 406

少女はゲーム内で普段通りすごした

- 417 少女は中二病になった | 423
- 少女は現状を報告しあった | 429
- 少女は賑やかに昼食をとった | 435
- 少女は耳かき店に勤めた | 441
- 少女は料理対決に参加した | 445
- 少女は精霊達の料理に見た | 451
- 少女は人工精霊の寝顔を見た | 456
- 少女はもう1人の人工精霊を見た | 462
- 少女は少年の妹になった | 471
- 少女は少年と人工精霊を探した | 476
- 少女は仲間とカラオケに行った | 481
- 少女は角と尻尾を生やした | 486
- 少年は人工精霊に選択を迫られた | 491
- 少女は人工精霊のいる生活を始めた | 494
- 少女は人工精霊の成長を感じた | 500
- 少女は仲間と遊園地で遊んだ | 508
- 少女は仮想世界での異変を見た | 517
- 少女は仮想世界での戦いを始めた | 517

千夜スペクター

少女は目覚めなかった

|

527

亡霊は絶望の産声を上げた

|

535

少年は悪夢と協力することにした

540

亡霊は亡者と暴走をした

|

546

少年は妹と昔を思い出した

|

554

少年は亡霊を迎えに行った

|

561

少年は亡霊を守った

|

566

少年は亡霊を救い出した

|

571

少女は目を覚ました

|

577

凜緒リンカーネーション

少女はご都合主義の結界を見た

582

少女は現状を確認に動いた

|

586

少女は鉄板をみんなで囲んだ

|

592

少女は少年の娘を見た

|

598

少女はクラスで親睦を深めた

|

603

少女は少年を振り回す娘を見た

609

少女は家族団欒？に加わった

|

613

少女はいちばんだいじなものを探した

|

623

少女は守護者と対話した

|

627

少女は結界の終わりを見届けた

631

少女はその花の意味を知った |

636

千夜トレーニング

死神は自身の能力を見直した |

640

少女は大人の魔女と出会った |

644

少女は悪夢から記憶の情報を得た

648

少女は年上に振り回された |

651

七罪サーチ

少女は鍋の味を整えた |

661

少女は少年の奇行を見た |

667

少女は魔女の対策を話し合った

673

少女は偽物を探すデートを見届けた

677

少女は幼女になった少女達をみた

682

七罪チエンジ

少女は幼女の少女達の面倒を見た

687

死神は落とされた人工衛星を破壊した

691

鳶一エンジェル

死神は精霊を襲う天使を止めた

695

死神は堕ちた天使と戦った |

702

鳶一デビル

少女は世界が改変されたのを知った

706

少女は天使を取り戻すのを見届けた

711

千夜メモリー

少女は失った記憶を思い出した

715

少女はこれからについて考えた

720

少女は思わぬ人物と対面した

—

723

少女は妹の事を問いただした

—

726

二亜クリエイション

少女は修道女との接触を知った

732

少女はコミコに参加した

—

735

少女は自主制作本を売りきった

739

死神は体を負傷した

—

744

少女は自身の体の状態を理解した

748

六喰プラネット

少女は隕石の飛来を目撃した

751

少女は精霊の出現の理由を知った

756

	少女は価値観の違いに困惑した	763		少女は悪夢の企みを考えた	806
	死神はDEMの襲撃に対応した	770		少女は悪夢と手を結んだ	809
	六喰ファミリ―			少女はチョコ作りに勤しんだ	814
	少女は死神である事を認めた	778		狂三ラグナロク	
	死神は星獣に記憶を閉じられた	785		少女は悪夢の過去を知った	817
	少女はおかしな状況にため息をついた	789		少女は最終決戦に備え始めた	820
	死神は精霊の真実を知った	793		死神は最終決戦に身を投じた	825
	死神は鍵を解き放った	800		死神は姉妹喧嘩を始めた	828
狂三リフレイン				瀦ゲームオーバー	
				死神は神と対峙した	831
				死神は自身の力の根源を知った	834
				死神は神の力を見た	838

死神は未来を少年に託した

842

千夜タイムリミット

少女は起こってしまった未来を知った

847

少女は妹との和解を目指した

851

少女は妹と心を繋げた

856

少女は祖父と対立した

861

少女は祖父を打ち倒した

866

設定・能力等が分からない場合ここへ（ネタバレ）（変更の可能性アリ）

《プロフィール》

名前：魂月千夜^{たまつきちや}

身長：157cm

スリーサイズ：B82/W59/H83

好きなもの：可愛い物、パーカー

苦手なもの：害虫、英語、火

特技：裁縫、ピアノ

誕生日：8/15

《設定（容姿・性格）》

容姿は精霊化する前はザ・日本人という感じで黒髪黒目であったが、精霊になってか

ら肌、髪、目の色素が落ちアルビノのような見た目になっている。

運動神経はそこそこ良く、勉強もかなりいい方（1部除く）。さらに、漫画やアニメにもわりと精通している。

性格は基本的に温和で、妹（年下や子供っぽい子）に非常甘い。1人で考える事が多く、そのまま誰にも頼らず自分で結論を出してしまう為、よく1人で抱え込んだり、暴走をしてしまう。士道に対しては厳しいのか甘いのかがよく分からない。

幼い頃に両親を事故、妹を5年前の災害で亡くしており、それから祖父に引き取られた。しかし、最近になって妹は生きている事を知る。

《能力》

識別名：〈リーパー〉・〈スペクター〉

総合危険度：C↓S

空間震規模：B

霊装：C

天使：S

STR (力) : 117 (147 + α)
 CON (耐久力) : 48 (78 + α)
 SPI (霊力) : 297 (327 + α)
 AGI (敏捷性) : 263 (293 + α)
 INT (知力) : 182 (212 + α)
 天使名 : 〈霊魂看守〉

魔王名 : 〈生死叛徒〉

霊装名 : 〈神威霊装・亡番〉

《技》

【邪視】^{イワイルアイ}(霊)(生)(現在使用不可)

対象を視る事で魂に干渉し影響を与える。

対象の魂の強さ（精神力の強さ、霊力の大きさ）で効能が変化。

基本的に身体的ダメージは無い。

拘束時間短い技ほど効きやすい。

（麻痺）：麻痺効果付与

（睡眠）：催眠効果付与

（死）：即死効果付与

（反転）（霊）（生）

霊力の＋－を逆転させる事が可能。対象に石突（鎌の持ち手の底の部分）をぶつける

事で発動。

【魂の記録書】（霊）（生）

魂を保存、保持、閲覧することが出来る。（記憶の保存・保持・閲覧・書き換え、存在

の保存・保持）

記録するのに対象の魂を利用するが、生死に問題は無い。

【魂迎えの夜】（霊）

結界を張り（巨大な満月が出現し辺りが夜になる）霊力を常時回復、能力の強化（全

てに30＋【魂を喰らう者】での吸収分）をする。

1度使うとこれまで【魂を喰らう者】で強化した分がりセットされる。

持続可能時間は5時間。

【魂を喰らう者】（霊）（生）

対象の魂や霊力を喰らい【魂迎えの夜】たまむか内での自身の強化値を増加する。

喰らった対象の魂の強さや霊力の量で強化度合いが変化する。

魂を喰らわれない場合は身体的ダメージは無い。

【魂を狩る者】（霊）（生）

一時的に対象の魂や霊力を奪い保持する。

【魂の記録書】ソウルログに保存するのに使ったりする。

【生命の満欠】（霊）

【望月】バリス：生命体を創造する。霊力消費量がとてつもなく多い。

【盈月】グロウ：生命体を成長させる。成長度合によって必要霊力が変化。

【虧月】ディケイ：生命体を衰退させる。衰退度合によって必要霊力が変化。

【朔月】ロス：生命体を破壊する。つまり、殺すこと。

【魂の観測】サ（霊）（生）

魂、霊力の位置を特定する。

場所、波長、大きさ等が分かりそれで個人を特定する。

【魂の接続】コネクト（霊）（生）

魂と魂、霊力と霊力を繋ぐ。

魂を接続することで記憶や考えを読み、霊力を接続すると霊力の受け渡しを簡単に無駄なく出来る。

魂を接続する時間が長すぎるとその魂に影響される。

【顔無しの亡霊達】（生）

その地で死んだ人の魂を呼び出し召喚する。触れた相手に死んだ時の情景を流し込む。

【変骨】（生）

骨を召喚して様々な形に変化させる。

（鞭剣）（大鎌）（浮遊武器）等。

【彼岸の園】（生）

一定範囲に結界（彼岸花が咲き乱れ紅い月が出現）を張る。結界内や周囲の相手から生命力を奪い続ける。奪った生命力で回復し強化され続ける。

【月喰狼】（霊）（生）

相手に喰らいついて霊力を奪う。また、空間の霊力も吸収する。【魂を喰らう者】

【魂を狩る者】【魂の接続】を使うことができる。

【亡者】（生）

一定時間、ダメージ無効。ただし自分も物理干渉出来ない。

【受^{インカーネーション}肉】（生）

魂に合った肉体を作り出し魂を定着させる。

【擬似^{シヤムスピリット}天使】（霊）

他の天使を模倣することが出来、出力は本来の7割程度出せる。

天使の霊力を保存したことがなければ模倣出来ない。

【万物^{デス}に等しく死^{サイ}を】（生）

全てに死と言う概念を与える攻撃。使う度、自身が死に近づく。

【^{ドッ}霊体^{ベル}偽造】

自分にそっくりな分身を作り出す。経験を蓄積させているため、本物より出力は劣るが技術は上。

十香デッドエンド

少女は魂と靈力の精靈となった

ウウウウウウウー—————

「この音は、いったいなんですか？———へ？」

鳴り響くサイレンの音で目を覚ましながら辺りを見渡します。その光景に私は思わず声を漏らしました。ビルは崩れ、道路はボロボロにひび割れており、そこらかしこに瓦礫が散乱しています。

ひとまず目を瞑りもう一度開きます。やはり景色は変わりません。それから、自分の頬を引つ張つてもみしました。

「ひはい………つまり、これは夢では無いということですか？」

でも、夢で無ければおかしいです。昨日はちゃんとベットの中で寝た———記憶はないですがこの状況は現実的では無いのです。

なんせ空間震の発生源らしきの位置に無傷で立っているのですから。何故か、私はクレーターの中心に立っていたのです。これでは私が空間震を起こしたみたいではないですか。

まあ、そんなわけないですが……空間震は自然災害のはずですし。

とりあえず、私は行動を開始することに決めました。人さえ見つければ状況などを聞けるかもしれません。

私はクレーターから這い出た所でカーブミラーが目に入ります。そこに映った自分の姿を見ました。

「なんですか……これは……」

鏡に映った自分を見て私は眩きました。日本人らしい黒髪黒目だった筈が、カーブミラーに映る私は白髪赤目と不思議な見た目をしていたので。

「いったいどうなっているのですか？それに……何なんですか、この服装は？こんな服持っていましたっけ？」

鏡に映った私は、真つ黒な少し大きめのフード付きローブを羽織って、真つ黒なブーツ履いています。まるで中二病の子供にしか見えません。

「まあ、脱ぐわけにもいきませんし、このままで行きますか」

改めて出発を決めたその時、空の方から音が聞こえました。そちらに目を向けると数名の女性が空を飛んで真つ直ぐこちらに向かつてきていました。

初めは助かったと思つた私でしたが、即座にそれを否定しました。

「明らかにここを指していますね……はっ！まさか警察ですか？ここをこんな風

にしてしまったかもしれない、私を捕まえに来たのですか!?!いや、それ以前にどうやって空を飛んでいるのですか!?!」

私は一旦隠れることにし、しばらくすると中々に際どい服を着た空飛ぶ女性達が来ました。

なんですかあの恰好は……恥ずかしくないのでしょうか?もしかして痴女なのでしょうか?怖いですね……

「空間震発生源への到着完了。精霊の姿確認できません。————了解。各自この辺一帯を搜索、発見しだい合図し集合し殲滅!」

「「「「「はい!」」」」」

……隠れて正解でしたね。殲滅とか聞こえましたよ。あと、わからない単語が出てきました。精霊ですか……もしかして私のことでしょうか?私はれっきとした人間なんです……知らないうちに精霊とやらになってしまったのでしょうか?————ん?

「……あ」

もんもんと考えていると警察(仮定)の1人と目が合いました。

「あ、安心して下さい、私は通りすがりの普通の精霊です。怪しいものじゃありません」
「せ、精霊発見! 攻撃開始!」

「へ？」

目の前の女性は即座にこちらに銃を向けて発砲してきました。

どうなっているのですかこの国は！銃刀法違反と言うものがないのですか!?!いや、あつた筈ですけど!?

「見たことの無い靈波反応だと思つたら、新しい個体か。どんな能力かわからない！気を引き締めていくこと！」

「「「「「はー」「」」」」」

銃弾やミサイルが雨ではなく滝のように降つて来ます。それに巻き込まれて、ただでさえボロボロだった街がさらにボロボロになっていきます。気がつくのと元のクレターまで戻つて来ていました。

この人達に無いのは、銃刀法違反じゃなくて秩序や常識です!.....あれ?なんで私は無事なんでしよう?.....なんでですかこれは!?!シールドが出ています。私は精霊ではなく魔法少女になったのですか!?!バッドエンドまつしぐらじゃないですか!

神様、仏様、何処かの偉い人、誰でもいいから助けてください!

その時、頭の中にある神様でもなく仏でもなく、偉人でも無い、天使の名が浮かび上がりました。私はその名を叫ぶように呼びました。

「〈靈魂看守〉!!」

名前を呼んだのに応じて黒い大鎌が出現し、出来ることが頭の中に流れ込んできます。

「さて、ここから反撃——うわあ!？」

格好良く決めようと思つたら、前方で爆発が起き、吹き飛ばされクレーターの中心まで転げ落ちてしまいました。

砂埃が収まり爆心地を見るとこちらのクレーターと同じようなクレーターが出来ており、中心に紫の鎧をつけた少女と玉座が現れました。

「へプリンセス! 精霊が2体同時なんて——みんな応援が来るまで頑張るわよ」

精霊? という事は1回めの空間震を発生させたのは私で決まりじゃないですか!?! やだあ——!

「プリンセス」と呼ばれた精霊は剣を抜き、街に向かって斬撃を飛ばしました。

斬撃が飛んでいく方には青髪の少年が立っていました。

何故、ここに一般人が!?! 私も一般人ですけど!!

全力で地面を蹴り青髪の少年の前へ滑り込むようにしながら、天使を使用します。

「〔反転〕!!」

霊力の+—を反転する〔反転〕を使用し斬撃を反射します。斬撃はそのままへプリン

セス」と呼ばれた少女に返っていききました。一瞬驚いたようでしたが斬撃を剣で弾きこちらに再び剣を向けてきました。

「お前達も私を殺しに来たのか？」

あまりの威圧感に青髪の少年は尻もちを着いてしまいます。私は今にも逃げ出したくてしかたがありません。足が震えて逃げられない訳じゃないですよ？

こんな事になっているのは全てあの空を飛ぶ痴女たちのせいです。あの——
長いからあの空飛ぶ痴女たちと呼びましょう。ASTが殺そうとしてくるせいなので
す。

「お前達も私を殺しにいたのだから？ならば早めに始末させてもらおう」

「ちよ、ちつと待った！待った！殺す訳ないだろ！だいたい君は……」

青髪の少年が尻もちを着きながらも叫びました。

この少年、勇気がありますね。私は怖くて声が出せないというのに……あれ？この少年何処かで見えた事あるような……って、もうASTがこちらに来たのですか!?

空を見上げるとASTが近づいてきていました。先程よりも数が多い気がします。見ていると一齐にミサイルを発射してきました。

ちよつと、一般人がいるのに無視なのですか!?

取り敢えず霊力バリアーを展開し防ぎます。隣では〈プリンセス〉も同じことをして
いました。

「こんなものは無駄となぜ学習しない……………」

この子は何度もASTに攻撃を受けているようです。〈プリンセス〉は空を飛びミサイ
ルを次々と粉碎していく。

「……………」つて、精霊は空を飛べるのですか!? 今度、試してみましよう。……………
うわっ! 危ない!

一気に近づいて来た白髪の少女がビームサーベルらしき物を振るい、私はすれすれの
所で躲し距離を取ります。白髪の少女は流れるように〈プリンセス〉の方へ行き剣をぶ
つけ合います。

な、なんて凄いい剣技なんでしょう……………全く見えない訳では無いですけど……………
なんか凄いです……………なんで見えるんでしょう?

見惚れていると、光剣と大剣が衝突し爆発が広がりました。

「あつ、少年!」

飛ばされていく少年に飛んでくる瓦礫を防ぎキャッチしてゆっくり下ろしていきま
す。少年は気を失っていました。が怪我は無さそうです。

さて、私はASTが来る前に帰りますか。

私はその場を後にしました。

少女は肉体を取り戻した

さて、自己紹介がまだでしたね。

私の名前は魂月千夜^{たまつきちや}、魂の月に千の夜と書いて魂月千夜です。

私は気がつくとき空間震を起こす精霊とやらになつてしまつていて、ASTに命を狙われここまで逃げて訳ですが……これからどうしましょうか……取り敢えず、祖父に連絡を入れますか。

私は両親は亡くしているため祖父に育てられています。まあ、何故かほとんど覚えてませんが。そんな訳で、前に住んでいた家もありましたが今は祖父の家に住んでいません。

自動販売機の中に残っていた10円玉を使い公衆電話で電話をかけます。

「あ、もしもしお爺ちゃん？千夜ですけど……」

『千夜だど!?ふざけるな今はそんなお巫山戯に構っている暇はない!?』

「え？ちよつと……切られました……」

何かすごい焦っていたみたいだけど何なんでしょうか？それに私が私ではないと言っただけ……まあ、歩いて帰ればいいですか。

く精霊帰宅中く

はい、我が家に帰ってきました。相変わらずとても大きな日本家屋ですね。

「え!!お嬢様!!?でも、色が違う……」

「あつ、中居さんではないですか」

「やっぱり、お嬢様!?!」

この人は中居さん。基本はお爺ちゃんのお世話をしているのですが……どうしたんでしょうか、まるで死人でも見たような顔して。

「お、お嬢様、病院に搬送されたのではなかったのですか!?!」

「え?病院?」

「行方不明から見つかったと思ったら、死亡している状態で見つかったって病院から……」

だから、お爺ちゃんは電話を切ったのですか。あれ?行方不明だった?死亡している状態で見つかった!?!

「中居さん。その病院の名前は?」

「え?は、はい!ちよと待って下さいね。えつと、病院名は……」

直ぐにその病院に向かいました。かなり大きい病院で意外と近場にあった為、直ぐにつくことが出来ました。

病院の見取り図から霊安室を探して向かいます。

「お邪魔します」

霊安室には一つだけベットが置いてありそこに寝かされていたのは黒髪の少女、紛れもなく私自身です。

「いったいどうなっているんでしょう?」

私は寝かされている私の体に触れます。すると、中に引つ張り込まれるような感覚を感じ、気がつくくと視点が寝ている私へと移っていました。

しかし、肩にかかる髪を見ると黒髪ではなく白髪でした。

「融合でもしたのでしょうか?」

分からないことばかりですが、とりあえずはいいでしよう。後で考えます。

これから、どうしようかと迷っていると扉が開かれて人が入ってきます。入ってきた人は私の顔を見るなり腰を抜き飛び出して言っていました。

「魂月さん!」

しばらくすると医者らしき人が慌てて飛んできました。奇跡だとか言っていました。が、まあ良いでしょう。

結局、検査をしてから1日拘束されました。

その後、お爺ちゃんにめちやくちや泣かれたのは、また別の話です。行方不明も死んだのも覚えないうんですけどね……

少女は彼らの後をつけた

病院出ました。病院を出てからお爺ちゃんに一人暮らしをしたいと伝えました。精霊の事やASTで迷惑をかけたくないからです。伝えたら「ちーちゃんに嫌われたー」と中居さんに泣きついていました。いい歳して勘弁して欲しいです。

そんな訳でマイホームを手に入れました。いや、お爺ちゃん、孫に甘過ぎないですか？ マンションでいいでしょうと思いましたが？ 元々、両親と住んでいた時の家なので買った訳では無いのです。

まあ、明日辺りにご近所さんの挨拶に行きましょう。久しぶりですね。あつ、冷蔵庫に何も入ってませんね。……買い物に行きましょう。

く精霊移動中く

「なんで、あの人達がここに居るんですか。……」

目に入った3人を見て私はそう呟きます。いや、まあ確かにあの場に居たってことは天宮市在住でしょうから当たり前といえれば当たり前なんですが。……

1人目は空間震の時居た青髪の少年で、連れ呼び方からシドーさんという名前らしい。シドー……何でしょう何故か聞き覚えが……考えるのはまた今度にしましょう。

2人目は精霊の〈プリンセス〉という個体で、こちらも連れの呼び方から十香さんと言わらしいです。

最後にASTの白髪の少女。名前は分かりませんが明らかに2人を尾行しています。

面倒事の匂いが凄いです。しかし、精霊についてまだ色々知りたいです……：……しようがないですね、私も尾行しますか。

それにしても、あのシドーさんと言う少年は精霊なのでしょう？少しだけ精霊に似た霊力を感じます。

私の天使の〈靈魂看守〉は魂と霊力について出来ることが多く、霊力の察知に優れています。どれぐらい優れているかと言うと、今この天宮市にいる精霊の位置を感知できるぐらいです。

えっと、2、4、6、8……あれ？3桁ぐらい居ないですか？目の前に2人いますけど、あと何人も他にもいるのですか？しかも、1人はシドーさんと霊力が似ている？いや、繋がっている？どうなっているんでしょうか？あと、いっぱいいると思っ

たら大部分は同じ霊力ですし、もしかして、あまりあてには出来ないのでしょうかこの能力は………

それにしても〈プリンセス〉もとい、十香さんはよく食べますね………シドーさんの財布がどんどん薄くなっています。

それに、さつき十香さんがデエトって言ったが、もしかしてシドーさんは出会って2日の女の子を口説いたのでしょうか？なんて、プレイボーイなんでしょう。と思いましたが十香さんの方はデートの意味はよく分かっているみたいだ。

その後、2人はお店で食べて商店街で食べていました。デートと言うより食べ歩きです。すね。

今度は福引でしょうか？ドリームランドの招待券？そんなランドありましたっけ？………って！ラブホじゃないですか!?学生に渡さないで下さい、そんな物!?

流星にシドーさんは不味いと思ったのか十香さんの手を引いてそこから離れて行きました。………なんだ、ヘタレですか。

それから、白髪少女がドリームランドの真実の口つばい物の口に手を突っ込んで戦闘服らしき物に一瞬で着替えていました。この街は本当にどうなっているんでしょうか………あれ？また、霊力の反応が増えました。空間震警報鳴りませんけど、精霊って空間震無しでもこっちに來れるのでしょうか？

シドーさんと十香さんは突然の雨を避ける為、ゲームセンターに入って行きました。つて！ゲームセンターの前にさつき出てきたばかりの精霊の子がいるじゃないですか!?!声をかけてみましょうか……

「すみません？」

「……………あ……………なん……………で……………しようか？」

「貴女は精霊ですよね？」

「っつー！」

逃げられました、何故……………あつ、精霊つて命を狙われていたんです。今度は気を付けましょう。さて、十香さん達の尾行を再開しましょう。

あつ、あのクツションいいですね。私も後で取りましょう。

死神は封印を目撃した

日はだいたい暮れました。シドーさんと十香さんはいい雰囲気になりながら公園から夕日を見えています。それにしても、ASTの白髪の少女はどこに行っただんでしょう？

しばらくすると行動がありました。シドーさんが十香さんを突き飛ばしたのです。そして、シドーさんの体に穴が空きました。そのまま、その場に力なく倒れ、血が地面を染め上げていきます。

突然のこと過ぎて頭がついていきませんが、シドーさんが十香さんを庇った為だとは分かります。私は心が乱れそうになりますが、〈^{サリ}靈魂^{エル}看守〉の力で無理やり落ち着かせます。

その間に十香さんは怒り狂い天使の発動させました。王座を切り裂き前よりも大きい剣を持ち空を飛び狙撃者、ASTの白髪の少女の元へ飛び前回戦っていた時と比べ物にならないくらい力の殺意を持って攻撃を開始しました。

白髪の少女は自分のした事にショックを受けてか移動出来ません。シールドのような物が防いでいますがいつまで持つか……

「これ以上死人を増やしてなるものですか！ 〈^{サリ}靈魂^{エル}看守！！」

天使と霊装を発動させ十香さんの前に立ちます。すごい怖いですが。

「へりパー〜!?!」

A S Tの隊長らしき人が上空で呟きます。私にはへりパー〜と言う個体名が付けられたようです。ちよつと待ってください、誰が死神ですか!?!

「また、貴様か! 邪魔をするな!!」

「^{フォールン}反転!」

大鎌の石突きを斬撃に衝突させ霊力を反転し斬撃を返しますが周りの被害が甚大になっしまいます。弾いてたら街に被害がいきそうです。

「なら、^イ魂を喰らう者^{ター}」

「^イ魂を喰らう者^{ター}」は大まかに言うとうと霊力を吸収する能力です。次々と霊力の含んだ斬撃を切り裂き吸収していきます。

「攻撃を斬って喰らうだど!?!ならば!!……うおおおお!!」

「ちよ!?!」

十香さんは斬撃の数を増やして来ました。

数十発、喰いきれずダメージを受けたり後ろに流れてしまいます。

「折紙! 早く離脱しなさい!!」

あの白髪の少女は折紙さんって名前なのですか。変わった名前ですね……

て、今はそんな事はどうでもいいです!!

「はあああああああ!!」

「くっ!」

十香さんは斬撃を繰り出すのを止め、近づき剣を振り下ろす。咄嗟に大鎌で受けますが力の差がありすぎます。私は後ろに勢いよく吹き飛ばされました。

私が吹き飛ばされて直ぐに折紙さんを守っていたシールドが破れてしまいます。

「シドー。今、仇を――」

十香さんはその剣にこれでもかかってくらい靈力を込め構えます。

ダメだ間に合わない。諦めかけた時、空から腑抜けた叫び声が響いてきました。

「うわあああああああ!!」

へ? シドーさん!? なんで生きていますか!?

何故か先程死んだ筈のシドーさんが空から涙目で降ってきました。十香さんは驚きながらも、慌ててシドーさんの元へ飛んでいき空中で受け止めます。

これでもう折紙さんは、大丈夫でしょう。良かった良かったです。……あれ? 十香さんの剣から靈力溢れていませんか? あつ、懇願するようにこちらを見えます。いや、無理ですよ、そんな量の靈力なんか1度で喰いきれる訳ないでしょう! ちよつと待て! 撃たないでください、絶対撃たないでください! ふりじやないですから!!

私は全力で首と手を振り否定します。

しかし、一体どうすーすーキスしました。

「へ？」

何故このタイミングでと思いました。が、十香さんの霊装と天使が消えていきます。それと同時に霊力は散っていききました。

「どうなっているのでしょうか．．．ん？」

霊力をしっかり見てみると、十香さんの霊力はシドーさんの方へ大部分が移り霊力の繋がりが出来ていました。

取り敢えずこれで大丈夫そうですね。

その後、私はASTに絡まれながらも逃亡しました。

四糸乃パペット

死神は魂を込めた

昨日は色々大変でした。今日から気を切り替えて行きましょう。早速ご近所さん挨拶へ行きましょう。

もうだいぶ済ましていて、行こうと思っていたのは、あと一軒。園神さんは留守だったからまた今度行く事にしましょう。あれ？昔、住んでいた時も居た記憶がない気がします。まあ、いいですか。最後は五河さんです。

インターホンを押し反応を待ちます。

『はい?』

「魂月です。戻って来たので挨拶に伺いました」

『千夜なのか!?!ちよつと、待ってる!』

あれ?何故か聞いたことのある声ですね.....

「あ.....」

「え!?!」

出てきたのはシドーさんでした。

まさか、シドーさんは士道だったとは……成長していて気が付きませんでした。

「千夜……なのか？」

「はい。少しだけ体の色素が落ちていますが千夜ですよ」

「全然少しじゃないけど……まあ、上がってくれ琴里も久しぶりに会いたいだろうし」

「琴里ちゃん！では、お邪魔します」

く精霊会話中く

久しぶりに楽しかったです。それに、私がへりパーだとバレていませんでした。良く考えればあの霊装の時フードを深くかぶっていますし、顔は見えにくいですね。

そう言えば、精霊らしき人をもう一人見つけました。私の妹（嘘）の琴里ちゃんです。力を失った十香さんと同じで士道と霊力で繋がっている感じでした。兄妹揃って精霊なのでしょうか？【魂の記録書】を使えばわかるんですけど……

【魂の記録書】は簡単に言えば記憶の保存・保持・閲覧、存在の保存・保持が出来る能力です。しかし、1度登録しなければなりません。登録の仕方は魂を取り1度保存

する。つまり、1度仮死状態にしなければならぬのです。その為、なかなか使う気が起きないのです。まあ、気持ちの整理が出来たらそのうち使おうと思いますが。

明日から転校生として高校に行くので考えることを止めて私は眠りにつきました。

転校した高校は土道、十香さん、折紙さんの3人と同じでした。クラスも同じでした。

「魂月千夜です。皆さんよろしくお願ひします」

「また、転校生だ」

「てか、美人ばかりうちのクラスに来すぎじゃない？」

「マジ引くわー」

「うおおおおお！十香ちゃんもいいが！千夜ちゃんもいい！！」

かなり、賑やかなクラスのようです。席は窓側の一番後ろ、主人公席と呼ばれる場所です。

土道と親しく話していたら。十香ちゃん（みんなそう呼んでいるから変更した）と折紙さんに凄い目で見られました。私、何かしたでしょうか？

その後、亜衣ちゃん、麻衣ちゃん、美衣ちゃんと友達になりました。3人に五河君は

女たらしだから気を付けるように言われました。昔はそんなふうじゃなかったのに残念です。

あと、変わった人がいました。土道は放つて置いていいと言っていましたが見えて中々面白い人でした。名前は知りませんが。その人は私が土道と親しく話しているのを見て「また、五河なのか……くそお！」と言っていましたが無何のことでしょうか？

学校が終わり帰ろうとした時にある霊力を感じました。

これは、あの雨の子でしょうか？今度は逃げられないように怖がらせないように会いましょう。

そう意気込んだのは良かったのですが……

「いいですね……やはり、この霊力感知能力当てにならない……ぐへ！」

あつていました。上下を考えていませんでした。まさか空から降って来るとは……予想外です。

「ひ、久しぶりです」

「つつつ!？」

少女は私を見るなり逃走しようとしています。

「まっ、待つてください！私も精霊なのです！ほら！」

制服から霊装へ変化させてみせます。すると少女はびつくりしたように目を見開き止まってしまいました。

「まずは、自己紹介をしましょう。私は魂月千夜です。貴女は？」

「わ．．．．．私．．．．．は．．．．．四糸乃．．．．．です」

「四糸乃ちゃんですか。どうですか？精霊どうし友達になりませんか？」

「私で．．．．．その．．．．．良ければ．．．．．」

「これで、やっと会話が成立します。私と四糸乃ちゃんは辺りが暗くなってくるまで続きました。

「そろそろ、帰らないといけませんね．．．．．」

「え？．．．．．」

「どうかしました？」

「あの．．．．．その．．．．．」

「それじゃあ、またー．．．．．うわあ!？」

立ち上がろうとしたが四糸乃ちゃんに袖を引っ張られて尻もちをついてしまいます。

「．．．．．しな．．．．．く．．．．．ささ」

「はい？」

「1人．．．．．に．．．．．しないで．．．．．くだ．．．．．さい．．．．．」

今にも泣きだしそう、いや若干涙目で四糸乃ちゃんが引き止めてきます。

私はこんな子を一人になんて出来ません。精霊と言っても精神は見た目通り幼く一人が寂しかったのかも知れませんか。

「私の家に来ますか？」

「いいいで………すか？」

「ええ、四糸乃ちゃんなら大歓迎です」

「ありがと………ござい………ます」

「あ、でも学校行く時は家で一人でいてもらうことになってしまいますね………そうだ！そのパペットを貸してくれませんか？それと、ちよつと霊力を分けて貰いますね。〈靈魂看守〉——【魂を狩る者】

大鎌で四糸乃ちゃんの霊力を少しだけ剥ぎ取り次の工程に移ります。初めてやるので成功するか心配ですが頑張ります。

【生命フエイト・オブ・ライフの満欠】——（望月パース）

四糸乃ちゃんの霊力を使い魂を誕生させます。この能力は霊力を使い生命体を生成することです。四糸乃ちゃんが寂しくないように明るく元気な性格になるようにつと——

「はあ〜い！はじめましてえ！よしのんの名前はよしのんだよお〜！」

「よし……のん……?」

「そうだよお、四糸乃!これからよろしくねえ?」

「よろしくね……よしのん……」

こうして、四糸乃ちゃんとよしのんが私の家によく遊びに来るようになりました。

少女は弱気な隠者を助けた

あれから四糸乃ちゃんおよびよしのんがよく家に遊びに来るようになりました。合鍵を渡してあるので何時でも来れるようになっていきます。

今日も帰ったら2人がいました。

「お邪魔……して……ます」

「千夜ちゃん、お久しぶりだねえ〜四糸乃およびよしのんが会いに来たよ〜」

「2人共、いらつしやいです。会えて嬉しいですよ。まあ、久しぶりといつても2日ぶりですけどね」

「もお〜千夜ちゃんつたら大胆〜！でも、細かいことを気にしてたらモテないよ〜？」

「それは、男の子の場合ではないですか？」

「あの……私……も……嬉しい……です」

「きや〜四糸乃も大胆〜！」

「つつ！……よ、よしのん……！」

何でしょうこの可愛い生物は。精霊です知ってました。私はこんな妹が欲しかったです。まあ、琴里ちゃんにはお姉ちゃんと呼ばれています……そうだ、四

糸乃ちゃんにもお姉ちゃんと呼んでもらえば完璧ではないですか！

「四糸乃ちゃん。私の事をお姉ちゃんと呼んでくれないですか？」

「お姉ちゃん……ですか？……千夜お姉ちゃん？」

「……ぐはっ!!」

「だ、大丈夫……ですか？」

「うん、バツチリです。これからもよろしくお願いします」

「もしかして、千夜ちゃんって妹萌え？」

よしのん、何処でそんな言葉を覚えたのですか？それにしても、よしのんは凄い性格になりましたね、いったい誰がこんな性格にしたのでしょうか……

「それはねえ、千夜ちゃんだよ」

「よしのん。心の中を読まないでください」

「おくと、よしのんったらミステイク！これは失礼。ごめんね」

こんな感じで毎日過ごしています。

〜次の日〜

(土道視点)

「なあ、千夜ちよつといいか？」

俺は近所に昔住んでいて戻ってきたクラスメイトの千夜に声をかける。琴里からの要請だ。なんでも、千夜の家は何度も精霊が出入りしているそうだ。

「土道？何でしょうか？」

「最近、誰か家にその……勝手に入られたりしてないか？」

「いえ、別にそんな事はありませんが？」

「そ、そうか……ありがとう」

「はい？どういたしまして？」

千夜との会話を終え教室の外に出て琴里に通信をする。

「琴里か？特に変わったことは無さそうだが」

『そんなわけないでしょ。ちゃんとこちらで〈ハーミット〉の霊波を何度か千夜姉の家から観測されているんだから』

「そうだよな。てことは……」

『ええ、意図的に隠している可能性があるわね』

「でも、一体なんで？」

『精霊に操られている可能性もあるけど〈ハーミット〉だしね。その可能性無い訳では無

いけど、かなり低いわ』

「そのへハーミット」ってのはどんな子なんだ？」

『それは————って、この霊波反応は！』

「琴里？ どうし————」

ウウウウウウ——————————

そこまで言いかけた時、空間震警報を知らせるサイレンが鳴った。

『土道、丁度噂をしていたへハーミット』よ。フラクシナスで回収するから令音と人目につかないところに移動しなさい』

「十香はどうするんだ？」

『置いてくに決まってるでしょ！ 力を封印された状態じゃ普通の人間と変わらないんだから。それに、ASTとの戦闘を見せてストレス値が上がる可能性もあるし』

「わかった」

琴里との通信を切る。さて、十香は………いた。

「皆さん、空間震警報ですよ。早く地下シェルターに避難してください！ 危険が危ないですよ！————五河君何をやっているんですか！ 空間震ですよ！ 危険が危ないんですよ」

「先生、十香のこと頼みます。十香は先生たちについて行って先に避難しておいてくれ」

「シドー!？」

「十香、ちゃんと先生言うことを聞くんぞ」

「ちよつと!五河君!?!村雨先生もどこ行くんですか!？」

たまちちゃんの引き止める声を放って俺は精霊の元に急いだ。

く少しだけ遡るく

さっきの土道はどうしたのでしょうか?別に泥棒なんて入っていませんが……..
不振な人影でも見たのでしょうか?もしかしたら四糸乃ちゃんを……いえ、あんな可愛らしい泥棒はいません。あれ?この霊力は……..
ウウウウウウウー……

珍しいですね。四糸乃ちゃんが空間震を起こすなんて。ASTに絡まれたら大変です。ね……..仕方ありません迎えに行きますか。

「皆さん、空間震警報ですよ。早く地下シェルターに避難してください!危険が危ないですよ!」

先生……..頭痛が痛いみたいなことを言ってますよ?落ち着きましたよ?ね?

取り敢えず人目につかない所に移動して。

「^{サリエル}靈魂看守！待っていてくださいね、四糸乃ちゃん。よしのん」

く精靈移動中く

「どういう事!?!今回の精靈はへーミットくじやなかったの!?!なんでへりーパーくが
の!」

なんですか!私では不満と言いたいのですか!だいたい、貴女達はあんな可愛い小さい子を殺そうとして何も思わないですか。

まあ、いいです。四糸乃ちゃんのもとには行かせません。

「^{サリエル}靈魂看守！ーーーーーーフエイト・オフ・ライフ「^{バリス}生命の満欠」ーーーーーバリス!!」

私の後ろから5体の死神が出てきます。「^{フエイト・オフ・ライフ}生命の満欠」のバリス（望月）は靈力の消費が激しいですが色々調整すれば靈力を節約出来るのです。この死神はよしのんと違い靈力を供給出来なく

時間が経って元の靈力切れると消えてしまいます。それに思考力もありません。ASTを足止めすると言う命令だけを入れています。つまりは殆どロボットです。こうして色々削ることによってこの5体の作るのにかかった靈力はよしのんよりも少ないです。

「行つてください」

「「「「.....」」」」

5体の死神はASTに向かつて行きます。ちなみに死神達には殆ど攻撃力も防御力もありません。ただの攪乱用です。さて、私の方も殺りますか。あつ、間違えました。殺してはいけませんでした。

4人ほどこちらに来ますね。1人は折紙さんですか。

「はあああああ!!」

折紙さんの攻撃を大鎌で受け止めてから蹴飛ばし、もう1人にぶつけます。振り返りながら大鎌を振り回し2人を薙ぎ払います。

「〈靈魂看守〉—————【邪視】」

私は【邪視】を發動させます。これは目で見て魂に干渉し状態異常を起こす能力です。今回は寝かせましょう。

「(睡眠)！」

ただこの能力にも弱点がありまして。

「くっ!!」

「.....ダメですか」

精神力が強かったり霊力が強かったりすると効果が減ります。3人は眠ったようで

すが折紙さんはダメだったようです。

「貴女は何者なの？」

折紙さんがそう問いかけてきました。何者ですか、精霊以外に何かあるでしょうか？
それともまた別の意味の質問？

「初めて現界した時もその後も夜刀神十香から土道や私を守っていた。でも、今は精霊を庇っている。それに、あの死神のような物も見せかけで殆ど攻撃をしていない」

色々とバレてしまってますね。なんと答えればいいのでしょうか……

「答える気がないなら別にいい。精霊は全員殺す」

物騒ですね。あつ、四糸乃ちゃんロストの霊力が消失した。私も撤退しますか。

「逃がさない！」

残念ながら、逃がしてもらいます。

「〈サリエル靈魂看守〉———」
「イヴァイル邪視」スタン（スタン麻痺）」

「くっ！体が!？」

「イヴァイル邪視」の（スタン麻痺）は（スリープ睡眠）より拘束時間が短い代わりに効きやすいんですよ。

私はその場を急いで離脱しました。

少女は少年を問い詰めた

(土道視点)

四糸乃の靈力を封印した次の日、四糸乃が行きたい場所があると話してきた。聞くとそれは2軒隣の千夜の家だった。

「わたし合鍵を貰ったのですけど、無くしてしまつてそれを千夜お姉ちゃんに謝りたいんです」

「もお、四糸乃なら心配性だなあ、大丈夫だよお、千夜ちゃんは別に気にしたりしないさあ！」

よしのんが四糸乃を励ます。つまりは心配だからついてきて欲しいってことか。

「よし、わかつた。一緒について行ってやるよ」

「ありがとうございます」

「ありがとうねえ、土道君」

曇っていた四糸乃の顔が少し明るくなり2人がお礼を言う。

「さて、早速行くか」

「はい！」

「レッツゴー」

「士道ちよつと、待ちなさい」

「ん？ 何だ琴里。四糸乃達は先に準備しておいてくれ」

琴里に引き留められた為取り敢えず四糸乃達だけ先に行ってもらおう。

「で、どうしたんだ？」

「一応、これを付けときなさい」

見せられたのは普段、フラクシナスからの連絡を受け取るためのインカムだ。

「何でだ？ 別にデートって訳でもないし」

「何か、きな臭いのよね。本当は千夜姉のことを疑いたくは無いけど、心配だから念の為

よ」

「わかった。じゃあ、行ってくる」

俺は玄関で待つている四糸乃達のもとへ向かった。

ピンポーン

誰でしょうか？ インターホンのカメラを見るとそこには士道が映っていました。

「土道？どうしたのですか？」

『千夜か？ちよつと、あつて欲しい人がいるんだけど』

「会つて欲しい人？」

『ほら、頑張れ』

『は、はい、ち、千夜お姉ちゃん』

画面に四糸乃ちゃんが映つた瞬間、玄関までとんでいき扉を開く。そのまま四糸乃ちゃんにとびつきます。

「おかえりなさいです、四糸乃ちゃん！」

「わあ!？」

「よしのんもいるよお〜」

「よしのんもおかえりなさいです」

昨日も助けに行きましたが、ASTがしつこかった為しつかり姿は確認出来ていなかったので安心しました。土道が吹雪の中に突っ込んでいたので大丈夫とは思っていましたが。

そこで気が付いたことがありました。四糸乃の霊力が極端に減り土道と繋がっていません。

「」

「」

「あ、あの、千夜お姉ちゃん？」

「千夜ちゃん、どうしたのおく？」

「四糸乃ちゃん、士道とキスしたの？」

「……………」

さつきまで静かに見守っていた士道は吹き出し、四糸乃は顔を赤くしてアタフタしました。完全に黒ですね。

「五河士道さん？」

「は、はい!!」

「説明お願い出来ますか？」

「はい……って、なんでキスしたの知っているんだよ！」

「えっ……あつ」

やってしまいました。失言です。

「実は十香ちゃんとしてる所を見てしまいました。」

「なんでそんな所を……なら、もう精霊のことは知っているんだな」

「四糸乃ちゃんから聞きました」

「え、あれ？」

「四糸乃ちゃん！お願いしますから黙っておいて下さい。あゝ首をキョトンと傾げて？」

います。可愛いですね。じゃなくて！伝わって下さい。

「あー！千夜ちゃんよしのんに任しておいてえ〜四糸乃ちよっとおトイレ行く〜」

「え。よし、のん？」

「いいから、いいからあ〜」

よし？のん！ありがとうございませす！

2人が家の奥へ入って行き、私と士道だけになります。

「取り敢えず上がってください」

「お邪魔します」

さて、根掘り葉掘り聞かせてもらいます。

（士道視点）

「さて、士道。最初の質問です」

「複数あるのかよ!?!」

「十香ちゃんと四糸乃ちゃんは精霊ですね？」

これは答えていいのか。千夜を巻き込んでしまうんじゃないか？

「琴里どうする?..」

『どうするもこうするも無いでしょ?あの戦いを見られたつてことはASTの事や士道の能力も見られてるわけだし隠し通せるとは思わないけど?こちらで、どこまではいかは指示するからそれに従いなさい』

「わかったーその質問だが、そうだ」

「随分長かったですね?しかも誰かと会話してたみたいな感じでしたし」

「き、気のせいじゃないか?」

「まあ、いいです。次は空間震は精霊が起こすのですか?」

「また、核心をつくようなことを聞いてくる。琴里の判定は」

『まあ、おおよそ千夜姉はそうだろうと思ってるでしょうし下手に隠しても意味ないわ』

「そうだ。だけど精霊達は空間震を起こそうとして起こしてるわけじゃないんだ」

「分かってますよ?十香ちゃんや四糸乃ちゃんを見ていれば分かります。次の質問です

十香ちゃんを襲っていた折紙さんが所属しているのはなんですか?」

「ASTだ」

「え、あつてた」

「あれ?今少しだけ驚かなかったか?それに何が合ってたんだ?!

「つ、次の質問です。士道はキスをすると精霊の力を小さくすることが出来るのですか？」

『一番大事なところを聞いてきたわね。まあ、いいわ。ここまで来たら全部ゲロっちゃいなさい。巻き込まれそうになったら、千夜姉はラタトスクで保護するから』

「わかった。————ちよつと違うが、そうだ」

「つまり、士道は女たらしクソ野郎だと言うことですか？」

「ぐっ・ち、違うぞ!?!」

精神的にもものすごく抉られた気がする。これ以上は俺の身が持たない。

「次の質問は、士道の知っている精霊は2人だけですか？」

「いや、もう1人に知っている。名前は知らないけど死神みたいな格好をした奴だ」

「士道が知らなくても士道の後ろについている人達は知っているのはいるんですか？」

『なっ!?!』

バレてる??

「まあ、それは後でいいとして、士道への最後の質問です。士道は精霊なのですか？」

「いや、違うけど」

質問の意図が読めない。何故そう思ったのかが分からない。いったい千夜は何を見

ているんだ

「さて、土道？土道のバックに付いてくれている人達のところに案内してください。四糸乃ちゃんの姉として友達として保護者として会っておきたいのです」
千夜はニコリと俺を見つめてきた。

少女は司令官から情報を得た

「土道お疲れ様。ようこそ千夜姉、空中艦フラクシナスへ」

私の前では赤色の髪を黒いリボンでツインテールにしている少女が座っている。

「あの、土道?」

「だいたい、言いたい事はわかー」
「どうして琴里ちゃんが双子だって教えてくれなかったのですか!」
「は?」

まさか琴里ちゃんが双子だったなんて・・・妹が増えますね!

「いや、違うぞ!」

「えっ?じゃあ、三つ子ですか!?それとも四つ子!?まさか五等分の妹!」

「違えーよ!あいつはお前が知っている琴里本人だ!」

「本・・・人?」

琴里ちゃんらしき子の方を見るといつもの無邪気な笑顔ではなく知的な感じの笑顔
を向けてきた。

「まさか・・・そんな・・・」

「まあ、俺も最初は驚ー」
「琴里ちゃんが中二病になっているなんて!」
「・・・」

フラクシナス内にいた私以外が転けました。私、何か変な事言ったでしょうか？

「士道！自分が通った道だからってお兄ちゃんとして正してあげないとダメじゃないですか！」

「中二病でもねえよ！てか、なんでその事知ってるんだよ！千夜が転校してからのことだぞー！」

「――瞬――閃――轟――爆――破――！」

「やめろおおおおお!!」

「じゃあ、琴里ちゃんはなんであんなふうになっているのですか!?二重人格ですか!?!
いったい琴里ちゃんにどんな負荷をかけたんですか!」

「だああああああ!!違うって!二重人格ってより二重性格だ!白リボンの時が千夜もよく知っている琴里で、黒リボンの時は《司令モード》って言ってあんな琴里になるんだよ!」

なるほど、分かりません。

「千夜姉?そろそろ話を進めていいかしら?」

「いいですよ」

「軽い!」

「士道は黙りなさい。私達は精霊を保護するための機関ラタトスクよ。ここはフラクシ

ナス、天宮市の上空を飛んでいるわ。士道に聞いた事以外で質問は？」

「士道はどんな能力を持っているのですか？」

「士道は精霊をデレさせてキスすると精霊の力を封印できるの」

「士道は今まで何人たらしこんでたのですか？」

「言い方酷くないか!？」

「・・・2人よ」

嘘ですね。少し間がありましたし、士道と繋がっているのは4人、なぜ隠すのでしょうか? 私が問題? それとも・・・

「士道ちよつとの間、出ていってくれませんか？」

「なんでだよ?」

「いいから早く出て行ってください。早くしないと折紙さんとタマちゃん先生に士道が結婚したいって言うていたって吹き込んできますよ?」

「おい! やめろよ! その二人だとガチでシャレにならないことになるから!!」

士道は慌てて部屋から出ていきます。

「これでいいですか? もう一度質問しますよ? 士道が封印したのは何人ですか?」

考えたもう一つの理由は士道に余計な心配をかけたくないという琴里ちゃんの考えでしょう。士道は琴里ちゃんが精霊だとまだ知らないみたいです。

「千夜姉には敵わないわね……ええ、2人は嘘。本当は十香、四糸乃そして私の3人よ」

「……3人？」

「どうかしたの？」

「いや、なんでもないです」

「どういう事なのでしょう。土道と繋がっているのは4人のはず、琴里ちゃんが嘘をついている感じもしないし……もしかして、知らない？確かにこの残り1つは他の繋がりとほだいたい違うけど……」

「ん？何かな？」

「いえ、なんでもありません」

「懸念の対象を見る。この人はいったい何なのでしょうか……」

「千夜姉どうかしたの？」

「いえ、なんでもありません。あとは確認されている精霊の詳細を教えてくださいますか？」

「分かったわ。じゃあ、まずは十香ーへプリンセスからー」

〈精霊会話中〉

「で、最後に最近現れた〈ヘリーパー〉よ」

結構いましたね。中でも〈ナイトメア〉って個体がヤバいそうです。総合危険度Sつて……殺人つて……

「この〈ヘリーパー〉だけど他の精霊以上によく分かっているの。空間震は最初の1回だけ。基本的に誰かを庇っているわね。いったい何が目的なのか……」

あれ？ 評価いい感じじゃないですか？ これなら総合危険度も低いんじゃないですか？

「総合危険度は〈ナイトメア〉と同じSよ」

「え？」

S!? なんでですか!?

「え、え〜っと。話を聞いた限りじゃ〈ヘリーパー〉の総合危険度がそこまで高くなる理由がわからないのですけど……」

「前回、出現した時にASTの構成員を眠らせたみたいなんですけど未だに目覚めてないらしいの」

え？ 【邪視^{イカイルアイ}】の（睡眠^{スリープ}）まだ効果が続いているんですか？ あつ、そうだと自動的に解除しようとしなければ解除出来ないのです。寝ていたら解除とかも考えられませんしね。

仕方ありません、今度解除しに行きましょうか……

「今回はここまででいいです」

「それじゃ千夜姉こちらから質問いいかしら？」

「いいですよ」

「私がないで精霊だと思ったの？」

「え？え〜つと……琴里ちゃんが司令をやっていたから？」

「どういう事？」

「琴里ちゃんって普通は中学生ですよね。そんな子がこんな組織の中核にくい込んでいくには何か必要だと思いましたし、そもそも精霊じゃなかったら精霊を守ろうとする機関に入ろうとも考えないでしょう？」

「なるほどね……さすが千夜姉だわ」

とつさに考えた理由でしたが、納得して貰えたようです。

「千夜姉、あんまり精霊達のところに突っ込まないでね。無茶はしちやダメだからね」
「分かってますよ。また遊びに行きますよ」

私は転移装置に乗り、フラクシナスを出て家へ帰った。

（??? 視点）

彼女はいつたい何者なのだろうか。

精霊と確信はしているが霊力を全くと言っていいほど感じない。それに、あんな
霊結晶セファイラはなかったはずだ。

イレギュラーだ、引き続き監視をしなければ……絶対に邪魔だけはさせない。シ
ンの為にも……

死神は後処理をした

今頃、士道達は温泉でしょうか？私は今、総合危険度Sと言う最高ランクなつてしまった事件、死んでないけど永眠についちやつたを解決する為にASTの本部へ向かっています。

取り敢えず侵入したのはいいのですが——ここ何処でしょうか？

そもそも、「邪視」^{イヴイールアイ}を使って眠らせた人の顔すら覚えていません。折紙さんの印象が強すぎるからでしょうか？

それにしても人が1人もいませんね何故でしょうか？あれ？温泉休暇？ASTの方々も温泉ですか……。あれ？何故か面倒事の予感がしますけど大丈夫ですよね？士道。武運を祈ります。

結局、隅々まで探しましたがいませんでした。あれ？もしかして、普通に病院にいるんじゃないか……。

そう思い、病院に移動しました。

「いました……。」

さっきまでの苦労は何だったのでしょうか……。

「さて、〈サリエル靈魂看守〉—————【イヴァイルアイ邪視】解除つと。これで完了ですね。あとは時間が経てば勝手に起きるでしょう」

「みなさーん。検査の時間で—————〈ハリーパー〉!?!」
て、撤回しまーす!

「え?なんで〈ハリーパー〉がこんな所に!?!もしかして、眠らせた子達の魂を狩りに!?!ほ、本部に連絡しなくては!」

こうして、誤解がまた一つ増えたのだった。

く精霊逃走中く

「ここまで来れば大丈夫でしょう」

完全に油断してました。いけませんね．．．．．気をつけないければ—————
「!?!」．．．．．あつ「!?!」

「!?!〈ハリーパー〉!?!」!?!「AST!?!」

もう追いついてきたのですか!?!早すぎやしませんか?それに、折紙さんよく会いますね!もう少し休んだほうがいいと思いますよ!

「どっつする!?!」

「隊長を呼ばないと！」

そうです、そのまま行ってください。何にもしませんから！

「関係ない。精霊は倒す」

折紙さん！仕事に熱心なのはいいことですけど！いいことですけど、時と場合を考えましょうよ！取り敢えず全力で逃がしてもらいます。

「あつ、逃げた」

「よかったあ」

「助かった……」

「逃がさない！」

折紙さんだけ、やる気スイッチ入っているじゃないですか。ほかの人と同じで見逃してくれればいいのに……

結局、スピードで振り切り逃げる事が出来ました。

疲れたから私も温泉に行きたいです……まだ、いますかね？琴里ちゃんに電話をかけてみましょう。

『もしもし、千夜姉？どうしたの？用事は終わった？』

「用事は終わりました。疲れたので私も温泉に行きたいと思っまして……」

『それならちようどよかったは神無月が温泉を掘り当てたのよ。フラクシナスで回収さ

せるから、少し待っていて』

神無月さんどうやって温泉なんか掘り当てたのでしょうか？……人力じゃないですよね？

（土道視点）

何故こうなった……

今、俺は露天風呂（神無月さん作）に入っている。他にも人が一緒に入っている。一緒に入っているのが男なら問題は無いしかし。

「どうだ？土道」

「土道さん……気持ちいい……ですか？」

「いやあくいいお湯だねえ」

「そうですね、本当にいいお湯ですね」

これはどうしたものか。十香に四糸乃、琴里そして千夜。

「つて、千夜!?!いつの間に」

「さつきです。今日は疲れたので温泉でのんびりしたい気分なのですよ」

「それはいいが……」

正直目のやり場に困る。

「どうしたんですか？」

「なっ、なんでもないです！」

「そうですか……四糸乃ちゃん、琴里ちゃん、洗ってあげるから来て下さ〜い」

「むっ！四糸乃と琴里ばかりずるいぞ。私も混ぜろ！」

「よしのんも！よしのんも！」

「じゃあ皆で洗いっこしましょう！」

この日、疲れを取るはずが逆に疲れた気がしたのは気のせいではないだろう。

狂三キラー

死神は悪夢と衝突した

転校生が来ました。いや、転校生が多いですねこのクラス。十香ちゃん、私、そして今回の人……何故でしょうか？しかも、今回も女子生徒らしいです。あつ、入ってきました……あれ？

「時崎狂三と申しますわ。……私、わたくし精霊ですよ」

「[[[[!!]]]]」

彼女の言葉をその場で正しく理解したのは私を含めて4人。あとは、土道と十香ちゃんそして折紙さん。私の表情はかなり厳しいものになっていくでしょう。他の3人は疑心暗鬼という感じです。他の人達は、天然な子という受け取り方しかしてないみたいです。

ちなみに彼女、時崎さんが言ったことは嘘ではないです。確かに体から精霊の霊力を感知することを出来る。それにこの霊力は街中にかんりの数いた者の物。

つまり、時崎さんの天使は分身が使えるような能力でしょうか？

そんな事を考えていると時崎さんは土道に学校案内を求めていました。何故、土道な

のでしょうか？ラタトクスのには万々歳でしょうが……何かある気がします。
一応、監視をしておきますか。

〔精霊監視中〕

十香ちゃんと折紙さんと一悶着ありましたが特におかしな事はありませんでした。
あと、十香ちゃんピンケツは貧尻ではなく貧血です。足りてないのはお尻のお肉ではなくて血ですよ。

あつ、時崎さんが男3人と裏路地に入っけいききました。精霊ですし、その辺の人よりは強いですから心配ないでしょうけど……

「ぎゃああああああああああ!!」

悲鳴!?でも、この声は男の方?

慌てて、その場へ移動すると時崎さんを中心として血だまりが出来ていました。

「うっーーーーー」

気持ち悪くなり吐き気がします。今すぐにでも〈サリエル靈魂看守〉を使い押さえ込みたい衝動に駆られますが、わざわざ正体をバラす訳にはいきません。

「あら？貴女は士道さんといった同じクラスの……」

「魂月ですよ。時崎さん、これは一体何をしたのでですか？」

「ただ、わたくし私はこの方々の時間を貰っただけですわ。．．．ただ、貴女に見られたのは厄介ですわね。申し訳ありませんが、消えて下さいまし」

「ツ！〈サリエル靈魂看守〉!!」

躊躇無く放たれた弾丸を切り裂きます。

「人殺しの精霊．．．貴女が〈ナイトメア〉ですか」

「そういう貴女は〈リーパー〉違いまして？」

「よくご存知ですね」

「それにしても、全く靈力を感じませんでしたわ。いったい、どうやってますの？教えて下さいませ？」

「嫌ですよ。そつちこそ、妙な靈力の感じ方する理由を教えてくださいですよ」

馬鹿みたいに多い靈力反応の個数。それに、一体を除き他の個体の靈力の少なさ。どういふことなんでしようか．．．

「少し待ちやがれです」

歪んだ敬語のような言葉を聞き私は振り返ります。そこには青い髪でポニーテールの少女が立っていました。

あれ？この子の顔立ち、どこかで見たことあるような気がします．．．

「ヘナイトメア」だけじゃなくて「リーパー」もいやがりますか」

「あらあら貴女は……」

どうやら、この子と時崎さんは知り合いみたいです。決していい意味ではない。

青髪の少女が早着替えをし戦闘服になります。

今のどうやってやったんでしょか？などと考えていると早速レーザーを放ってきました。狭い裏路地なので上へ一度退避します。そこには待ち構えていたAST。

また折紙さんいますよ……さて、私はさつきと逃げましょう。時崎さんも精霊、しかも総合危険度Sならそれなりの戦闘力はあるでしょうから。

いつも通り、逃げ切りますが少し気がかりなことがあります。時崎さんの霊力が消えたのです。もちろん、街中にいる個体の全てが消えた訳ではありません。あの裏路地にはいた個体だけです。

まさか、殺された？そんなありえないことがあるのでしょうか……もしそうだとしたら、あの青髪さんとしてつもなく危険ですね……

霊装を解除し、先に帰っていた土道と十香ちゃんに追いつこうとします。

「あつ、見えてきましたー……あれは……」

土道と十香ちゃん以外にもう一人の姿が見えます。青髪にポニーテール……いや、まさか……さつきの子ですね……

近づきたくないですね。怖いのです。

「兄様！」

そんな事を思いつつ影から見守っているとポニーテールの子が士道に、そう言つて飛びついた。

士道に琴里ちゃん以外にこんな可愛い妹が!? 私の妹にしなければ!! あと、士道は隠していた罰を受けさせないといけませんね。

私は士道達のもとへ近づいて行きました。

「しかし驚いたぞ、士道にもう一人妹がいるとは」

「隠し子ならぬ、隠し妹! やるねえ〜!」

本当です! けしかりません! 私によこしてください。

「でも、確かにそつくりだよね〜!」

顔立ちに覚えがあつたのはこのせいでしょうか? と考えていると自称士道の実妹の真那ちゃんと、義妹の琴里ちゃんが実妹、義妹勝負を始めました。

「じつまい・・・ぎまい・・・お米でしょうか?」

「ピンポンピンポン！大せいかい！因みに2つ合わせて丼にするとそれはそれは禁断の果実のような味がするだよ〜！」

よしのん!?なんで、そんな知識まで持っているのですか？

「なんだと!?!シドー今度作ってくれ！」

「俺を犯罪者にする気か！」

「十香ちゃん、それは食べ物じゃありませんよ。土道は変態です、けしかりません〜」

「あつ、作ったら私が食べますので、お願いしますね？」

「変態はお前じゃねえか！」

土道の叫び声が家の中に響きました。

少女は重複した約束を見た

今日は開校記念日で休みですね。お爺ちゃんに呼ばれているので夜はお爺ちゃん家に帰らないといけません。

午前中に買い物を買って済ましておきたいですね。日用品類を買いに行きましようか。

折紙さんが噴水前に立っていましたね。誰かと待ち合わせでしょうか？鳩が止まっていますけど……どれだけ前から微動だにせずに立っているんでしょう。まあ、関わらないのが吉でしょう……って土道と時崎さんですね。

目の前に土道と時崎さんが腕を組んで歩いているのが見えます。

ああ、いつものですか……あれ？ランジェリーシヨップ？……ってデートで行く場所でしたっけ？あつ、土道が下着をリクエストしています。土道……本当に昔から変わってしまいましたね、私は悲しいです。でも、男の子なら仕方が無いのでしょうか？

ランジエリーショップを素通りし日用品を買いいます。時間もいいですし、昼食べていきましようか。

昼食をとる場所探していると窓から折紙さんが食事をしているのが見えました。待ち合わせ相手とは合えたみたいですね。陸自の人でしょうか？……って、なんで士道がいるんですか？

さつき、時崎さんとランジエリーショップで下着選んでましたよね？士道はついに分身が使えるようになったのでしょうか？とりあえず、ここは辞めておきましょう。

その後、何故か行くとこ行くとこで士道を見かけました。何故か毎回女の子を連れていました。十香ちゃんと折紙さん、時崎さんの3人です。

士道は本当に分身が使えるようになったのでしょうか？まさか！ドツペルゲンガーでしようか!?士道が死んでしまいます!!……まあ、それは無いですね。他に考えは……あつ、トリプルブツキングでしょうか？

フラクシナスの転送装置を使えばどうにかなりそうですが……技術の無駄使いですね。

……!!?

急に靈力の反応を察知します。反応した靈力の対象は……時崎さんです。

さつき士道といった中にも時崎さんがいました。まずいかも知れませんが……

私は霊力の反応があつた方へ走り出しました。

そこに着くと土道の実妹の真那ちゃんが時崎さんの首を貫いた所でした。

「なんで平然としてられるんだよ！お前は今、人を!!」

「精霊です兄様。それに慣れていやがりませんから」

まさか、本当に精霊のような馬鹿みたいな能力を持った者を殺せる人がいるとは……崇宮真那。危険ですね。

それにしても、時崎さんの能力は一体何なのでしょう？確かに目の前で死んでいますが、多分コレは本物ではありません。かと言って偽物と言われるとそうではないような気がします。

土道と真那ちゃんの会話を聞きますが時崎さんは、また何処かに現れるようです。どうやったら倒れるのでしょうか？能力が解ればどうにでもなるんでしょうけど。

さて、そろそろお爺ちゃんの家に向かわないといけませんね。行きながら琴里ちゃんに真那ちゃんのことを聞きますか。

私はスマホでコールをかけながらお爺ちゃん宅へ向かいました。

少女は自身の謎に触れた

「琴里ちゃんから真那ちゃんの情報が来ました。Deus Ex Machina Industry、通称DEM社の派遣社員らしいです。DEM社は基本的にASTが使っているような兵器を作っている所ようです。会社はかなりマズイ所から来ているらしいですが真那ちゃん自体は悪い子には思えません。まあ、少し喋った程度ですが……」

「士道の実妹ですか、なら私の妹ですね。私は魂月千夜です。お姉ちゃんでも姉上でも姉様でも好きに呼んでください」

「いや、なんで俺の妹なら千夜の妹になるんだよ」

「姉様？でも、鳶一の姉様もいやがりますし……兄様！どうなってやがりますか!?!」
「誤解だ!」

「……ってな感じでしたし。あつ、そう言えば最後不思議な事を言っていましたね……たしか……」

「貴女に姉妹はいやがりますか？」

「……でしったっけ？」

「いませんけどね。だからこそ妹に憧れを持っているのではないですか。

「なんで、そんなことを聞いたのでしょうか？ つと、着きましたね。それにしても、相変わらず大きなところですね。」

「ちーちゃーん！……ぐえ!？」

「あれ？ お爺ちゃんどうしましたか？」

「うううう……なかなかいい右ストレートじゃったぞ。これなら世界を目指せるぞ」
「目指しませんから」

「飛び付いてきたお爺ちゃんを殴り飛ばします。いつもの事です。」

「部屋の中に進みます。部屋に入ると中居さんが料理を並べていました。」

「中居さんお久しぶりです」

「お嬢様、お久しぶりです。腕によりをかけて作りましたので味わって下さいね」
「はい」

「お爺ちゃんの対面に座り食事をすすめます。相変わらず、美味しいです。」

「料理に舌鼓を打っていると、お爺ちゃんが箸を置き真剣な目をして口を開きました。」

「千夜、お前は何故あそこで倒れていたんだ？」

「あそこ？」

そう言えば、意識不明になっていたんですね。体は何処にあったかは聞いてませんでしたね。

「今、お前が住んでいる家だ」

「今の家？」

「なんで、そこに行ったのでしょうか？その日より前の数日間の記憶がないんですね……」

「中居さんが鍵がないのに気が付かなかつたら今頃どうなっていたことやら」
中居さん、ありがとうございます。

「私はどの程度、行方不明になっていたのですか？記憶が少し曖昧で」
「帰ってこなくて探し出して1日目に見つかったな」

「……結構早く見つけたんですね」

「心配したからな」

お爺ちゃんやんは両親が死んでから何かと気をかけてくれています。当時の私はシヨツクを受けたせいで、かなり記憶が曖昧ですが……

「お爺ちゃんは何か心当たりはありますか？」

「……いや、ないな」

「そうですか」

お爺ちゃんは何か隠しているみたいですが私の為でしょう。聞かないでおきます。

「……………いや、これは渡しておくか……………これが、近くに落ちていた」

「コレは……………」

それは、金色ヘアピンでした。三日月型の飾りが付いたヘアピン。あれ？どこかで見たような……………

「ツツ!!？」

「千夜!？」

「あ、あ、ああああああああああああああ!!」

急に頭が割れるように痛みが走り、吐き気と目眩がします。それと同時に何か流れ込んできます。

あ、頭が痛い……………割れるようだ……………それに……………なにかが、頭に……………

『千夜』

『千夜ちゃん』

—————これはお父さんとお母さん?……………それに—————

「これ、お父さんとお母さんにプレゼントで貰ったヘアピンでした……」

「千夜……全部、思い出したのか？」

「全部？なんのことですか？」

「そ、そうか」

「うっ、お爺ちゃん……もう限界……です……」

ヘアピンを握りしめながら私は倒れた。

薄れゆく意識の中、今さっき頭に流れてきたあの声を思い出します……

『やーちゃん』

……誰の声かはわからない、けど何故かひどく懐かしくて暖かく、そして寂しく感じました。

死神は屋上を目指した

放課後。昨日のことをぼんやりと考えていました。髪には昨日のヘアピンを付けています。

「一体どこの誰なのでしょいか……」

答える人はおらず質問は風に消えていきます。他にも色々気になることがあります。私が貰ったヘアピンはこれだけの筈なのに足りない気がして仕方が無いのです。

悩んでいても仕方が無いかと帰ろうとした瞬間、突然不思議な感覚に襲われました。気のせいかと思いましたが周りの人達は倒れ込んでいます。

それにこの霊力は……

「時崎さんですね……」

いったい学校で何をやるつもりでしょうか？それにしても、これは霊装無しだときついですね……

私は霊装を既に纏っています。周りはみんな倒れているので問題はないでしょう。時崎さんの本体は……屋上ですね。

『土道さん、聞こえますか？うふふ、わたくし私に御用があるなら屋上までどうぞ。なるべく早

くいらして頂いた方がいいと思いますわよ。いひ、いひひひひひ』

「……それにプラスして土道の呼び出しですか……行かないと、まずいかも知れませんか……土道は絶対に行くでしようから。」

そう思い、屋上に向かおうとしたが私の行く先を塞ぐ影が現れます。

「この先は行かせませんわ」

「時崎さんですか……それに分身の方ですね？まあ、分身が正しい言い方かは分からないですが」

「あらあら、よく分かりますわね」

「靈力の量が違いますので、簡単にわかりますよ」

「それは、少し厄介ですね……」

「ひとつ聞いていいでしょうか？」

「なんでしよう？」

「貴女は何故、土道を狙うのですか？」

理由を解決させることが出来るならそつちで和解ができるかもしれません。戦わなくていいならそちらの方がいいですし。

「何故ですか……貴女は人間だった記憶があるみたいですし、精霊を生み出す存在を知っていますわよね？」

「……」

本当は知らないですが、ここで話を折る訳にはいきません。あえて、返事はせずに沈黙します。

”いいえ”と言わないのが重要です。

「私の目的はその精霊を殺すことですわ。その為にも士道さんの中にある霊力が必要なんですの」

「なるほど。あなたの考えは分かりました」

つまり、殺したい存在がいてその相手を倒すために約4人分の霊力を保持している士道を狙っているわけですか。何があつたのかは分かりませんが、かなり強い気持ちのようですね……でも……

「……それでも、士道を殺させてあげる理由にはなりませんかねっ！

〈サリエル霊魂看守〉………イヴァイルアイ【邪視】………スタン（麻痺）！」

「っ！」

いくら霊力が多くなると効きづらくなるイヴァイルアイ【邪視】でも一瞬動きを止めるぐらいのことは出来ます。その一瞬あれば充分です。

「ハル魂を狩る者ター！」

大鎌で時崎さんを切り裂きます。しかし、体には傷一つつきません。変わりに魂と霊

力を全て持っていききます。時崎さんはその場に倒れ込み消えました。やはり、私の【生命フエイト・オブ・ライフの満欠】の（望月パース）みたいに霊力で動いている存在でしたか。心配でしたから【魂ハを狩ンる者ター】を使いしましたが【魂イを喰ウらう者ター】でも良かったですね。

あれ？十香ちゃんの霊力がありませんね。あちらでも戦っているのでしょうか？
そんな事を考えていると時崎さん達が影から這い出てきます。

「貴女の存在は面倒ですの」

「だから、ここで」

「足止めさせてもらいますのー！」

「何人出てくるんですか!?!」

私は時崎さんの分身達との戦闘を再開しました。

琴里シスター

死神は少年と悪夢を救った

屋上に着くまでに2回も時崎さんに邪魔されたせいで遅れてしまいました。

そのせいで問題が起きています。それは屋上にいる霊力の種類です……この霊力は琴里ちゃん!?

私は勢いに任して、屋上の扉を蹴飛ばして開きます。

「それでは、ゴ機嫌よ」

扉を開けた瞬間、時崎さんの声と共に銃弾が放たれる音が響きます。放たれた弾丸は琴里ちゃんの頭に直撃しました。琴里ちゃんは力なく倒れました。

「あ、あ、ああああああああああああああああああああああ!!」

〈^{サリエル}靈魂看守〉で心を落ち着かせるのも忘れ時崎さんに飛び込んでいきます。霊力の量で本物は分かっています。本物を目指してとびかかっています。

「あらあら、少し遅かったですわね」

「ふざけないで下さい!!」

「別にふざけてなんていませんわ。^{わたくし}私達!!」

分身の時崎さんが囲んできませんが関係ありません。

〔サリエル靈魂看守〕——「魂を喰らう者」!!邪魔しないで下さい!!」

大鎌で薙ぎ払い喰らう。喰らっても喰らっても次々と時崎さんは狂ったように突撃してきます。

「キヒヒヒヒ。無駄ですわ————ッ?!」

「?!」

私と時崎さんはある事に気がついた。琴里ちゃんから靈力を感じたからです。

「まったく、派手にやってくれたわね。それにヘリーパーまで現れるなんて今日はどうなっているのかしら」

さつきまで倒れていた琴里ちゃんが無傷で立ち上がりそう言い放ちました。

「私としては貴女達が恐れおののいて戦意をなくしてくれるのがベストだけど」

「ふん!戯れないで下さいまし!」〔アレフ一の弾〕!」

そこから、時崎さんと琴里ちゃんの戦闘が始まりました。あれ?私、空気?さつきまで戦っていたの私なんですけど!?

それにしても……ふむ、時崎さんの能力は時間に関するもので、琴里ちゃんの能力は炎に関するものでしょうか?

なんて心の中で考察をしていると、琴里ちゃんが苦しみだしました。しかし、直ぐに

立ち直りました。どうしたのでしょうか？

「〈灼爛殲鬼〉————」【砲】!!」

巨大な斧が形を変え大砲になり炎を吸収していきます。まずいと思ったのか時崎さんは分身を盾にします。———が

「灰塵と化せ〈灼爛殲鬼〉！」

琴里ちゃんは、それをお構い無しに炎が焼き付くしてしまいます。

これで終わりかと思いましたが琴里ちゃんは止まりません。土道が止めようとしても無視して第2発目を放とうと力を貯め続けています。

あれ？これ気がついたらまたやばくなつてませんか？

土道が時崎さんの前に庇うよう立ちますが関係なしに炎が放たれます。

「お兄ちゃん！避けて！」

火炎が放たれてから琴里ちゃんは正氣に戻ったようですが間に合いません。

「土道！」「魂を喰らう者！」

土道を助けるため、そして土道が守ろうとした時崎さんを守るために、私は土道を吹き飛ばし【魂を喰らう者】を発動させます。【反転】を使わなかったのは琴里ちゃんにダメージがいきかかないからです。

「ツツ!!」

喰らいきれない熱風や炎が私を襲います。体が焦げあちらこちらから煙が上がります。ここまでダメージを受けたのは初めてです。

「くっ……行きませよ！」

ボロボロな体に、鞭を打ち時崎さんを抱え上げて私はその場を離脱したのでした。

少女は謎の想いに困惑した

「どうして、私わたくしを助けたのですか？」

「土道が時崎さんを助けたがっていたからですが？」

「そんな理由で……まさか……いえ、これを言うのは野暮というものでしょう」

「？」

「それでは、私わたくしはこれで」

「あつ、ちよつと待つてください」

その場から去ろうとする時崎さんを引き止めます。話したいことがあるからです。

「時崎さんは、靈力が欲しいんですよね？」

「まあ、そうなりますわ」

「じゃあ、私わたしがあげるから土道から手を引いてくれませんか？」

「貴女あなたが？それは、貴女一人の靈力で土道さんの事を諦めろとおっしゃいますの？」

「いや、流石に一気に全部はあげられないですよ。でも、私の靈力は他の精靈よりも多い

ですし、他から奪うことだってできます。それを少しづつ時崎さんに分けるといふことです」

悪くない取引だと思えますけど……乗ってきますでしょうか？

「成程、話は分かりましたわ」

「了承ということでもいいんですか？」

「いいえ、それぐらいでは土道さんの事を諦める事は出来ませんわ。それに、こちらにもカードがありますのよ？」

「え？」

この場合は、交渉のカードの事だろうですけど……何かありましたっけ？

「貴女は土道さん達に精霊だということを隠していますでしょ？」

「あ……あ！まさか……」

「その通りですわ、ばらされたくなかったら霊力を無償で下さいまし」

忘れてたあああああ!!あれ?形勢逆転されてません?

「ちよ、ちよと待つて下さい!!じゃあ、こうしませんか?私は時崎さんに最初の想定していたのより多い霊力を定期的に渡します。なので時崎さんは土道がピンチな時は手を貸して、少しだけ襲撃回数を減らして下さい。これでダメでしょうか？」

「……仕方ありませんわね。貴女には助けられた借りもありますし。それでいいで

すわ」

よかったです。なんとか丸くまとまりました。

「それでは、早速霊力を移しますね。手を貸してください」

時崎さんの手をとって霊力を自分の中から時崎さんに移動させます。

「終わりですね。契約の事、ちゃんと守ってくださいね？」

「分かっていますわよ。それでは、また会いましょう」

時崎さんは暗闇に消えて行きました。私も帰りましょうか。

〜後日〜

私はプールに來ています。目的は土道と琴里ちゃんのデートのサポートですが、そこまで手を出す訳にも行きません。まあ、基本的には十香ちゃんと四糸乃ちゃんのお守りでしょう。適当に楽しんでいきましょう。

「千夜行くぞー！」

「早く……行きま……しょう」

「レッツゴー」

十香ちゃんと四糸乃ちゃん、よしのんが私を急かします。十香ちゃんは紫のビキニで四糸乃ちゃんはピンクのワンピースです。よしのんもちやつかり水着になっています。うん、みんな可愛いですね。カメラを持ってきておいて正解でした。

「先に行っておいてください」

「うむ、早く来るのだぞ」

「行って……きます」

「早く来てねえ」

3人は勢いよく更衣室を出ていきました。

「悪いわね、千夜姉。十香達のお守りを任せちゃって」

「全然いいですよ。琴里ちゃんは大好きな士道とのデートを楽しんで下さい」

「なっ!?!し、士道の事なんて!」

「はいはい。行きますよー」

琴里ちゃんを置いて更衣室を出て士道達の元へ移動します。

「士道、十香ちゃん達は私に任せて琴里ちゃんにかまっておいてください」

「おう、悪いな千夜」

「いいえ、むしろ役得ですのぞ」

カメラを構えて楽しそうに遊ぶ3人を収めます。

「はははは。程々にしておけよ」

一体なんのことでしょうか？まあ、いいです。とにかくみんなのかわいい姿を残しておきましょう。

流れるプールではしゃぐ十香ちゃん、氷山の上に居る四糸乃ちゃん、ウォータースライダーから吹き飛んでいく琴里ちゃん達、いい絵が撮れますね。

あれ？土道と琴里ちゃんの姿が見当たりませんね。うん、あれは！土道がいつも耳につけてる通信機じゃないですか!?

「もしもし、こちら魂月千夜。応答願います」

『ああ、千夜さんですか』

「その声は神無月さんですね？土道達はどうしたんですか？」

『実は土道君がそれを外してしまって、今は遊園地の方にいますよ』

「なら、私はこっちで他の子の面倒を見えますね」

『申し訳ありません、お願いします。何かあったら連絡しやすいようにそれを付けたままにしておいて下さい』

「分かりました」

土道、頑張ってください。

『千夜、聞こえるか？』

「村雨さん？どうしたんですか？」

『シン達が鳶一折紙に襲撃された。その場から避難してくれ』

「……大丈夫なんですか？」

『大丈夫とは言えないがこちらでやれる事はやるつもりだ』

通信を切る。確かに爆発音が大きくなってきた。前よりも威力が強い機体でも持ってきたのでしょうか？

とりあえず、十香ちゃんと四糸乃ちゃんを連れて避難してそのあと助けに行かないと。あっ、インカムのせいで私の位置が分かってしまうじゃないですか！困りましたね、とりあえず避難……って、あそこに飛んでいるのは十香ちゃんと四糸乃ちゃん？どうしましょう……絶対やばいですよね。

インカムさえどうにか出来れば……よし、壊しましょう。

インカムを壊して更衣室で霊装を展開します。

少し時間がかかってしまいましたね……急いで向かいましょう。

私が着いた時には土道が琴里ちゃんの霊力を再封印し折紙さんの前に立ちはだかつ

ている時でした。

「折紙、お前さつき言ったよな。自分の仇は炎の精霊（エイフリート）であって人間の五河琴里じゃないって、もう琴里は精霊じゃない人間だ。だから俺を狙え、今は俺がエイフリートだ！」

つまり、琴里ちゃんの変わりに自分を殺せと言っているようなものです。バカなんですか！

私は、いつでも飛び出せるように準備をしておきます。しばらく、士道と折紙さんが話していましたが折紙さんが倒れたところで中断されました。

ふう、今回私は必要なかったですね。

それにしても士道は女たらしになっっているのかと思いましたが変わってませんでしたね。誰か困っている人がいたら見過ごせない、それがどんな人であろうと手を差し伸べます。十香ちゃんの時も四糸乃ちゃんの時も時崎さんの時も、今回の琴里ちゃんの時も。そして、あの時………なんでしょうか………この感じは？

私は何故か早く大きくなる胸の高鳴りや、不思議な感覚に疑問を持ちながらもその場をあとにしました。

少女は謎の想いに結論を出した

あの日から自然と土道が目に入るようになりました。いったい私はどうしたのでしょうか？

「見てくれシドー！ケイタイデンワーという物らしいぞ！琴里に貰ったのだ！」

「良かったな」

「なあ！シドーの番号入れて貰ってあるのだ、かけてもいいか？」

「ああ、もちろん」

「そうか！」

「おい！どこへ？」

「遠くに離れてからかける〜！」

「土道、明日一緒に街を歩きたい」

「えっ？それってつまり……」

「デート」

「あく、悪いんだが明日は……」

「恋人なら当たり前」

「ですよねー」

「午前10時西天宮公園のオブジェの前で待っている」

何故か前まで何とも思っていなかった、十香ちゃんや折紙さんとの会話を聞くだけでなにかモヤモヤした感じがします。この感覚はなんでしようか？

電話を終えて土道が教室に戻ってきます。じーつと土道の顔を見て見ます。

「どうした千夜？俺の顔になにか付いているか？」

「目と鼻と口が付いてますね」

「いや、確かについているけどさ……お前本当に大丈夫か？」

「何がでしょうか？」

「前のプールの時からなんかぼーつとしていると言うか、よそよそしいと言うか」

「……別になんともないですよ」

「そうか、ならいいんだ」

何故なんですか……普段は気が付かないくせにこういう時は気がつくのでしょうか？腹立たいです。

そんな私の気持ちとは裏腹に心臓はドクドクと高鳴っていました。

本当になんなのでしようか？

憂鬱な気分なまま私は家へ帰った。

〈2日後〉

遊んで気を紛らわせようとゲームセンターに来ました。

昨日は折紙さんと土道がデート?をしているのを見ましたがあれは何だったのでしょうか?土道はアニメTシャツを着ていたし、折紙さんはスク水犬耳犬尻尾と物凄い格好してましたが・・・まあ、とりあえず楽しみましょうか。

まずは、UFOキャッチャーでもやりましょうか。最近キモカワとか言って流行っているのがあるって殿町君が見せてくれましたけれど私はよく分かりませんね・・・あつ、このパンダは可愛いですね。よし、とりましょう!

500円玉を投入します。この機は500円を入れると1回おまけで出来て6回動かせるのです。まあ、位置的に2、3回動かせば取れそうですけど。

ボタンを押し少しづつパンダの景品を動かしていきます。結局、回数いっぱい使いパンダをとる事が出来ました。

さて、どこに付けましようか・・・スマホでいいですかね・・・って、土道と十香ちゃんですね・・・

士道と十香ちゃんがゲームセンターに入ってきました。デートでしょうか？

まあ、私は私で楽しみましょうーーーーー

ドコオオオオオオオオン

!!!!!!

ーーーーーん!?

楽しもうと思った矢先に爆発音が聞こえ振り返ります。見ると十香ちゃんがゲーム機を破壊していました。

「ふう、少しスツキリしたぞ」

成程……あんな感じでやれば私もスツキリ出来るかもしれないね。よし、パンチングマシンでもしましょうか。

力を込めて拳を放ちます。おお、コレはなかなかスツキリしますね。

『パツパツラツパツパー！ニユーレコード！1位！』

「あれ？」

パンチングマシンを見ると、1位：評価997と出ていました。

「えっと、2位は471……」

やってしまいました、知らないうちに霊力でも込めてしまったのでしょうか？気を付けないといけませんね。壊してしまわなかったのは幸いでしたね……霊力は漏れてないですかね。

霊力を確認しようと周りを確認します。

「あれ？」

同じ霊力を持つ2人がいました。つて、精霊!?なんでこんな所にいるんですか!?

まあ、関わる気力はありませんし帰りますか。

ある程度スツキリした為か私の足取りは軽いものでした。

↳帰宅後↳

しかし、何故土道の事でこんなにモヤモヤしたのでしょうか?もう一度考えてみましょうか。

スツキリとして落ち着いたところで考えをまとめようとしています。

モヤモヤし出したのは・・・琴里ちゃんを庇っていた時でしたよね。つまり、土道の土道らしい瞬間を見てからですね・・・あつ。

その時頭の中に一つの答えが出ました。妙に心にストンと落ちて、それに納得の音が漏れます。

私はただ、土道が変わってしまったかと思っていましたが根の部分は変わってなかつ

た、士道は士道のままだった事が嬉しかったのです。

士道は、私が一番辛かった時を支えてくれた士道のままで変わっていないと気がついて安心したのです。

なんだ、それだけの事でしたか……これでもうモヤモヤとすることは無いですね。

私の気持ちは整理がつき、とても晴れやかなものになりました。

あれ？でも士道が十香ちゃんや折紙さんと会話していた時のモヤモヤは説明ついていないような気が……まあ、いいですね。気にしないでおきましょう。

少女は清掃に勤しんだ

始まりはこんな言葉だった。

「シドー！千夜！これに参加しないか！」

土道の家で、ご飯を食べた後に十香ちゃんが清掃活動のポスターを持ってきました。

「その日なら別に用事はありませんし、いいですよ」

「俺も大丈夫だ。それにしても十香が清掃活動なんていつたいたいという風の吹き回しだ？」

私もそれを不思議に思っていました。十香ちゃんは土道と食事にぐらいしか強い興味を惹かれないものだと思っていましたからね。

「うむ、実はな、ここを見てくれ」

「えーつと、なにに。一番ゴミを集めたチームには豪華北海道海鮮の恵みセットをプレゼント……」

「あははは……」

十香ちゃんは十香ちゃんでしたね。

「それにしてもゴミ拾いでチーム戦ですか。チームは1〜3人で範囲は……結構広

いですね。あつ、1位じゃなくても5位まで他の景品があるみたいですね」

「どれも豪華な景品だな……。予算はどこから出ているんだ？まつ、いいか。どうせなら豪華北海道海鮮の恵みセットを目指して頑張るぞー！」

「おー！」

くゴミ拾い大会当日く

「土道、チーム登録してきましたよ」

「ありがとう、千夜」

「ちなみにチーム名は“プリンセス”にしておきました。リーダーは十香ちゃんにしました」

「うむ！任せるのだ！」

参加チームは67……。結構多いですね。

「あつ、五河君だ」

「性欲だけじゃなくて食欲も凄いのね」

「まじ引くわー」

「くっそお！五河めえ！十香ちゃんと千夜ちゃんと参加なんてえ！絶対負けないからな」

知り合いも結構いるみたいですね。

「それでは第3回ゴミ拾い大会開始です!!」

司会の掛け声とともに各チームが別れていきます。

「シドー！千夜！行くぞ！」

「ああ！」

「はい」

私たちのゴミ拾い大会が始まりました。

「それにしても大きな袋ですね」

私は大会担当者から渡されたゴミ袋を見ながら呟きます。

「うむ、沢山集めて優勝するのだ」

「沢山はいる分にはいいんじゃないか？」

たしかにそうですが、こんなに集めれるでしょうか。

「もういつそのこと、ゴミ箱から抜き取りましようか」

「いや、それはダメだろ。ちゃんと集めないと意味ないぞ」

「なら士道、この袋の中に入りませんか？そしたら、いっぱいになります」

「俺はゴミじゃないぞ!？」

「ゴミではないですが、沢山の女の子を誑かしているので他の人から見ると屑だからいかと思います」

「酷い言い草だな．．．．．だいたい、俺を袋に入れて持つていつてみる実行委員の人達なんて思うと思う」

「——生きてんのかよ?」

「殺せと!?実行委員さん怖いな!」

そんな話をしながら黙々とゴミを集めます。あつ、エロ本落ちてました。

「士道、いりますか?」

「いらねえよ!」

「む!」

「．．．．．!」

「ゴミ拾い大会の終盤に差し掛かった時、折紙さんと出会いました。一人で参加でしょうか？」

「鳶一折紙、貴様も参加していたのか。まあ、貴様には負けんがな」

「私はこの大会の常連。もう2回も出て優勝している。私に負ける要素はない」

「貴様はたいして集められていないでは無いか！」

「見た感じ私たちの集めたゴミの3分の2ぐらいでしょうか？しかし、あれはもしかして……」

「コレは全てタバコの吸殻。タバコの吸殻はポイントが高い、だから私の方が上」

「ぐぬぬぬぬ」

なるほど、そんなルールがあったのですか。でも、このままでは負けてしまいますね。

十香ちゃん泣いてしまうかもしれませんし、仕方ありません一肌脱ぎますか。

「土道、ここからは別行動でいいですか？」

「いいけど、どうしたんだ？」

「こちらにも本気を出します」

「お、おう。頑張れよ」

「任せておいて下さい」

土道達と分かれたいぶ遠くに来ました。さて、始めますか。

「サリエル靈魂看守」——「フェイト・オブ・ライフ生命の満欠」(パース望月)」

いつかの死神が現れます。ただし数は数十倍で持っているのは鎌ではなく火バサミです。

さあ、街をキレイにしましょう。

「おつ、千夜戻ってきた——つて、なんだその量!？」

「頑張りました」

「おお! 凄いぞ千夜!」

やるだけやった、あとは結果を待つだけです。

「さて、集計が終わりました。6位まではこちら!」

名前は……無いですね。これで賞品は決定しました。

「ああく6位だ!」

「賞品ギリ貰えないじゃん」

「まじ引くわー」

「最下位だと……」

さて、何位になったのでしょうか。楽しみですね。

「第5位はチーム名“ナイトメア”です。おめでとうございます!」
んん!!?

「おめでとうございます。お茶菓子セット3ヶ月分です」

「ありがとうございます。嬉しいですわ」

時崎さん!?なんでいるの!?!しかも、チーム1人だし絶対に天使を使いましたね?卑怯です。(ブーメラン)

「第4位はチーム名“AST”です。お米50kgになります。おめでとうございます」

ASTチームで出てるじゃないですか。折紙さんなんで1人で参加しているんですか!?

「いよいよトップ3です。一気に発表します」

さて、どうでしょうか……

「負けんぞ!」

「優勝は私」

「結果はこうなりました!」

3位：トビー

2位：プリンセス

1位：ラタトクス

「「「え？」」」

「前回、前々回優勝”トビー”やダークホースの”プリンセス”を抜き去り見事”ラタトクス”が優勝しました」

気の抜けたような声が出ます。ラタトクス？え？ということは……

「やったわね。四糸乃！令音！」

「はい……がんばりました」

「四糸乃、偉いよ」

「ああ、だが少し疲れたな」

凜祢ユートピア

少女は日常に違和感を感じた

（6月26日）

「本当に、何でしょうかこれは……」

私は天宮市全域を囲うように出来ている靈力にため息をついていました。

これが発生したのは十香ちゃんの靈力が暴走し、土道が巻き込まれた為、意識を失い倒れた日、つまり4日前でした。

靈力に関することで起こっている不可解なことは2つあります。1つ目は先程から話題になっていきます天宮市全域を境界のように覆った靈力です。靈力が在るのは分かりますが流石に何のためにあるかは分かりません。2つ目は土道と十香ちゃん、四糸乃ちゃん、琴里ちゃんとの間の靈力が逆流し続けている事です。今までもストレスが溜まったりした時は一時的になっていましたが、今は常にその状態なのです。

ラタトクスで調べているようですが私も私で調べましょう。

ちなみに、土道は大丈夫そうでした。3日も目を覚まさなかつた割にピンピンとしていました。流石に心配だったので少しホッとしました。

そうこう考えているうちに、そろそろ土道の家に朝食をとりに行く時間ですね。

私は戸締りを済まし土道の家へ向かいます。

「あれ?」

私は外のいつも通りの光景を見て何故か違和感を感じました。特に違和感を感じたのは新天宮タワーです。

「別におかしな所はありませんよね?」

特に気にせず私は土道の家に向かいました。

「皆さん、おはようございます」

この時間に私が来ることが分かっているため鍵はかかっています。そのまま、リビングに入ると3人の少女がいました。十香ちゃん、四糸乃ちゃん、琴里ちゃんです。

「うむ、千夜おはようだ」

「おはよう……ございます」

「千夜ちゃん、おはよおー」

「千夜お姉ちゃん、おはようなのだー!」

各々が挨拶を返してくれますが、あれ？士道がいませんね。

「琴里ちゃん、士道は？」

「んー？多分、凜祢お姉ちゃんが起こしに行ってると思う」

「……………凜祢？」

「待ちきれん！私も起こしてくる」

「あつ、十香ちゃん士道はドロップキックで起こされると嬉しいらしいそうです」

「分かった、行ってくる」

「私も……………行きます」

「行つくよー」

慌ただしく2人と1匹がリビングから出ていく、それと入れ替わるようにピンクの髪の少女が入ってきます。

「あつ、おはよう千夜ちゃん。もう来てたんだ、今日は早いね」

「えつ？えつと……………おはようございます、凜祢」

「……………」

「凜祢？どうかしましたか？」

「いや、何でもないよ。ちよつと待っていてね。あとは並べちゃうだけだから」

なんででしょう、何か変な感じがしました。私、今の今まで凜祢の事を覚えていました

か?・・・いや、覚えていましたね。私は何を考えているのでしょうか。

凜祢は土道と私の家の間の家に住んでいる同い年の子で、土道と同じ幼馴染です。これぞ、大和撫子って言う感じで男子からの人気も高いです。

そういう考えしていると土道も着替えて降りてきました。

「おはようございます、土道」

「おはよう、千夜」

軽く挨拶を交わしながら土道は席につきます。既に凜祢が用意した朝食がテーブルの上に並べてあります。どれも美味しそうです。

私は口になし巻き卵を運び入れます。うん、凜祢は凜祢の味付けがあり土道とはまた違っていいですね。

「やー、凜祢ちゃんは気が利くなー、理想のお嫁さんになれるよー」

凜祢の四糸乃への気遣いを見たよしのんがそう言います。

どうやら、熱いものが苦手な四糸乃ちゃんのために少しだけ味噌汁を冷ましておいたみたいです。あつ、味噌汁も美味しい。

よしのんの言葉に同意するようにみんなが口々にいいます。

「おう、それは間違いないな。家事も安心して任せられるし」

「うむ、料理も絶品だしな」

「もく、みんな本当にどうしたの?」

凜祢は照れくさそうに微笑みました。可愛いです。

「そう言えば十香ちゃんのドロップキックはどうでした?」

「お前か! 十香に妙な事を吹き込んだのは! 無防備の状態でそんなの食らったら、本気でシャレになんねえよ!」

「士道なら余裕でしょう? それに失礼なこと言わないでください、確かに十香ちゃんにドロップキックを伝えたのは私ですが、私に伝えたのは琴里ちゃんです」

「結局、お前が主犯じゃねえか! 今度からはそう言う妙な事を吹き込むなよ、琴里も」

「はい、分かったのだ」

「最善の結果が得られるように、善処します」

また、機会があればやりますがね。善処はします、善処は。

「あーすつごつく悪い顔してるー。コレまた絶対やるよー。テレビで政治家の人が同じ言葉使ってるの見た事あるよ、ねー四糸乃?」

あつ、こらよしのん! それは言っちゃダメなやつです! 四糸乃ちゃん、誤魔化してください。

「・・・・・・・・えつと・・・・・・・・はい」

・・・・・・・・素直でよろしいです。

「千夜ちゃん、あんまり悪さしたらダメだよ?」

「はい、分かりました!」

「なんで、凜祢の時は即答なんだよ!」

「まあ、気にしないでくださいよ」

「まったく……」

少し落ち着きを取り戻し朝食に戻ります。

「あ、おにーちゃん!だし巻き卵いらならー個ちよーだい?」

「琴里ちゃんがそうおねだりすると土道はあっさり了承します。相変わらず兄妹仲がいいですね。あっ!私のだし巻き卵が逃げた!……あー、落ちてしまいました……」

「落ちただし巻き卵を拾っているうちに琴里ちゃんは土道のだし巻き卵を食べ、凜祢が土道の減った分のだし巻き卵をあーんで食べさせていました。」

「ほら、土道。あーん」

「あーん……うん、うまい。いつもの凜祢の味だな」

「どうでもいいですけど、凜祢の味って響きが何かエロくないですか?」

「ぬ!?凜祢、抜け駆けはするいぞ!私もシドーに、食べさせる役をしたい!」

「あ……私も、してみたいです」

「おー?私もあーんしたい!」

「なかなかやるねー。さすが士道くんー」

みんなが私もと、収集がつかなくなってきた。こういう時は――

「士道、あーんです」

――乗るしかないのです、このビックウエーブに！

「と、とりあえず今度な！遅くなると遅刻するし！あと、千夜！それさつき落としたやつだろ？人に何押し付けようとしてるんだ」

「あれ？バレていましたか」

「逆に何故バレない?!」

「あ、千夜ちゃん落としたのは避けて置いて」

「分かりました」

その後、士道が付けたテレビからニュースの声に耳を傾けます。今日はやけに天宮市のニュースが多いですね。

動物園の園長と近隣のペットが行方不明ですか……まさか、この靈力の結界のせいだったりしませんよね？まあ、関係ないでしょう。深く考えすぎですね。

皆は皆で宇宙人が来るなどと騒いでいます。それはそれでどうかと思いますが。

「十香ちゃん、ご飯大盛りにする？」

「うむ、よろしくた――ツツ!」

凜祢に十香ちゃんがおかわりを頼み、お茶碗を渡そうとした瞬間、靈力が乱れるのを感じました。それに苦しんだ十香ちゃんのためからお茶碗がこぼれ落ちます。

「おっとー！」

落ちる寸前でお茶碗をキャッチし割れるのを防ぎました。お茶碗が割れるなんて縁起が悪いですからね。つと、それより十香ちゃんは大丈夫でしょうか？

靈力は平常とまでは行かないですがさつきより安定していますね。これなら大丈夫そうですか。

「ありがとう、千夜。この茶碗はシドーに大切にすると約束したものだ」

「そんなに心配しなくても土道は割れたぐらいじゃ怒ったりしませんよ。別に雑に扱っていた訳では無いでしょうか？ 割ったら割ったで、また買ってくれますし十香ちゃんの体の方を心配しますよ。それが土道ですー……ですよね？」

「ああ、十香、本当に体は大丈夫か？」

「うむ、さつきも言ったがぜんぜん平気だ」

結局そのあと十香ちゃんはおかわりを要求しましたが、よしのんの提案や皆の心配が重なりおかわりは我慢することになりました。

こうして、賑やかな朝食を過ごしました。

学校に行く時間になりました。今は、土道を待っています。多分、琴里ちゃんと今後についての打ち合わせをしているのでしよう。……つと、来ましたね。

「ほら、2人とも早く行かないと間に合わないかもよ?」

家を出てから土道と十香ちゃんが話し出してしまったのに凜祢が催促をします。

「あ、ちよつと待ってくれ凜祢。これ渡しとく」

「ん? 鍵? これ、なんの鍵?」

「ああ、実は新しい鍵をつけることになってさ凜祢が入れないと困るだろ?」

「え、でも、私が持っていていいのかな?」

「いいも悪いも、凜祢は家族同然だし。合鍵があれば、家に遠慮なく来れるだろ?」

「ありがとう、土道………大切にするからね」

「十香は無くさないようにな」

「分かっている! 私だって大事にするのだ!」

「そ、そうか。よし! じゃあ、いい加減行くか!」

「ちよつと、待って下さい!」

学校に向かおうとする土道の肩を掴みます。

「まだ、私は貰っていません！」

「あ、あー悪い、千夜。ほら」

「ありがとうございます、土道。多分大切にします」

「大切にしてくれよ！」

「大丈夫です。折紙さんに貸すぐらいです」

「やめてくれ！」

私達は学校へ向かって歩き出しました。

本当に暑かったです。まだ、6月26日、夏も始まったかどうかのあたりです。つまりこれからどんどん暑くなると……勘弁して欲しいですね。

そう言えば、途中に土道が昔飼っていた猫を見つけて追いかけて言っていないなくなりましたけど、居たのは霊力で分かりましたが、猫じゃなくて時崎さんでしたね。時崎さんは今、何をやっているのでしょうか？たまに会いますが何をしてるのかはよく分かりませんよ。

ぼんやり、考えていると土道達に殿町君が近づいて来て話をして始めました。話は朝

のニユースでやっていた、ペットがいなくなっていたのは、天狗牛の祟りだ、と言う話です。

まあ、精霊みたいな存在がいますからそう言う妖怪がいてもおかしくない気もしますね。え？朝は宇宙人を否定していたって？記憶にございません。

「よし、話は決まったな。じゃあ、今日の夜、皆で肝だめー！ー！ーじゃなかった……お供え物持っていて池に集合だ！」

今、完全に肝試しって言いかけましたよね？まあ、夏の風物詩ですし、いいのでは無いか。殿町君は驚かせようとするでしょうし、先に話をつけておきましょうか。

私は今日の夜を楽しみにしながら授業を受けました。

少女は驚かせようと策を生じた

さて、放課後になりました。早速、商店街で色々買いに行きましょう。

私は商店街に移動します。

何で驚かせましょうか。手が凝ったふうにしましょうか、それとも無難な感じにしましょうか。

手が込んだ感じなら、銅などの炎色反応が面白いのを燃やして火の玉にみせる感じになりますね。因みに銅は燃やすと緑色になります。花火とかでも使われます。ここ覚えておいてください、テストに出ますよ。

無難な感じなら、音楽プレーヤーから不気味な音を流したり、あとは………。こんにやくでしょうか？こう、こんにやくを釣竿で吊るして………。何故こんにやくなんでしょうか？別に他のものでも良くないですか？例えば、凍っていない保冷剤なんか使えると思います。まあ、柔らかくて、冷たければ何でもいいんでしょう。

他のトランプも何か考えなければなりませんね。あれ？あれは、土道と十香ちゃんですね。デートでしょうか？

視線の先には土道と十香ちゃんが並んで歩いており食べ歩いています。あの二人で

デートする時は大抵食べ歩きになつてゐる気がします。

それにしても、十香ちゃんは本当によく食べますよね。食べたものは何処に行くのでしょうか？

あつ、パン屋に入ったのにきなこ^{いっ}パン^もではなくて、クリームパンを食べています。焼きたてですか、美味しそうですね。まだ、夕食まで時間はありますし私も買っていきましよう。士道達はこれから帰るみたいですし、帰るタイミングをずらさないで仕込みの道具が見られてしまいます。ちようどいいですね。

そろそろ帰ろうとした時、士道と十香ちゃんを見かけます。

あれ？帰つたはずではなかったのでしょうか？

話を盗み聞きしてみると、どうやら今日のお供え物を買ひ忘れたようです。

さて、何を選ぶんでしょうか。ちなみに私はきゅうりで牛を作りました。お盆で、馬を作つたりする要領でそうしました。本当は牛ならナスなのですが、きゅうりで作つた方がバランス良く綺麗にできたのできゅうりにしました。中々いい出来になりました。

あつ、十香ちゃんがお供え物を決めようです。あれは……ケバブですね。あの肉塊全てを貰おうとしているみたいですが……お店の人、困つてますね。士

道、早く止めてあげて下さい。

結局、ケバブサンドを買い、十香ちゃんも満足して土道と帰っていきました。

さて、まだ時間ありますし仕掛けを仕掛けに行きましようか。

私は霊装を展開し湖を目指しました。

あつ、殿町君に話すの忘れていました。まつ、いいですか。

「ええと、十香、折紙、凜祢……それに琴里と四糸乃、と。よし、メンバーはだいたい揃ったな、殿町と千夜以外……って、千夜はともかく言い出しつぺの殿町がいねえってどういうことだよ」

待っても、2人は姿を表せず琴里がグズってしまし、折紙と十香が暴走したりと大変な事になってきた。

「ねえ、土道？殿町君達を待っている間に、みんなでどんなお供え物を用意してきたか見せ合おうってどうか？」

凜音のアイデアによりお供え物を見せ合うことになった。

十香は一緒に買ったケバブサンドだ。ケバブの肉が牛肉と発覚して十香以外が微妙

な雰囲気になった。

凜祢はスイカ、折紙は白百合、四糸乃は牛のパペット、琴里は棒付きキャンディーだった。

話が終わっても2人とも来ない。携帯にかけても出ないし……

そのうち、天狗牛の祟りだの神隠しだの不穏な空気になってきた。

心配だし、少し探しに行くか。

みんなにはその場で待っていてもらい、近くを搜索する。が、見つからない。

結局、みんなで搜索する事になった。

「うわああああ!!」

途中絶叫が聞こえたと思ったら殿町が飛び出してきた。そのまま、走り抜けていく。

天狗牛が出たなど言っていたがあれは殿町の作り話だったよな？

しかし、殿町の異常な反応を見て四糸乃と琴里が怯え始めてしまった。更に、追い討ちをかけるように変な声が聞こえた。

「あれが天狗牛……?」

「いや、あれはどう見たってワニだろ!」

なんでこんな所に!?

「きゅー」

「あ！こ、琴里ちゃん!？」

「うえええええん!!」

「四糸乃！何かで出てきてるよー！落ち着いてー」

琴里は気絶し、四糸乃は靈力を暴走させてしまっていた。

この後、琴里にこっつてり叱られた。

くその頃、千夜はく

「あれ？みんな来ないですね……」

みんなを待っていた。

少女は球技祭を写真に収めた

（6月27日）

肝試しで放置された次の日。

いや、怒ってないですよ？みんなと集合の約束を破ってその場に行かなかったのは私です。これで怒るのは筋違いだと思いますからね。

「きゃー！」

凜祢の悲鳴!?土道がついに警察に厄介になる時が来ましたか!?

みんなも聞こえたようで急いで2階に向かいます。

「さつき、凜祢の悲鳴が聞こえてきた気がしたのだが」

「おにーちゃん、面白そうなことあった?」

そこには、凜祢とパンツだけの状態の土道がいました。

「土道……さん?」

「あっちゃー。土道君、それはアウトだよー」

「私、110にかけてきます」

「いや、ちよつと待ってくださいこれには訳が……つて、お前らまで入ってきたのかよ

!?

結局、凜祿が土道をビンタして、その場は収まった。

さて、今日は球技祭ですし気持ちを切り替えて頑張りましょう—————

—————撮影を。

私の手には一眼レフカメラが握られています。

決して、やましいことは無いです。そう言えば、土道と殿町君は休むようです。殿町君は結核だと言っていましたが完全に嘘ですね。タマちゃん先生以外に騙される人はいるんでしょうか？

ちなみに、撮影は卒業アルバムに使われる物です。タマちゃん先生に提案したら許可して貰えました。

さて、このクラスの人気格は十香ちゃんと折紙さんと凜祿ですね。十香ちゃんはテニス、折紙さんはバレー、凜祿はラクロスですね。全部、回れるように頑張りましょう。あつ、他の所は移動しながらテキトウに数枚撮っておきますよ？

さて、まずは十香ちゃんのテニスです。実はみんなが出る順番を聞いたり試合の時間

を考えたりにして回る順番を決めておいたのです。十香ちゃん、凜祢、折紙さんの順番に回る予定です。

じゃんじゃん取りますからね。

十香ちゃん頑張ってますね、デビューじゃないですか。あつ、チャンスボールです。

「ていつー！」

「ア、アウトー」

十香ちゃんはベストコースに来た球を空高く打ち上げました。見事なホームランです。いや、競技が違いますね。残念ながら十香ちゃんの負けですね。それと十香ちゃん、スコートを今度から履くか、スパッツを履きましようね。

次は凜祢です。やつぱり、ラクロス部だからマークが厳しいですね。しかし、パスを上手く回し凜祢に渡ります。そのままシュートがゴールに突き刺さります。ふー、いい絵が取れました。おっと、急いで折紙さんのところに移動しなければ行けませんね。

最後に折紙さんの所です、だいぶ終盤ですが間に合って良かったです。あれ？土道と殿町君が応援に来てますね。あつ、殿町君が連れてかれました。どうでもいいですが。

さて、折紙さんはリベロですか。しかし、よく拾いますね。身体能力ヤバイですね。あー、でも負けちゃいましたか。

さて、いい絵がいつぱい撮れましたから、厳選しますか。

結局、優勝は出来ませんでした。私は満足です。

実は今日は調べたい事があるのです。昨日の肝試しで言った湖にあった、取水塔から物凄く微弱ですが今天宮市を覆っている霊力と同じ霊力を感じたのです。もしかしたら、他にもあるかもしれませんし探してみようと思います。

さて、ゆっくり探しますか。っと、あれは土道と四糸乃ちゃん？物凄く量のアイスキャンディーですね。

食べきれれるでしょうか？あの二人で、助っ人に入りたいですけどデートの邪魔するの
も悪い気がしますし……土道のお腹を信じましょう。

結局、その日は何も発見することが出来ずに終わりました。

（6月28日）

朝、四糸乃ちゃんが倒れたって聞きましたが、今日は日直の為お見舞いに行きませんでした。土道が行くみたいですし大丈夫でしょう。

あと、今日は十香ちゃんを珍しく朝早い時間に学校に居ました。そして、寝てますね。何か、あったのでしょうか？

多々気になる事がありました。これと言った行動はなく一日が過ぎていきました。そして、そのまま放課後になりました。

廊下を歩いていると歌声が聞こえてきます。コーラス部かと考えますが、凜祢が朝に部活がテスト習慣に入ったから休みになったと聞いたことを思い出します。

誰の歌かが気になり、歌の聞こえた方、屋上に行くと土道と折紙さんがいました。声色的に考えて折紙さんの歌ですね。本当になんでも出来ますね。

私は2人にバレないよう、その場をあとにしました。

今日の夕飯は珍しく土道が作りました。凜祢の方がなにか用事があつて遅くなった為です。用事ってなんでしょね？

あつ、そう言えば霊力の結界の方で動きがありました。私はテストも近いので勉強をしていたので動いてませんが一瞬結界が大きく歪んだんですよね。

琴里ちゃんの方で脱出を試みたのでしょうか？ともあれ、歪みが戻ったということは

誰か戻す人がいるという訳ですから、やはりこれは新しい精霊の力の可能性が濃厚になりましたね。でも、こんな事して何か意味があるのででしょうか？

私はイマイチ相手の目的が分からないでいました。

少女は異常の中心を見つけた

（6月29日）

いつも通りの日常（十香ちゃんと折紙さんが言い合ったり、殿町君が変な事言ったり）を過ごし放課後になりました。

私はビックリすることになりました。何故ならある人の霊力を学校で感じたからです。時崎さんです。

なんで、時崎さんが？十香ちゃんや折紙さんと顔を合わせたら大変ですね。時崎さんが土道と移動し始めましたね。分身の方とはいえ油断できません。後をつけますか。

土道と時崎さんはペットシヨップや服屋などをまわりクレープを買って公園で一息着きました。このクレープ中々美味しいですね、あむーろーろーぶっ!!?

私はビックリして吹き出してしまいます。土道の手に付いたクリームを時崎さんが舐めたのです。随分と長いこと舐めてますね。時崎さんにはビックリさせられてばかりです。

その後、土道と時崎さんは別れて行きました。それにしても、あの分身は随分と霊力が少ないかったですね。なんででしょうか？

夕食後、土道と琴里ちゃんがこんな事を言っていたことを思い出します。「モニュメントがなにか怪しい」って事でした。一応、調べに行きましようか。

例のモニュメントの傍につくと、土道と時崎さんが居ました。ちなみに、例のモニュメントからは微弱ながら霊力を感じます。変なことが起きなければいいんですけど……

そう思ったのがフラグになった様に霊力が強くなりモニュメントが光だし2人が結界に取り込まれてしまいます。

まずいです。土道は結界のせいで〈カマエル〉の再生能力を持っていませんし、時崎さんは分身ですし霊力が少ないです。もし、あの中で精霊本人が出てきたら本当にまじい事になります。

〔サリエル霊魂看守〕!!—————〔イ魂を喰らう者〕

結界を突き破ろうとしましたが大鎌は空を切ります。吸収する前に結界が壊れたのです。中から土道と時崎さんが無事に出てきます。

「なっ、お前は……」

「あらあら………」

………退却します。

「待ってくれ！お前は————」

士道が後ろで叫んでいますがお構い無しにその場を後にしました。

↳ 士道視点↳

狂三とモニュメントで会った時にモニュメントが光だし結界に閉じ込められ、精霊の様な存在《ガーディアン》が現れた。

狂三が応戦してくれたおかげで何とか無事に脱出する事が出来たが結界を抜けた先にいたのが意外すぎる人物だった。

「なっ、お前は………」

「あらあら………」

俺が会った中で封印できていない狂三以外の存在（ヘリーパー）。名前や顔すら分からない謎に包まれてる精霊だ。行動に一律性がなく何を考えているのかが分からない。

まさか、この事件に関与しているんじゃないか？そんな、考えを頭をよぎる。

〈ヘリーパー〉はその場を去ろうと体の向きを変えた。

「待ってくれ！お前は今、起きていることを知っているのか！お前がこれを起こしているのか！何でもいい知っている事があつたら教えてくれ！」

しかし、〈ヘリーパー〉には俺の声は届かず、そのまま闇に姿を消してしまった。

〈6月30日〉

昨日はやってしまったあああああ!!

よし、もう放課後ですし切り替えましょう。

あのモニュメント、取水塔や結界と同じ霊力を感じましたね。取水塔もそうですが結界の霊力が大きすぎてそれを実際に調べないと分からなかったですね。多分ですが、モニュメントと取水塔は結界を支えている場所でしょう。あと、いくつあるのでしょうか……

結界……神聖な物……神社……

よし、あるか分からないですが神社行ってみましょう。あればいいなぐらいの気持ちで行きましょう。

途中、琴里ちゃんを背負った土道がいました。琴里ちゃん、少し体調が悪そうでしたけど土道がついてますし大丈夫でしょう。兄妹仲睦まじいですね。

さて、神社に着きましたよ……ありましたよ……

神社の横の御神木。まさか、本当にあるとは思いませんでした……

これで3箇所……あれ？

疑問に思った事があり携帯で地図を見る。天宮タワーのモニュメント、湖の近くの取水塔、神社の御神木この3点を結ぶと、ちょうど真ん中にあるのは……

「新天宮タワー……」

そう言えば、前に新天宮タワーに違和感を感じたんです。何故、忘れたのでしょうか？

私は不思議な事に疑問を感じたのです。

少女は日々を繰り返した

さて、新天宮タワーが怪しいのは分かったけど1人で乗り込むのは……土道は極力巻き込まないつもりでしたけどこれだけの結界を張れる相手だと1人で勝つのは難しそうです。

でも、私から土道達に新天宮タワーは敵の本拠地と伝えるのは無理があります。どこかでワンクッションおきたいですね。

私が〈ヘリーパー〉だってバレないようにするには……あつ！ そうだ。あの人を間に挟めばいいじゃないですか。

「と、言う訳でお願い出来ますか？」

「なるほど、新天宮タワーか。分かった、こちらで一応確認を取ってからシン達に伝えよう」

土道の中から感じた霊力の1つの持ち主に頼むことにした。

この人は何故だか自分が精霊で士道に既に封印されている事をみんなに伝えていないのです。だから、私がヘリーパーだつて事を伝えても、こつちも秘密にしておくから、秘密にしておいてと約束を取り付けることが出来るのです。まあ、私がヘリーパーだど明かした時にあまりビックリせずに、さも知っていたような感じでしたけど……それに、士道の敵かと考えましたが、封印されている時点で士道にデレているので問題ないでしょう。

「じゃあ、お願いしますね」

「ああ、ちよつと待ってください」

「はい？」

「君はシンを害すつもりはあるのか？」

何を言っているのでしょうか？

そんなの……

「そんなの決まっているじゃないですか。そんなつもりは微塵もありません。私は私と士道の為にこの力を使うつもりですから」

「……そうか」

「はい、では」

私は部屋を出ました。

〽 数日後の夜

令音さんから新天宮タワーの異常性を確認できたと報告が来しました。既に土道と琴里ちゃんに連絡済みらしく2人で向かっているそうです。

早くこの状況を打破したいのは分かりますがせめて十香ちゃんと四糸乃ちゃんも連れて行って最大戦力で攻めて欲しかったです。……何故でしょう？これを考えたのが1度目ではない気がします。それよりも今は新天宮タワーへ向かいましょう。

私が新天宮タワーについた時には琴里ちゃんが動けなくなっていました。

何でしょうこれは？琴里ちゃん……いえ、新天宮タワーでの霊力の乱れがひどいです。それよりも、土道は……

土道はすぐに見つけることが出来ました。さらに、その先に精霊らしき少女を見つけました。私は土道達の方へ向けて速度をあげます。

またです、何故かこの状況が初めてでは無い気がします。あの精霊と私は過去にあっていたのでしょいか？……いえ、初めてのはずです。

謎の精霊から霊力の攻撃が放たれ土道に向かっけいき土道を吹き飛ばしました。

私はあと少しのところで間に合いませんでした。

「土道おやおお!!」

倒れる土道に向かって叫ぶように名前を呼び、駆け寄ろうとします。しかし、その瞬間に世界が光に包まれました。

～6月26日～

「はっ!!」

私はベッドの上で目を覚ましました。頭上では目覚まし時計が電子音を響かせています。時計には6/26(月) 7:00と表示されていました。

「なにか凄い夢を見た気がします。．．．」

思い出させません。夢とは思えないリアルな夢だった気がします。

まあ、夢は夢です。早く着替えて土道の家へ朝食を取りに行きましょう。

私は疑問を気にすること無く普段の生活に戻りました。

少女は虫相手に気絶をした

（6月26日）

私は今日の肝試し用の道具を買いに行こうとした所を土道に呼び止められます。

「千夜、このあと良いか？」

「この後ですか？」

「ああ、買い出し手伝ってもらいたくて」

「なら、十香ちゃんや四糸乃ちゃんが行った方が良いのでは？今、霊力が不安定何でしょう？」

「ああ、十香達のことでも話したいこともあるし」

「それなら、わかりました。準備するので待っていてください」

「おう、悪いな」

肝試しの道具を用意することが出来なくなりましたね。まあ、家にある物で何とかするでしょうし、最悪、殿町君が驚かすでしょう。

「そう言えば何を買うんですか？」

「食品類とトイレットパーパー、洗剤あとは今日のお供え物だな」

「お供え物、士道は何にするんですか？」

「あー、まだ決めてない。適当にぶらついて目に付いたものを買っていいこうと思う。千夜は？」

「うーん、私もどうしましょうか・・・ナスでいいでしょうか？」

「なんでナス？」

「お盆の時、ナスで牛を作るでしょ？天狗牛って言うぐらいだから牛にしようと思いまして」

「よく分からんが・・・あつ、千夜」

「なんですか？」

「右肩」

「右肩ですか？ー！ー！ー！ツツ！！！！？」

士道に言われ右肩を見るとそこに青虫が乗っていた。

「し、ししししし士道！と、ととととと取って！取ってください！」

「分かったから落ち着け。つと、取れたぞ」

「ありがとうございます・・・」

「お前、昔から虫はダメだな」

「ううう、面目ないです」

虫全般ダメという訳では無いのです。蝶やカブトムシ、バッタ、カマキリなどは大丈夫なのですが。害虫などのゴキブリ、ムカデ、ハチ、クモやうねうね動く、ミミズやイモムシはダメなのです。バッタも害虫？知りませんね。

「殺虫スプレーを最近常備してなかったのが問題ですね。士道！殺虫スプレーも買いに行きましょう」

「むやみに殺すなよ。俺が取ってやるから」

「……なら、お願いします」

「おう」

私達は買い物が続けて行きました。

士道、お供え物にショートケーキはどうなんでしょう……

肝試しの時間になりましたが殿町君は来ません。どうせ隠れているのでしょう。

時間潰しにお供え物をみんなで見せ合うことになりました。

十香ちゃんはケババサンド、その肉って牛肉ですよ？共食いになりませんか？凜祢はスイカ、美味しそうです。折紙さんは白百合、お供え物ですからね模範解答っぽいで

すね。四糸乃ちゃんは牛のパペット、可愛いです。琴里ちゃんは棒付きキャンディー、地方限定発売………。いったい何味なんでしょう。

見せ合いが終わっても案の定、殿町君は来ません。士道が探しに行きましたが大丈夫でしょうか？

「ちよつと、士道が心配なので探しに行きますね」

「うん、分かった。みんなは私が見ておくね」

凜祢だけに告げて士道を探しにいきます。案外直ぐに士道は見つかり、結局全員で殿町君を探すことになりました。

「うわああああ!!」

しばらくすると、絶叫と共に殿町君が飛び出して来ました。そのまま、走り抜けていきます。

天狗牛が出たなど言っていました。あれは殿町の作り話ですよ？

しかし、殿町の異常な反応を見て四糸乃ちゃんと琴里ちゃんが怯え始めてしまい、追い討ちをかけるように変な声が聞こえました。そして、影から奴がのそつと現れました

「あれが天狗牛………?」

「いや、あれはどう見たってワニだろ!!」

「なんでこんな所にワニがいるんですか!？」

「きゅー」

「あ!こ、琴里ちゃん!？」

「うええええん!!」

「四糸乃!何かで出てきてるよ!落ちていてー」

琴里ちゃんは気絶し、四糸乃ちゃんは靈力を暴走させてしまいます。

早く四糸乃ちゃんを落ち着けさせないと。そう動き出そうとした私の足もとで柔らかい感触を感じました。恐る恐る足もとを見ると巨大なミミズを踏んでいました。

「きやあああああああああああああああああ!!」

びっくりして、一番近くにいた人に飛びつきます。

ミミズ、コワイ。ウネウネ、イヤダ。

「ちよつと!千夜まで!？」

落ちていて見ると飛びついたのは土道で私は土道の頭を抱えるように抱きついていました。土道の両サイドにくっついていて十香ちゃんと折紙さんは不服そうな顔をしています。

「わっ!す、すみません!ー!ー!ー!ー!ー!きや!？」

慌てて離れようとした所で足を滑らし、その場で転んでしまいます。それと共にグ

チャと音がなります。

「いたたた・・・ぐちゃや？」

手を見るとさっきのミミズが潰れていました。

「—————!?!?」

私はそこで意識を手放しました。

少女は少年にお詫びをした

（6月27日）

球技祭。

今日はみんなを写真に収めるために頑張ります。助手には土道がついてきます。殿町君もいましたが、連れていかれました。

昨日、色々あったせいで気まづいです。抱きついて、その後ミミズのせいで気絶してしまうなんて……帰りは土道がおぶってくれたようです。

恥ずかしいような、申し訳ないような、そんな気持ちがある私の心の中を渦巻いています。

「千夜、どこから回るんだ？」

「まずは、サッカーからです」

土道も土道ですね。乙女の胸に顔をうずめた癖に反応がなすぎます。まあ、悪いのは100%私なのですが、それにしてももう少し反応があつていいと思います。

私、何でこんなに怒っているのでしょうか？ いけませんね、迷惑かけたのはこちらのなのです。今日、何かお詫びでもしましょう。

「土道、今日の放課後は何か予定ありますか？」

「放課後？別にないが」

「付き合ってください」

「へ？」

「何か変なこと言いましたか？」

「いや別に分かった。放課後だな」

無事に球技祭を終えて、土道と学校をします。

「つと、その前に、昨日は迷惑をかけてしまい申し訳ないです。今日は何かお詫びをした
いと思ひましてこうして付き合ってもらいました」

「別にそれぐらい気にしなくてもいいぞ」

「まあ、何か奢られてください。せっかくここまで来たんですから」

「そうだな……アレなんてどうだ？」

土道が指をさしたのは映画のポスターでした。

「映画ですか？いいですね。天宮シネマに行きましょう。何を見るか決めてますか？」

「SF系のファンタジーに恋愛系にホラー系か……千夜は何が見たい？」

「土道へのお詫びを兼ねているので土道が決めてくれていいですよ？」

「それでも、千夜も見るわけだろ？つまらないのを見るよりは2人で楽しみたいし」

「っ！……わかりました。そうですねホラー系は遠慮したいです」

「あれ？怖いのだメだったけ？」

「いえ、ホラー系つてたまに虫が物凄い量で出るじゃないですか……」

「なるほどな。なら、SFファンタジーと恋愛になる訳だが……よし、恋愛にしよう」

「わかりました。それでは、チケット買いますね」

受付に移動しチケットを購入しようとしています。

「いらつしやいませ。本日カップルデーでカップルなら2割引になります」

「……カップルです」

「千夜!?!」

素早く横に立っていた土道の手を繋ぎ受付の人に見せます。

「初々しいですね。はい、こちらチケットになります。お楽しみください……ちつ」

今舌打ちされましたよね？独り身なのでしょうか？

受付から移動しポップコーンやドリンクを買っている時に土道が耳打ちしてきました。

「千夜、いいのか？俺たちカップルじゃないのに」

「土道は私じゃ嫌ですか？」

「いや、そういう訳じゃないんだが……」

「からかったただけですよ、冗談です。早く行きましょう」
「うっ……」

私は土道の手を引き映画館の中へ歩を進めました。

映画館を見たあと少し微妙な雰囲気になったのはまた別の話。

少女は家の中を整理した

（6月30日）

最近、士道と行動することが多いです。ここ3日間程ですが士道が私をよく誘ってくれます。今日は家の掃除を手伝ってくれる予定です。

両親が死んでから整理をして居なかつたのでやってしまおうと思ったのが始まりでした。

ちなみに、私の家は1階にリビング、キッチン、トイレ、お風呂、物置。2階に両親の部屋、書斎、私の部屋、トイレ、そして開かずの部屋があります。この開かずの部屋は鍵が行方不明だそうです。

士道が家にやって来たので整理を始めます。まずは1階の物置です。整理の途中、質問を投げ掛けてきた。

「千夜は、家族のことをどれぐらい覚えてるんだ？」

「そうですね、両親の見た目はほとんど覚えてませんね。一応、写真が残っているのを知っています。実感が湧きません。エピソードや声とかは結構覚えていますね」

「そうか……悪いな変な事聞いて」

「いえ別に……さて、1階はこれで終わりです。2階に行きましょう」

土道連れて2階に上がります。2階の整理する場所は両親の部屋と書斎です。

「千夜の家の2階に上がるのは久しぶりだな……あつ、ここは？」

「開かずの部屋ですか？鍵が無いから入れないとお爺ちゃんが言っていました」

「そうか……」

そう答えた土道の顔はどこか寂しげでした。

「どうかしましたか？」

「え？」

「何か私、変なこと言いましたか？」

「いや、大丈夫だ。何でもないぞ！」

「土道は誤魔化す時目線で直ぐに分かりますよ」

「ぐっ……それ凜祢にも言われた」

「それで、本当に大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。心配かけて悪いな」

「そうですか。何かあったら頼ってくださいいね？」

「ああ、その時は頼むよ」

私達は整理に戻りました。

結局、理由は教えて貰えませんでしたね。何なんでしょうか？

夜、私はデザートを買いにコンビニを目指しながら考えていました。

いくら考えても分からないものは分かりません。

「あれ？土道？」

目線の先に悩みの原因の土道が歩いていました。私は声をかけようと土道に寄っていきま

す。こんな時間にどこに行くのでしょうか？

声が届く範囲にいた時その疑問は解決されました。天宮タワーの横のモニュメントです。

なんで、こんな所に？その声をかけようとした瞬間、モニュメントが怪しく光だしました。

霊力の動きを感じとり天使と霊装を展開します。霊力は勢いよく広がっていき私と土道を囲み結界となりました。そして、精霊のような存在が現れます。そいつはこれ以上近づくなと言わんばかりに土道の足元に攻撃をずらし放ちます。

「精霊なのか？」

その答えはズバリNOです。あれは精霊ではなく、私の
フエイト・オブ・ライフ
【生命の満欠】で生み出す死神に近い存在です。

モニュメントを守っていますからガーディアンが一番しつくりくるでしょう。取り
敢えず片付けましょう。

「へりーパー!?!」

飛び出した私に土道が驚いた声を出します。私は気にせずガーディアンに向かって
大鎌を振り下ろします。いとも容易くガーディアンは崩れ去り結界は崩壊しました。

「……………助けてくれたのか？あつ！待ってくれ！」

私は相槌だけ打ってその場をあとにしました。

少女はまた日々を繰り返した

（7月1日）

昨日のあのガーディアンは一体なんだったのでしようか？あのガーディアンから感じた霊力は結界を張っているのと同じものでした。つまり、あの2つは同じ存在によるものだと分かります。あのモニュメントは結界の要とまではいかなくても支えている一部なのだろうと予想ができます。

本当にこの結果を貼った精霊は何が目的なのでしょう。私達を閉じ込めるや拘束するなら何らかしらの接触があるはずですが、特にそういった事ありませんし、外部で何かあるとしても謎の精霊の動きが少なすぎます。考えられるのは、この結界に何らかしらの効果があるということだけです。……

時崎さんの「時喰^{ときは}みの城」ぐらい分かりやすければいいですが、さっぱり効果がわかりません。

分からないものは仕方ありません。

気分転換と出来たら他の情報収集の為、私は散歩をしに外に出ました。

「あ」

散歩の途中、もう日が暮れ始めている時に土道と偶然会いました。

「少し一緒に歩かないか？」

「別にいいですよ」

そのまま、2人で散歩をすることになりました。

「昨日は助かりました。昨日中で終わるとは思つてませんでした」

「いや、大したことないさ……」

「土道？」

土道が足を止めた為私も立ち止まります。ここは、公園？

「千夜、覚えているか？ここで昔みんなよく遊んだよな」

土道は公園のブランコに腰掛けてそう言います。私もそれを聞きながら横のブランコに座ります。

「はい覚えていますよ。私と土道、凜祢に琴里ちゃん、4人でよく遊びましたね」

「……ああ、そうだな」

土道は昨日見せたどこか寂しげな表情をしました。土道は過去に何度もこんな表情

を見せたことがある事を思い出します。

見せるタイミングは大抵……私の昔の話をした後。

「やはり、私に関わる事なんですね？昔の私の」

「っ！」

「土道は顔に出すぎなのですよ。別に無理して聞きません。でも、もし良かったら教えてくださいませんか？」

「でも、千夜が……」

少しの間、沈黙が続く。

そして――

「千夜、実は――」

『ブーツブーツ！ブーツブーツ！』

携帯の着信音が土道の言葉を遮ります。タイミングが悪いですね。

「土道、出てください」

「ああ、悪い」

土道が電話に出ます。しばらくは、待機ですね……土道はなんて言おうとしたのでしょうか。まあ、もう少しすればわかる事です。つと、電話は終わった見たいですね。

「千夜悪い！急用が出来た！話はまた今度な！」

士道は電話を終えるとそのまま走り去ってしまいました。

士道が見えなくなってから、脳裏に変な光景が浮びます。士道が倒れ、その前に誰かが立っている……

何でしょう。物凄く嫌な予感がします。

私は士道の霊力を辿り士道を追いかけます。場所は新天宮タワー。

嫌な予感がさらに大きくなります。

新天宮タワーに入り士道はすぐに見つけることが出来ました。さらに、その先に精霊らしき少女を見つけました。私は士道達の方へ向けて速度をあげます。

またです、何故かこの状況が初めてでは無い気がします。あの精霊と私は過去にあっているのでしょうか？……いえ、初めてのはずです。

謎の精霊から霊力の攻撃が放たれ士道に向かっていき士道を吹き飛ばしました。

私はあと少しのところで間に合いませんでした。

「士道おやおお!!」

倒れる士道に向かって叫ぶように名前を呼び、駆け寄ろうとします。しかし、その瞬間に世界が光に包まれました。

（6月26日）

「はっ!!」

私はベッドの上で目を覚ましました。頭上では目覚まし時計が電子音を響かせています。時計には6／26（月）7：00と表示されていました。

「なにか凄い夢を見た気がします．．．．．」

思い出せません。夢とは思えないリアルな夢だった気がします。

まあ、夢は夢です。早く着替えて土道の家へ朝食を取りに行きましょう。

私は疑問を気にすること無く普段の生活に戻りました。

少女はまた日常に違和感を感じた

（6月26日）

殿町君の提案で肝試しをやる事になりました。私が準備している間、土道は凜祢と十香ちゃんとは何処かに行ったみたいでしたが……両手に花とはけしからないですね。あつ、音が聞こえますね。そろそろ出番のようです。この即興で作った天狗牛の衣装で驚かせてしましましょう。

ん？なんて言って出ていきましよう？化け物らしく「ギャオー」？それとも牛つぽく「モオー」？

……よし決めました

「モオオオオオオオ!!」

「きや!!」

「うお!!」

あれ？凜祢と土道だけですか。まあ、いいです存分に怖がつて貰いーーーーーつあ！暗いたため裾を踏んでしまい転倒します。

「痛たたた……」

「なっ、千夜!？」

「なんだ千夜ちゃんか．．．．驚かせないでよ」

完全に失敗してしまいました。起き上がろうと手をつくくとグチャと音がなります。

．．．．ぐちゃ?

手を見るとミミズが潰れていました。こんなこと前にもあったような．．．．そう
考えつつ私の意識は飛んでいきました。

く6月27日く

昨日は酷い目に会いました。球技祭も優勝出来ませんでしたし気分がだいぶ下が
り
気味です。

なので、気分転換に私は映画館に来ています。映画館に来ようと考えたのは昨日、土
道と凜祐、十香ちゃんが行ったと聞いたからです。まあ、映画自体は見ていないそう
ですが。

さて、何を見ましようか．．．．あれ?今日はカップルデーなんですか。前みたい
に土道とカップルのフリが出来れば安くなつたのに残念です。．．．．あれ?私、土
道とそんな事しましたっけ?

取り敢えず、何故か見た気がする恋愛系を除外してSFファンタジー系でも見ましようか。

〔6月28日〕

結果が今日は夕方ぐらいから随分不安定でした・・・なんででしょう？

それにしても、最近覚えのないことを覚えていたり、覚えていることを覚えていなかったりと随分と変な感じになっています。1度整理した方がいいですね。

〔^{サリエル}靈魂看守〕—————〔^{ソウルログ}魂の記録書〕

魂に記録されている情報を洗いますか。何故か5年前の両親が亡くなったぐらいよりは前はロツクがかかって見れないんですけどね。

「—————っ!!」

急に大量の情報が流れ込んできました。

何コレ？これは未来なのでしようか？

様々な6月26日からの記憶。その中にはこの結界の原因らしき精霊の姿もありました。

これは、未来なんかじゃない。全て私が実際に体験した現実なのです。

「うっ……」

中には土道が死んだ物があり気分が悪くなります。しかし、これで分かりました。この結界の効果は世界を繰り返す。トリガーは土道の死です。

明日こそは本人にどう言うつもりか探して聞き出しましょう。――土道の為にも。

私はそう強く決意しました。

く6月29日く

私は学校も休み1日中霊力を探っていました。反応があつたのは学校が終わり数時間たった頃でした。

場所は見晴台。そこに居たのは土道と

「凜祢……」

――園神凜祢でした。

夕食後、土道の部屋から少し暗い顔で出てきた凜祢に声をかけます。

「凜祢、少しいいでしょうか？」

「千夜ちゃん? どうしたの?」

凜祢は暗い表情を直ぐに表情をいつもの笑顔に戻し答えます。

「土道のことについて聞きたいことがあります。ちよつと散歩に付き合ってくださいか?」

「う、うん。分かったよ。ちよつと、待ってて今準備するから」

さて、鬼が出るか蛇が出るか……ここが正面場です。

私は近くの公園まで足を運び自販機で飲み物を買います。

「凜祢はカフェオレでいいですか?」

「え!? 別にいいよ」

「気にしないでください、もう買っちゃたから飲んでくれないと困ります」

缶を投げて凜祢に渡します。私はブランコに座りプルタブを開けて中身を口に流し込みます。凜祢もゆっくりと横のブランコに座ります。

「それで、話って何かな?」

「凜祢、単刀直入に聞きます……」

飲み干した缶を立ち上がり籠に放り込んでから〈サリエル靈魂看守〉と霊装を展開させます。

大鎌を凜祢に向けて問います。

「……凜祢、貴方の目的はなんですか?」

「な、何を言っているの千夜ちゃん？それにその恰好はなんな————」とぼけないで下さい!!」……」

自分でもびつくりするぐらいの大きな声が出ます。

「もう一度聞きます。貴方はこんな結界を作って何がしたいんですか!!」

凜祢は目を瞑り、ゆつくりと言葉を放ちます。

「私はね、ただ土道に幸せになつて欲しいの。その為になら何でもするし何にでもなれるの……千夜ちゃんなら分かつてくれるよね？」

「これは、土道の為だと言うのですか」

「うん……」

凜祢は私に同意を求めて来ます。理解している自分と納得していない自分がせめぎ合い、私の中で葛藤が起こります。

「……土道はこれを良しとはしないでしよう」

結局、私は自分の意見を捨て、土道という存在を言い訳にしました。

「それは、土道が否定しなければ千夜ちゃんも否定しないという事だよね？なら、私はまだ否定されていないし、これからもされない。千夜ちゃんには何も問題ないよね？」

確かにその通りです。言い返す言葉が見つかりません。

「……わかりました。でも、土道が凜祢、貴女のやり方を否定した時は全力で貴女

を倒します」

私はそう言い捨てて、その場を去りました。

死神は繰り返される日々を終わらせた

（6月30日）

「始まりましたね・・・」

赤く染った空を見上げながら眩みます。土道と凜祢は対立・・・土道は凜祢のやり方を否定したようです。

「なら、宣言通り全力でいかしてもらいます。〈サ霊リ魂エ看守ル〉—————【たまむか魂迎えの夜】

巨大な満月が出現し私の周辺が夜になります。【たまむか魂迎えの夜】の効果は霊力を常時回復、能力の強化を【イ魂を喰らう者ター】での吸収した分だけする、というものです。1度使うとこれまで【イ魂を喰らう者ター】で強化した分がリセットされるのが玉に傷ですが。

【フ生命エの満欠イ】—————（ハ望月ス）

死神達を生成します。力も速度もいつもの比ではない程の強さで数も何時もの数百倍です。

さて、結界の要はモニユメント、池の取水塔、神社の御神木でしたね。それぞれに四糸乃ちゃん、折紙さん、時崎さんが向かったようです。まあ、時崎さんには送らなくていいでしょう。

モニュメントと池の取水塔、後は土道の所に死神達を送り込みます。さて、私も土道の近くまで行きますか。

新天宮タワーにつく頃には各要は破壊されて土道は奥に進んでいました。

「琴里！黒い奴らの親玉らしき奴が来たぞ！」

「へりーパー！?!なら、コイツらも貴女の……敵意は無さそうね。今回は協力してくれるのかしら？」

頷いて承諾をします。

「あつ……あれは……」

「いやーあの格好を見るのはひさしぶりだねー」

「へりーパー」やはり貴女が手助けを……」

「あらあら、お久しぶりですわね」

他に向かつていた面々も集まり全員集合した。

「サキ、イッテ。ココハ、クイトメル。シドウ、マカセル」

わざと片言で伝え、面々を新天宮タワーの内部に向かわせます。

私は未だに生み出され続けているガーディアン足止めでもしますか。
「さて、全力で行きます」

次々とガーディアン達を斬る。斬る。斬る。斬る。

しばらくしてガーディアンの生成が止まります。土道が凜祢を封印した為です。霊力で分かりました。

その場に向かうと消えかけの凜祢とそれを抱えている土道。周りで立ち尽くしているみんながいました。

「本当はね、私は．．．．私だけを一緒に帰れないんだ」

「どういふことだよ!!? だって、お前．．．．さつき．．．．」

凜祢の言葉に土道が疑問を叫びます。

私は理由を知っています。凜祢は霊力が意志を持ち作られた精霊に近い存在、霊力が封印されてしまえば消えてしまうのも必然でした。

私に出来ることは――

〈土道視点〉

「————ねえ、士道…………ちよつとだけ聞いてくれる？」

「何でも聞いてやる。何だ…………？」

「こうしてるとね…………士道と過ごした日々がとても愛おしく感じるの…………だから、思うの。私の樂園は間違っていたかもしれないけど…………士道といられる日々は…………偽りなく本当に————幸せだった…………って」

「何言つてんだよ…………これからだつて一緒だそう言つただろう？」

「ふふ…………士道にこんなに想つてもらつてゐるって…………嬉しいな。でも、聞かれたらみんなに怒られちゃうかも…………」

「はは…………確かにそうかも…………」

「…………じゃあ、みんなが聞いてない今のうちに…………言っちゃいます」

「なんだよ？そんなに改まつて…………」

「私…………ずつと、ずつとね？」

…………好きだったよ、士道のこと————

消えかけの凜祢の光がいつそう強くなる。その瞬間、黒い巨大な鎌が凜祢を斬り裂いた。

「えっ…………？」

凜祢が消えて、そこには鎌を振り降ろしたへりーパーの姿があつた。

「り……んね？凜祢？凜祢……あ、あああああああ!!」

悲しみと怒りで目の前が染まっていくのを感じる。「何故?」、そうへりーパーに問いただそうとした瞬間、体が宙に浮くような感覚に襲われ気がつくとなんて高台にいた。どうやら崩壊しかけていた新天宮タワーからフラクシナスで転移させたいのだ。

結局、何も分からずじまいだった。凜祢は、どうして結界を張ったのか。どうして俺を殺そうとしたのか。へりーパーは何故、凜祢を斬ったのか。

何もかも謎のまま残して、終わってしまった。

「……大丈夫かい、シン」

一人打ちしがれていた所に令音さんがやってきた。

「いや……さすがにまだ、堪えています」

「……ふむ、そうかね。では、今回の現象についての話は時間を改めた方がいいかな?」

「何か分かったんですか!?!」

「ああ、先程のへりーパー手から結界の制御が離れた際に、ようやく結界の解析をすることができた」

「ほ、本当ですか!?!教えてください!あの結界は一体なんなんですか!」

「……」

「令音さん！」

「……これは君にとって必ずしも良い情報とは限らないかもしれない。……それでも知りたいかい？」

「……ッ」

脅すような令音さんの口調に一瞬怯みかける。

でも——それで、凜祢の考えが分かるなら。少しでも凜祢に近づけるなら。

「お願い……します」

「……ん。覚悟あるなら私は君の意志を尊重しよう。まず——

そこからの話は壮大だった。

〈ルーラー〉つまり凜祢は精霊では無く強大な霊力の残滓に意思が宿ったもので、器が無いため封印した際に消えてしまった事。

結界、〈凶禍楽園〉には世界をやり直す力があり、それは俺が死ぬ事で発動する事。

俺の中にある記憶は実際に会ったことである事。

十香達の霊力の暴走は俺自身が緊張感やストレスで暴走状態になり、霊力が逆流していた可能性が高い事。

様々な情報がパズルのピースの様に繋がっていく。

凜祢は……凜祢は、精霊の力を暴走させてなんてなかった……

利己的な欲求のために、俺達を閉じ込めていたのでもなかった……！
ただ、ただ俺のために……ッ！

己の身を削りながら……再生の炎を失った俺が死んでしまわないように、助け
てくれていたんだ……！

「凜、祢……」

「そうだ、（ヘルラー）園神凜祢は君を守るため……その為だけにこの世界を作っ
たんだ」

「あ……あつ……ああ……お、れ……は……ッ、何にも……
知ら、ないで……凜祢に……なんて……俺は……俺は……ッ
！」

「それ以上は、やめてくれないか、シン」

「……令音……さん？」

「誰が彼女を恨もうが、誰が彼女を哀れもうが、構いはしない。……しかし、シン。
君は、君だけは、彼女が命を賭して守った君だけは……彼女の決意を、汚さない
でくれ」

「……ッ!!」

「お願いだ、シン。園神凜祢は、ただ君を好こうとしただけだった。それに報いようとす

るなら……お願いだ。後悔や謝罪ではなく……感謝を」

「は……い……!」

令音さんがフラクシナスに戻り、1人になる。時より空間が揺れる令音さんが言っていたが〈凶禍楽園〉が崩壊しかけているらしい。崩壊したらまたあの日に戻る。記憶を全て失って……

空を見上げると空から袋が落ちてきた。地面に落ちたそれはからは軽い金属音が響いた。

俺は、それを拾い上げて中身を見る。

「これ……」

「私、大事にするね」そんな凜祢の言葉を思い出す。中に入っていたのは見覚えのある鍵。そう……これは、凜祢が俺の幼馴染だった証だ。これを渡した時の顔は忘れない。驚いていたけど、凄く嬉しそうで……家に忘れた時だってあんなに慌ててさ……

「……大事にするって約束しただろう、凜祢? だったら責任持てよ……ちやんと持っていけよ……!」

でない……わかっちゃうじゃねえか……朝、起こしてくれない……嬉しそうに料理の味を聞いたりしてくれない……お前の笑顔はもう見れない

「そんな事ないですよ。私は士道の意見ばかり気にして士道を守ることを考えられてませんでしたから。あと、少し勘違いしてました。この前はすみませんでした」

『ううん、気にしないで』

「それと、まだ器はないからどうにも出来ませんが……そのうちどうにかしますの
で気長に待つててください。凜祢」

私があの時、凜祢を斬ったのはこの為です。【魂を狩る者】で魂を刈り取り
【魂の記録書】に保存する為でした。この状態なら消えることはありませんし、後はどう
にか体を用意できれば……

「死神になら直ぐにでも成れますけど、どうしますか？」

『うーん……士道と早く会えるは魅力的だけど……死神はちよつと……』
「まあ、そうですね……〈凶禍楽園〉がそろそろ終わりますね。凜祢、士道に何
か言っておきたいことありますか？」

『え？じゃあ……』

ありがとう、土道・・・・私、土道と一緒にいた時間が・・・・本当の幸せだったよ』

千夜サマーバケーション

少女は夏休みが楽しみだった

テスト。それは、学生達の学力を測るためにある。学生達はその結果に一喜一憂するでしょう。

私はそんなテストの結果を受け取り、一憂している所でした。

凜祢の件があり、まともに勉強する時間が無かった訳では無いけどいつもより少なくなつた事は確かでした。それが結果によく現れていました。

合計421点。これだけ聞けば結構優秀だと思えるでしょうが、しかし現実はいま
す。

「土道。どうでした？」

「375点だ。まあまあかな」

「配点はどうでしたか？」

「えっ？ 国語76、数学73、理科77、社会74、英語75だけど？」

「いいですね・・・」

「千夜は何点だったんだ？」

「・・・・421点です」

「俺より良いじゃねえか！」

「配点が問題なんですよ・・・・ほら」

「どれどれ、あつ・・・」

点数が書かれた紙を土道に見せると納得したような声をあげます。

国語98、数学96、理科97、社会100、英語30

見てわかる通り英語が絶望的なのです。何故こんなにも英語が出来ないのでしょ
か・・・

「まあ、いいですけど。それより、明日から夏休みです！土道は何か予定ありますか？」

「いや、切り替え早いな・・・・予定は特にないけど？夏祭りぐらいか？」

「なら、旅行に行きませんか？十香ちゃんや四糸乃ちゃん、琴里ちゃんと一緒に。今なら

何と！宿泊費が無料です！」

「マジか！ちよつと待つてくれ琴里に聞いてみる」

土道は琴里ちゃんに電話をかけるため、スマホを持って廊下に行きました。

宿泊費が無料になる理由は宿泊場所はウチの経営している所だからです。旅館経営
なんて、お爺ちゃんなんの仕事しているのでしょうか？今度しつかり聞いてみましょ
う。

それにしても、楽しみですね。旅行はこれを入れて2回行く予定ですし、他にも七夕祭りに夏祭り、やるのがいっぱいですね。早めに宿題を終わらせておきましょう……

「千夜！確認取れたぞ、どこに行くんだ？さすがに海外は厳しいらしいんだが」

「大丈夫です、国内ですよ。伊豆諸島ツアーです」

「そうか、いつ頃なんだ？」

「7月中旬です」

「分かった。他にも用意する物があったら、また教えてくれ」

「分かりました。後で送っておきます」

土道と別れ帰宅します。

折紙さんも誘った方がいいでしょうか？……十香ちゃんの機嫌が悪くなりそうなのでやめておきましょう。ごめんなさい、折紙さん。

それにしても、楽しみですね。友達と旅行なんて何年ぶりでしょうか？あつ、去年に修学旅行行ったばかりでしたね……

そう言えば、もう1つ家族旅行で行くイギリスには土道の妹の真那ちゃんの所属している会社のDEM社の本社があるんですよ……まあ、特になんともないでしょう。

夏休みまであと数日頑張りましょう。

少女は短冊に願いを乗せた

七夕つて雨が多いですよね？

雨が降ると天ノ川が洪水になって織姫と彦星が会えないって言いますが、それだと織姫と彦星が会えない比率高すぎませんか？何年も何年も雨が降ったら何年も2人は会えない事になってしまいますし。

私は毎年ちゃんと会えていると思うんですよね。
だつて—————

—————どんなに雨が降つていようが、

—————雲がかかって曇つていようが、

——その雲の先は必ず晴れていて……

満天の星空が広がっているんですから……

今日は七夕で七夕祭りがこの天宮市で開催されています。みんなとお祭りに来ていきましたが、少し前にはぐれてしまいました。まあ、そのうち会えるでしょう。

七夕ってことで色々サービスをしている所が多くありますね。星に関係あるプラネタリウムが少し安くなっていましたし公演回数が多くなっていました。全く関係ないところで言うと結婚式場でウエディングドレスの試着のサービスがやりました。

……タマちゃん先生が見たら涙を流しそうですね。

さて、気を取り直して屋台巡りをしましょうか。

普段見ないような変わった物が色々ありますね。七夕にちなんだ屋台が結構出ていました。

笹の葉カステラ、天ノ川かき氷、織姫綿あめ、天牛ビーフジャーキー e t c . . .
どれも美味しそう つて、天牛は食べちゃダメでしょ！彦星が仕事できなく
なりますよ。

全部食べてみたいですが、夕食が入らなくなると困りますし少し食べる程度にしてお
きましょう

屋台を回っていると短冊を配っている場所を見つけました。

短冊ですか 織姫と彦星も大変ですよ。1日しか会えないのに他の人の願
い事を叶えなければならぬなんて。

短冊も願い事と名前しか書いてないのでどこの誰かもわかりませんし

あれ？十香ちゃんの短冊がありますね。今日の夕食はカツカレーが食べたい
十香ちゃんらしいと言えかなんというか

四糸乃ちゃんによしのん、琴里ちゃんもありますね。土道のは見当たりませんし、土
道もはぐれたのでしょうか？

あつ、ちょうど土道を見つけました。土道がこっちに向かって来てーーーっつて！
時崎さん!?なんで、土道と一緒に あれ？時崎さんは分身の方？

土道を見つけたと思ったら一緒にいたのは時崎さんの分身でした。

なんで、2人が一緒にいるのでしょうか？それに、時崎さん、本体の方はあちらこちら

動き回っていますがどうしてでしょうか？

2人は短冊を書いていきますね。なんて書いてあるんでしょうか？まあ、土道は精霊が幸せになれるようにとか書いてあるんでしょうけど。

さて、何処に付けるか迷っているようですね。あつ、2人が移動します。土道が心配ですし、後を付けましょうか。

少し移動すると、丁度いいところを見つけたようで、土道が短冊をつけ始めました。

土道が短冊をつけ終えて時崎さんと話をしている所に声がかかります。

「ようやく見つけましたわよ、わたくし私」

本体のお出ましのようです・・・

時崎さん本体の話聞いた限りで分かったのは、あの分身の時崎さんは本体の時崎の命令を無視して行動している事と、分身の時崎さんは土道に心を開きかけた時の時崎さんらしいです。時崎さんがデレた時あったんですね・・・知りませんでした。

時崎さん（分身）は無数の手に捕まれ影の中に引きずり込まれて行きました。土道はそれを助けようと思いましたか、間に合うことはなくその場には本のようなものと短冊が残りました。

「狂三・・・」

「同じ私わたくしを2度、殺すというのもあまり気分がいいものではありませんわね・・・今

日の要件は済みましたわ。本当なら土道さんともっとお話したいのですが……」
そう言つて時崎さんは私のいる方に目を向けてきました。私がいる事に気がついて
いるようですね。私という存在がストッパーとして役立っているようです。

そう考えていると直ぐに複数の足音が聞こえてきました。

「シドニー」

「どきなやんこー」

十香ちゃんに琴里ちゃん、四糸乃ちゃんです。十香ちゃんと琴里ちゃんは時崎さんを見
るなり目の色を変えました。四糸乃ちゃんは土道の心配の方が先のようにです。

「狂三……！土道には指一本触れさせんぞ！」

「また性懲りもなく現れたわね、今日は何の用？大人しく降伏するっていうなら話を聞
かないまでもないけど」

「うふふ、今日は怖い怖い炎の精霊さんがいらつしやるようですし、退散しておきます
わ。ごきげんよう、土道さん」

そのまま、時崎さんは暗闇に姿を消しました。

私もそろそろ出てきても大丈夫でしょう。建物の影から出て、時崎さん（分身）が落
とした2つのものを拾い上げます。

1つは白い本のような物でそこには花婿姿の土道と花嫁姿の時崎さんの写真があり

ました。多分、あの花嫁衣裳を無料で着れると書いてあつた結婚式場で撮つたんでしよう。時崎さん（分身）は自分が本体に殺されると分かつていたからこのような思い出作りをしたのかも知れませんか・・・

もう一つは短冊。そこに書かれていた願いは——

「土道」

私は短冊を持つて土道に近寄り、その短冊を渡します。

「これを」

「————ツ!!」

土道は短冊を受け取ると血相を変えて走り出しました。

「シドー!どこへ行くのだ!」

「それに千夜姉!?何処から現れたの!」

「びっくり・・・しました・・・」

「そんなことより土道を追いかけますよ!」

4人で土道の後を追います。土道を追いかけていると通行人が上を見あげている一帯があり何事かと思うと土道がいました。

土道は一番高い竹の天辺にビルの屋上から短冊をくくりつけていました。付け終えた事に油断した土道が竹の反発に負けビルの屋上から放り出されました。

咄嗟に十香ちゃんが飛び出し土道を受け止めました。びっくりしました……。心臓に悪いですね。

「大丈夫かシドー！」

「ああ、ありがとう十香」

「なにやってんのよ！わざわざあんな高いところに短冊ついたりして！」

「危ない……です」

「すつごい目だったけどねー」

「ああ、悪い……。でも、あの願いだけは叶ってくれなきや困るんだ……」

そう言えば、短冊は星に近い程叶いやすいって言いましたっけ？土道の行動はその為でしょう。

土道が付けた時崎さんの短冊願は……

……土道さんとまたいつか会えますように

そう言えば、私はまだ短冊を書いてませんでしたね。せっかくなので書いておきましょうか。私の願いは……

――――彦^士星と織^{時崎}姫^{さん}がちやんと通じ合えますように。

少女は最凶の最恐の最狂と戦った

皆さんは奴を知っているでしょうか？

奴は、雑食で基本的に何でも食べることが出来、水1滴で3日、油1滴で5日、生きることが出来ます。

奴は、物凄い防御力を持っていて、潰されようが、凍らされようが動きません。

奴は、とてつもない抵抗力を持っており毒をかけられようが動き、決して病気になるません。

奴は、恐ろしい程の生命力で手足や体をもげようが頭が取れて脳が無くなるのが動き続けます。

奴は、とても頭が良くIQは340程あると言われています。

奴は、生物の中でも強い繁殖力を持っており、1から300の子孫が生まれます。また、子孫を残す為に性別すら変えることが出来ます。

奴は、姿を見せただけで人々を恐怖のどん底に突き落とす程に禍々しい姿をしていて、1目見れば人々はSAN値をゴリゴリと削られ、叫び出すでしょう。

奴は、黒く光沢のある体をし、その形は速度を極限まで殺さない為の流線型で高速、人

間換算で時速320kmで地や空を駆けまわります。古代から変わらないその姿は完成された完全の姿と言えるでしょう。

——奴の名前はゴキブリ、通称G。

今回は、Gとの戦いです。

出会いは突然でした。夏休み初日という事で少し掃除をしようとしてクッションをどかした瞬間、奴は現れました。

目が会った瞬間、高速で逃げていきます。パニックで頭が真っ白になり、とにかく目の前のゴキブリ^敵を倒そうと体が動きます。

「サリエルウウウウウウウウウ
ハ霊魂 看 守」!!!」

天使、巨大な鎌を召喚し力強く振り下ろします。Gはこれをもとめせず逃げ回ります。それどころか体の向きをこちらに向け直進してきます。

「こっちはないでください!!」

連続で大鎌を振りますがGには掠りもしません。そして、ついに羽根を広げ飛びます。

「いやああああ!! 飛びましたああああ!!」

大鎌を振り回しますが空を切るだけでGには当たらずどんどん近づいて来ます。

びっと………

Gが肩に止まり目が合った気がします。

「あ、あ、いやあああああああああああああああああああああああああああああああああ

!!!」

この日、過去2番目に強い空間震が起こる前兆が観測されたようです。(ギリギリで

止めました)

「————と、言うわけで士道! G退治を助けてください」

「千夜…….ちゃんの家は掃除してるのか?」

「しますよ! 長年住んでいなかったからその間に増えたみたいで、夏になって急に活動しましたんですよ!!」

Gの行動時期は春~秋ですが、特に夏は活動が活発になるのです。

「分かったよ。後で行くから家で待ってろ」

「私にあのGの巣窟に一人で行けと言うんですか！早く来てください！」

「ちよ、千夜、引つ張んな！今、昼食の途中だから待ってっ！」

「分かりました……私も準備してくるので早くしてくださいね？」

30分後、士道の家を訪ね直します。

「準備はいいですか？士道」

「どちら様ですか？」

「私ですよ、千夜です」

「なんだよその服は……」

「対蜂用の防護服です」

私は白い防護服を身につけています。これでGがくつついても大丈夫です。

「士道の分もありますよ。着ますか？」

「着ねえよ。行くぞ」

「はい。あつ、武器もありますよ。Gジェットを消化器みたいにした物です」

「いや、普通のGジェットでいいだろ……」

「士道は、機動力が欲しいのですか。では、こちらのGジェット（ガンタイプ）を渡しましよ」

「だから普通のでいいって……」

このガンタイプは、普通のと違い横向きになっており引き金が付いている。そして、引き金を引くと銃の様に中の薬品が飛び出るタイプなのです。

士道は何故か渋々とガンタイプのGジェットを受け取ります。

「さて、行くか」

「はっ」

私達はG退治に向かいました。

数時間後、何とかG退治が終わりました。全て倒せたかは分かりませんがトラップを仕掛けておいたので、それ頼みです。

今は士道の家で夕食を食べています。

「本当に大変だった……」

「本当にすみません……」

「そんなに大変だったのかー？お兄ーちゃん」

琴里ちゃん（白）が心配そうに声をかけます。

「ああ、千夜がGにビビってGジェットを俺に向かつて噴射したり、逃げ回ったり、塩を

撒いたりしたからな……」

「本当につ！すみませんでしたっ!!」

今回は本当に弁解の余地が無いです。

「何故、塩を撒いたのだ？」

「お塩……無駄に……なっちゃいます」

「ダメだよー千夜ちゃん。食べ物は大切にしなきゃ」

「そーだぞ！お姉ーちゃん」

「ううう、みんな……」

ここうして、私のGとの戦いは終わりました。

少女は島への旅行を楽しんだ

7月18日

私は、土道と十香ちゃん、四糸乃ちゃんによしのん、琴里ちゃんと一緒に旅行に来ています。

大きな船に揺られながら目的地、八丈島へ向かっています。だいたい、11時間で着くそうです。

「シドー！魚が跳ねているぞ！あの魚は美味しいのか？」

「どれどれー！ー！って、野生のイルカじゃねえか．．．十香、あれは食べねえよ」
「そうなのか？残念だ．．．」

「飛んでいるって言うから飛魚かと思ったぜ」

「十香ちゃん、イルカは魚じゃないですよ」

「そうなのか!？」

「はい、でも食べると美味しいですよ」

「え!？」

あんまり、食べるイメージは無いですけどね。

「シドー！騙したな！」

「いや、俺も知らなかったんだよ！と言うか、本当なのか、千夜？」

「はい、少ないですが地方によつては食べる所があるみたいですよ」

「そうか！何にすると美味しいのだ？味噌煮か？蒲焼きか？」

「イルカさん……食べるの……可愛そうです」

「四糸乃は優しいなあ。まあ、イルカは芸をする可愛い生き物ってイメージがあるからねえ」

「ああ、俺もそう思っていたー……おっ！向こうにクジラが見えるぞー！」

土道が指をさした方をみると大きな魚影が見えます。

「すげえデカイな」

「すごく……大きい……です」

「ビツクリなサイズだねえ」

「千夜！あれも食べれるのか？」

「食べれますよ」

「おお！何人前になるだろうか？」

十香ちゃんは本当に食べることばかりですね……

そのまましばらく、みんなでクジラを見ていると琴里ちゃんが来ました。

「あんまり、身を投げ出しすぎると落ちるわよ。そろそろ準備しなさい」
「琴里？どうしてだ？」

「あと30分程で目的地に着くからよ。さっさと降りる準備を済ましておきなさい」

「おう、教えてくれてありがとう。さて、みんな準備するぞ！」

「「おー！」」

島についてからウエトスーツに着替えてシユノーケリングの準備をし小さい船に乗り込みます。残念ながら四糸乃ちゃんは年齢制限？に引っかかってしまったので令音さんとお留守番です。四糸乃ちゃん、ごめんなさい。

四糸乃ちゃん達は釣りに行くそうです。晩御飯を捕まえると意気込んでいました。

さて、私達の方に戻ります。ゴーグルとシユノーケルをつけて先導者について行きます。

「すごいぞシドー！水族館よりも魚が近いぞ！」

「お兄ーちゃん！お魚いっぱいぞー」

「確かに凄いな」

「シドー！この魚はとってもいいのか？」

「いや、手掴みは難しいだろ……。あれ？千夜の持っているのって」

「ヒトデですよ。ガイドさんが渡してくれました」

「不思議な形をしているな。千夜、それは食べれるのか？」

「いや、食べれませんよ」

「わーヒトデだー！千夜お姉ーちゃん、私もヒトデが欲しいのだー」

「いいですよ」

琴里ちゃんにヒトデを渡します。すると、琴里ちゃんはヒトデをそのまま回転させて投げました。

「ぐへっ!？」

「あははは！ぐへだつて！ヒトデ手裏剣命中！」

ヒトデ手裏剣は士道の顔に吸い込まれるように飛んでいき命中しました。

「こら琴里！ヒトデは投げるものじゃないぞ！」

「うー……。ごめんなさいなのだー」

士道が琴里ちゃんに軽めにゲンコツをして怒ると琴里ちゃんは素直に謝りました。まあ、ヒトデも生き物ですしあんまり雑に扱っては可哀想です。

しばらく、泳ぎ続けてウミガメやイルカと触れ合ったり、土道がウミガメに頭突きさせられたり、十香ちゃんやシヤコガイを取ってきたりと色々ありましたが無事楽しくシユノーケリングを終えました。

「みなさん……おかえり……なさい」

「コツチはいつばいお魚とれたよ」

「さて、皆で予約しておいた旅館へ行くか」

少し、歩き旅行まで行きます。旅館についてからとつたお魚を女将さんに渡して料理に使ってもらおうようにお願いしました。本当、急にすみません。

急にだったのに料理は絶品で十香ちゃんだけでは無く、みんなが沢山食べていました。

最後のお楽しみは温泉です。熱帯植物が生い茂っていて中々壮大な光景でした。

「うおお!!緑がすごいな!」

「とても……良い景色……です!」

「おう!四糸乃が珍しくテンションを上げてるよ」

「凄いのだー!」

「これは中々、いいものだな」

大自然の中の秘湯って感じがします。これは、また明日も入りたいですね。朝、入っ

てから帰りましょう。

温泉から出たあとと寝る前に定番の枕投げをして、そのあと持ってきていたゲームをして遊びました。

1人また1人と、睡魔に負けてリタイアしていき最後には私と土道だけになりました。令音は寝てませんがどこかに行ってしまうのでカウントしていません。どこに行っただんでしょうか？

「みんな寝ちゃったな」

「あれだけはしやいでいれば体力も無くなりますよ」

「そりゃあそうか。千夜、誘ってくれてありがとな」

「いえ私も1人では楽しめませんし、みんなと来れて良かったですよ」

「そう言つて貰えると助かるよ」

「さて、明日に――って、今日ですが備えてそろそろ寝ましょう」

「ああ、おやすみ、千夜」

「はい。おやすみなさい、土道」

私たちはゆっくと眠りにつきました。

少女はサバイバル生活を始めた

「曇つて来たな……」

「曇つて来ましたね……」

八丈島からの帰り、天気が悪くなってきました。風も強く吹き始め、海は波が高くなってきました。

十香ちゃん達は船の中にいて、私達は気分転換で外に出てきた所でした。外にいる人は少なく、小学生ぐらいの子供が数人遊んでいる程度です。

「この状況で遊んでいられる子供って凄いやな」

「土道……おじいさん見たいですよ？」

しばらく、遊んでいる子供達を見ながら雑談をしていると雨がポツポツと降り出してきました。そろそろ戻ろうとした瞬間、かなり強めの風が吹き甲板で遊んでいた女の子の帽子を吹き飛ばしました。帽子を飛ばされた女の子は慌てて帽子を追いかけ、その子は帽子を海に落ちる前にギリギリ甲板の柵から身を乗り出して帽子を掴み取りました。その時、船が波によって大きく揺れました。バランスを崩しその子は船から転落しかけました。

「……………つ!!危ないっ!!」

たまたま、近くにいた土道が飛び出し女の子の手を引き船に引き戻します。しかし、引き戻された女の子と変わるように土道が海へ落ちて行きました。

「土道っ!!」

私は、近くに設置されていた浮き輪を掴み船から飛び降り海に飛び込みます。

……………土道っ!どこですかっ!?

暗い海の中では視界が効かなく人影を見つけることが出来ない、また荒れた海ではプロでも思うように前に進めないものです。普通の人間なら到底助からないでしょう。そう、普通の人間なら……………

……………見つけましたっ!土道、今行きますっ!!

私は精霊です。土道限定になります。が霊力を探れば位置は分かります、荒れた海でも苦なく進むことが出来ます。私は土道の手を掴み海面まで引つ張り上げました。

「……………ぶっはあ!」

海から出るとさっきまでの景色と変わり、辺りがかなり暗くなり、大雨が降り波が凄く高くなっていました。船はかなり遠くまで行つてしまっています。落ちたのを見たのは子供達だけです、まともに救援が来るとは思えません。土道も引き上げた時から脈はありませんが息をしていなく、一刻を争う状態です。迷つてる暇はありません。

私は霊装を纏い土道を抱えて空を飛び、近くの島まで運びます。

えっと、こういう時はなんて言いましたっけ？確か、心肺蘇生法でしたっけ？とにかく、始めましょう。私は、土道を砂浜に寝かし蘇生法を開始したのでした。

土道！こんな所で死ぬなんて許しませんよ！

「かはっ！……けほっ、けほっ！」

「土道!!」

蘇生法を続けると土道が水を吐き出し、息を吹き返しました。良かったです、これが一安心です。

「……千夜？あれ？俺は……」

「海におちたんですよ！全く無茶しますね、こっちの身にもなってください!!」

「ああ、悪い……」

「本当に……心配……したんですから……」

目頭が熱くなり目に涙が溢れてきます。あれ？なんで涙が出てくるのでしょうか？まあ、幸い雨のおかげで土道には気づかれていないでしょう。ああ、安心したらなんだ

か意識が遠く——

「千夜? 千夜!?! 千夜!!」

私はそこで意識を失いました。

↳ 士道視点

千夜が倒れてから千夜を運び雨宿りできる洞穴に入った。千夜には外傷は無く熱もあるわけではなかった、ホツとして気が抜けたのだろう。

「しつかりしねえとな」

千夜にとって身近な人が死にそうになるなんて、トラウマを引き出しかねない事だ。千夜はあの時から変わってしまったな

『お兄ちゃん』

『士道』

『士道君』

ふと昔の光景を思い出した。 昔はもつと落ち着いてい物静かだったな。でも、あの日から——

「……………おっと、いけないな……………気分が沈んできた。今はとにかく琴里がフラクシナスで見つけてくれるまでどうするか考えないとな」

まず、服をどうするか。濡れたままじゃ風邪引くよな……………でも、千夜のをぬがすのは……………うん、とりあえず、たき火の為の乾いている木の枝を探すか。ついでに食べられるものを探そう。

俺は森の中を進んで行った。

パチパチと弾ける音で目が覚めます。

「千夜、目が覚めたか?」

「土道?」

目を覚ますと土道がたき火を作っていました……………パンツ一丁で。

「土道?今ならまだ弁解を聞きますか?」

「いや、好きで脱いでるわけじゃねえよ!濡れたままじゃ風邪引くだろ?」

「確かに……………」

それは、問題ですね。いつ助けが来るか分からない状態で体調を崩すのは良くないこ

とです。その点、士道の判断は正しいでしょう。

「それで、その……悪いと思っただけ……」

「どうしたんですか？士どー」

次の瞬間士道の言わんとしていることが分かりました。問題があつたのは私の格好です。士道と同じで下着だけの姿でした。

「……っ?!」

「いや、風邪を引いたらまずいし……その、スマン……」

「……士道は私の為を思っただけですよ？なら、いいです。今回は不問にします……あんまり、こっちを見ないでください。恥ずかしいです……」

「すっ！すまん！」

こうして、私達のサバイバル生活がスタートしました。

少女はサバイバル生活を満喫した

サバイバル生活開始。

服が乾き雨も止んだので本格的にサバイバル生活を開始する事になりました。

サバイバル生活において第1にしなければならぬのは安全確保です。これはもう出来ています。例の洞穴を拠点としていていいこうと思います。

次にしなければならぬのは水と食料の確保です。

「土道は水を探してください。湧き水じゃないとダメですよ？私は、食料を探してきました」

「おう、頼んだ」

土道と別れ海の方へ来ます。さて、食料確保の前に――

「SOSつと、これでフラクシナスから見つけやすいでしょう」

砂浜に大きくSOSと書き残し食料確保を再開します。

サバイバル生活では体力を使い切る事はしては行けません。動物を狩りでとれば数日間持ちますが疲れますし、もしも取れなかつたら最悪です。なので、サバイバル生活は以下に体力を消費しないで食料を集めるかが大事になります。

サバイバル生活する上で一番楽な食料は貝です。比較的浅瀬にありますし、1ヶ所に集まっているため量を取ることが出来ます。それに、逃げることもありません。とりあえず貝を持てるだけ取ります。

さて、貝だけでは量が足りませんその為に魚を楽ししてとる方法を使います。

まず山の中から魚のエサとなる幼虫やミミズなどを集めます。

私は触れないので木の枝を箸に見立てて持つていきます。——うねうねしてる……気持ち悪いです……

次に海岸沿いのため池を作ります。砂浜では波で潰れてしまう可能性があるのですが、出来るだけ岩場にするようにします。最後にため池にさつき取ってきたエサを入れ、魚が入ってきたのを確認して、入り口を塞ぐだけです。

この方法のいいところは、作るのにそこまで時間がかからなく、魚が生きるのでいつでも新鮮な状態で食べることが出来る事です。モリで刺したりすると死んじゃいますからね。

さらに、ここから少し改良します。別にやってもやらなくてもいいのですが、入り口に木の葉で返しを作り、ため池に入るとは出来ても出られないトラップを作ります。こうする事で、ちよくちよく確認しに来る必要がなくなるんです。

トラップを作り終えたところで拠点に戻ります。戻ると土道が戻ってきていました。

「おっ！千夜、湧き水あったぞ。それに、これを見てくれ」

「それは……鍋？」

「そう、ここは昔は人が住んでいたみたいで家があつてさ、そこから借りてきた」

「こつちも、貝が取れました。魚は夜食べれるかもしれません」

「分かった。じゃあ、寄生虫とかが怖いし貝は焼くか」

「その前に塩を作りましょう。味がないと流石に寂しいです」

こうして、私たちのサバイバルクッキングが始まりました。

結構、美味しかったです。

すっかり日が暮れ晩御飯の準備中です。晩御飯は貝とトラップにかかっていた魚、コナツツです。

魚は鱗と内蔵をとり木の棒に刺して焼きます。土道は手際がいいですね。あつという間に魚を捌いています。

今日の晩御飯は魚の塩焼き、貝の塩焼き、コナツツジュースです。食物繊維が足りていませんがしかたありません。

美味しく、いただいてから2人で海辺を散歩します。

「千夜、星綺麗だな」

「そうですね。都会ではなかなか見れませんね」

「昔、4人で簡単に作れる望遠鏡を作って星を見たよな」

「――――4人？」

私と士道と琴里ちゃんと……もう1人は誰でしょうか？凜祢は士道の記憶にはいないはずで……

「士道――――」やっと思つけたわ!!」

私の呼び掛けはそう遮られてしまいました。声の方を見ると、琴里ちゃんと十香ちゃん、四糸乃ちゃんに令音さんがいました。

「シドー!千夜!心配したぞ!」

「無事で……良かった……です」

「ヒヤヒヤしたね」

「本っ当に!心配したんだから!反省しなさいよ!士道も千夜姉も!」

琴里ちゃんは随分、オコのようにです。

「悪かったつて、今度から気をつけるから」

「その言葉、忘れないようにね?」

「はははは．．．．．さて、帰ろうぜ。千夜」

「はい」

こうして、私達のサバイバル生活は幕を閉じました。

少女はアイドルの曲を作曲した

久しぶり、パソコンを開いたある日のことでした。

「あれ？知らないアドレスからメールが来ていますね」

私はパソコンはパソコン、スマホはスマホとメールを使い分けて、それぞれの端末でしか見ていなかったたのでパソコンにメールが来ていることに今まで全く気がついてませんでした。

かれこれ、数年開いて無かったのでまずいかと思つたのですが送られてきた日付を見ると1週間前とそこまで経っていませんでした。メール内容は次のようでした。

『千月さん

突然のメールを送り申し訳ありません。私はアイドル、誘宵美九のマネージャーをしている者です。貴女の作曲した曲をウチのアイドルがとても気に入りました是非、曲を作つて欲しいということでメールを送らせて頂きました。返信お待ちしております。

天宮プロダクション アイドル部担当』

作つた曲つて……ああ！3年ぐらい前に作つて投稿していた物ですか！受験前にやめてしまつてそのまま放つたらかしてしたね。千月はその時の投稿者名ですね。

で、アイドル事務所ですか。誘宵美九さんって有名な人なのでしょうか？とりあえず、検索つと……基本的に顔出しをしないアイドル。たまに女性限定ライブをする。今人気のアイドル……どこか不思議な感じの活動仕方ですが、すごい人気ですね。まあ、こんな経験二度と出来なさそうですし受けましようか。

『天宮プロダクション様

メールありがとうございます。お話ですが受けようと考えています。打ち合わせなどは必要ですか？その辺を詳しく教えていただけると嬉しいです。

千月』

こんな物でいいでしょうか？さて、誘宵美九の今までの歌を聞いてみますか。作ってあげてない曲もありますし、雰囲気合えば話し合いの時に持っていきましよう。

彼女の曲をネットで探しヘッドホンをしてスタートとさせます。音楽と共に歌声が響き始めました。

—————あれ？この歌声どこかで……

〳数日後〳

「おお、大っきい……」

私は天宮プロダクションの前に来ています。これ入っていいのでしょうか？会社の前でウロウロしていると女の人に声をかけられました。

「あのおくどうしましたかあ〜？」

「ここ会社のアイドル部に呼ばれたんですけど……入っていいものかと思ひまして」「そおなんですかあ？なら、一緒に行きましようよ〜」

「ここの人なんですか？」

「そおなんですよお〜私、一応これでもアイドルなんですよ」

少し舌足らずな言葉で彼女は言います。確かにいいスタイルしてますね……あれ？

「もしかして、宵待月乃さんよいまちつきのですか？」

「っ!？」

会社に入りエレベーターに乗った後、聞いてみると彼女はビツクと反応した。

「違ったらすみません、もしかしてそうじゃないかって思ひまして……私、彼女のファンだったんです。辞めてしまいましたけど、彼女の歌にはいつも元氣づけられています。私が曲を作ったりしただしたのは彼女の影響なんですよ」

「そう……なんですのお……」

指定され階にエレベーターがつき扉が開きます。そこからは無言で進みます。地雷を踏んでしまいまったか心配になってきました。

しばらくして、扉の前で止まりました。

「お客さんを連れてきましたぁー……えっとお……」

「あつ、千月です。誘宵美九さんの作曲を頼まれて来ました」

「えっ!?!千月さん!?!」

案内してくれたアイドルの子が驚きの声を上げます。そう言えば、この人の名前はなんなんでしょう。

「千月さん、今日は来てくれてありがとうとー……あれ?お姉様と一緒にだったんですね?なら、話は早いです。こちらへお願いします」

マネージャーさんに案内され応接室らしき場所に行きます。案内してくれたアイドルの子と一緒に。まさか……

「あの、もしかして……」

「はぁ〜い。もしかしなくても、私が誘宵美九ですう〜」

案内してくれたアイドルの子はまさかの誘宵美九さん本人でした。

でも、やっぱり宵待月乃さんに似ているな……芸名を変えたのでしょうか?まあ、色々ありましたし触れない方がいいですね。

「はい、千月です。よろしくお願いします」

「ちよつと待つてください。千月さん？本名はなんなんですかあ？」

「えっ？」

「いいじゃないですかあ？これから仲良くしたいです。私は本名なので気軽に姉様って呼んでください。お願い」

「いや、お姉様って呼んだら本名関係ないじゃないですか？」

「……えっ？」

「まあ、いいですけど。魂月千夜です。よろしくお願いします、誘宵さん」

「……」

「誘宵さん？」

「千夜さん？服を脱いでください」

「ちよつと、何言っているんですか!？」

「……ちよつと、外してもらえるかしら」

誘宵さんは急に黙り込んだらマネージャーさんを追い出してしまった。どうしたんでしょうか？

「千夜さん、貴女は一体何者なんですか？」

「何者って……？」

「私の〈破軍歌姫〉の力が効かないなんて、普通の人間にはありえませんか」

えっ？今なんて言いました？ガブリエル？天使？まさか……

慌てて「魂の観測」を使います。普通よりも強い霊力感じます。

「精霊……なんですか？」

「そういう、貴女もでしょ？」

「そうですが……」

まさか、こんな形で他人に露見するとは思っていませんでした。さて、誘宵美九は精霊の識別名は〈ディーヴァ〉半年前に現界したきり現れていない精霊ですね。琴里ちゃんに見せてもらった霊波パターンと一緒だから、多分そうです。

士道たちに知らせるべきでしょうか？いえ、私が口出しすることではありませんね。時崎さんみたいに被害を出している訳ではありませんし、十香ちゃん達みたいにASTに見つかる心配も少なさそうです。大丈夫でしょう。

「まあ、いいですよ。貴女を手に入れるのはまた今度で。それで曲についてですけど」

「すごいこと言いますね……それで、曲のイメージはありますか？あつ、一応誘宵さんの声を聞いて合いそうな曲を数曲ピックアップして持ってきましたけど」

「美九」

「はい？」

「美九と呼んでください」

「なんですか？」

「いいじゃないですかあゝ私は可愛い女の子と仲良くしたいんです」

まさかの、百合っ子!?!土道大ピンチ!?!どうやってデレさせるのですか!?!

「はあ……美九さん、曲聞きますか？」

「はあゝい」

こうして、会議は進み、私はこれからも何回も美九さんの曲を作ることになりました。あと、関係はお友達ということになりました。

「千夜さくん！今日は家に泊まって行きませんかあゝ？」

「貞操が危険な気がするので結構です」

「ああん！いけずうゝ」

少女は誕生日を祝った

誕生日—————

—————人の生まれた日、あるいは、毎年迎える誕生日の記念日のことです。

そして、今日は8月3日。琴里ちゃんの誕生日です。さらに、私の誕生日は8月15日とけっこう近いのです。なので今年は合同で誕生日パーティーをすることになりました。

「ハッピーバースデー!!」

パツパツンつと、クラツカーが弾け中からテープが飛び出します。テーブルの上には土道の作った豪華な料理がぎっしりと並んでいます。

「皆さん、ありがとうございます」

「普通でいいって言ったのに……」

私は素直にお礼を言いますが、琴里ちゃんは相変わらずツンとしています。しかし、嬉しいのがまるで隠せていません。顔をほんのり赤くさせ、頬は少し上がっています。さらにはリボンがピコピコと嬉しそうに動いているのです。——えっ? ちょっと待って、なんで動いているんですか!?

まあ、それは置いて。早速、プレゼントの時間です。

「おめでどう。これはフラクシナスのクルー全員からだ」

「ありがとう。……これが例のスペシャルってやつ？」

「……さて、どうだろうね？」

令音さんが琴里ちゃんにプレゼントを渡します。まあ、中身はホラー映画なんですけどね。計画はバッチリです。なんの計画かというところ……あつ、令音さん。えっ？ 私の分のプレゼント？ フラクシナスのクルーで用意してくれたんですか？ ありがとうございます。中身は？ 自作ゲームですか？ 楽しませてもらいます……計画の説
明はもう後にしましょう。

「琴里！ 千夜！ おめでどうだ！」

「おめでどうございます。琴里さん、千夜お姉ちゃん」

「こんぐらつちゅれーしょーん！」

十香ちゃん、四糸乃ちゃん、よしのんが綺麗にラッピングしたプレゼントを渡してきます。

「みんな、ありがとうございます。あつ、そうだ。はい、琴里ちゃん。私からの誕生日プレゼント」

「あ、ありがとう……それと、千夜姉もおめでどう」

「ありがとうございます」

あくもく可愛いですね！少し照れ視線を外しながら行動する琴里ちゃん。何時もの司令官モードではあまり見れない姿です。

「誕生日おめでとう。琴里、千夜」

「士道もありがとうございます」

「……一応お礼を言つといてあげる」

「はいはい」

「……開けてもいいかしら？」

琴里ちゃんがみんなを見回しながら言います。十香ちゃん、四糸乃ちゃん、よしのんが元気よく頷きます。私も別に構いませんが、令音さんのプレゼントを開けられると計画に支障が……

「琴里、私のプレゼントは、私達は帰った後で開けてくれないか」

「え？そりや構わないけど……」

令音さんナイスです。これで計画はそのまま行けます。

「あー、できれば俺のも、みんなが帰った後に開けてくれないか？」

「士道も？いいけど……何2人して何か企んでるの？」

士道は企んでいると言うより、みんなに見られるのが恥ずかしのでしょうか。まあ、令

音さんはバリバリ企んでますけどね!

「ふうん……まあいいわ。じゃあ、十香と四糸乃と千夜姉のを開けさせてもらうわね」

「じゃあ私も開けますね? あつ、土道?」

「なんだ?」

「私も開けちゃまずいですか?」

「あー、千夜も家に帰ってからでもいいか?」

「まあ、いいですよ」

まあ、ここで私だけいいって言ったら琴里ちゃんもむくれちゃうでしょうし。と、ここで十香ちゃんの我慢の限界が来ました。

「なあシドー、もう食べてもいいのか!」

「ははは………琴里達がプレゼントを開けるまで待とうな?」

「む! そうか、そういうものなのか。すまん琴里、千夜、無礼をした」

「いいわよ。先に食べちゃって」

「私も構いませんよ」

「いいのか!」

「ええ」

「はい」

「おお！ではいいいただきますだ！」

そう言つて、十香ちゃんは元気よく手を合わせました。

それから数時間、みんなで遊びお開きになりそれぞれの家へ帰つていきました。

さて、ここからが本番です。私は家にプレゼントだけ置いてフラクシナスに向います。

今からする計画は素直になれない琴里ちゃんにたまには大好きな土道に甘えさせようというものです。

「状況はどうだい？」

令音さんと共に艦橋に入り、前方のモニタに注視します。

どうやら、フラクシナスのクルー達のプレゼントのホラー映画を見だしたようです。

「あれ？琴里ちゃん白リボンになつてますね？」

「どうやら、黒い方を汚してしまつたようです。にしても、幸運でした。まさかあんなタイムリングでリボンを変えてくれるとは。まさに、天が後押ししてくれるとしか思えない

「通信が来たみたいだ……」

「なるほど……こつちに逃げる作戦ですか。そうは、させませんよ。令音さん転移装置の不調かなんかで転移出来ないと伝えてください」

「了解した」

『……も、もしもし！いつかことりともうしますが、むらさめさんのおたくですか！?』

か、可愛い……っ！

『あ、令音！今すぐ拾っ「済まないが、転移装置が不調だね。明日の朝までは使えそうにないんだ」……えっ?』

令音さん！タイムング早すぎです！ちゃんと聞いてから返答しないと怪しまれますよ！……と、動きがありましたね。琴里ちゃんはトイレに行きたいようですが怖くて行けないみたいです。

『お、おまる持つてきて……っ！ここでするううっ!』

『ば、馬鹿！ていうかそんなモンうちにあるわけねえだろ!』

『じゃ、じゃあオムツでもいいから！助けてムーニーマーンっ!』

琴里ちゃんはムーニーマーンですか。私はパンパスでしたね。ってそんな場合じゃないですよ！けっこうピンチじゃないですか？あれ？神無月さんは？

『こんばんは。お届け物です』

何やってるんですか、あの人は？

『なんなんだコレは？……』

士道が神無月さんが運んだダンボールを開けると、中からはアヒル型のおまると紙オムツでした。

何やってるんですか!?あの変態は!?

一瞬、おまるを使いそうになりましたが士道と一緒にトイレに入り一難を去りました。

その後、士道と一緒に風呂入ったり一緒に布団で寝たりして存分に甘えているようでした。良かったです。

あつ、もちろんお風呂シーンは男性陣には退去してもらいましたし。神無月さんは締め上げておきました。でも、喜んでたな……あの変態^人。

「さて、私もそろそろ寝ましょうか……あつ、まだ士道のプレゼント開けてませんでしたね」

士道のプレゼントの包装紙を綺麗に剥がしていきます。

「さて、士道のプレゼントは……ネックレス？」

星と月の型に藍色の宝石あしらわれたネックレスでした。

「士道、ありがとうございます。大切にしますね？」

私はそこには居ない少年に語りかけるように声を漏らしました。

自然と微笑みが零れているのを少女自身は気づかなかっただろう。

少女は灯籠を燃え上がらせた

8月15日。私の誕生日でもあり、そして世間一般的でお盆とされる日です。

今日は灯籠流しを土道と一緒に行く事になっています。何故か十香ちゃん達を誘ったのに断られました。何かに琴里ちゃんが手回ししているような感じてはたけど、まあ気にしないでおきましょう。

「土道、お待たせしました」

「いや、大丈夫だ。俺も今来たところだからな」

「では、行きましょうか」

土道と会場を目指して歩き始めます。今日は灯籠流し、お盆の送り火をしに行きません。本当はおじいちゃんと来る予定でしたが急遽仕事の予定が入り行けなくなりました。1人で夜遅くに出発したら危ないとおじいちゃんが行かせてくれなかったので、土道に頼んで一緒に来てもらいました。あまり記憶ないとはいえ、しっかりと父親と母親の見送りはしたいですね。

「ち、千夜。そのネックレス付けてくれたんだな。似合ってるぞ」

「えっ? ああ、はい。ありがとうございます。土道からのアクセサリーのプレゼントは

初めてですし大切にしますね」

「お、おう」

土道なんだか変な感じですね？挙動不審って感じで……どうしたんでしょか？もしかして……」

「本当は今日は忙しかったですか？それならごめんなさい」

「いや、別に予定は何も無かったぞ」

「それなら、十香ちゃん達と来たかったのですか？」

「ちよ、ちよつと待て！どうしたんだ急に！」

「いえ、土道がどこか変でしたので。そういう事かと思ひまして」

「いや、俺は千夜と来たかったから来てるんだ気にするなよ」

「そうですね？なら、いいんですが」

そこで、会話は途切れてしまい沈黙が続きました。

「そ、そう言えば！俺がアクセサリーをプレゼントするの初めてじゃないぞ？5年前、ロケットをプレゼントしただろ？」

「ロケット？土道、小学生がそんな物買えるわけがないじゃないですか………宇宙にでも行きたいのですか？」

「そつちのロケットじゃねえよ！アクセサリーって言っただろ？」

「ああ、ありましたね。何で忘れていたんでしよう。今度、探してみますね？」
 会場に着いたため、灯籠の準備をします。

5年前————本当に何があったんでしようね？両親が死んで大火災が起きてと部分的な事しか思い出せません。そういえば、私はロケットの中に何を入れていたんでしょうか？

『やーちゃん』

また、ですか……

頭の中で再生される声。それには聞き覚えがありました。前におじいちゃんの家で思い出すよりずっと前に。でも、私は『やーちゃん』そう呼ばれていた記憶は無いのです。今は呼ばれるとしたら『ちーちゃん』ですし。

「ちよつと！千夜！燃えてる燃えてる！」

「えっ？————つきやつ!？」

考え事をしていたせいか灯籠に火をつけるのを失敗し灯籠が燃えていました。

慌てて、手を離します。灯籠は燃え上がり崩れていききました。

そして何故かその様子を見てから、頭が痛み始めます。

————火————燃える————崩れる————誰かの声————衝

撃————

何なんでしょうか……これは……

私の疑問と不安は解消されることはなく。灯籠は炭となりました。

く士道視点く

「千夜が精霊の可能性がある!?!」

琴里から告げられた事に驚きの声が上がってしまう。

「なんで、そうなるんだよ?」

「この前の遭難した時のことを覚えてる?」

「ああ」

八丈島からの帰りに海に落ちて遭難したのはまだ新しい記憶だ。その時は千夜も一緒に遭難した。

「その時なんだけどね霊波を感知したの」

「それは……」

「まあ、これだけじゃ千夜姉が精霊だと言うのには弱い。でも、観測された霊波はヘリーパーのものだったの。ヘリーパーが千夜姉と同時に現れたことは無いし、他にも色々

不審な点がある。だから確認のために少し揺さぶりをかけたいの」

「どうするんだ？」

「土道。千夜姉とデートしなさい」

「はあ!？」

「丁度いいことに、さつき千夜姉から電話があつてね。灯笼流しに行くのに土道を貸してくれないかってー。土道、もう一度言うわ。千夜姉とデートして千夜姉が精霊じゃないか確認しなさい」

「と、言われてもな……」

千夜より先に集合場所につきひとり眩く。しばらくすると千夜が集合場所に小走りできた。時間はまだ早めだ。

「土道、お待たせしました」

「いや、大丈夫だ。俺も今来たところだからな」

「では、行きましょうか」

このやり取りは十香達とよくやっているためかスムーズに言葉が出た。さて、ここか

らどうするか。

『ちよつと、土道？何時もなら服装を褒めたりするでしょうが。シャキツとしなさい』
インカムから妹様のお小言が飛んでくる。

「ち、千夜。そのネックレス付けてくれたんだな。似合ってるぞ」

「えっ？ああ、はい。ありがとうございます。土道からのアクセサリーのプレゼントは初めてですし大切にしますね」

「お、おう」

不覚にもドツキとしてしまった。そう言えば千夜とこんな風に出かけることは少なかったな。それに、忘れがちだけど千夜も十香達と同じぐらい美人だし、どうしても転校する前の時のイメージがあるから変な感じがする。

「本当は今日は忙しかったですか？それならごめんなさい」

「いや、別に予定は何も無かったぞ」

「それなら、十香ちゃん達と来たかったですか？」

「ちよ、ちよつと待て！どうしたんだ急に！」

「いえ、土道がどこか変でしたので。そういう事かと思ひまして」

「いや、俺は千夜と来たかったから来てるんだ気にするなよ」

「そうですか？なら、いいんですが」

『何やってるのよ、士道！不安にさせてるんじゃないわよ。早く話を繋げなさい』

琴里に催促されて会話の内容を探す。そして、ぱつと思いついたことを口にした。

「そ、そう言えば！俺がアクセサリーをプレゼントするの初めてじゃないぞ？5年前、ロケットをプレゼントしただろ？」

「ロケット？士道、小学生がそんな物買えるわけがないじゃないですか……宇宙にでも行きたいのですか？」

「そつちのロケットじゃねえよ！アクセサリーって言っただろ？」

「ああ、ありましたね。何で忘れていたんでしょう。今度、探してみますね？」

千夜はそう言い、灯籠を流す準備を始めた。ロケットを渡したのは5年前だし残っているとは思えないが……

たしか、あの時はアイツの両親の写真と琴里抜きで3人撮った写真を入れていたっけ？

考え事をやめて、ふと千夜に視線を戻すと灯籠が燃え上がっていた。

「ちよつと！千夜！燃えてる燃えてる！」

「えっ？……きやつ!？」

千夜は慌てて灯籠を手放し、灯籠は地面に落ちて燃え上がり炭となった。

俺には灯籠を見つめる千夜の目が何時もと違って、何かに怯えているように見えた。

少女は他の人と間違えられた

ついに来ました、イギリス！

私は観光名所を周りまくり、美味しい食べ物を食べて、イギリスを満喫する———はずでした。

「Are you listening? You also got out of the meeting does you understand your position ! ?」

「そ、ソーリー」

何故か私は、黒塗りのリムジンの中で白髪のお姉さんに叱られていました。何言っているか聞き取れません
いつたい何故こうなったのでしょうか

（数分前）

お爺ちゃん、一緒に空港まで来ましたがお爺ちゃんは仕事の方へ行くみたいで、私は自由行動になりました。

楽しもうと思つた矢先、ある問題に気が付きました。

「私は英語出来ないですよ……」

お爺ちゃん！助けてください。まあ、最近は便利な世の中になってスマホの翻訳機能を使えば、ある程度は意思疎通出来るものです。

言語はこれどころにかなりましたね。よし、早速土道達にお土産を買つていきましよう。あつ、今いくら持つているんでしたっけ？

ふと、気になった為、お爺ちゃんに渡された財布を開きます。そこで、新たな問題が発生しました。

日本円じゃないじゃないですか……

お爺ちゃん、なにやっているんですか！ボケているんですか！歳ですし、しょうがないですね！（やけくそ）

こうなつたら、電話をかけてー……あつ……

電話をかけようとスマホを取り出しますが、手を滑らしてスマホを落としてしまいました。スマホは器用に転がっていき用水路に落下しました。

「……h」

スマホを拾い上げ電源を付けようと思いますが、ビクともしません。

1人で、知らない土地で、言葉が通じなくて、無一文・・・あれ？これ詰んでませんか？ いや、諦めたらそこで試合終了って言いますし諦めませんよ！

そう、1歩踏み出した瞬間、黒塗りのリムジンが目の前に止まりました。中から黒いスーツを着てサングラスをかけたお姉さんと屈強そうな男が2人降りてきて私を囲むように立ちます。

あつ、ここ邪魔ですよね？私、ちよつと退きますね。

その場から移動しようと思いますが首根っこを掴まれて止められました。

あつ、やつぱり私なんです。もういいです、諦めました。試合終了でいいです。

「I finally found you Well, we will return soon」

「あ、アイ ドント ハブ マネー」

「What are you saying? We will return to the company」

「あつ、ちよつと待って！ウエイト！ウエイト！」

ーーーーこうして、今に至るわけです。本当に誰か助けて下さい！

そう、願うと白髪のお姉さんのスマホが音楽を流しながら電話の着信を知らせまし

てもらいました。

「ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ、ありがとうございます。えつと……」

「あつ、魂月です。魂月千夜です。エレンさん」

「魂月？……いえ、それでは、魂月さん」

「はい」

私たちはそこで別れました。

「魂月……いえ、まさか……」

最後のエレンさんの眩きは私の耳には届きませんでした。

死神は煩惱の多い修道女を助けた

イギリス旅行2日目。

今日は昨日の反省を活かしてお爺ちゃんについて行くことにしました。移動の合間に色々見る予定です。

そして来ました、DEM社本部！……なんで？

お爺ちゃんの仕事って本当に何なんでしょう？聞いてもはぐらかされてしまますし……

さて、流石に正体がバレていないといえ敵陣のど真ん中には突っ込んでいく勇氣はありません。お爺ちゃんを見送って近くでのんびりしようと考えていましたが、ある事がきっかけでそれは中止となりました。

これは……霊力？精霊が近くにいるのでしょうか？えつと位置は……あれ？DEM社の中？もしかしなくても、捕まっています？いや、早まっではいけません。霊力が発生する兵器かも知れませんし、ここは琴里ちゃんに聞きましよう。

復活したスマホから日本にいる琴里ちゃんに電話をかけます。数コール待つと琴里ちゃんが電話に出ました。

「もしもし、琴里ちゃん？」

『千夜姉？どうしたの？今はイギリスでしょ？』

「琴里ちゃんの方も旅行でしたっけ？それより、聞きたいことがありますて……」

『聞きたいこと？』

「ASTとかが使っている兵器って霊力や霊波を出すものってありますか？」

『無いわよ？それが、どうかしたの？』

「いえ、気になっただけです。それと、もう一つ精霊が海外、つまり日本以外にいる可能性はありますか？」

『そっちは、充分可能性があるわ。……本当に大丈夫？何かあったの？こっちから応援が必要かしら？申し訳ないんだけどこっちもこっちでかなり精一杯なのよ。士道をまともな感性に戻さないといけないし……』

「大丈夫ですよ、ありがとうございます。お土産期待しておいてください。あと、士道の矯正を頑張ってください」

『ええ、それじゃあ』

通話を終えてDEM社の方へ向き直ります。確かに感じる霊力、やはり精霊がいるのでしょうか？捕まっているとしたら大変ですね。よし、探しに行きましょう。

私はDEM社の本社近くの研究所へ向かいました。

見つからないように気をつけながら進むこと数分後、扉の前まで来ることが出来ました。まさか、地下まであるとは……

さて、この先から霊力を感じますね。人がいたら厄介ですが——

「正面突破で行きましょう」

霊力を最大まで溜め込み……一気に放つ!!

ドゴオンツ!!

大きな音をたてながら扉が凹みます。

破れないって、この扉、硬すぎませんか？よし、早くしないと社員が来ちゃいますし急いで壊しましょう。

その後、何度も斬り付けると扉が吹き飛び中に入ることが出来ました。中にはショートカットの灰色の髪の少……女？、年？骨格的に女でしょうか、がいました。

「うん？……流石に死神がお迎えに来てるなんて笑えないな……」

少し気だるそうにこちらを見ながら起き上がり少女はそう呟いた。

「貴女は精霊で間違いありませんね？」

「そうだよ。それで君は？まさか本当に天国への導きだったりしないよね？」

「私は—————「まつ、いいや調べれば分かるし」—————え？」

そして、少女はこちらの話を聞かずに天使を召喚しました。

「〈囁告篇帙〉^{ラジエル}」

天使と霊装が展開される。黒い聖書のような浮かぶ本が現れ、身にまとっていた服は修道女のような服装になった。

「ほーほーふむふむ……………なるほど……………」

「あ、あの〜」

「ああ、ごめんごめん。お待たせしたね—————魂月千夜ちゃん？」

「—————っ!!？」

「あく、驚かせちゃったね。これは私の天使、〈囁告篇帙〉^{ラジエル}の能力でね。言うなれば超々高性能検索エンジンみたいなものだよ。それで、君の事を調べさせてもらったのさ」

何その能力、個人情報ダダ漏れじゃないですか。

そんな事を話していると、数人の足音が聞こえました。あれだけ大きな音をたてていればしょうが無いでしょうが……………

「早く逃げますよ—————えっと……………」

「二亜。本条二亜^{ほんじょうにあ}だよ。よろしく、タマちゃん」

「タマ……ちゃん……?」

「魂月だからタマちゃん。ダメだった?」

「その……結婚できない先生と被るので変えていただけると……」

「じゃあ、ちーちゃんはどう?」

「まあ、それなら。行きますよ本条さん」

「了解」

しばらく、逃げ続けて追っ手をまくことが出来ました。

「いや、助かったよ。ちーちゃん、ありがとう」

「いえ、たまたま見つけただけですから」

「よし！これで今年はコミコに参加できるぞ！」

「へー参加するんですか?」

「これでも、そこそのマンガ家なんだよ?本条蒼二つて聞いたことない?」

「えっ!? SILVER・BREATHの!?」

「おっ！知ってくれてる?嬉しいね」

その後、アニメ・漫画トークをしばらくしました。すっかり打ち解け合い私は彼女の事を二亜さんと下の名前で呼ぶぐらい仲良くなりました。残念ながら、お爺ちゃんから仕事が終わったと電話があったた為そこでお開きになりました。

「これ、私の電話番号です。何かあったらかけてください」

「分かったよ。またね、ちーちゃん」

「では二亜さん、またー」

私は二亜さんと別れて、お爺ちゃんの元へ向かいました。

「ちーちゃん……それに、五河士道か……日本に帰ってある程度片付いたら、ちよつかいかけてもいいかもねー」

「あれ？エレン？どうしたの？そんな怖い顔して？」

「第2の精霊に逃げられました」

「えっ？本当に？やっちゃったじゃん。何やってんの、エレン」

「元はと言えば貴女が昨日出歩いたせいで予定が狂ったんでしよう!!」

「おっと、危ない。世界最強は伊達じゃないね。でも、なんかその日は、外に行けば素敵

な出会いがある感じがしたんだ。——なんにも無かったけどね」

「はあ、貴女が彼女ぐらい真面目だったら良かったのに。顔も苗字も一緒なのに何故ここまで違うんでしようか……」

「エーレーナー！疲れたー！もう休憩しよー」

「貴女は少しは真面目にやったらどうですか？そしたら、貴女が世界最強になる可能性だっておおいにあるのに……」

「別に今のままでも精霊は殺せるレベルだし。つまんないもん」

「はあ……いいから、続きをしますよ」

「え〜」

少女は夏祭りを楽しんだ

今日は待ちに待った夏祭りです。本当は土道たちと行きたかったのですが、今日は土道は四糸乃ちゃんとデートらしいです。残念ですが、四糸乃ちゃん頑張って下さい!!

さて、私たちは私たちで楽しみましょう。私と十香ちゃん、あと引率の令音さんでまわります。琴里ちゃんはフラクシナスで屋台を出すそうので一緒には回れませんでした。が後で会いに行きましょう。

十香ちゃんは夏祭りは初めてみたいで食べ物だけでなく、お面やヨーヨー釣り、輪投げにも興味深々と言った感じでした。気がつくとお面、手には焼きそば、たこ焼き、フランクフルト、焼きイカ、リンゴ飴、綿あめ、ヨーヨーとかなり満喫している感じですよ。土道がないので不機嫌になると思いましたが、大丈夫そうですね。

あつ、かき氷屋がありますね。あのシロップって全部味は一緒なんですよね……。確か匂いが違うだけのはずですよ。あと、頭が痛くなるのは空気を含んだ氷を削って作っているものだけと言うのも聞いたことがあります。本当なんでしょうか？

さて、他には何かあるでしょうか。あつ、あれは型抜きですね。決められた型を抜く事で景品が貰える物です。なかなか難しいんですね、あれ。えっと、賞金は傘は20

0円、花は500円——リードドラゴン、3万円!?

一体どんなのでしょうか? ちょうどやっている2人組がいますね。顔が似ているので、双子でしょうか?

「くくく、夕弦よ。私の完璧で精巧な腕パーフェクト・アームによって生み出された菓子スイーツの龍ドラゴンよりも貴様に優れたドラゴンが作れるのか? まあ、無理であろうな」

「否定。私のドラゴンの方が細部までこだわって彫ってあります。耶俱矢のは顔の作りが不細工です」

「なにおー!?!」

いや、どっちもレベル高いですね……どうやったら、そんな3Dのドラゴンが掘れるんですか。私には無理そうですし、次行きましょう。

「千夜! あれはなんだ!?!」

「あれは……金魚すくいですね」

「あの金魚とやらは食べれるのか?」

「食べれなくはないですが、あんまり美味しくないそうですよ? それに、普通はペットとして扱うものです」

「そうなのか」

「お嬢さん達、やっていくか?」

「いえ、けつこうですよ」

屋台のおじさんに声をかけられますが断ります。

「そうか、それがお嬢さん達の選択か」

「どういうこと……あれ？金魚救い？」

「おうよ！水槽を見てみな！」

「水槽？……えっ!？」

私は水槽の中を覗き込むとそこに居た生物に驚愕しました。無数の金魚の中に肉食魚が一匹混ざっているのです。

「なんて奴と金魚を一緒にしてるんですか!!」

「さあ、お嬢さん達！このポイで金魚をすくって救うか？それともピラニアをすくって金魚を救うか？はたまた、見捨てるか？」

「金魚さん！逃げて！超逃げて!!」

「なあ、千夜そのぴらにあとやらは美味しいのか？」

「えっ？まあ、金魚よりは美味しいですし、普通に食べられますよ」

「よし、ならば私がやろう！」

十香ちゃんはおじさんからポイを受け取ります。じつと、ピラニアを見つめポイを水平に滑らします。ポイはピラニアに直撃しピラニアは水槽外に吹き飛ばされていきま

した。

「よし！取れたぞ！」

「酷いとり方ですけどね……」

「ピラニアを恐れないとは……やるな嬢ちゃん。俺の負けだぜ」

「なんの勝負ですか!?!」

金魚救い屋を後にし移動をします。ちなみにピラニアは令音がフラクシナスに送り
ました。

しばらく、歩くと聞きなれた声が聞こえてきました。

「おーい、十香！千夜！」

「ぬ？おお！士道に四系乃では、な、い、かー！ー！ー！」

十香ちゃんは何か思い出したかのようにお面をかぶり令音さんの後ろに隠れました。

「十香？どうしたんだ？」

「士道？今あなたは何をしているんですか？」

「えっ？なんだよ千夜？そんなに怒った声を出して……四系乃とデートだけど」

「なら、他の子よりも四系乃ちゃんを優先してあげてくださいよ！邪魔しないように
した十香ちゃんの方が立派ですよ？士道はもう少しデリカシーを持ちましょう」

「うっ！確かに……悪かったな、四系乃」

「いえ、私は大丈夫です」

「それじゃあな、十香もありがとうな」

「ふ、ふははは！十香？誰だそれは。私の名はきなこパンマン！お腹が減った子にきな粉をまぶすスーパーヒーローだ！」

十香ちゃんが暴走した!?お腹空いた子にきなこパンをあげるんじゃないかって、きな粉をまぶすの!?ヒーローより怪人よりになってますよ！

士道と四糸乃ちゃんがその場から去って行って少しすると折紙さんが士道の方へ向けて行こうとしました。十香ちゃんは四糸乃ちゃんのデートを邪魔させまいと引き止めます。

そして、令音さんの提案により射的で決着をつけることになりました。最初は渋っていた折紙さんですが、令音さんの説得編りにより見事勝負に乗ってきました。

さて、肝心の射的の射的ですが————

「————あふう!!」

————ほんとうに何をやっているんですか、神無こ月変さんは？

的は、半裸の神無変月應さんでした。フラクシナスの屋台ですよね？ついに、クルーも狂いましたか？いや、既におかしい人ばかりでしたね。

「ウホッ!!」

「……令音さん」

「なんだい？」

「途中でゲットしてきた電動のエアガンあるんですけどあれに撃つていいですか？」

「千夜、気持ちは分からなくもないがルール違反だ。それは認められない」

そんなこんなで、十香ちゃんと折紙さんの射的勝負を見ていました。結果は折紙さんの圧勝でしょうね。折紙さんは的確に股間100点ばかりを狙っていますし、確実に当てています。十香ちゃんは「……まあ、精霊の時は剣を使っていましたししようがないでしょう。」

勝負の終盤に差し掛かった所で急に雨が降って来ました。この雨……四糸乃ちゃんの力ですね。土道が何かしたのでしょうか？この雨じゃ花火は中止でしょうか……：そう言えば四糸乃ちゃん花火楽しみにしてましたね「……よし！四糸乃ちゃんのお姉ちゃん、魂月千夜！雲を吹き飛ばします！」

「〈靈魂看守〉「……それっ!!」

山奥に移動して天使を解放し、靈力を貯めて雲にぶつけます。雲は一気に散り直ぐに雨は止みました。これで、四糸乃ちゃんが花火が見れますね。

「ヘリーパー」発見！戦闘を開始します！」

ご苦労さまです！ASTの皆さん！今回は早すぎませんか？えっ？本当はヘベルセル

クレを感じました？私、巻き込まれてるじゃないですか！
こうして、私はろくに花火を見ることは出来なかつた。でも、四糸乃ちゃんが笑顔ならOKです。

八舞テンペスト

少女は或美島に修学旅行で向かった

今日から修学旅行です。何故か沖縄だったのに或美島になりました。どこかの旅行会社が観光PRのために旅行費全部持つという破格の条件を学校に出したそうです。

そして、驚くことにエレンさんと再会しました。先生から、旅行会社から派遣されたカメラマンと言うカタチで紹介されました。

ちなみに、このカメラマンという言葉ですが、日本では間違っって使われています。日本で言うカメラマンは英語ではフォトグラファーです。

英語で言うカメラマンはTVスタジオなどでカメラを操作している人たちの事なのです。

通常の一眼カメラなどで写真を撮影する人のことは、国際社会ではカメラマンとは呼ばなくて、フォトグラファーと呼ぶのが常識だそうです。

あちらは、まだ気がついてないようですが、あとで声をかけましょう。

「また謀ったな鳶一折紙!!こちらの席は景色が遠いではないか!!貴様知っていたな!!」
「座席の希望を出さないあなたが悪い」

「ぐぬ〜！」

前の席の十香ちゃんと折紙さんが土道を挟んで言い合いを始めました。土道、眠たそうにしましたけどあれじゃあ寝れませんね。

タマちゃん先生がキャビンアテンダントさんに謝ってますし、キャビンアテンダントさんは苦笑いしてます。

「土道、見て、雲が絨毯のよう」

「ジュータンなら通路にも敷いてあるぞ！ほら、見るのだシドー!!」

「少し寝かせてくれないか・・・」

——パシャ

フラッシュと共に土道が写真に撮られます。エレンさんです。

「突然失礼しました。でも、とてもいい表情が撮れましたよ」

「あ、はあ・・・?」

エレンさんはそのまま席に戻って行きました。その間、十香ちゃんは土道にエレンさんの事を聞いていました。さては、先程の先生の説明を聞いてませんでしたね。

あつ、あいまみーコンビがエレンさんの方に行きましたね。

「うわあ〜！すごいカメラ！」

「高いんでしょう？コレ。うん10万とか！」

「マジ引くわー」

あのコンビ凄いですね。あの、クールな感じのエレンさんが戸惑っています。

「3人とも落ち着いて下さい。エレンさんが困っていますよ」

「あ、貴女はっ……!」

「お久しぶりです、エレンさん。その節はお世話になりました」

「なにになに? 2人は知り合いなの!」

「どゆうこと!」

「マジ引くわー!」

「それは……『当機はまもなく最終の着陸体制に入ります』……つと、席に戻らないといけませんね。では、また後で」

私は、3人組を席に追いやって、エレンさん一言声をかけて自分の席に戻り3日月型の或美島を視線を落としました。

最初は資料館の見学……って、あれ? 土道と十香ちゃんは?

気がつくくと2人の姿が消えていました。はぐれたのでしょうか?

仕方がありませんね。靈力を探ってみますか……あれ？他の靈力を感じる……つて！これは、精霊！

士道達の近くに新しい精霊がいるみたいですね……本当に士道いる所に精霊ありですね。さて、何故か同じ靈力の精霊が2人いるみたいですし、急いで向かいましょう。

士道達の元へ駆け足で向かいます。士道達に近づけば近づくほど風が強くなってきました。精霊のせいでしょうか？

そして、士道達の元に着いた時そこに居たのは、士道の両サイドに腕を組みながらくっついている顔のそっくりな2人の精霊と、そんな2人に戸惑っている士道、何故か目を回している十香ちゃんでした。

「士道？これは一体どういう状況なのですか？」

「いや、俺にもわからん……」

こうして、私達の修学旅行は2人の精霊と共に始まりました。

少女は枕投げで大暴れした

さて、双子の精霊ですが転校生という事で皆の中に無理やりねじ込みました。こうでもしないと一緒に行動していたら変ですもんね。

この、2人ですが元々は1人の精霊だったらしいです。しかし、2人に別れた時に、その人格は既に消えていて、元に戻るとどちらかの人格が消えてしまう。そのため、人格を残す方を決めるために勝負をしているらしいです。そう令音さんに聞きました。あれ？おかしいですね・・・時崎さんの言い分では精霊は元人間のはずです。まあ、どうせ土道が封印するでしょうし深くは考えないでおきましょう。

そう言えば、これが最後の戦いつて言っていましたね。勝負内容はなんなんでしょうか？ーーーえっ？土道を落としたほうの勝ち？

・・・これは、また面倒なことになりましたね。まあ、土道の健闘を祈りましょう。

で、私の役割ですが十香ちゃんと折紙さんの妨害ですか・・・何故か無謀な気がします。考えただけで頭が痛くなってきました・・・こういう時は、お風呂に入つてスッキリしましょう。

私は、女と書かれた赤い暖簾の方へ入ります。

ここは露天風呂らしいので楽しみです。あれ？もう入っている人がいますね、服がありません。誰でしょうか？一番風呂出ないのは少し残念ですが、さて行きましようか。さて、いるのは誰か——

「「あつ………」」

「え？」

そこに居たのは2人の精霊、耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃん、そして——

「ち、千夜っ!？」

——土道でした。

私はすぐにタオルで体を隠します。前に1度お風呂に入っていますがあの時はバスタオルを巻いていましたが今回は違います。完全に裸、一糸まとわぬ姿を見せてしまいました。

「わっ、悪い千夜! って、なんで千夜が男湯に!？」

「ここは女湯ですよ？五河土道さん？」

「はっ!まさかお前ら!」

「うむ、土道が入る前に暖簾を入れ替えておいた」

「補足。入ってから元に戻しました」

「我らが男湯など入るわけなからう」

「で？話は終わりましたか？辞世の句は読み終わりましたか？」

「いや、違うんだ！俺は騙されただけで」

「いいから早く出て行つてください！」

「すつ、すまんっ！」

しかし、タイミング悪く土道が湯船から上がった瞬間に脱衣所の扉が開きました。奥から十香ちゃん、折紙さん、あいまいみーコンビが入ってきます。

「土道早く後に隠れてください！死にますよ、物理的にも社会的にも」

「お、おう」

土道の逃走ルートはどうしましょう。脱衣場はもう無理でしょうし、どこか……

どこか……

「あっ」

他の人にバレないように土道を隠しながら後ろに下がっていくうちに土道とぶつかりました。

土道はそのまま、崖から落ちていきました。……すみません、土道。着替えはこちらで回収しておきます。

お風呂を終えたあと、土道の服を届け部屋に戻ります。

今日は、本当に色々あり過ぎて疲れました。部屋でゆっくりしましょう。

そう思い、部屋に入った瞬間、私の顔に枕が衝突しました。

「「「あつ………」」」

私に枕がクリーンヒットしたのを見て枕投げをしていた同級生達が固まります。

本当に疲れている時になんでこうなるんですか。私の邪魔をして楽しいですか？

はぁ—————

「—————よろしい、ならばクリークです！」

枕を拾い投げ1人につつけます。ぶつけられた少女はひっくり返り倒れました。

「まず1人」

「両軍、一時協力体制をとる。目標、千夜ちゃん！いけっえー！」

「「「わっー！」」」

私に向かつて一斉に枕が投げられるが全てたたき落とすか躲した。躲した枕は他に被弾し、叩き落とした枕もすぐさま投げます。場はどんどんと乱戦状態になり最終的にはエレンさんも巻き込んだものになりました。

い。あつ、土道はどうなったんでしようか？まあ、今日は疲れましたし、おやすみなさー

少女はビーチバレーをした

さて、今日はビーチで自由時間です。土道と耶俱矢ちゃんも夕弦ちゃんは少し離れたプライベートビーチで遊んでいます。

案の定、十香ちゃんと折紙さんは土道を探しているようですが、さすがに見つからないでしょう。プライベートビーチまで0.8キロもあるんですから。

「おおっ！あんな所にいたのかー」

嘘ん!?土道見つかったの!?!凄いですね。おっと、連絡を入れておきましょう。スマホを操作しメールを飛ばします。さて、私もついて行きますか。

意味にはいる途中、エレンさんが土に埋まつてきた気がしますが気にしないでおきましょう。

土道達の元へ行くと既に2人がいました。十香ちゃん達には、道に迷っていたと言っていました。それが納得するのは十香ちゃんぐらいでしょうね。

耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃんは既に十香ちゃん、折紙さんと知り合い?になっいてあまり話はいじれませんでした。

十香ちゃん達が来たことで計画を変更することになり、ビーチバレーをすることに

なった。くじを引きチームを分けます。

「グレゴール、ジャクソン、スペンサーがこちら。アレクサンドル、エイブラハム、アンソニーが向こうのコートだ」

どれがどれでしょう？理解できる人いるんでしょうか？

結局、私、十香ちゃん、折紙さんチームと土道、耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃんチームになりました。ちなみに聞いたところ私はスペンサーでした。

ビーチバレーは着々と進みます。耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんはケンカをしながらでチームワークがまるでないです。

そこで、十香ちゃん達もこんな物かと言った感じで言いました。

「ふっ、なんだ？耶俱矢も夕弦も大したことないな」

「期待はずれ。この程度で私たちに挑もうなんて身の程知らず」

その言葉に耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんが反応します。それを見た令音さんが十香ちゃんと折紙さんに告げ口をしました。

「もつと口汚く、本場ではそうやるんだ」

いや、うそを教えないでくださいよ。

「耶俱矢は弱虫で、夕弦は下手つぴーなのだ。2人合わせてへっほこぴーだな」
へっほこぴーって可愛いですね。

「この××。お互いの××つてればいい。敗者にはそれがお似合い」

口悪すぎです。載せられない単語を言わないでください！

しかし、その言葉で火がついたようで耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんは見事なコンビネーションで点を奪い返してきました。さすが双子です。ね息ピツタリです。

それにしても、さつきら思っていたのですがー

ドコンツ!!!

バコンツ!!!

ベツコツ!!!

ドカーンツ!!!

ー

紙さんはよくついてきてますね。精霊組は分かりませんが折

紙さんはよくついてきてますね。破れないんでしょうか？あんな衝撃をくらったら普通破れますよ。

その後、なんやかんやでビーチバレーは進んで行きました。

死神は世界最強の魔術師と戦った

夕日が沈み始め、みんなが戻ります。そんな中、士道は微妙な顔をしていました。

「士道？どうかしましたか？」

「えっ？……いや、大丈夫だ」

「大丈夫な顔ではないですよ、その顔は。どうせ、耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんの事ですよ？ 私でいいなら相談に乗りますよ？」

「千夜にはお見通しか……それじゃあ、頼む」

「任せました」

2人で浜辺を歩きながら話します。そして、耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんがお互い自分じゃ無い方を選んで欲しいと士道に伝えたことを聞きます。

「なるほど、喧嘩している割にはビーチバレーで息ピッタリでしたし、とても仲良さそうに見えたのにも納得がいきますね」

「千夜……俺はどうすればいいんだ？あの2人は、耶俱矢と夕弦はお互いを生かす為に自分が消えようと考えている。そんなの悲しすぎるだろ。俺はどちらかなんて選べない、2人もと消えて欲しくないんだ」

お互いがお互いの事を思つて消えようとしている。なんとも皮肉なものです。土道は消えるほうを、残るほうを選ぶ事を託されています。どっちを選んだところで恨まれるでしょうし、土道自身がそれを良しとしないでしょう。

「……別にならぬかを選ぶ必要はないのでは無いのでしょうか？」
「えっ？」

「選択肢がないなら作ればいいのです。ありますよね？土道にしか選べない選択肢が。それに土道は自分で今、言つたじゃないですか……2人とも消したくないって。つまり、2人とも助けたいんでしょ？なら、もうやることは決まっているじゃないですか。相手は精霊です、土道がやるべき事は1つだけ、それは……」

「……デートしてデレさせる……っ！」
キツそうな顔から、何時ものような顔に戻ってきました。これでもう大丈夫ですね。
「そうです、正解です。なんですか、ちゃんと分かっているじゃないですか。……もう、大丈夫ですね？」

「ああ、ありがたいな千夜。そうだな、俺は何を迷っていたんだ。俺がやる事は2人をデレさせて霊力を封印すること。そして、2人とも救う事だ。俺は、あんなに仲がいい2人にお互いのために身をけずって欲しくない」

「それでこそ土道です。頑張ってくださいね」

「ああ、千夜。ありがとうな、俺に選択肢をくれて」

「いいですよ。選んだのは士道です。さて、戻りましょう」

私たちは、ホテルに向けて歩き始めました。

士道は失敗したようですね。外で同じ霊力がぶつかり合うのを感じます。十香ちゃんも霊力を解放して誰かと戦っているみたいです。

でも、ここで諦めるあなたでは無いですよ？士道。

「さて、私も手助けしに行きますか。〈靈魂サリ看守エル〉」

私は天使を解放して士道と十香ちゃんの元へ向かいます。あつちでは耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんが戦っており、そつちではフラクシナスとどこかの空中艦が戦っています。あちらこちらで戦っていますね。

さて、着きましたか・・・これはいったいどういう状況なのでしょう？士道と十香ちゃんと対峙しているのは、エレンさんと6体の機械。

エレンさんつてもしかしてAST? いや、イギリスにいたことを考えみるとDEM社の社員?

そんなことを考えているとバンダースナッチと呼ばれた機械人形が動きを止めます。戸惑っているエレンさんを置いて土道達は八舞姉妹の方へ向かって行きました。

「ま、待ちなさいっ！……っ！？」

土道達の後を追おうと踏み出すエレンさんに向かって鎌を振り下ろします。ギリギリの所で踏みとどまり距離を取られました。生身で普通に避けるとか十分化け物クラスですね。それに、今纏った機器、ペンドラゴンって言いましたっけ？ASTのより俄然性能が良さそうです。

「貴女はっ!?へリーパー!?ちようど良かったです。逃げ出したヘシスターは貴女が関与しているらしいですね?彼女の居場所を吐いてもらいましょう。それに、貴女の能力と存在にアインがとても興味を持っていました。ここで捕えさせてもらいます」

ブレードを二本抜き斬りかかって来ます。鎌の柄の部分で受けますが……
「重っ!？」

これ、人間の出力じゃないですよ。完全体の時の十香ちゃんに近いパワーです。

【生命の満欠】フェイト・オブ・ライフ …… (望月)パース !!

私は能力を使って、死神を生成して送り出しますが……

「はああああ!!」

すぐに蹴散らされてしまいます。強すぎないですか？

どうしましょう、【魂たまむか迎えの夜】は凜音の時に使ったばかりでそこまで貯まってませんし、【魂イを喰タらう者】や【魂ハを狩タる者】は当たりません、【生命フの満オ欠ブ】は今、防がれたばかりです。【反フ転ォ】に至っては相手が靈力を使つてないと使えませんし……あれ？もしかして私つてある程度強い精霊以外の相手に弱くないですか？さらに言うと、生命体でなかったら更に勝ち目ないじゃないですか？バンダースナッチ止まってて良かったです

さて、今やった限りでは力では劣っています。速度では勝っています。速度で攪乱しましょう。

全力で動き回り鎌を振りを攻撃します。しかし、器用に受けられ防がれてしまいます。速度では勝っているのになんでついでこれるのですか!?なら、からめ手です。

サイズを絞つた死神を作り出し死角に置き、先程と同じように速度を活かして攻撃します。やはり、防がれてしまいます。でも……

「今……」

「つつつ!?!」

隠れていた死神の攻撃は通りましたが直前に気が付きかすり傷しか付けられません。そのまま死神も斬られて消滅します。

もう一度やりましょうか……いや、動きを読まれて反撃されそうですね。どう

しましようか……

「本当に強いですね……何者なんですか？ 貴女は」

「情報では〈ヘリーパー〉は対話をしないと聞いていましたが間違いだったのででしょうか？」

「今までしたことが無いだけです。それで貴女は一体なんなんですか？ ASTの鳶一折紙よりも、DEM社の崇宮真那よりも確実に強い。恐らくDEM社出身でしょうけど」

「私は世界最強のウィザードですよ。それにしても、よく喋りますね？ 時間稼ぎのつもりですか？」

「そうですね。士道ならあの二人をどうかしてくれます。必ず」

「また、五河士道ですか……彼は一体何者なんですか？ 精霊の現れるところに危険を省みず自ら向かい、精霊に慕われ、精霊の力を使う。更には総合危険度の最高ランク、Sランクの〈ヘリーパー〉にこれ程までに信用されている」

「士道はただの人ですよ……根が真っ直ぐでとても優しいねっ!!」

言葉の終わりと共に飛び掛り鎌を振ります。しかし、やはり当然のようにブレードで受け止められます。

「無駄ですよ。貴女では私に勝てません」

「まだまだだっ!!」^{フエイト・オブ・ライフ}「生命の満欠」
 「何を————つなあ!?!」
 「—————(盈月)!!」^{グロウ}

急激に成長し伸びた木々の根っこがエレンさんを襲います。

「ちっ!!こんな物!!」

「(盈月)!!」^{グロウ}「(盈月)!!」^{グロウ}「(盈月)!!」^{グロウ}「(盈月)!!」^{グロウ}「(盈月)!!」^{グロウ}「(盈月)!!」^{グロウ}

エレンさんが根っこに戸惑っている間に周りの木々を急成長させ巨大化させます。

「潰れろっ!!」^{サリエル}「(靈魂看守)」^{フエイト・オブ・ライフ}「生命の満欠」
 「—————(朔月)!!」^{ロスト}

木の根っこの部分だけを殺し、樹齢何万年の木々が一斉にエレンさんに向かって倒れ

ます。

「くっ!こんなもの————っ!?!なあ!?!」

突然、降ってくる木を斬りつけようと一歩前に出たエレンさんがすつと消えました。

あれ?どこに消えました?魂を観測・・・えくつと、位置は・・・土の中?

あいまみーコンビ、こんな所にも落とす穴を作っていたのですか?それにしても深いですし木で穴はふさがっているしエレンさんも咄嗟のことすぎて気絶してしまっているみたいですね。

ちやうど、勝負がついた所で海岸から物凄い爆発音が聞こえました。あつちも、終わったみたいですね。

・ ・ ・ ・ ・ さて、耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんの為に服を用意しましょう。

私はこれから士道にひん剥かれるであろう2人の為に着替えを用意する為、ホテルに戻ったのでした。

帰りになりました。本当にこの修学旅行は滅茶苦茶でしたね。楽しかったですけど。

私の目の先では士道を取り合って、十香ちゃん、折紙さん、耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃんが腕を引っ張っているます。

私は、スマホのカメラを起動し5人に向けてパシャリとシャッターをきりました。

「うん、みんないい表情です」

こうして、私の修学旅行は幕を閉じました。

少女は購買戦争へ向かった

「まさか、お弁当忘れてしまうとは……」

土道にから朝受け取って、そのまま家に忘れてしまったようです。仕方ありません、今日は購買にしますか。

購買部へ移動し、テキトウに数点見繕って買いました。今日はチョココロネとクロワッサン、タマゴサンドに抹茶オレです。ちよつと、買いすぎましたね。

購買部への帰りに、土道と耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃんの3人に会いました。

「あれ？千夜？購買部に行ったのか？弁当は作つたる？」

「家に忘れてしまいました……」

「かかか、千夜はおつちよこちよいだな」

「確かにな」

「失笑。土道が言えたことではありません」

「うぐつ！……確かにお前らの分を作つてなかつたけど」

これから、3人で購買部へ行くみたいです。あれ？でもこのタイミングだ

と……

「コロツケパン1つ！あといちごオレも！」

「うわっ！服引つ張んじやねえよ！」

「いいカレーパンは俺に食われるカレーパンだけだ！」

「なんとしても確保するのだ！」

「メデイック！メデイック！」

「畜生、なんでパンなんかのために！」

「————やはり、遅かったですか。」

怒号が飛び交い、悲鳴が上がり、絶叫が耳をつんざぐ。おびただしい生徒数に対して販売員のおばちゃんが一ひとりというアンバランスな配置が生み出した苛烈な戦場がそこに展開されていました。

「うわ、やっぱり遅かったか。ちょっと待たないと買えないなこりや」

やっぱり、購買部のおばちゃんを増やすべきですよ。そしたら、もつとスムーズに行くのに。

さて、この購買部^{戦場}を2人はどうするのでしょうか。女の子といえ元精霊です。ポテンシャルは普通の人よりも全然いいはずですし、何より2人とも少し中二病気質なところがありますし……

「なんでなんだ？昂らせてくれるではないか。牙を抜かれた家畜ばかりかと思っていた

が、やはり闘争本能を内に隠しておったか。くく、血湧くの、夕弦」

「興奮。悪くありません。先々月から生活はとても快適でしたが、ぬるま湯に浸かりすぎて少し体がなまっていたところですよ」

やっぱり、火がついてしまいましたか。

「お、おい、2人とも」

「案ずるな士道。ようはあの最奥の店主に金を払えばよいのだろうか？」

「首肯。ならば話は簡単です。夕弦と耶俱矢に不可能ありません。――設置。耶俱矢」

「おうともー!」

夕弦ちゃんが片膝をつき手を組み合わせ、耶俱矢ちゃんがそこに足をのせます。

「はあっ!!」

声と共に耶俱矢ちゃんは宙を舞い、他の生徒を飛び越して購買の前に向かって放物線を描きながら飛んでいきます。

しかし――

「奥義・英雄撃墜ツ!!」

声と同時に耶俱矢ちゃんの左方から勢いよく誰が飛び出し、耶俱矢ちゃんに当て身を食らわせました。

「……………ふふ、ふふふふ、ふあーっはっはっは!!」
 「何奴!？」

耶俱矢ちゃんが叫ぶと同時に、前方にバツと人影が躍り出てきそしてそのまま廊下の手について華麗な前転を連続し最後に二回転宙返りを決めてその場に降り立ちます。長身の男です。トサカのように刈り込まれた頭に、鋭い目。なぜか制服の袖が肩口で千切つてあつて両腕はバンデージで固められていました。ちなみにその腰には、焼きそばパンとフルーツ牛乳が下げられています。

あつ、この人さつき足場にした人ですね。

「甘い。甘すぎる。その程度で購買を利用しようとしていたのか」

「は……………?」

士道がポカンとしてしていると柱の陰から、白衣の男が現れました。縁の曲がった丸眼鏡に、痩せた体。見るからに科学者のような格好です。ちなみに手にしているのはハムたまサンドとコーヒー牛乳です。

「くきき……………まあ、歓迎させてもらうよ。ようこそ新兵諸君。我らの戦場へ」

そう言つて、バツと白衣を翻します。白衣の内側に、栓をされた幾本もの試験管が吊られているのが見えました。

みんなで怪訝そうな顔をしているとさらに柱の影から女の子が現れました。先程、2

人にぶつかつた子です。その子は何やらサンククロースのように、大きなピニール袋を背負っています。

「驚嘆。あなたは——」

夕弦ちゃんも先程ぶつかつた相手だと気が付き声をかけます。その少女は先ほどの弱々しい調子が嘘のように嘲笑めいた笑みを浮かべました。

「きやはは、そんなんじやいつまで経つてもパンは食べられないわよーん?」

そう言つてピニール袋から、包装の端が切り取られたパンの耳を取り出し、ポン、ポンと弄んでみせてきました。

「あれは!」

「凝視。夕弦たちのパンの耳です」

「おのれ貴様ら、何者だ!」

耶? 矢ちちゃんと夕弦ちゃんが視線を鋭くし、三人を睨め付けます。耶? 矢ちちゃんが叫ぶと、三人はフツと不敵な笑みを浮かべました。

「ふ……ならば名乗つてやろうか?」

初めに名乗りを上げたのは足場にした人でした。足場にした人は両腕を広げ片足をあげました。

「体操部で鍛えし強靱な脚力としなやかな身のこなしで、群がる凡百共全ての上を往く

！空中の貴公子—————〈吹けば飛ぶ〉鷺谷瞬助！至高の逸品は焼きそばパン！

「なんだよその異名。つか、普通そういう煽りつて自分で言うか？」

士道のもつともらしいツツコミをスルーして科学者姿の男が眼鏡を押し上げ身をそらすポーズをとりました。

「科学部の部費を濫用し、特殊調合した芳香剤で戦士たちの食欲を奪う！死へと誘う芳香—————〈異臭騒ぎ〉烏丸圭次！至高の逸品はハムたまサンド！」

「……………なんつー迷惑な……………」

なるほど、先程した変な匂いの正体はこの人でしたか。……………後で、生徒会に科学部の予算減らす検討をしてもらいに行きましようか。

最後にビニール袋を背負った少女があざといポーズを取ります。

「その可愛らしい容姿で相手を油断させ、刹那の早業でパンをスリ盗る！幻惑の魔術師—————〈おつとごめんよ〉鷺沼亜由美！至高の逸品は人から盗んだもの！」

「いや普通に犯罪じゃねか！」

警察に電話いるでしょうか？

「きやはは、見くびらないでよねえ。—————ポケットをご覧なさい！」

言われた通り耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんがポケットの中を探ります。するとその分だけの小銭が入っていました。警察はいらないようですね……………微妙なラインだと

思いますが。

「「————我らこそは、雷禪高校購買四天王!!」」

この瞬間、私と土道は何故かこの人達、八舞姉妹と波長が合いそうだなあと思ったのでした。

「四天王……だと」

耶俱矢ちゃんが驚きの声をあげます。あれ?でも四天王ならあと一人足りないですね。

「四天王って……3人しかいねえじゃねえか」

土道も同じことを思ったようでした。

「ふふふ、あのお方は四天王最強めつたなことでは姿を現さぬわー」

「そう、通称〈完璧主義者〉ミス・パーフェクト。いつの間にかパンを手にしている謎に満ちたお方……」

「私たちにすら勝てないあなた達が会えるお方じゃないのよー」

ミスって事は女性なのでしょうか?まあ、その人は気にしないでしようね。

「おのれ、ただで帰れると思うなよ。我らをコケにしたその代償、命をもって贖ってもらうぞ。煉獄の檻に囚われ己の罪を悔いるがいい」

「宣戦。数々の非礼、もはや捨てて置けません。あなた方に決闘を申し込みます」

「ふ……今宵の戦いはもう終結している。無粋なことを言うな」

「くきき、だが、その意気は買おうじゃないか。我らは購買にて最強。我らを前にして、目当てのパンを手にできるものなどいはいはしない」

「挑戦はいつでも受けるわよおー？そうねえ、さしあたっては……あら、ちようどいいじゃない。次の月曜日、月一の限定パンが発売されるわ。今月はレインボークリームパンね。それを先にゲットした方の勝ちというのはどおーお？」

何ですか、そのレインボークリームパンって私もその日買いましたよ。

「よかろう、購買の借りは購買で返してくれる、貴様らにパンの耳をかじらせてくれるわ」

「宣言。その言葉後悔させてあげます」

2人はビシツと四天王に指を突きつけます。3人は愉快そうに肩を竦めた後、私達の方を見てきました。

「ふ……威勢のいい弟子たちだな〈無反応〉、〈既に居らず〉」

「くきき、蒙昧なる弁当派に堕ちたと聞き及んでいたが、まだ貴様にも購買士の誇りが残っていたというわけか」

「でもお、こんな子たちじゃ私達の相手が務まらないわよお？」

「……は(い)？」

〈無反応〉？ 〈既に居らず〉？ それ、一体誰ですか？

「お、俺のことか?」

「もしかして、私もですか?」

「何を言っている、当然だろう。〈無反応〉^{デイスベル}は1年前、我が空中殺法、鳥丸の死の芳香、そして鷺沼の盗法——それらを全て難なく避け、意中の至高の逸品^{フエイバレット・ワン}、カツサンドを手に入れた剛の者よ。そして、〈既に居らず〉^{テレポーター}は今年の4月から度々現れ、我らは攻撃すらさせて貰えぬ。何時も我らが戦場に降り立った時には既にを至高の逸品^{フエイバレット・ワン}を手に入れ、その場から立ち去っておる速き者よ」

「おい待てなんだそれ初耳だぞ」

「私なんて関わってすらいないじゃないですか」

「ふ——とぼけるのであればそれもいいだろう」

「くきき、どちらにせよ、貴様の弟子達はやる気のようにだしね」

「きやはは、どうせ無駄だと思っけどお」

3人はそのまま歩いていってしまいました。

「くっそ!コケにしようって目に物見せてくれる!」

「同意。同じことは言わせません。——しかし、夕弦たちが敗北したのは事実です。その汚名をすぐためには、特訓して強くならねばなりません」

「特訓——」

「……………士道！特訓を頼む！」

「……………士道！特訓をお願いします！」

こうして、3人は特訓することになり、次の月曜日には見事四天王の3人を打ち倒したのです。

美九リリイ

少女は天央祭の準備を始めた

「ブラック企業もびつくりな大激務と言われる、今年の天央祭実行委員は！五河土道君に決定しましたー！」

今年も始まりましたか天央祭。天宮市内の高校10校で行われる合同文化祭で模擬店、展示、ステージの3部門で投票が行われ1番に選ばれた学校は王者として君臨する。去年は向こうの高校で参加しました。

隣では殿町君が十香ちゃんに同じような説明をしていました。その中で聞き覚えのある単語が飛び出しました。

「……………今年はあの美九たんもいるから手強いぜ」

「美九たん？」

あれ？土道は知らないみたいですね。まあ、私も作曲の話が来なければ知りませんでしたし。

「おいおい、今をときめくミスティアスアイドル誘宵美九を知らないのか？」

「いや……………知らないけど」

「ジーザス!!まさか、そんな旧人類がこんな身近にいただなんて。日本で五河ぐらいなものじゃないか」

いや、いるでしょう。十香ちゃんとか……

「じゃあ、他に知らない奴がいたらどうするんだよ」

「その時は、土下座しながら尻でスパゲッティでも食べて見せようじゃないか」

なんですかそれ……どうやってやるんですか？

「なあ、十香、千夜」

「ん？」

「なんですか？」

「誘宵美九って知ってるか？」

「卑怯だぞ五河……!!」

↳放課後↳

学校で天央祭の準備中に空間震を知らせる警報がなりました。この霊力は……美九さん!?何やってるんですか、あの人は!

あつ、空間震発生させたということは土道が向かっちゃいますよね。美九さんは物凄く男嫌いだったはずです。土道が危ないです。

「〈靈魂看守〉」

霊装を纏い、霊力を辿って行くところにはドームでした。中には土道と美九さんの霊力がありますね。さて、もう接触していたら不味いですね。さて、状況は——

「——この確立時空から消え去ってくださいよ！」

アウトー！土道大ピンチ!!すぐに救出します!!

美九さんの前に上から突撃します。美九さんは後ろに飛び退きこちらを睨んできました。

「なんですかの？貴女は？」

私は、そつとフードを美九さんからだけ顔が見えるように上げます。美九さんは驚いたような顔をします。

「あ、貴女は——ーツ!!」

このままだと名前を言われかねないので、鼻の前に人差し指を立てて言わないようにジェスチャーをします。

「わかりました。それで？今日は何の用ですかあ？もしかしてえ〜デートのお誘いですかあ？それならいつでも大歓迎ですよ〜」

デートならこの土道として欲しいんですけどね・・・まあ、無理でしょうけど。

「この人を見逃して欲しいんですけど、ダメですか？」

「なんで？そんなにダミ声で話すんですかあ？まあ、いいですよ？今度デートしてれるなら」

「……わかりました」

「それじゃあ、いいですよお……早く出ていってくれませんか？」

「待ってくれ！まだ話は……」

土道がそこまで言った時ドームの天上が破壊されました。ASTですね、もう来たんですか。

「美九さん。あれはASTと言いまして……まあ、可愛い女の子がいっぱいいる部隊です」

「なんですかあ!?その素敵な部隊は!?ちよつと、いつてきますう〜!」

物凄いスピードでASTの元に行きました。あつ、折紙さんにくつつきました。お目が高いですね。さて、土道をフラクシナスに戻しますか。

「ラタトスク!この少年を早く回収して下さい!」

「待ってくれ!お前はいつたいなんなんだよ!!……!」

回収される前、多分琴里ちゃんに諭されたんでしょうね。さて、美九さんが暴れている間に私は退散しますか。

千夜は逃げ出した。

少女は少年に女装をさせた

次の日、天中央祭の話し合いの場で土道が美九さんを見て接触を測るための作戦会議を始めていました。

「誘宵美九ね……まさか彼女が精霊だったなんて」

「この子が美九。知ってたのか？」

「名前ぐらいはね。CMやドラマの主題歌なんかで曲もいくつか。デビューは今から半年前、聞く麻薬とさえ言われる美声と歌唱力でヒット曲を連発するも、表には姿を現さない謎のアイドル。狂三なんてめじやいほどこちらの世界に溶け込んでいるわね」

土道達は美九さんについて色々と推論を立てていきます。その途中で土道からこんな疑問が出ました。

「それにしても。なんで、いきなり好感度が下がったんだ？」

「あつ、それなら分かりますよ。ただ単に美九さんが大の男嫌い百合っ子だからですよ」

「なんで千夜がそんなこと知ってるんだよ」

「仕事で何度か会ってますし」

「仕事？」

「私、誘宵美九の作曲を担当しているんです。そっちの業界では千月でとおしてますけど」

「はあああああ?!? 琴里は知ってたか？」

「知ったのはついさつきよ。まさか、こんな身近に情報源があるなんて思ってたなかったけどね」

「まあ、とにかく美九さんは男が嫌いで女の子が大好きなんです」

「だったら俺じやどうしようもないじゃないか!!」

「大丈夫です。その辺は琴里ちゃんと話して考えてあります」

琴里ちゃんがパチンつと指を鳴らすとクルーが準備を始めました。女物の雷禅高校の制服、メイク道具、女物のカツラ、女装セットです。

「大丈夫、怖くありませんよ。最初は少しスースーするかもしれませんがすぐに快感に変わります。先輩が言うのですから、間違いありません」

神無月さん、女装まで手出していたのですか。幅の広い変態ですね。

「こ、琴里〜!」

「グットラック、お姉ちゃん」

助けを求める士道に向かって琴里ちゃんはいい笑顔でサムズアップしました。

「うう……」

「大丈夫ですよ、土道。とてもよく似合っています」

「そういう問題じゃない！」

私の目の前には美少女がいます。言わずもがな土道ですが、パツと見ただけでは男と気づける人はほぼ居ないでしょう。声も変声機を使い女の子の声になっています。

「もう、土道ずつとこのままでもいいんじゃないですか？」

「嫌だよ！」

それにしても似合いですよね。写真撮っておきましょう。そして、スマホの壁紙にしましょう。あつ、美九さんを見つけてました。

「じゃあ、美九さん攻略、頑張ってくださいね？土織ちゃん」

少女はステージで演奏をした

さて、天央祭が開始しました。

うちの模擬店メイドカフェです。十香ちゃんに八舞姉妹、土織ちゃんがいるのでこれは勝てるでしょう。本当は折紙さんも加わる予定でしたけど何故か来てません。なにかASTの方で問題でもあったのでしょうか？

あと、土道が美九さんと天央祭の王者をどちらの高校が取れるか勝負するみたいです。展示は互角だとして、残りはステージと模擬店。ステージでどれだけ引き離されなしか、模擬店でどれだけ引き離せるかが重要ですね。

そろそろ、土道達のステージでしょうか。あれ？あいまみートリオがまだ残ってますね？3人もステージだったはずじゃー！あつ、琴里ちゃんから電話ですね。

「琴里ちゃん？どうかしましたか？」

『千夜姉、急にで悪いけどピアノの弾けたわよね？』

「はい」

『なら、ステージに出てくれないかしら。誘宵美九の妨害でドラム、ベース、キーボードが出れなくなったの。ボーカルの鳶一折紙も来ないし』

「それで土道のステージのキーボードとして出て欲しいということですね？」
『ええ』

だから、あいまいみートリオはまだここにいるんですね。

「ベースとドラムは？」

『それは……』

「どうした？トラブルか？」

「心配。土道になにかあったのですか？」

八舞姉妹が声をかけて来ました。そうだ……

「2人ともベースとドラムは演奏出来ますか？」

「ふっ、我に弾けぬ楽器などないわ」

「肯定。その2つなら問題ありません。以前の勝負の中にもありましたので」

「と、言うところで、琴里ちゃんメンバー確保完了です」

『ありがとう千夜姉、耶倶矢も夕弦も。今から音楽データを送るからそれを聴きながら会場に向かってちょうだい』

「わかりました」

私達は会場へ急ぎました。

私達が着いたのは美九さんのステージが終わる少し前でした。流石アイドル、ステージ慣れしてますね。他の高校とも一線を引いています。土道も吞まれかけているようです。

「無理だ……やっぱり、差がありすぎるじゃないか……どうやったって勝ててくれない」

「随分と暗い顔をしているではないか。亡者に足を絡め取られているようだぞ」

「落胆。それでは戦う前から負けています」

「そんなに一人で背負い込まないでください。一人で無理なら、みんなで頑張りましたよ」

「お前達……!!」

「琴里ちゃんに言われた来ました。最強の助っ人ですよ」

「我らが揃えば無敵よ」

「興奮。昂つてきました」

「さて、土道行きますよ」

ステージはこのメンバーで大丈夫でしょう。それよりも外で起きていることが気に

なりますね。そこその人が上空にいます。狙いは誰でしょうか？まあ、ラタトスクのメンバーでその辺は対応してくれるでしょうから、ステージが終わったら行きましようか。

「本当にぶつつけで大丈夫なのか？」

「ふっ、舐めるでないぞ。我らは斯様な楽器既に制しておるわ」

「確認。第72試合、嵐を呼ぶドラマー対決では耶俱矢が、第84試合、ベストベーストショー対決では夕弦が勝利しました」

「本当に色んな勝負をしてたんですね。私も楽譜は頭に入れたので大丈夫ですよ」
「見てくれ！3人とも！私はこれを任せられたのだ！」

そう言って、十香ちゃんはタンバリンをシャラシャラと鳴らします。かわいいですね。

「ほほう、聖なる音色を打ち鳴らすタンバリンか」

「納得。とてもお似合いだと思います。皮肉ではなく」

『次は、雷禅高校によるバンド演奏です』

アナウンスが入ります。私達の番のようです。

「よし、行くぞ」

私達はステージに向かって歩き始めました。

それぞれの位置に移動し各自で楽器の調子を確かめます。確認が終わると土道が目で耶俱矢ちゃんに合図をして、耶俱矢ちゃんがスティックを叩きそれに合わせて演奏を開始します。出だしは好調、ボーカルは結局折紙さんが間に合わなかった為録音になりました。

しかし、トラブルが発生しました。なんのトラブルか、歌が流れ始めませんでした。えして、演奏が完全に止まってしまいます。

どうすれば・・・ここを乗り越える・・・？私がやるべき事は――――

「アレコレ抱え込んで〜♪思えばいらぬものまで〜♪上手くなる言い訳と妙なプライド〜♪」

私が考えている間に歌声が響きます。十香ちゃんです。

「自分を棚にあげて〜♪人の事ことあだこうだ〜♪言うつもりもないけど〜♪」

暗くなっていたみんなの表情が明るくなってきます。そうですね、難しい事は無しです。皆などで全力でこの状況に挑む！

「無機質に回る t i c & t a c ♪」ガンバル” ってなんだろ〜♪」

そして、全員で演奏を再開します。サビに一気に音が合わさり会場が沸き上がりま

す。
「Attention! Q. なんとなく流されてる、そっちの水は 甘いですか? Ye

s / No、Yes / No。あたり見回した途端に♪ここだけ、時が止まるCOLOR
♪
♪

曲が終わり、それと共に歓声が起こります。十香ちゃんが土道に近づきハイタッチを
すると歓声がより一層大きくなりました。

なんとかなって良かったです。さて、外は大丈夫でしようか？

私は会場を後にし外へ向けて霊装を展開しながら向かいました。

死神はウィザードを蹴散らした

さて、演奏を終えて外に出てきました。会場では今頃、結果発表中でしょいか？

それにしても・・・すごい数ですね。DEM社員のウィザードとバンダースナッチが空を埋めつくしています。

それに対するは、折紙さんただ1人。前に土道が琴里ちゃん攻略中に襲ってきた時と同じ武装で来ています。何でしたっけ？ホワイトなんとかと言う出力は凄いけど危険な物だった覚えがあります。折紙さんは大丈夫なのでしょうか？

そう、考えていた矢先多数の弾丸が折紙さんのテリトリーを破壊し折紙さんにダメージを与えていました。活動限界ガチかそうですね。バトンタッチです。

〔^{サリエル}靈魂看守〕————〔^{フェイト・オブライフ}生命の満欠〕(望月)。行ってください死神達！

生成した死神軍団は背後からウィザードたちに襲いかかります。卑怯？褒め言葉です！

「なっ!?へりーパー!?今日は一体何なのよ!こんなにもイレギュラーが続くなんて!!
〈プリンセス〉と五河土道を回収すれば終わりだっというのに」

目的は十香ちゃんと土道のようなですね。なら、尚更ここで帰ってもらわないと行けま

せんね。

帰ってもらうために次々とウィザードを無効化して言っていると天央祭会場から何故か霊力を感知しました。いや、いつも感知しているのですがこれは天使を使用している時の出力です。天使を使用しているのは、十香ちゃん、四糸乃ちゃん、耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃん、美九さんです。会場にいる精霊全員じゃないですか!?

どうなっているのでしょうか?確認しに行きたいですけどここを折紙さん一人に任せるのは……つて!?フラクシナス!?なんでミストルティンを会場に向けてチャージしてるんですか!?なんですか!なんですか!?そんな緊急事態ですか!?————あつ、止まりました何だったのでしょうか?

まあ、いいです。続きを狩りましょう。

ウィザード狩りをしていると真那ちゃんも助っ人に来ました。ジエシカとか言うリーダーらしき人を撃退をして撤退をさせてくれました。ありがたいです。

そういうえば、途中で十香ちゃんが会場から吹き飛んできましたけど大丈夫でしょうか?……あれ?会場に土道と十香ちゃん霊力が無い?まずい気がしますね……

会場からペンライトを持った人がゾロゾロと出てきますが関係あるのでしょうか？
「とりあえず、琴里ちゃんに連絡を入れましょう」

霊装を解除し会場に戻ってカバンからインカムを取り出し通信を入れます。

「もしもし、琴里ちゃん？今どういう状況ですか？」

『良かった千夜姉！無事だったのね！』

「無事？」

『ええ。誘宵美九が一般人を操っているの。四糸乃達も洗脳されてるわ』

「美九さんが？あつ、士道と十香ちゃんは？」

『士道は今は誘宵美九に洗脳された一般人から逃げていると思うわ、そのせいか通信が取れてないわ。十香は……』

妙に言い淀む琴里ちゃん。私は次の言葉を待ちます。

『十香は攫われたわ……DEEM社に』

「なっ!？」

十香ちゃんが攫われた!？

「助けに行かないと!」

『分かってるわ。でも、準備を整えてからじゃないと返り討ちにあうわ。それと、千夜姉は手を出さないでね』

「・・・わかりました」

『それじゃあ』

じつとしていることなんて出来ません。通信を切り、私はすぐに靈力を辿り彼の元に向かいました。

死神は悪夢と協力することにした

土道の霊力を辿って行くと廃ビルにつきました。その廃ビルの中からは土道だけではなくもう一つ霊力を感じます。

「久しぶりですね。時崎さん」

「あら？ご機嫌よう。また、随分と変わった声を発しますわね？いい加減に土道さんに正体を明かしたらいかがですか？」

私は今は声を変えている。土道が土織ちゃんになる時に使っていた変声機を付けているのです。これで普通に喋っても気づかれないでしょう。

「それ以上は喋らないでください」

「あらあら、怖いですわ。土道さん助けてくださいまし」

「なっ、狂三!?〈ヘリーパー〉の正体を知っているのか!？」

「知っているもなにもー！ー！ー」

「時崎さん？私なら貴女を確実に殺せる事を忘れてませんか？」

「と、言うことなので私わたくしからは何も言えせんわ。でも、良かったですわね。とても心強い協力者が1人増えましたわよ？」

「……信用できるのか？」

「さあ？少なくとも彼女は私の知る限りでは裏切るような方ではないですよ」

「……分かった。十香を助ける為に協力してくれ」

「わかりました」

私は了承を示すため、深く頷き返しました。

私達は移動し美九さんの家に来ていました。

「おい、2人達！今、美九の家に来たって誰もいないだろ！俺は一刻も早く十香を————」

「十香さんを助ける前に美九さんの件を片付けてしまいませんと。邪魔される可能性もありますし、土道さんが捕まってしまつては私も困りますし」

「片付けるって簡単に言うけど美九にはあの声と天使が……」

「問題ありませんわ」

時崎さんは、扉の鍵を銃で壊し開けます。不法侵入ですけど緊急時ですし問題ありませんよね？責任を問われたら土道のせいにしましょう。そうしましょう。

「私わたくしに任せてくだされば華麗に取ってみせますわよ」

「ダメだそんな事！」

「うふふ、冗談ですわよ。優しい士道さんはこんな私わたくしでさえ救おうとした酔狂なお方ですもの。でも、となれば骨ですわよ？最低限、十香さんを助け出すまでの間、こちらに手を出さないという約束をさせておきませんか」と

「だけど、美九の生まれ持った価値観は異常だ。まともに話が通じる相手とは……」

「え？」

「まっ、ここに来たのはそれを確かめる為でもありますわ。士道さん、彼女の私物を探してくださいませ」

「私物？」

時崎さんの天使、刻々ザフキエル帝の能力で物体から過去でも読み取るんでしょう。私もそうしまししょうか、時崎さんに聞くより早そうですし。

「ええ、私わたくしの予想か正しければ彼女の泣き所を抑えることが出来るかもしれませんわ」
美九さんの部屋につき、家探しを開始します。しばらくして時崎さんが美九さんのブラジャーを見つけ出し士道に見せつけます。

「士道さん見てくださいいまし！ほら、凄いサイズですわよ。私わたくしの顔が入ってしまいそう

ですわ」

「な、何やってんだよ、お前！今はそんな場合じゃ」

「うふふ、真面目ですよのね」

いえ、そういう問題では無いような気がしますけど……時崎さんの基準がよくわかりません。

「ほら、士道さんも付けてみませんか？」

「はあ!?!なんで俺が!?!」

「ああ、これは失礼しましたわ。士織さんもいかがでして？」

「見たたのか……」

私は写真を撮ってあります。スマホの壁紙は士織ちゃんです。スマホのアルバムには他にも士織ちゃんの写真が沢山あります。提供者はT・Oさんです。

「ええ、ただ近くで見る機会はありませんでしたの。1度じっくりと拝見したいのですけど」

「じよ、冗談抜かせ！」

「つれませんのね。少しの間でいいんですよ？可愛い可愛い士織さんの顔が恥辱に震える所を見せていただければ」

「何するつもり！士織ちゃんに変な事しないで！」

「良いではありませんの。良いではありませんの」

「時崎さん？そこまでにして頂けますか？」

「仕方ありませんわね……では、土道さんまたの機会ということだ」

さて、本格的に調べないと……あれ？これは宵待月乃のCD？やっぱり、美九さんと同一人物なのでしょうか？それなら、男嫌いや人間不信にも納得が行きますが……一応、調べておきましょう。

〔^{サリエル}靈魂看守〕——^{コネクト}魂の接続〕

CDの記録を接続して覗きます。やはり、宵待月乃Ⅱ美九さんだったみたいですね。枕営業させられかけて、拒否したら変な記事を書かれてたうえ、歌手の命でもある声がストレスで出せなくなってますから、恨みも仕方が無い気がしますね。私はこの時期は受験中だったので知ったのは引退した後だったんですね……

「時崎さん、これが丁度いいですよ」

「あら？ありがとうございます。では、^{ザフキエル}刻々帝〕——^{ユツ}二〇の弾〕」

時崎さんはCD越しに銃をこめかみに当てて発砲しました。実害は無いのでしようけどいつ見ても心臓に悪いですね。

「狂三!?!」

「うふふ、大丈夫ですわよ。〔^{ユツ}二〇の弾〕の力は懐古。撃ち抜いた対象が有する過去の記

憶を私に伝えてくれる弾ですわ」

「記憶を……」

「どうやら美九さんは——」

「口で説明するよりこつちの方が早いです——」
【魂コの接ネ続クト】

士道の手を掴み、直接情報を流し込みます。これで、士道も美九さんに起きた事を理解したでしょう。

「なんだよ……これ……」

士道はかなり戸惑っている様ですが、止まっている暇はありません。

「さて、美九さんの元へ行きましょう。反撃と行きましょうか」

私達はドームを目指しました。

美九トウルース

死神は女神と隠者の記憶を弄った

さて、天中央祭会場に戻ってきました。今頃、土道と時崎さんは正面から突き進んでいくでしょう。

私はある諸事情により正面から行くことが出来ないのです。その諸事情とは、四糸乃ちゃんと美九さんに正体がバレているので迂闊に近づこうものならあつという間に土道の前で正体が暴露されてしまいます。そうならない為にも四糸乃ちゃん達の記憶をいじる必要があります。美九さんが土道達に気を取られているうちに記憶を弄らせてもらいましょう。

さて、今の状況は時崎さんの「時喰ときはみのしろみの城」で美九さんが操っている人達を無効化して、会場に入ったみたいですね。

「美九！」

「はあくなんですか？その声……汚らわしい音声で私や私の可愛い精霊さん達の鼓膜を汚さないでくれませんか？本当に不愉快ですね。無価値を通りこして害悪です。ちよつと、黙ってくれませんか？歩く汚物さん」

うわゝ……酷い。これ本当にデレさせること出来るのでしょうか？

「美九、聞いてくれ！俺は今から十香を、あの時拐われた女の子を助けに行かなきゃならない。だからー！ー！ー！」

「黙ってくださいいつて、言ってるでしょ!! 〈破軍歌姫〉ー！ー！ー！【行進曲】！」

美九さんが天使を召喚し演奏を始めると眠ってしまっていた人達がよろよろと起き上がりました。その目には生氣はなく操られているようです。

「くっ、これは……」

「驚きましたわね、ただの人間が私の影を踏みながら動けるなんて」

「どうですか？凄いでしょ。私の〈破軍歌姫〉の力は人を心酔させるだけじゃないんですよ。さあ、もう捕まえるなんて言いません、私の可愛い女の子達私の目の前でその男を殺しちやてください！」

「くっ！」

「いひつひ。だあくめですわよそれぐらいで勝ち誇ってしまつてわ。だって、私には敵わないんですもの!!」

操られてる人の足元から無数の手が伸び人々を拘束します。無数の時崎さんが現れたのです。

これ、最高どのぐらいまで出せるのでしょうか？めちやくちや出現してますけど。美

九さんも、驚いてますね。

「〈颯風騎士〉」エルフアエル

「―――穿つ者」エル・レエム

「―――縛める者」エル・ナハシユ

驚いて動けない美九さんの代わりに耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃん、八舞姉妹が天使を召喚し暴風を起こします。

風によつて士道は吹き飛ばされていましたが時崎さんがいるので大丈夫でしょう。さて、お目当ての2人以外が離れたのでそろそろ実行しましょうか。

私は影から素早く出て四糸乃ちゃんと美九さんを掴みます。時崎さんの協力のもと影という完全に予想外の場所から飛び出し、尚且つ対象の時間を早める弾で撃つて貰い気づかれた時にはもう触れている状況を作りました。

「貴女は！」

「千や―――」

おつと、それ以上は禁句ですよ。

「【魂の接続】&【魂の記録書】」コネクトソウルログ

魂を繋ぎそこから変更。次に、おかしくない程度で修正を―――

「姉上様から離れろ！」

「警戒。何者ですか」

八舞姉妹に邪魔されてしまいました。修正が中途半端になってしまいました。まあいいでしょう。

「姉上様、大事ないか？」

「心配。四糸乃も大丈夫ですか？」

「ええ、なんともないです」

「私も……大丈夫です」

一応、成功したみたいですね。

「姉上様を傷つけるとは……万死に値する!!」

「憤怒。絶対に許しません!!」

「怒り……ました!」

耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんがかつちに高速で攻撃してきます。その間を縫って四糸乃ちゃんが氷塊を飛ばしてきます。みんなが私に寄ってくる……やったね! モテモテだよ。いや、命を狙われるのは嫌ですよ……

まあ、本来の作戦を土道と時崎さんが実行するでしょうから。それまで時間稼ぎと行きましょうか。

「さあ、来てください。霊力を喰らって上げましょう」

負けるはずありません。私は精霊相手では最強の精霊なんですから。

死神は悪夢に置いてかれた

槍と鎖を躲し、風に抗いながら突き進みます。四糸乃ちゃんの氷塊は飛んできません。どうやら、時崎さんの対応におわれているみたいです。

今は、土道が時崎さんの影の中で美九さんに十香ちゃん救出の邪魔をしないでくれと説得をしているところです。

上手くいくといいんですけど……あつ、出てきました。

「お姉様！」

「無事であつたか！」

「安堵。なりよりです」

四糸乃ちゃんと耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃんは戦いをやめて美九さんの元へ駆け寄りま
す。うらやまーゲフンゲフン。

「土道さん、立てまして？私の時間も無尽蔵ではありませんし。そろそろ退散しますわ
よ」

「待ってくれ狂三。もう少しで……」

土道がそこまで言いかけると、氷塊が降つてきました。大鎌で切り裂き軌道を逸らし

ます。

士道の様子だと、まだ約束は取り付けてないようですね。

「お姉様の敵は許しません」

「四糸乃……」

「状況が理解出来まして？〈刻々帝〉^{ザフキエル}———」

「一の弾」^{アレフ}」

士道と時崎さんは加速し離脱しました。

———あれ？私は？

私は慌ててその場から逃げ出しました。

えつと、2人は……居ました。

靈力を辿って2人の元へ急ぎます。と、そこで———
ウウウウウウ———

けたたましくサイレンの音が鳴り響きます。

空間震警報!?!でも、おかしいですね。霊力は感じられません。十中八九大暴れする為に人々の目の届かないようにしたいのでしよう。なので次にくるのは敵の戦力。

予想通り、DEM社の方から大量のバンダースナッチとウィザードが飛び出してきました。

相変わらずすごい数ですね。お金と人員は居るみたいです。

さて、土道と時崎さんと合流……あつ!!また移動しました。次はDEM社の方ですね。しかも、十香ちゃんが囚われている建物の近くです。さすが時崎さんの情報収集能力は凄いですね。

はぁ……もう一度移動しましょう。

土道と時崎さんの霊力を辿って行くと途中で2人は別れてしまします。

何考えてるんですか!?!土道1人なんて危険すぎます。……あれ?もう1人誰かいますね。この魂のパターンは……えつと……あつ、そうだ真那ちゃんです。

これなら、安心……って、あれ?今、紅い機器を身にまとった人と一緒に真那ちゃんっぽい子が飛んでいきませんでしたか?土道、また1人じゃないですか!!

私は、急いで彼の元へ向かいました。

死神はウイザードに苦戦した

さて、やっと着きました。士道は既に中に入っているみたいです。さっき、士道が天使の力を使ったのかビルに斬撃が走りましたね。士道つてもしかして封印した精霊の天使を使えるのでしょうか？十香ちゃんの〈塵殺公〉サンダルフォンの剣や琴里ちゃんの〈灼爛殲鬼〉カマエルの再生能力しか使っているのを見た事ないですが、もしかしたら〈四糸乃ちゃんの氷結傀儡〉ザドキエルや耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃんの〈颯風騎士〉ラフアエルも使えるのでしょうか？凜祢の〈凶禍樂園〉エデは使えるか微妙そうですね……

私が入ろうとすると中から誰かが歩いてきます。ヘルメットで顔は分かりませんが身にまとっている機器はエレンさんのペンドラゴンに似ています。

「貴女が〈ヒーパー〉？」

あれ、なんででしょうか？この声なにか違和感が……聞き覚えのあるような気がします。いえ、今はそんなことを気にしている場合じゃないです。

「私は貴女の抹殺を命令されているの」

「そうですか。なら、押し通らせて貰います」

大鎌を振りかぶり斬りかかります。しかし、その場には既にその少女は居らず横に躲

していました。

「しゅー！」

連続で大鎌を振り攻撃をしますが全て躲かれてしまいます。

速い……今まで戦ってきたどのウィザードよりも。あのエレンさんよりも速い。

「こんなものなの？じゃあ、こつちからいくよ」

「くっ!？」

ブレードを受け止めますが、後ろに弾き飛ばされます。

このウィザード……速さだけじゃなくて力もエレンさん以上です。技はエレン

さんの方が上みたいですけど。出力に物を言わせてる感じですね。

「フェイト・オブ・ライフ生命の満欠」（パース）「望月」

死神を生成し一旦離れます。今のうちに周りの状況を確認。

ビルの中

士道と美九さんが十香ちゃんを救出中。

ビルの外

時崎さん↓DEM社戦闘員。

四糸乃ちゃん、耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃん↓ウィザード達。

紅い人⇄真那ちゃん。

A S T、DEM戦闘員↓精霊

エレンさん⇄折紙さん

「……って、感じですか。物凄い乱戦になってますね。さて、私もそろそろ本気を出しましょうか。」

「〈サリエル靈魂看守〉………」
たまむか「魂迎えの夜」

空に巨大な満月が浮き上がり、力が湧き上がってきます。月からは半永久的に靈力が補給され続け、常に靈力は満タンです。

「フェイト・オブ・ライフ生命の満欠」………
パリス「望月」

大量な上に出力を最大まで強化した死神を生成します。狙いはバンダースナッチだけにしておきましょう。

さて、そろそろあのウィザードも戻ってきましたね。怪我を一つもしていないのは間違えじゃないですよ？出力最大では無いにしても、100近く送り込んだつもりだったんですけど？

「手こずらせてくれたね」

「あれを手こずらせてくれたで済ます人間は貴女かエレンさんぐらいですよ」

「そっちは、やっと本気って感じだね。じゃあ、こつちも最大出力で行くよ」

今まで、本気じゃなかったんですか!?

お互いの大鎌とブレードが衝突し合います。そこから生まれる衝撃波は周りのウィザード達を巻き込み吹き飛ばしていきます。

そのまま、戦っているとエレンさんと折紙さんが戦っているところまで来たようです。折紙さんの方はもうボロボロです。エレンさんの方は少し傷を受けた程度でしょう。

「へりパー!?」

「へりパー!? それに千陽^{ちはる}」

「あれ? エレンじゃん」

千陽? 彼女の名前でしょうか? うっ……何でしょう。また、頭が痛みます。

「千陽、アイクからの呼び出しです。私はアイクの元へ行きます。鳶一折紙とへりパーの相手をお願いします」

「マジで? へりパー」だけでもかなりきついんだけど」

「お願いしますね」

そのまま、エレンさんは飛んでいってしまいました。

アイク……確か、DEM社の代表取締役。つまり、土道達の方へ行った? 不味いです。

「おっと、行かせないよ?」

エレンさんの後を追おうとすると道を塞いでできません。折紙さんだけでも、言ってくれれば……あつ、ダメです。折紙さん、耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんと戦っています。

さつきから嫌な予感がします。早く土道の元へ行かないと。

私は大鎌を握る手に力を入れ直しました。

死神は反転を感じた

千陽と呼ばれたウィザードと戦い続けて数分が経ちました。どちらの攻撃も通るが、決定的なダメージを与えることが出来ずにいる状態がつづいています。

しかし、それにも変化が現れてきました。

原因は精霊と人間の差。自分の力で戦っている精霊に対して、人間である彼女は機器を使用する事によって、この出力を維持しています。しかし、それには限界があります。機械面的にも肉体的にも。もちろん精霊にも限界はありますが「魂迎えの夜」たまむかを発動中の私は言わば常に回復魔法をオートでかけられているような状況です。この状況で負けることは無いです。

疲れからか少し反応が遅れた彼女のヘルメットに大鎌の石突の部分を叩き込みます。彼女はヘルメットが砕けながらも、負けずとブレードを至近距離で突き出して来ますがフードを掠つただけで私を傷付けることはありませんでした。しかし、代わりにフードが取れてしまいます。

お互いに一旦離れ体制を整えます。彼女を見るとヘルメットは砕け散っていて、中からは長い金色の髪が広がりました。こちらを見る目は綺麗な青色でこちらを真っ直ぐ

ただ、真つ直ぐに突っ込みブレードを振るう彼女の攻撃を躲して鳩尾に石突を叩き込みました。

「うっ!!?ー!ー!ーあ、あ………」

そう呟いて、彼女はそのまま意識を失いました。落ちないよう受け止めるとある物が目に留まりました。彼女の髪にを着いている太陽をモチーフにした金色の髪留めです。

「うっ………」

それを見ていると頭痛と共に何かを思い出しそうになります。

何でしょうか……何か大切な事を、物を、人を忘れているような……

考えれば考える程に頭痛は強くなります。しかし、ここで諦める訳には行きません。痛みを堪えて思い出そうとし、何かを思い出しそうになった瞬間、背中に寒気が走りましました。

今まで感じたことの無いような禍々しい靈力を感じたのです。しかし、この靈波には覚えがありました。

「………十香ちゃん?」

そう、土道が助けに行つた十香ちゃんの靈波と酷似しているのです。しかし、全く違う点が一つ。靈波がマイナス値を表しているのです。今まで会つたことのある精霊は全てプラス値でした。十香ちゃんも例に漏れずそうだったはずです。

あれは……一体なんなんでしょうか……？

そう考えていると、目の前がクラクラしてきました。先程の頭痛が原因でしょうか？
流石にここで意識を失う訳には行きませぬ……

「時崎さん？居ますか？」

「いますわよ。あらあら？随分と満身創痍じゃありませんの」

「時崎さん、私を私の家まで運んでくれませんか？お礼として靈力をバカみたいな量を渡します。多分今回の戦闘で使った量より多く渡せます」

「まあ、それならいいでしょう」

「じゃあ、始めますね。【魂コネクトの接続】」

靈力を時崎さんに流し込んでいきます。今の状態の私は靈力切れが無いのでどんどんと送り込めます。

しかし、意識の限界が来てしまいました。

「後は任せました。それと、土道をよろしくお願いします」

「ええ。勿論ですわ」

私の意識はそこで途切れました。

「………どうか、みんなが無事でありますように。」

(狂三視点)

「さて、千夜さんを運びましょうか。それにしても、この方は千夜さんに瓜二つですわね」

狂三は足元に転がっているウイザードの顔を見ます。

「見れば見るほどそっくりですわね……千夜さんには悪いですが少し調べさせてもらいましょう。〈刻々帝〉^{ザフキエル}「二〇の弾」^{ユツ}」

「二〇の弾」の力は懐古、撃ち抜いた対象が有する過去の記憶を伝える弾です。これで千陽を撃ち抜くことによって千陽の記憶を受け取ります。

「これは!?!……いひひひ、千夜さん貴女も大変ですね。全てを思い出した時貴女はどうなってしまうのでしょうか」

狂三はそれだけ言葉を残して千夜を抱いたまま影の中に消えていきました。

少女はミスコンに参加した

次の日、目が覚めると自分の家に居ました。時崎さんがちゃんと運んでくれたのでしよう。

その後、琴里ちゃんに連絡をして、どうなったかを聞きました。結論から言っても十香ちゃんを奪還し、美九さんの霊力を封印することが出来たようです。あの状況でよくデレさせましたね。

そして、もう一つ。十香ちゃんのマイナス値を指した状態の事です。その時の十香ちゃんはまるで別人格になったようで、さらにその時召喚したのが^{サンダルフォン}〈塵殺公〉ではなかったようです。召喚した時、ナヘマーと言っていたら幸いです。ナヘマーって悪魔ですね？まあ、この状況の事を反転と言うらしく、心に負荷がかかることによつて起こるそうです。

私は反転に思うことがあり、今度試してみようと心に留めておきました。

色々あったせいで流れてしまつてましたが天央祭が再開されました。事件のせいで潰れてしまつた2日目を後夜祭の後に行くといふかなり変則的な日程で。

さて、私は士道に伝えないといけない事があつたので探しているのですが見つかりませんね……えっ？携帯電話はどうしたかつて？家に忘れてきましたよ。携帯しなきゃ携帯電話つて言いませんよね。

それにしても、見つからないですね……

『……皆様、本日は天央祭にご来場頂き誠にありがとうございます。ご来場の皆様にイベントのご案内をさせていただきます。本日、15時よりセントラルステージにてミスコンを開催いたします優勝者には高級温泉旅館一泊二日宿泊ペアチケットが贈呈されます』

やばいですね。この放送が入つたということはポチポチ準備をしてもらわないと不味い時間です。

実は士道の士織ちゃんを見た時に勝手にミスコンに登録してしまつたのです。早く伝えなければなりません。

『……なお、今年は特別に飛び入り参加枠が設けられています。天央祭参加校の女子生徒であれば誰でも参加が可能です。奮つてご参加ください』

今年はその制度が出来たのですね。

あつ、そうだインカムで琴里ちゃんから連絡を取ってもらいましょう。

「もしもし、琴里ちゃん？」

『千夜姉？どうしたの？』

「士道に連絡を入れて貰えませんか？」

『士道に？』

「実はミスコンに士織ちゃんをエントリーさせてしまっていたのを思い出しまして」

『そういう事ね。でも残念ながら士道は参加出来ないわ。士道は審査員になっているから』

「え？」

じゃあ、士織ちゃんは参加出来ない？士織ちゃんの枠が空いてしまいます。どうしましよう………

『千夜姉は、参加しないの？』

「私ですか？参加するわけじゃないじゃないですか」

『今、とても困っているから参加して欲しいのだけど』

「嫌ですよ」

『千夜お姉ちゃん、お願い♡』

「お姉ちゃんに任せなさい!!」

ふっ……我ながらチョロい。

ということで、私は用意された道着に着替えています。なんで、道着？と聞いたところ、審査員の1人がキチツとした人が好きらしいです。

それと、今回私が参加する理由となったのは十香ちゃん達が参加する事、土道が審査員な事、優勝賞品が温泉旅館のペアチケットだということにあります。十香ちゃん、耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃんが参加して土道が審査員となると土道が満点を付けなければ不機嫌になります。さらに誰かが優勝して土道と2人で温泉旅館に行こうものなら残り2人はかなり不機嫌になるでしょう。その為、土道は3人に満点を付けつつ、3人に優勝をさせないようにしないといけません。ちなみに審査員の買収は失敗したそうです。

『皆様、お集まりいただきありがとうございます！ごぎいます！これより第25回、天央祭ミス・コンテストを開催いたします!!』

「「「おおおおおおおおおおおおおおおおお!!」「」」」
司会の子がマイクで話始めると会場が一気に湧き上がりました。

「仙城大付属高校風紀委員長、兼、茶道部部长！女子たるもの、男子の3歩後ろを歩くべし！絶滅危惧種の大和撫子、伊集院桜子!!」

「「「姫様アアアアア!!」」」

うわあ、凄い人気ですね。この人がしつかりとした格好が好きで人でしょうね。

「続きまして、栄部西高校の若き獅子！生徒会長、兼、柔道部主将！文武両道のスーパーヒーロー！ファンクラブの男女比はなぜか男の方が多い！古茂田柊平!!」

「「「兄貴イイイイイ!!」」」

声援、野太いですね。確かに男性率が高いみたいです。

「さてお次は、雷禅高校より臨時審査員が来てくれました！家事全般が得意というだけで男はこうも女にモテるのか！男子職員お料理の腕腕を磨け！五河士道!!」

「「「死・ねエエエエ!!」」」

「おい、俺の時だけ説明も声援もおかしくねえか」

酷。

『「「「皆様お待ちかね！まさかまさかのこの人が来てくれた！デビュー以来、1度もメディアに姿を晒さなかった幻の歌姫！童堂寺女学院、誘宵美九!!」」』

「「「美イイイ九たアアアアア!!」」」

一際大きな声援が上ります。もう、ミスコン優勝は美九さんでいいんじゃないです

か。

審査員の紹介を終え、エントリーナンバー1番の人からステージ上上がります。参加者は各自好きな衣装でアピールをして、審査員が得点を付けていくという物でした。それにしても、古茂田柊平さんは0点しか付けませんね。逆に美九さんは満点の10点しか付けてません。

少しづつ順番が近づいて来ます。十香ちゃん、耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃんの審査は終わりみんな点数は一律に25点で暫定1位です。点数配分はみんな同じで、伊集院さん5点、古茂田さん0点、土道10点、美九さん10点でした。

ちなみに十香ちゃんと耶俱矢ちゃんは水着、夕弦ちゃんは黒いボンテージでした。

『さて、次でラストとなります！エントリーナンバー25番！雷禅高校、魂月千夜さんです、どうぞ！』

さて、アピールはどうしましょうか。緊張して表情筋が動きません。もう、演武でいいでしょうか。

動きがなるべく派手な演武を披露し礼を審査員と観客にします。

『はい！ありがとうございます。それでは審査員の方々、得点をどうぞ!!』

一斉に得点の札が挙げられます。結果は——

『7点・0点・8点・10点・合計25点です！まさかの同率1位4人目です』

「とても良かったですわ」

「中々キレのある動きで素晴らしかったよ。ただ君が男でないことが残念だ」

「きゃー！千夜さんカツコイイです〜」

あれ、今ホモが湧きませんでしたか？気のせい？ならいいです。

それにしても、土道の得点は8点ですか。十香ちゃん達には10点つけたのに。へーほーふーん。

最終決戦のため、同率1位の十香ちゃん、耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃんもステージ上に出てきて横一列に並びます。

あれ？美九さんの霊力が不安定になってますね。それに泣いてませんか？なんででしょう。まあ、土道が宥めてますし土道に任せましょう。

『決選投票は審査員だけではなく、会場のお客さんの声も票に入ります。————皆さん、せーので1番優勝に相応しいと思う方の名前を挙げてください。いいですか？』

「せーの————」
「……美九たん!!」

あれ？最初に考えていた事が現実になった？いや、美九さんは参加者じゃないですよ。でも、どうして……あつ、泣き声でまさか魅了させてしまった？

「……美九たあああああん!!」

会場に向かって、観客が押し寄せて来ます。もはや、この会場でまともなのは私を除くと士道と美九さんのみ。成程、これが混沌カオスですか。

士道と美九さんは脱出を試みますがそれを塞ぐ影が3つ。

「くかか！逃がしはせぬぞ士道！」

「跳躍。とうっ！」

「シドー！美九を置いていくのだ！」

あらら、大変なことになってますね。

「姉上様アアアアアア！！」

「飛翔。ペロペロー」

「いただきますだあああ！！」

「う、うわああああああああああああ！！」

「きやああああああああああああ！！」

3分後、美九さんの洗脳は解除されました。その3分間士道達は全力で逃げ回りました。

精霊キングゲーム

少女は王様ゲームをした

私は今、駅前のカラオケボックスの一室にいます。他にも土道と精霊組が一緒にいます。

何をやっているかと言うと――

「王様だーれだー！」

王様ゲームです。琴里ちゃんの声と共に皆が割り箸を抜き取ります。なぜ、急に王様ゲームをやる事になったかという点、アイマイトリオが十香ちゃんに入れ知恵をして、十香ちゃん達が興味を持ってしまったからです。

多分、アイマイトリオ的には土道と十香ちゃん2人で王様ゲームをする事によって十香ちゃんが土道と接近出来るようにしたかったんでしょうけど、残念ながら十香ちゃんはそこまで頭は回らなかったようです。

さて、ゲームに戻りましょうか。最初の王様は――

「わっ、私だー！」

どうやら十香ちゃんだったみたいですね。十香ちゃんは王様ゲーム初心者ですけど、

どんな命令をするのでしょうか？

「なっ！わ、我は王の器ではなかったというのか!？」

「異義。納得できません」

十香ちゃんが王様なのを見て耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんが文句を言い始めました。

いや、そういうゲームじゃ無いですからね？

「これは、ただの運だし、またすぐに次の回が巡ってくるから」

「ふん、まあよいだろ。どうせ最後に笑うのは真の王・八舞なのだからな」

「肯定。選定の剣は相応しい者のもとに」

士道が説明して収めてくれましたが……何か2人は変な勘違いをしている気がします。

「じゃあ、あなたが王様よ、十香。なんでも好きな命令を出してちょうだい」

「なら……しつ、シドー！私にあーんをしてくれ！」

「ええと、あーんっていうと……ご飯を食べさせる、あれか？」

「うむ……亜衣麻衣美衣がおうさまになればそんなことさえ思いのままと言っていた。ダメとは言わせぬぞ。王様の命令だからな！」

やっぱりアイマイミイトリオが狙っていたみたいですね。でも、十香ちゃん残念ながらルール違反です。

「なんだそれぐらいならー……あつ……十香、王様の命令は対象を数字で指定しなきゃいけないんだ」

「な、何？ そうなのか？ それでは、シドーにやってもらえないかもしれないのか？」

「まあ、そういうルールだからな……」

「う、うぬう……」

それを聞いた十香ちゃんは酷く落ち込んでしまいました。まあ、ルールですし仕方がないでしょう。最初に説明はしたはずなんですけど……

あつ、琴里ちゃんが士道をとて睨み付けてます。あれは多分、何十香をしよげさせてんのよこのクソ虫って思っている顔でしょう。それに対して士道は、俺が悪いのか？ みたいな顔をしていますね。

その顔だけの意思疎通を終えた琴里ちゃんは十香ちゃんに向けて3を指で示しました。それを見た十香ちゃんはすぐに命令をしました。士道の数字でしょうね。

「3番だ！ 3番は私にあーんをするのだ！」

「仰せのままに。ー……ええつと、これでいいか。ほら、あーん」

「うむ……あーん」

士道が十香ちゃんにフライドポテトを摘み上げあーんをします。

「ど、どうだ、美味しいか？ 十香」

「うむー！ありがとうだ、シドー！」

まあ、最初の1回目なのでしつかりとルールをやりながら確認出来たのでよかったですよ。

「さ、次の王様を決めるわよ、引いてちょうだい」

琴里ちゃんが割り箸を回収して、みんなの方に差し出しました。

「「「王様だーれだ！」「」」」

さて、次の王様は——

「あら、次は私みたいね。ふふ……どんな命令をしようかしら」

次は琴里ちゃんが王様のようです。ちよつと、笑顔が怖いですよ。どんな命令をするのでしようか？

「じゃあ、そうね。せっかくカラオケに来てるんだし、1便と4番にデュエットでもしてもらおうかしら」

1と4……私ではないですね。さて、当たったのは——

「くく、1番は我だ」

「呼応。4番は夕弦です」

——あつ、これ絶対上手いやつ。双子の彼女がデュエットをしたら息がピツタリなので綺麗になるでしょう。

「かか、我らを合わせて指定するとは良い度胸よ、デュエットと申したな、ようは我らの美声を堪能したいということか」

「理解。歌唱力勝負は第36試合で経験済みです。夕弦と耶俱矢のコンビネーションしかと目に焼きつけさせてあげます」

2人はそのままマイクを手に取り無伴奏で歌い始めました。2人の歌はカラオケの採点機能を使うまでもなく上手いと分かります。まるで、事前に練習して準備してきたみたいです。

数分後、2人のステージは幕を閉じ皆からは拍手がこぼれました。

「何よ、結構上手いじゃない」

「かか、当然であろう、我らは超完璧な八舞シスターズ！」

「同意。夕弦達に出来ない事など少ししかありません」

少しはあるんですね。素直でいいと思います。

「さあ、早く次なる選定をせよ。」

「肯定。次こそ夕弦達が王となる時代です」

琴里ちゃんが割り箸を集め、3回戦目となります

「」「」「王様だーれだ！」「」「」

さて、次の王様は――

「あつ……わ、私……です」

「……………四糸乃ちゃんですか。」

「おお！今度は四糸乃が王様か、羨ましいぞ」

「ぬう！またしても……我は王の器ではないということか！」

「残念。夕弦たちの時代は遠いようです」

「あくん。なんで私の所に来てくれないんですか。せつかく素敵な命令をいっぱい考えてきたのに……っ！」

美九さん？その素敵な命令とやら物凄く怖いんですけど。

「じゃあ、王様？命令を」

「えっ？えつと……私は命令なんて……」

「いいのよ四糸乃。王様ゲームなんだから王様になった人が命令しないと面白くないでしょ」

「うんじゃあねく2番の人は膝の上に王様を乗つけて頭をナデナデすることく」

「えっ!?!よしのん何を……」

迷っている四糸乃ちゃんの代わりによしのんが命令をします。私は……………2番じゃない……残念です。

「……………2番。私か」

「あつちやく士道君は外したか。あつ、でも四糸乃、いつも令音さん見ながらどんな事したらアンナ胸になるのかなくって言つてたじゃない？せつかくだから現地調査を————モゴモゴ」

「よしのん!?!」

余計な情報を喋り出すよしのんの口を四糸乃ちゃんは慌てて塞ぎます。まあ、令音さん大きいですからね……

「……来たまえ。四糸乃」

「じゃあ……お願いします」

渋っていた四糸乃ちゃんでしたがプレッシャーに負けて令音さんの膝にちよこんと座りました。それと同時に令音さんの豊かなバストが四糸乃ちゃんの背に押しつぶされ、むぎゆうと変形していきます。

「ふ、ふあ……」

「……あとは、撫でるのだったかな」

令音さんが四糸乃ちゃんを撫でるとその度にその胸が形を変えます。数分後、四糸乃ちゃんは解放されフラフラと自分の席に戻りました。

「……お、おお」

一同がそう声を漏らしてしまったのも仕方がないことでしよう。

「見たか夕弦。令音の胸が四糸乃に押されてあんなにぼよよに……」

「驚嘆。人をダメにする胸です」

「なんか、すごいものを見た気がします」

「あ、ああ……」

「……次に進まないのかい？」

原因である令音さんはまるで気にしていないように聞いてきます。それで、全員現実に戻ってきました。

「そ、それにしてもシドー王様ゲームとは楽しいものだな！ 亜衣麻衣美衣に教えて貰って良かったぞ」

「我も参加して正解だ」

「共感。中々王様にはなれませんが満足です」

「そうか、なら良かった」

「そう言ってもらうと、このカラオケボックスのパーティールームを抑えたかいたが良かったわ」

「うふふ、素敵なロケーションですよね〜こんな密閉空間に可愛い女の子達やダーリンと一緒になんて……うへへへ……ぐへへへへ」

1人、王様ゲームとは関係ない所に趣旨を置いている気がしますが……

「じゃあ皆、次を始めるぞ」

土道が素晴らしい割り箸を集めたところで、カラオケボックスの扉が勢いよく開かれました。

そこに居たのは――

少女は無表情少女の無双を見た

開かれた扉の向こうに居たのは、折紙さんでした。あつ、これ絶対面倒臭い事になるやつですね……

「お、折紙!? 一体なんでここに!？」

「偶然通りかかった」

いや、絶対嘘ですよね？

「私も混ぜて」

「折紙、俺たちが今なにをしているかわかって……」

「王様ゲーム」

「えっ……え……」

間髪入れずに答える折紙さんに対して土道は困惑してます。

やつぱり、知ってて来ましたよね。

「実は私は熱狂的王様ゲームフリーク。国内に10名しかいないS級ランカーの1人。無茶ぶりトビーと言えはその筋では知らないものはいない」

「そんな物知ったことか！ 貴様の参加など認めぞ!!」

「狭量な女」

「なんだと!」

「良いでは無いか。愚かな挑戦者を受け入れるのもまた王の器よ」

「同意。マスター折紙であれば夕弦は依存ありません。是非S級ランカーの技を見せて頂きたい思います」

「私も別にいいですよ」

「ぐぬぬ、しかし割り箸の数が足りぬでは無いか」

「それなら用意してある」

耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃん、美九さんは折紙さんの参加を許可しますが十香ちゃんは絶対に認めたくないようです。

「なんつー周到な……」

「絶対分かってて準備してますよ、これ。それにしても、無茶ぶりトビーですかこんな所で会えるとは思ってませんでした」

「千夜、知ってるのか?」

「ええ。ちなみに私は不参加の千夜と呼ばれています」

「……今は気にしないでおこう」

「さあ、引いて」

「勝手に進めるな！ 鳶一折紙の参加など私は認めん」

「私これー」

「選択。夕弦はこれにします」

「では、私も」

「はあ、仕方がないわね。私はこれ」

「じゃーよしのんも」

「・・・うむ」

「やれやれ・・・」

「まあ、選ぶしかありませんよ」

十香ちゃんの反抗は虚しく他のメンバーは次々と割り箸を掴みます。

「あなたは どうするの？ 負けるのが怖いのか？」

「貴様、言うに事欠いて！ だったら私も引くぞ！ 引いてやるとも！・・・こつちだ!!」

全員が選んだところでお決まりのセリフを言います。

「「王様だーれだ！」」

「私」

間髪入れずに折紙さんが王様を宣言します。土道はそれに対して微妙な声を上げました。

「6番を引いたものはその場で立ち、自らのスカートを捲り上げて下着を露出させ、そのまま1分キープ」

「「「「!!!」」」」

皆からは驚きの声が続きます。まあ、こんな命令をされたらびつくりしますよね。私では無いので一安心です。あれ？スカートを脱いで事はスカートじゃない土道だった場合どうなるのでしょうか？

「まあ、素敵な命令です」

「ふざけるな!!そんなことが出来るかあ!!」

6番は十香ちゃんだった見たいですね。あと、そのアイドル、今問題発言しましたよね。

「そう、ならばやらなくても構わない。その代わり王様の命令を拒絶した貴女は反逆罪となり、ゲームから除外される」

「除外?抜けるってこと?」

聞いたことのないのか琴里ちゃんが折紙さんに聞き返します。

「そう、それを繰り返し返していき最後に残った者が真の王となる。そして、真の王はゲーム参加者の中から1人を選び1日の間、好きにすることが出来る。それが王様ゲームのエクストラルール、キング・オブ・キングス」

「キング・オブ・キングス……」

「ふふふ、面白くなってきましたね」

士道はまたしても困惑しているようです。そして美九さん、貴女は状況適応能力高すぎではありませんか？

「真の王になれば1人を1日好きに……だど？ 鴛一折紙、何を考えている！」

「ペロリ」

「ひっ！」

折紙さんは士道を見て舌ずりをし、士道は悲鳴を上げます。これは、折紙さんに勝たせてしまうと士道の貞操が危険な気がします。

「命令を執行出来ないのなら、夜刀神十香は反逆罪としてゲームから除外——」

「待て！ やらないとは……言っていない……」

「お、おい十香！ 早まるな！」

「大丈夫だ。シドーを鴛一折紙などに……渡しわせん!!」

そう言い、十香ちゃんはスカートを捲りあげました。下からは可愛らしいショーツがあらわになります。

「十香さんたらなんて可愛らしいお召し物を……あれ？ ダーリン見ないんですか？」
「見られるか!!」

「鶯一折紙!!早く1分数えんか」

「ちっ……いーち……に……さーん……」

「貴様!ゆつくり数えているだろ!!」

「話しかけるからどこまで数えたか分からなくなつた。もう一度やり直す。いーち……」

「貴様!!」

「はいはい、ストップよ。次に行くわよ、次に」

琴里ちゃんが強制的に止めて次に移行します。

「」「王様だーれだ!」「」

「私」

「またですか。それにしても、異様に自分が王様だと察知するのが早いですね……考え過ぎでしょうか……」

「7番はこれをマイクに向かつて読む事。出来ないのなら反逆罪」

「……ひっ……」

「7番は四糸乃ちゃんだつたみたいで、紙を読んだ瞬間顔を真っ赤にして息を詰まらせました。」

「うっはー、やるねえあの子。ちよーつと四糸乃にはへびーかなあー?仕方ない、ここは

よしのんが……」

「もちろん、音読はくじを引いた者が行わねばならない。そのルールを違えた場合、対象は即刻失格となる」

「ああん、いけずう」

よしのんがそこまで言うとは……一体どんな内容を四糸乃ちゃんに読ませようとしているのでしょうか……

「出来ないのなら構わない。その代わり、あなた反逆罪」

「や、やります……」

困ったような顔をしていた四糸乃ちゃんでしたが、意を決してマイクをとりメモを読み上げます。

「わ……わたしは、おとなしい顔を……していますが……ほ、本当は、とても、い、行けない女の子……です。男の人を、見ると……身体が熱くなってきた……その、あの……え、えつちな……気分……な……ります。今も、欲しくて……たまりません。し、土道さんの、ふ、太くて……硬い……その……」

えつろつ?!折紙さん?四糸乃ちゃんになんてもんを読ましているんですか!!?

早く止めないと!!私の純粋でピュアな四糸乃ちゃんが!!!——あれ?純粋と

ピユアって一緒の意味でしたっけ？……ってそんな事はどうでもいいです!!

「四糸乃ちゃん、ストツ……」

「ふ、ふにゆう……」

「四糸乃(ちゃん)!!?」

四糸乃ちゃんはボンツ!と頭から湯気を出して倒れてしまいました。

令音さんが倒れた四糸乃ちゃんを支えて、様子を見てくれます。問題は内容ですね。「彼女は最後まで文章を読み切れなかった。反逆罪として除外する」

淡々とゲームを続ける折紙さん。四糸乃ちゃんの仇、絶対にとつてやります。

「「王様だーれだ!」」

「私」

「また(かよ)(ですか)!?」

本当に何か仕込んでいるんじゃないんですか!?

「次は、1番と2番。2人まとめて片付ける」

私ではないですね。さて、誰が当たったのでしょうか。

「ほおう？片をつけると申したか」

「反応。簡単に言ってくれます」

「耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんの2人が不敵な笑みを浮かべます。

「あつ、こら2人とも、名乗り出たら良いようにされちゃいますよ。」

「くく……言っておくが、我らを十香や四糸乃たちと同格と思わぬことだ。下着の露出や隠語の羅列など、我らの前には児童も同然」

「首肯。むしろ、実は恥ずかしいのに、それを必死に取り繕いながら下着をみせたり、えつちなことを言う耶俱矢は夕弦のご褒美にしかありません」

「あくそれよくわかります」

「ちよ、ちよつと、夕弦！美九まで……！」

さて、この2人に対して無茶ぶりトビーはどんな命令をするのでしょうか。

あと、そのアイドル。今日、暴走しすぎですよ。

「1番と2番は、5分間互いの乳房を揉み合い、その感想を素直に述べ合うこと。10秒以上無言が続いた場合は失格と見なす」

「耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんは余裕と言ったんさ感じに返してますが……大丈夫でしょうか？」

「くく、ではゆくぞ、夕弦」

「首肯。誰か時間を数えていてください」

そう言つて、お互いの胸を揉み合いました。

最初はお互いの胸の大きさや形について褒めあつていましたが、1分を超えたあたりから雲行きが怪しくなつてきました。

「ね．．．．．ねえ、夕弦．．．．．」

「反応。なん．．．．．ですか、耶俱矢」

「直接、触つちや．．．．．駄目？」

「．．．．．思案。皆．．．．．見ています」

「夕弦う．．．．．」

「耶俱矢．．．．．」

ゆるゆり、ゆるゆり、ゆるゆり、さんはいつ！あつ、駄目ですねー！このまま行くとR18指定が入りそうです。

「2人ともストップした方がいいのでは無いのでしょうか？」

「そうだ！2人とも1回落ち着け！」

「う、うん．．．．．き、棄権．．．．．しとく」

「同調．．．．．これ以上続けると、なんだか．．．．．」

はい、夕弦ちゃんそこでストップね。言わなくていいですよ。危なかつたです、ゆる

ゆりを突破して、がちゆりになってR18指定が入るところでした。「命令を最後まで実行できず。ゲームから除外」

折紙さん、エグイですね……

まだまだ、無茶ぶりトビーのターンは続きます。

少女は無表情少女の反則を見た

折紙さんが入ってからの第4回戦目です。

「王様だーれだ！」

「私。次の命令、3番はこの場でブラジャーを脱いで。他の人は絶対に目を瞑ったり、顔を背けたりしてはダメ」

えっと番号は……違いますね。

「お、おい折紙……さすがにそういうのは……ほら、な？」

「羞恥心を煽るのは、キング・オブ・キングスでは基本中の基本。むしろ法に触れてないだけで優しい部類。この程度もクリアできないようでは、真の王などなれはしない」

士道が窘めるように言いますが意味をなしません。

それに、法に触れてないって……法に触れるレベルの命令って逆になんてしよう。

「3番の人、早く名乗り出て。さもなければ反逆罪——」

「……これでいいかな？」

令音さんが器用にブラジャーだけを脱ぎとり机の上に置きます。

・・・なんでしょう。2人の表情は変わっていないのに火花が散っているエフェクトが見えます。見えるのは私だけでしょか？

「・・・これで終わりかい？」

「上等」

「次の命令」

はい、もうお分かり通り王様は折紙さんです。やつぱり、なにか仕込んでますよね？仕込んでないと逆におかしいレベルですよ。44100分の1の確率とか狂ってますよ。

「9番は王様の足を舐めること」

「おいおい、折紙!？」

なんか、ぶっ飛んだ命令も聞き慣れてきました。慣れつつ怖いですね。で、またハズレですか。

「出来ないのなら反逆罪。私はどちらでもいい。9番、やるの？やらないの？」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

あつ、美九さんだ……クリアしましたね、コレ。

「いいんですか？ いいんですよね？ 王様の命令は絶対ですものね？ 折紙さんの……御御足をペロペロしていいんですよね？」

「お、お、落ち着け！ 美九！」

あつ、完全に出来上がってます。士道の声が届いてません。

「美九！ いっきマースっ!!」

「ちよつと待て!! お前、もうちよつと人としてのプライドとか尊厳とかをだな！」

「足つてあれですよね？ 足首から上も含まれますよねふくらはぎや太腿も広義の上では足ですよね!!」

もう、折紙さんの足をしゃぶりつくしそうですね。士道が引つ張つて止めてますが、だんだん折紙さんの足に近づいていきます。凄い執念ですね……

えっ？ 私は止めないのかって？ ハッハッハ……諦めつて肝心だと思っんですよ、私は……

「ペロッ」

美九さんの舌が折紙さんの太ももを舐めます。あつ、まだ舐めようと頑張ってます。

「折紙!! 一応条件を満たしたよな!! 成功だよな!! な!!」

「はあ……構わない……」

あの折紙さんが引いている……これは感心していい物なのでしょうか……

「「王様だーれだ!」」

「5番ー」

「おい、ちよつと待て!いくら何でもこんなに連続して折紙ばかり王様になるわけないだろう!!」

「くじ引きだから仕方がない」

「そうですねー(棒)仕方がないですねー(棒)308700分の1の確率だけど、クジだからねー(棒)」

そして、私は5番ではありません。

「5番は穿いている下着を」

「ふん……」

命令の途中で琴里ちゃんが鼻を鳴らしました。5番は琴里ちゃんのようにです。

「また、パンツね。はいはい。別に構わないわよ。同性ばかりだし、唯一の男は士道だものね」

あく、なんでこのメンバーはフラグをたてたがるのでしょうか？そんなこと言ったら折紙さんが言いかけの命令を過激なものにしますよ。

「……………2番に脱がされる」

「「「はあ?」」」

やつぱり、そうなりましたか。そして、運の悪いことに2番は士道です。妹のパンツを脱がそうとする兄……………これもう事案ですよ。法律スレスレどころかアウトですよ。

「なっ、なななによそれっ！妹に何しようとしているのよ変態っ!!」

「お、俺に言ったって仕方ねえだろがっ!!」

「別に、出来ないのなら構わない」

淡々という折紙さんに対して琴里ちゃんは悔しそうな顔をします。そして、しばらくして決心したような顔をしました。

「……………や、やりなさいよ……………」

「は……………?お、おい、琴里」

「いいから、やれつての!ふ、ふん、何意識してんのよ。別にこれくらいなんともないし……………」

強がりなセリフを吐きながら士道の手を掴みゆつくりと自分のスカートの中に誘導

していきます。

「ちよ、ちよつと待てつて！」

「うるさいっ！変に意識するなカボチャ!!」

「ああつ、もうっ……」

士道も覚悟を決めてスカートに手を入れていきます。あつ、士道、顎を蹴られました。変な所を触ったみたいです。

そして、ポジションが困ったみたいで士道の手が、ゆつくり下がっていきます。しかし、琴里ちゃんのスカートの裾から白い布が見え始めたとき……

「……や、やっぱ無理……」

やっぱ無理でしたね……これで、士道と琴里ちゃんが除外ですね。

「王様の命令は絶対。あなたを反逆罪としてゲームから除外する」

「う、うう……」

「これで、5人片がついた」

四糸乃ちゃん、耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃん、琴里ちゃん、士道ですね。

残りは、私、折紙さん、十香ちゃん、令音さんの4人ですか。大丈夫ですかね？

「「王様だーれだ!」」

「わたー」

「ちよつと待ったあ!」

次のゲームが開始され、また折紙さんが王様なろうとした瞬間、琴里ちゃんが待ったをかけました。

「琴里ちゃん?」

「どうしたんだ、琴里?」

「……してやられたわ。これを見てちょうだい」

琴里ちゃんの手には先程まで使われていた割り箸です。琴里ちゃんはそれをパキッと折ります。中から機械のようなものがでてきました。

「なんだ、こりゃ!」

「なんか機械みたいのがいっぱい入ってる!」

「ほー知らなかつたぞ。割り箸とはこんな精密機器だったとは」

「指摘。普通の割り箸には入ってません」

「えっ?し、知っていたぞそのくらい」

「あまりにも王様ばかり引くから調べさせてもらったわ。恐らく、これは電子タグのよ

うな物ね」

「なるほど。これで細工をしてたんですね」

「そうでなければ折紙さんは1234800分の1を引き当てた事になりますし、当然
といえば当然の結果ですね」

「つまり、鳶一折紙はズルをしていたということか!!」

「ありやくこれは言い逃れ出来ないね。折紙ちゃん」

「なんの事か分からない」

「ここまで来て、とぼけるとは……」

「貴様こそ失格だ!ここから出ていけ!!」

「そんな事をしても意味ないわ。ゲームを続けましょう。クジを作り直すことと、失格
になったメンバーの復活、それと……引いたくじの番号を公開するって条件を飲
むなら、あえて貴方の責任は問わないわ。どう?」

「構わない」

あつ、琴里ちゃんの顔が悪い顔になってます。仕返しがしたいんですね。まあ、折紙
さんに非がありますし、私はあえて止めません。

「何を言ってるのだ琴里!こんなやつ残しておくことは……」

「十香。あなたやられっぱなしでいいの?」

「……………っ！」

「少なくとも私は我慢ならないわ。私が受けた恥辱を彼女にも味わわせてやらなきや気が済まない……………！」

わあ……………オコだ、激おこだ……………

「わかった……………私もそうさせてもらう!!」

こうして、彼女達の折紙さんへの反撃が始まりました。

少女は王様ゲームに参加したかった

「「「王様だーれだ!」」」

皆の目には反撃の意思が宿っています。折紙さんにやり返したいという意味が感じ取れます。これは、もう別のゲームですね。さて、王様は——

「よしっ! 私だ!!」

「ナイス十香。皆、番号を見せて」

あつ、そういうルールに変更になったんでしたね。どれだけ折紙さんに仕返ししたいんですか。でもこれ、もし折紙さんが王様を引いたら土道の貞操が本格的に危ないですね。まあ、10分の1ですから……いや、十分ありえる確率ですね。

「ふふん、鶯一折紙は1番か。私にさせた事をそのまま返させてもらう。1番は皆の前で1分間下穿きを晒すがいい! ふ、ふふふ! どうだ鶯一折紙! 皆の前でスカートを捲るなど、考えただけでも恥ずかしいだろ! さらに下穿きを1分もの間晒し続けるなど……さあ! どうする!? 恥ずかしいのならば止めても——」

「ほあ!?!」

十香ちゃんがそこまで言った瞬間土道が変な声を上げました。折紙さんがスカート

をなんの躊躇いもなく捲り上げたからです。しかも、わざわざ士道の方を向いて。

「なっ……き、貴様！そんな事をして恥ずかしくないのか!」

「命令したのは、あなたのはず」

「そ、それはそうだが……」

「士道。目を開けて。恥ずかしくて恥ずかしくてたまらないけど、王様の命令ならば仕方ない」

「ま、待て貴様！私はそんな命令を下した覚えはないぞ！」

「見て、士道。しっかりと見て。間近で見て」

「こ、こら！シドーに近づくな！」

折紙さんイキイキしてますね。ここぞとばかりに士道へアタックを仕掛けるとは……羞恥心を何処に忘れてきたのでしょうか？

次の王様は四糸乃ちゃんでした。ちなみに折紙さんは1番です。

「んっふっふ、それじゃあ四糸乃の無念を晴らそうかなあ。———よしのんの語彙を振り絞ったこの文面を大音量で呼んでもらうよ！1番の子にね！」

よしのんが語彙を振り絞った：：：なかなかエグい文面になってそうですね：：：
 「―――私はどうしようもない変態女です。士道の???を想像して毎晩???を???てま
 す。でも、もうそんなのじゃ満足出来ません。もう我慢の限界なんです。お願いしま
 す。どうかこの哀れな雌豚の???に、貴方の雄々しい???を???して滅茶苦茶にして下さい。
 もっと。もっと激しく。ああ、???が、???で、―――」

本当に羞恥心どうしたのでしょうか。折紙さんより他のみんなが恥ずかしがってしま
 ってますよ。まさか、折紙さん、本当にこんなこと思っていたりして：：：
 それから、よしのん後でOHANASIがありますからね。純粋でピュアな四糸乃
 ちゃんを守るためです。

「く、くく：：：ようやく来たか、俺らの時代が！」

「首肯。先程は少々氣勢が削がれましたが、ここからが本番です」

「ふ：：：無論命令はこれだ！」

「呼応。1番は王様と3番に胸を5分間揉みしだかれる」

もちろん、1番は折紙さんです。王様と3番が耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんが引いた番

号のようです。

王様を引けなくて耶俱矢ちゃんが少し凹んでいたのは可愛かったです。

「くく……覚悟するが良いぞ折紙よ。俺らが魔性の手管を以いて、御主を快樂の頂へ登らせてくれようぞ」

「微笑。やめると言ってもやめてあげません」

2人とも楽しそうですね。でも、その指をランダムに開いたり閉じたりするのは変態みたいなのでやめた方がいいですよ。

耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんは折紙さんの前後に回り込み胸を揉み始めました。

「くく、ほうら、どうだ、折紙よ」

「……」

「刺激。声を上げてもいいのですよ」

「……」

「が、我慢は身体に毒であるぞ?」

「……」

「強弱。ほら、ここがいいのですか?」

「……」

「なっ、折紙?何か言つてよ」

「……………」

「切実。お願いします。何でもいいので」

「……………」

「ねえ、夕弦。私達下手なのかな……………」

「焦燥。家で練習した方がいいかもしれないね……………」

結局、折紙さんは最後まで無表情で、うめき声ひとつすら出しませんでした。

「……………ん？今度は私か。そうだな……………では1番にブラジャーを脱いでもら……………」

「はい」

「……………随分と早いな」

「……………」

令音さんが王様になり自分にして来た命令をそのまま返して、1番の折紙さんは命令を言われきる前に実行しました。またもや二人の間に火花が飛んでますね。

あつ、折紙さんがブラジャーを土道へ向けて投げました。

「ほわあ!？」

「次」

「次は、私が王様ですか。舐めるのもいいんですけど……やっぱり、舐められたいというのが乙女心ですし」

捨ててしまえ、そんな乙女心。

「ですのでえ、1番の方は王様の足を舐めて下さい。あつ、もちろん足と定義される場所を全てですよ。——折紙さんの可愛らしい舌が私の足を……ぐへ、ぐへへ……」

「ちよつと待とうな美九。せめて太ももだけにしような? な?」

「ダーリンがそうまで言うなら仕方がないですね。では、折紙さん。お願いしますね?」
「ペロツ」

「きゃ〜! いいですね! やっぱり可愛い女の子は最高ですう」

折紙さんは顔1つ変えずにやってのけました。

もうヤダこのアイドル……

「1番のパンツを5番が脱がせる」

「ちよつと待て琴里！5番つて俺じゃねえかよ！」

「そーですよ！脱がす訳なら私がやりますう！」

「女の子が女の子のパンツを脱がしたつてしようがないでしょ？彼女に私と同じ辱めを与えるためには土道にやつて貰うほかないのよ」

「そう言われたつて……」

確かに、そうですね。土道にとっては酷いとばつちりでしょうけど。

あつ、折紙さんが土道に近づいていき、手を取りました。

「土道。王様の命令は絶対。恥ずかしくて死にそうだけど、仕方がない。さあ」

「お、おい、ちよつと待てつて折紙。手を引つ張るなつて！」

「ここ。触つて。もつと強く」

「いや、ちよ！せめて目隠しをしてから！あ、あつ、あ……らあめえええ!!」

土道……南無……

本当に折紙さん強いですね。みんなに集中砲火をされているのにケロッとしています。むしろ、他の人にダメージを与えています。

さて、次の王様は士道ですか。みんなの目からは士道に向かって折紙さんを倒して欲しいと言う思いをひしひしと感じます。本当にあるんでしょうか？折紙さんができない命令。

「あ……………」

士道は考えて考えた結果、何かを思いついたようです。

「……………俺の命令はこうだ。王様がいつていうまで1番と10番は仲良くすること」

1番と10番は……………折紙さんと十香ちゃんですか。

「……………とういこと？」

「いや、どうゆうことって……………言葉通りだよ。1番は10番を嫌ったり喧嘩したりせず、友達になってあげてくれ。できないなら……………反逆罪だ」

「……………」

成程……………普段喧嘩しかない十香ちゃんと折紙さんを仲良くさせる。折紙さん

にはなかなか難しい命令ですね。

「わかった」

「な、何だ貴様。なぜ私の隣に来る」

折紙さんは十香ちゃん隣の隣に同士手を取りぴたっと寄り添うように肩を触れさせました。そして——

「十香」

「……っ!!?」

名前を呼ばれた瞬間。十香ちゃんは全身に鳥肌を浮かばせました。

「な、何を言ってるのだ鳶一折紙!」

「そんな他人行儀な呼び方はやめて。折紙と呼んで。オリリンでも構わない」

「お、オリ……!!」

オリリンって……

「折紙さんが十香さんの手を握ってる……」

「すっごい……私夢見てるのかも?」

「驚嘆。悪夢かもしれないが……」

言いたい放題ですね、君たち。

「シドー……」

ついに、十香ちゃんが士道に助けを求め始めました。まあ、敬遠の仲だった相手が一瞬にこうなったら戸惑いますよね。

「あ、あくなんだ。十香もちよつとだけ折紙と仲良くしてやってくれ」

「う、うう……王様が言うなら仕方がない。お、折紙……」

「やつと名前で呼んでくれ。嬉しい」

「ひい！」

折紙さんが名前を呼ばれてから、十香ちゃんに指を絡ませていきます。それに対して十香ちゃんは悲鳴をこぼしました。

「わあくいいですねぇ〜」

「さすがねぇ……自称でもS級ランカーはダテじゃないってか……」

何故か折紙さんより十香ちゃんの方が無理しているように見えますね。

「今までごめんなさい。ずっと仲良くしたかったのだけど、どうしても勇気が出なかったの。こんな私を許して」

「う、うむ……それは構わんが……」

「これからは心を入れ替える。お願い……十香……私と、とも、友達に……」

あれ？折紙さんの様子が……

「なっ……なっぶしやらべればら」

折紙さんが吐血して倒れた!!いや、吐血したのは幻覚でした。でも、確かに吐血したように見えました。十香ちゃんと仲良くするのが、どれだけ嫌なんですか……

そこで、丁度よくカラオケルームの電話がなり時間が来たことを知らせてきました。琴里ちゃんが電話に出で延長はなしでいいと伝えます。

「じゃあ、そろそろ遅いし、家に帰りましょう。ほら、みんな片付け片付け」
「お、おう。そうだな」

みんなで、マイクをしまったり、ゴミを拾ったりし始めます。

「あ……そうだ土道」

「ん、十香?どうかしたのか?」

「うむ、そういえば、亜衣麻衣美衣もう一つゲームを聞いていたのだ。こちらはもつとマイルドらしい。なあシドー、今度はポツキーゲームというのはしてみないか?」

その瞬間、片付けをしていた皆や、倒れ伏した折紙さんの目に再び猛禽の如き眼光が灯ったのは私のみ間違えではないでしょう。

はあ……また、大変なことになりそうです。

それにしても、王様ゲーム……また、1回も王様になれませんでしたし、1回も命令を指名されませんでしたね……

万由里ジャツジメント 少女は謎の球体を見た

「なんですか、あれ……?」

朝、目が覚めてカーテンを開けるとそこには巨大な球体が浮いていました。よくよく、見てみると霊力の塊のようなものでしたけど一体なんでこんなものが発生しているのでしょうか?

とりあえず、他の精霊の皆や土道、そしてそれ以外の人がどう見えているか確認する必要がありますね。それによって、こちらでも行動を変えなければなりませんし。

まあ、外を見た限りでは騒ぎが起きている訳ではありませんし、普通の人が見えているならASTが出て来ていてもおかしくないですがいけません。なので精霊や霊力に係する人しか見えない可能性がありますね。

とりあえず、それは土道の家へ行けば分かりますね。

士道の家へ行き球体が見えているのは士道だけだと分かりました。一応、私も見えな
いフリをしています。

そして、私、琴里ちゃん、士道はフラクシスナスに移動をしました。

今は、その球体の解析中です。

「それじゃあ士道には、この辺に大きな球体が見えているってわけね」

「ああ」

「人に見えねえ物を見るなんて、流石です兄様。真那はまだ修行が足りねえですね」

「いや、そういうのとは違う気が……」

十香ちゃん誘拐事件の時からDEM社をやめてラタトスクに所属した真那ちゃんも
会話に混ざりだしました。

前は折紙さんやエレンさん、千陽に続き、私にとつての危険な対象でしたがコチラに
ついてくれるなら心強いです。これで攻撃されないと信じたい……

「この船のようにインビジブルをかけて見えないようにしているのでしょいか？」

「だとしたら、士道にだけ見えているのはおかしいでしょうが。DEMの仕業とも考え
にくいし……」

「士道だけに見えるなら霊力じゃないですか？」

まあ、確実に霊力なんですけど。

「千夜姉、どういう意味？」

「士道と他の人が違うことなんて、精霊の力を封印以外だと、体内の霊力の量ぐらいです。結局はどっちも精霊に関することですから霊力と思っただけです。精霊なら普通に見えますしね」

「解析出ました。確かにその座標から球形に放出される微弱な霊波を観測されています」

「本当にあるのね……」

「確認できたのは霊波だけです。物体の有無は断言出来ませんが、何らかの力がそこに集まっているのは間違いないかと……」

「まさか、新しい精霊!？」

いや、それはいいですね。時崎さんが言うには、精霊は皆元人間らしいので、こんな霊力だけから生まれることは無いはず。あつ、でも過去に例外もありましたね。

「……いや、これは、いつけん複雑な波長をしているが要素を分解してみると、十香や四糸乃、八舞姉妹、美九そして琴里、今までシンが封印してきた精霊の霊波に酷似している」

「なんですって!？」

「近似率99.6%解析官の言われる通りです」

そこまでは気が付きませんでした。令音さん、よく気が付きましたね……

「……球体は琴里、君たちの霊力で出来ている可能性がある」

「私達の!？」

「なくんだ、全部、司令のイタズラだったんですか？もく人騒がせなんだから」

神無月さんが琴里ちゃんをつつきます。それに対して琴里ちゃんは神無月さんの指を逆向きに曲げていききました。

痛そうですね……でも、あの人、お礼言ってますね。本当に変態ですね。

「……これは、私の推測だがこの球体は精霊たちの無意識のあらわれなのかもしれない」

「どういうことよ」

「……つまり、君たちのいだいている何らかの感情が形となった物。という事さ。

例えば「……」

「……嫉妬」

何故か恋のライバルに次々と不幸が訪れる。午前2時の女、通称（ネイルツッカー）の椎崎さんがぼつそつと眩きました。

「いきなり何よ椎崎!!」

「す、すみません。で、でも、司令や精霊の皆は心のどこかで土道君を独占したいんじゃない」

ないんかって」

「分かる!!独り占めしたい願望……!近づきたいけど近づけない切なさ……!」

愛が深すぎるがゆえに法律で愛する彼の半径500メートル以内に近づくことを禁じられた、通称〈保護観察処分〉の箕輪さんが椎崎さんの言葉に同調します。

「しかし、ストレスという物は無意識に抱えているものですからね。私もある日、突然、妻が家財道具一式と消え失せてしまったという苦い経験が……」

5回の結婚と離婚を経験した恋愛マスター、通称〈早速きた倦怠期〉の川越さんが自分の経験を語り始めます。

「精霊どうし仲良くしてても、全くないとは言いきれないんじゃないんですかね?皆、士道君が好きなんですし」

「くっ……」

最後に100人の嫁を持つ男、通称〈次元を超える者〉の中津川さんがそう纏めると琴里ちゃんは反論できないのか悔しそうに声を漏らしました。

それにしても、このフラクシスナスのクルーって本当に問題を抱えている人ばかりですね……でも、こんな人達でも優秀なんですよね……本当になんでなのでしょう……

「……………彼らのいうことも一理ある。引き続き球体の調査を進めるとして、並行して精霊達のストレス解消にかかると」

「どうやって?」

「デートじゃないんですか?それをしてる時が一番、皆が楽しそうですし」

「……………千夜の言う通り、1人1人順番に希望通りのデートをしてあげるんだ。その時間、シン、君はその彼女だけの物になる。それが見えない球体にどんな効果を及ぼすかは分からない。ただ、なにもしないよりは良いかと思う。どうする?琴里」

「ほ、他に手がなさそうなら仕方ないでしょ?」

琴里ちゃんはそっぽを向きながらも土道とデートする案を採用しました。嬉しいのか頬が少し上がり、顔が赤くなっています。可愛いですね。

「……………頼んだよ、シン」

令音さんは土道の肩を叩き船から出てきました。

さて、私はどうしましょうか……………

少女は謎の少女との接触を図った

昨日、帰ってから精霊の皆のデートする順番を決めました。耶俱矢ちゃん、美九さん、四糸乃ちゃん、夕弦ちゃん、琴里ちゃん、十香ちゃんという順番になりました。

今日は耶俱矢ちゃんがデートをして、その後を私、十香ちゃん、四糸乃ちゃん、夕弦ちゃんであとを付けていました。

皆は自分のデートの参考にするらしいですが、私にはデートの予定はありませんので他の理由で来ています。その理由は、原因の対象が土道に接触する可能性があるからです。

これだけの霊力が集まっているのです、凜祢みたいに実体のない精霊が生まれる可能性があります。その精霊がなにかを知っているかもしれないのでこうやって監視を続ける予定です。

それにしても・・・耶俱矢ちゃん大丈夫でしょうか？究極にして趣向にして完璧なデートをしようと行って張り切りましたが・・・隠れた名店でオシャレなフレンドのお店に行こうとして何故かラーメン屋に行ってますし、ヤングでナウいプールバーに行こうとして何故かゲームセンターに行っていました。

昨日、一生懸命に雑誌を開いて計画を練っていましたのに……一体、何時の雑誌を引つ張ってきたんでしょうか？多分、数年前のですね……

まあ、土道達は楽しんでますのでデートとしては成功ですね。さて、私も少し遊びましょうか。

「……よしつ、フルコンボです。次は鬼に挑戦しましょうか。あれ？もう一回遊べるドンが出ませんでしたよ？この太鼓は出ないんですか!？」

「……あつ、今叩きましたよ！なんで反応しないんですか!!」

「……小銭が切れましたか……よし、野口！君に決めた！」

そのまま、悔しくてフルコンボ取れるまで続けました。気がついたら他のみんなも帰っていました。

さて、私も帰りましょう。そういえば、感じたことの無い靈力を一瞬、感じたのは気の所為だったのでしょうか？譜面を見るのが忙して見れませんでした。まあ、まだ一人目です次の時見つけましょう。

今日は土道と美九さんのデートです。

流石に今人気のアイドルと男が歩いていたら問題があるということ。土道は土織ちゃんになつていきます。

土織ちゃんは美九さんに連れられて服屋を転々とし、物凄い量の服や帽子などを買っています。流石アイドルお金もつていますね……ここからここまで全部下さいとか初めて聞きましたよ。

シヨツピングは夕方まで続き土道一人で持てる量を遠に超した荷物は琴里ちゃんに頼んでトラックを用意してもらい載せることになりました。

「まだ上載るよ」

「何処？」

「そこ、載る。上」

「「そーれっ」」

「ノルウエー」

あれ……よく見たら積んでいるのフラクシスナスのクルーの面々じゃないですか。ラタトスクつてもう少し人員居ないんでしょうか？

荷物を積んでいる横で士道がウィッグが蒸れたのか外しました。が、すぐに士道が慌ててウィッグをかぶり直します。

士道の目線の先には金色の髪をサイドテールにした白い制服の女の子がいました。しかし、直ぐに消えてしまいます。

……今の子は精霊ですね。霊力の量が精霊以外ありえない量でした。それにしても……あの霊力量、凜祢並に多いですね。凜祢やあの子の霊力は規格外で普通の精霊の十香ちゃん達より俄然多いのです。

やはり、凜祢のような霊力が意思を持った存在なんでしょうか？

まあ、とにかく今回の謎の球体について知っていることがある可能性があります。

〔^{サリエル}靈魂看守〕————〔^{サイ}魂の観測〕〕

先程の霊力を捜し出します。

「見つけました」

私は、霊力の方へ移動しながら、保存してある凜祢の魂に語りかけます。

「それで、あの子をどう思いますか。凜祢」

『うくん、はつきりとは分からないけど多分、私と似た存在なんじゃないかと思うよ』

「やっぱり、そうですか……なら、もし士道が封印をしたら……」

『うん、残念だけど器が無いから私みたいに消えちゃう』

「そうですか……」

『……千夜ちゃん』

「大丈夫です。土道が救えなかった分は私が救ってみせます」

『ふふ、頼もしいね。それじゃあ、私の肉体も早くお願いできるかな?』

「今、それを言いますか!?!……死神でもいいなら今すぐ用意してあげますが?」

『冗談だよ、ゆつくりでいいからね。無理しちゃダメだよ?』

「分かっていますよ。もう少しで突破口が見えそうなんです。あと少しだけ待ってください」

「やい」

『うん。待ってるからね』

話をしている間に目的地に着きました。凛祢の魂をしまい、目の前の女の子に声をかけます。

「少し良いですか?」

「……アンタ精霊?」

「そうですか」

「驚いた。アンタみたいな精霊がいるなんて」

「えっ?」

「それより何か用?」

「えっと、あの球体と貴女について教えてくれませんか？」

「それを聞いてどうするの？」

「えっ？それは、士道をサポートする為に役立てるとか……」

「なら、教えられないわ。これは、システムケルブは五河士道にかせられた試験のようなものだから」

「な、なら貴女は士道を害するつもりはありますか？」

「それも士道しだいよ」

全然教えてくれません。分かったのは、士道がシステムケルブという何らかの試験の最中で、それに失敗した場合この子は士道と敵対するつもりであるという事です。

システムケルブとは一体なんなんでしょうか。試験を受ける条件は？合格方法は？全然わかりません。

「もういいかしら？じゃあ、私は行くから」

「待っててください。最後に貴女の名前は？」

「万由里よ」

そう名前を告げて万由里ちゃんは街の中に消えました。

少女は悪夢に情報提供を求めた

霊力の球体の謎を知っているであろう少女、万由里ちゃんと接触しましたが、あまり情報を得ることが出来ませんでした。

万由里ちゃん、凄い素っ気なかったですね……少し傷つきました。

結局そのまま進展は無く、四糸乃ちゃん、夕弦ちゃん、琴里ちゃんのデートが終わりました。順調に球体は収縮していつているみたいですけど本当にこれでいいんでしょうか……？つて、あれ？外に霊力の反応？これは……土道と時崎さんと万由里ちゃん？

カーテンの隙間から外を見ると土道と時崎さんが話していました。時崎さんは土道をどうこうするつもりは無さそうです。そもそも、私がこんな近くに居るんですからそんな事はしないでしよう。

あつ、そういえば時崎さんもあの球体が見えているのでしょうか？見えているなら何か対策を立てようと動くのがあの人です。自分に不都合がないか？あるならどうするか？などをとことん考えて行動し解決する。それを可能とする力を時崎さんは持っていますからね。

よしっ！明日の朝に時崎さんに会いに行つてシステムケルブについて聞きましよう。
私はそれだけ決めて、明日に備えて眠りにつきました。

「……」と言うわけでシステムケルブについて教えてください」

私は、時崎さんに会いに今は廃ビルの中にいます。

「いきなりいらしたと思つたらその事ですか。それよりも千夜さん？なにか私わたくしに言うことはありませんの？」

「えっと……ご機嫌麗しゆう？」

「何故疑問形なのですか？それに、違いますわ。この前助けて差しあげたでしょう」

「あつ、その事でしたか。はい、その節はお世話になりました」

「まあ、いいですわ……で、システムケルブのことでした？私わたくしはてつきりあのウイザードについて聞きに来たとばかり」

あのウイザード……多分、千陽の事です。私と瓜二つの顔で、曖昧になつている記憶の中の記憶にない呼び方、やーちゃんと私を呼んだ少女。5年前の私に関係している可能性がかなりある存在です。確かに気になります……

「何か知っているのですか？」

「ええ、知っていますわ。まあ、教えるつもりはありませんが」

「そうですか……なら別にいいです」

「あら？随分と諦めがいいんですね」

確かに気になります。しかし、今は今起きている状況に手を打つのが先です。それに、私自身のこととは私自身で解決したいのです。

「改めまして、時崎さん。システムケルブについて教えてください」

「分かりましたわ。システムケルブ、その正体は1つの器に一定量の靈力が集約された際にその器となった者、つまり土道さんがそれだけの靈力を持つに相応しい者かどうかを見極めるために現れる世界のシステムの管理者ですわ」

「もしも相応しくないと判断されたらどうなるんですか？」

「その場合は場合はその器を破壊しに動きますわ」

「なっ!?!つまり、土道を殺すという事ですか!?!そんな事させません!!」

「そんなに焦らなくても大丈夫ですわよ」

話を聞いて飛び出しかけた私を時崎さんが呼び止めます。

「何を言ってるんですか!?!土道が危険なんですよね?それに、土道が死んだら貴女も不都合なのではないですか?」

「だから、落ち着いてくださいまし。システムケルブの方は心配ないでしょう。士道さんは順調にクリアしていますので」

「そ、そうですか……」

精霊の皆とのデート、あれが良かったのでしょうか？

「ただ、一つ心配があるとしたら……彼女が自分の思いに気づいて、いえ気づかなくともその気持ちを抱いてしまうことですよ」

「どういう事ですか……?」

時崎さんの返答の前に、突如霊力の変化を感じました。感じたのは天宮市上空、あの霊力の球体からです。霊力の球体は形を変え、実態を持ちました。その姿は巨大な球体の周囲に左右非対称に色が違う2対の翼と歯車を持ち、そして骨で出来た尾を纏っています。

「なんですか……あれは?」

「あらあら……」

「時崎さん!あれは何ですか!?!」

「あれは、システムケルブの対象を破壊するための天使ですわ。それにしても、桁はずの力を持っていてそうですわね」

「士道は順調にシステムケルブをクリアしていたんじゃないんですか!?!」

「ええ、してましたわ。ただ……千夜さん？土道さんにも言いましたが、人の心は自分でも予期せぬように揺れるもの————彼女自身もこうなるとは思っていなかったでしょう」

「彼女自身？……まさか!?万由里ちゃんの事ですか!?」

産まれて間もない、審査委員側の少女の心の奥底にある気持ちにシステムケルプが反応したっていうんですか!?

なんですか、その初見殺しは!?

「時崎さん、私は行きます。貴女は……?」

「私はここで見ていますわ」

「……そうですか」

「ご安心下さい。土道さんがピンチになれば私も助太刀しますから」

「そうならない事を祈りますよ」

私は暴れている天使のもとへ急ぎました。

少女はまたもや悪役を演じた

万由里ちゃんの天使が暴走を始めました。真ん中にある黒い球体から次々と電撃が放たれ士道達がいる見晴台を破壊していききました。

負けずと十香ちゃんは斬撃、四糸乃ちゃんは氷結、耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんは暴風、美九さんは超音波で応戦し電撃を防いでいました。

このままだと街の方へ被害が広がりそうと思っていると、フラクシスナスのインビジブルが解除され、無数のユグドフォリユウムが天使の方に飛んでいきました。天使を囲むように配置され結界を張り天使を上空に跳ね上げます。そして、すぐさま街の上空に結界を展開しました。

あれ、確か神無月さんが一人で脳を使って動かしているんですよ……あの人の変態などころ以外は基本ハイスペックなんですけど、変態のせいで全てを台無しにしてますね……

結界が張られてから、十香ちゃん、四糸乃ちゃん、耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃんは飛び出し天使への攻撃を始めました。美九さんは士道の護衛のようです。

—————さて、私も参戦しますか。

大鎌に「魂を狩る者」を斬撃に乗せて相手の霊力を削ります。うくん……あんまり効いてなさそうですね……

「む！貴様は真つ黒な奴ではないか！」

「助けてくれて……ありがとう……ごさいます」

「うむ！そなたの活躍、期待しておるぞ！」

「期待。頑張ってください」

わ……みんなの期待が重いです……それにしても、この状況はまずいですね……いくら精霊と言っても皆は力を殆ど出せてない状況ですし、フルパワーを出せるのは私だけ、相手は皆の霊力の塊ときました。せめて、時崎さんの手助けが欲しいです。

フラクシスナスの方でも攻撃の準備をしていたみたいでミストルティンを放ちます。がまるで効いていません。最近、ミストルティンが活躍しているの見てない気がします。いや、威力を疑ってる訳じゃありませんよ？実際、私が当たったら一溜りもないでしょうし。

フラクシスナスを見ながら考え事をして天使から少し目を離していると、いつの間にか万由里ちゃんが捕まっていました。

ちよっと、士道何やっているんですか!?ちゃんと守ってくださいよ!!しかも、天使の

霊力や攻撃力が上がってますよ!!

あと、天使の名前は〈雷霆^{ケルビエル}聖堂〉って言うみたいですね。万由里ちゃんが叫んでいたのでもっとわかりました。

さて、この状況をどう打破しましょうか。せめて、十香ちゃん達が完全体であれば……あつ、そうだ！完全体にしてしまえばいいです。そう考えたら、善は急げです。えつと、士道は……居ました。フラクシスナスの中ですね。

私はフラクシスナスに移動します。入り方は真那ちゃんがスーツを着て出てきた所を逆走していききました。

フラクシスナスの中に入るとクルーと士道、美九さんが居ました。

「真那！万由里を連れ戻すまで待つてくれ！俺が何とかする！アイツを助けさせてくれ！」

「士道?!」

「万由里は！アイツは皆の霊力から生まれた存在なんだ！十香や四糸乃、耶俱矢、夕弦、美九、そして琴里。万由里はお前らみんなの分身なんだ。アイツは言った、自分は役目を終えれば消え去ると、その為だけに生まれたと。消えるために生まれる命なんてあっていいはずがない。あの暴走が万由里の消えたくないという思いなら尚更だ！俺はアイツを……皆を助けたい!!」

「それでこそ士道です」

「なっ!?!」

「へリーパー!?!?なんでフラクシスナスの中に!?!」

フラクシスナスのクルー達は慌てて、琴里ちゃんや美九さんは士道の前に立ちほだかります。

「万由里ちゃんを救います。その為に力を貸してください」

「信じろっていうの?時崎狂三以上に得体の知れないアナタのことを?」

「………決めるは士道です」

「分かった、どうすればいい?」

「士道!?!」

「大丈夫だ。こいつは俺達に被害を加えたことは無いし、この前の十香の時だって協力してくれた。――こちらからも頼む。万由里を助けるために力を貸してくれ」

「ええ、では早速始めます。――【魂コの接続ネクト】」

士道の手を取り霊力を接続します。えつと………あつた、これが十香ちゃん達とのパスですね。

士道の中にある霊力と十香ちゃん達の繋がりを見つけ、それを一時的に拡大させます。それによって、十香ちゃん達の霊装は完全な状態へ戻りました。

「なっ!? 一体何をしたのよ!」

「士道の精霊の皆のパスを一時的に拡大させました。かなり集中力がいるので早めにケリをつけますよ」

「よしっ! 琴里、美九頼むぞ」

「ええ!」

「任してください。ダーリン」

士道達とフラクシスナスから外へ出て外のメンバーと合流します。ちなみに、士道は琴里ちゃんと美九さんに抱えられて空を飛んでいる状態です。

「十香! 皆!」

士道の声に反応した面々が士道の近くへ集合します。

「万由里を助け出す! 協力してくれ」

皆は領き、〈雷霆聖堂^{ケルビエル}〉に突撃していきます。各々が出来る全力を尽くし、そして士道を万由里ちゃんのもとへ届けることが出来ました。そのまま士道は万由里ちゃんを捕らえている檻を破壊し万由里ちゃんに抱えられてみんなのもとへ帰ってきました。

さて、あとは〈雷霆聖堂^{ケルビエル}〉をどうにか……なっ!? なんですかアレ!?

突如、〈雷霆聖堂^{ケルビエル}〉は姿を変えてドリルのような形になりました。そして、ドリルの先端に霊力が集中していきます。

「〈雷霆聖堂〉!?まさか……ラハットヘレヴ」

霊力の充電を終えた次の瞬間、フラクシスナスのミストルティンに似た霊力砲が放たれ山を吹き飛ばしました。

なんですか、あの威力……私の【反転】^{フォーレン}でも返しきれない気がするんですけど……
こんなの、どうすればいいんですか……

「令音!」

『……解析結果が出た。その天使にはまともな攻撃は通用しない。君たちの霊力を一点に集中させることが出来れば、あるいは……』

「そんな!」

ちよつと、琴里ちゃん?何でこつちを見るんですか?いや、無理ですよ。パスを維持しなからそんな事をやるなんて。

私が首を振ると、万由里ちゃんが決心したように十香ちゃんの手を掴みました。すると、私以外の精霊の皆から波動のような力が広がり、十香ちゃんに集結していきます。

「霊力が集まっていく……」

「力が湧いてくる」

「これなら!」

「兄様!天使が!」

打開策を見つけても、〈雷霆聖堂〉には待つつもりは無さそうです。真那ちゃんは真っ先に動き出し、先程より充電時間の少ないラハットヘレヴをテリトリで受けました。そこで、ユニットに限界が来たのかそのまま墜落していききました。

私も、【魂を喰らう者】で靈力を吸収してはいますが……・焼け石に水ですね。これ以上、動くとパスを、保てなくなりますし……・つて！土道!?

「守る！俺が守る！皆を！万由里を！」

土道は〈塵殺公〉をふるい〈雷霆聖堂〉に突撃していきます。しかし、いとも容易く吹き飛ばさせてしまいます。

まだ、力の集中は終わらないんですか!?

「シドー!!」

みんなの靈力の集結が終わり十香ちゃんの靈装が姿を変えます。剣のような翼が生えて、もう一つの剣が姿を現します。

十香ちゃんは土道を助けようと移動します。物凄く早いですがこのままだと間に合いません。ラハットヘレヴが至近距離で放たれてしまいます。

もうダメかと思いましたが、〈雷霆聖堂〉が時計の針が動く音と共に少しの間だけ動きを止めました。その間に、土道は救出されます。

今の力は〈刻々帝〉……・時崎さん。ありがとうございます。

そこからは、十香ちゃんが一人で〈雷霆聖堂^{ケルビエル}〉のラハットヘレヴを切り裂き、倒してしまいました。十香ちゃん、強すぎです!!

まあ、土道と万由里ちゃんがキスしたことによって封印されて〈雷霆聖堂^{ケルビエル}〉が弱体化したこともあるでしょうが。．．．．．本当に土道にデレてましたね。

「万由里! そんな、なんでこんな」

「私は靈力結晶体、封印を施せば消えるのが道理．．．．．でしょう!」

「封印．．．．．? でも、お前は俺とー!」

「であつたばかりじゃ封印なんて出来ないはず．．．．．? あはははつ。ばーか、私はみんなの靈力から生まれたんだよ? アンタの事嫌いなわけないじゃん。．．．．．生まれ
た時から愛してた」

「万由里．．．．．!」

「考えないようにしてたけど、きつと私みんなが羨ましかったんだ．．．．．!」

「待て! 万由里、消えるな!」

「でもね、私もみんなに自慢できることが1つだけあるの。私だけ土道と同じだったんだ」

「同じ?」

「私はもう消えるために生まれた存在じゃない。アンタに会えたから．．．．．それだけ

で………」

「万由里!!」

「ありがとう………土道」

さて、完全に消える前に最後の仕事です。

「—————【魂を狩る者】」

「—————「なっ?!」—————」

万由里ちゃんの魂を捕まえ【魂の記録書】に保存しました。絶対に消えさせませんから。

「リイイイイパアアアアアア!!!」

土道が絶叫します。まあ、私に斬られて消えたようにも見えますよね。

「なんでだ!万由里を救うんじゃないやなかったのかよ!」

「………救いましたよ」

「ふざけるなっ!!」

ここで、この事を話すべきでしょうか。いえ、話すべきではないですね。これ以上深く関わると、バレル可能性が上がります。

「では、私はこれで」

「待てっ!!」

士道達を置き去りにして私はその場から離脱しました。

或守インストール

少女は仮想世界に少年を助けに向かった

万由里ちゃんの騒動から数日後、土道も落ち着いたみたいです。土道は落ち着いたのですけど……

『ねえ、千夜？まだ肉体は用意できないわけ？』

「骸骨の死神でいいですか？」

『良いわけではないですよ？』

『万由里ちゃん、千夜ちゃんも頑張っているから、もう少し待つてあげよ？』

『そんなことないわよ。千夜は、私を封印してから何もしてないじゃない』

『た、確かにそうだけど……』

『いや、凜祢？そこは擁護してくださいよ』

『私もそろそろ土道に会いたいなくなると……』

「こちらにも色々あるんですよ。土道を立ち直らせたり、時崎さんにお礼を言いに行ったり……」

『なんでもいいから、早くしてよね。それじゃあ』

『千夜ちゃん頑張つてね。風邪には気をつけてね』

万由里ちゃんが早く体が欲しいと文句を行ってきます。確かに凜祢の騒動からもう3ヶ月近く経っていますが、仕方がないじゃないですか。立て続けに事件が起こるのですから。

わたしのせいではありません。強いて言うなら土道のせいです。

「お〜い！千夜」

「そおいつ!!」

「危なっ!?!いきなり何するんだよ!!」

「すみません。気がたつていまして」

「それでも、いきなり人に向かって蹴りを放つのはどうかと思うぞ?」

「それで、何か用ですか?」

「ああ、ちよつと匿つてくれないか?」

「犯罪者の肩を持つつもりはありませんが?」

「ちげえよ!十香達から隠れる為に匿つて欲しいんだよ!」

「十香ちゃん達?一体何があつたんですか?」

「それはだな—————」

どうやら、土道は十香ちゃん、折紙さん、耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃん、美九さんに詰

め寄られて誰とデートするかを迫られていたみたいです。つまり、どういうことかと言うと、いつも通りだということです。

「じゃあ、上がってください」

「おう、ありがとうございます」

「待っている間、何かしますか?」

「そうだなー」

土道が帰ってから数時間、琴里ちゃんから電話がかかってきました。

「琴里ちゃん、どうかしましたか?」

「千夜姉!土道がアクシデントにあって大変なの!!」

「アクシデント?何があつたんですか?」

「とにかく説明は後で!今すぐフラクシスナスで回収するから!」

「わかりました」

しばらくすると、フラクシスナスへの転送が始まり艦内へ移動されました。艦内に居るのはフラクシスナスのメンバー、土道に封印された精霊達、そして折紙さんと時崎さ

んです。折紙さんと時崎さん？他のメンバーは分かりますがなぜ2人がここに居るんです？

「皆、集まったわね。それじゃあ、状況を説明するわ。落ち着いて聞いてちょうだい。まず、士道の状態だけど仮想世界に閉じ込められているわ」

なっ!?!仮想世界!!?なんですか、そんなハイテクな物まで出来てきたんですか!?!フラクシスナスの技術 おかしくないですか？

「士道はこの仮想世界でギヤルゲアのシミュレートをしていたの」

ここまで来て、まさかのギヤルゲアですか。いや、なんとなく予想は来ていました。が……もつと、ほら、あるじゃないですか、色々と……

「そして、士道がプレイ中に仮称、人工精霊が現れて仮想世界の管理権を奪い取られたわ。普通は取られるはずがないのだけど……」

「人工精霊？精霊って人工で作れたんですか？」

「それもよく分からないのよ。ただ、このセキュリティは普通の人間には破れないはずだし、それにプログラム自体が霊力を持っている状態なの。それで、仮称として人工精霊と呼んでいるわ」

確か、フラクシスナスのセキュリティは人工知能がやっているでしたっけ？確かに人間の処理速度では突破出来そうにないですが……人工の精霊ですか。

「それで、こちらから手を出すことが出来なくなってから向こうからコンタクトを取ってきたわ。『五河士道を愛するためにこちら側に来て下さい』って。それから何故か私、十香、四糸乃、耶俱矢、夕弦、美九、千夜姉、鳶一折紙、時崎狂三のアクセスが許可されたわ」

なるほど、それで呼ばれたわけですか。

「こちら側からは干渉出来ない、というわけで仮想世界にアクセスする必要があるの。正直、向こうの状況も、相手の目的もわからない。罠である可能性も高いわ」

「問題ないと言った。士道が危険ならば、ここは迅速に行動するべき」

「迷っている暇はありませんね。その人工精霊がDEM産だったら士道がかなり危険ですし」

「そうですね。分からないことを考えても仕方が無いですし……皆さん、士道さんを助けたいのではありませんか？」

「うむ！ゲエムの中に入って、悪いヤツをやっつけて、シドーを助けるのだ！」

「そうですね……貴方達の言う通りよ。令音、準備して」

「……ポットの用意は出来ている。指定された者のタイプは問題ないだろ。だが……現実世界と同じに見えても、中は仮想世界だ。こちらで設計した時点では、恋愛ゲームのための世界。だが、相手が管理権を握っている以上、どんなことでもありうる」

「分かってる。まずは相手の目的、正体を探るわ。その後は……まっ、出たところ負けね。いいじゃない。ギャルゲーだったら、こっちだって散々やってきたのよ。さぁー……私達たちの戦争デートを始めましょう」

私達はポットに入り、仮想世界にダイブしました。

士道、今行きます!!

少女は少女達との愛を論じた

ゲームの世界に入るといつももの天宮市と全く同じ街並みが目に入ります。さらに、視線の奥には土道と見慣れない少女が立っていました。

「いたわ！土道、そいつから離れなさい！」

「琴里!? 離れろって……ちよつと待つてくれーいきなりで、わけが分からないぞ」
琴里ちゃんに続いて私達は土道のもとへ向います。

「その子は危険だわ。このゲームには異常が起きている。その原因はその子よ。で、私達は、そいつに呼び出されて来たわけ」

「シドー! ゲームから助けに来たぞ！」

「ゲームの外からですね。それで土道、怪我? いや、なんともないですか?」

「あらあら、開始早々物騒ですわねえ」

「土道に危害を与えるならただではおかない」

「十香に千夜……それに折紙に狂三まで!? 助けに来たって、どういうことだ? 俺は別に、危ない目にはあつてなんか……」

あれ? 土道、ゲームから出られなくなったことに気がついていないのでしょうか? で

も、外と通信が出来なくなってからだいぶ時間が過ぎていくはずだし……もしかして、外と中で時間の流れが違うのでしょうか？

「し、土道さんは、ゲームの中から出られなくなっているんです。そ、その人の……せいで」

「或守のせい？ あつ、そういえばさつきから琴里や令音さんと通信が切れちゃまっているみたいだけど……」

「ダーリンらしいですう。でも、その子は可愛らしくても敵ですよ。離れた方がいいと思いますう」

「土道、こつちに来て。私の後ろに下がるのが賢明な判断」

「何を言っているのだ鳶一折紙！ シドーは私が守る！ 私の後ろに来るのだ！」

「2人とも喧嘩は後にしてください。あの子がどう動くか分かりませんし……」

「彼女が人工精霊ですか。なかなか可愛らしいではありませんの」

「人工、精霊……？」

「人工、精霊？ それは、なんのことですか？」

あれ？ 人工精霊では無いのでしょうか？ なら、普通のウイルス？ それとも人工知能でしようか？ でも、プログラムに霊力を宿しているのやっぱり精霊……あゝ!! わけがわからなくなってきました!!

「くくく……とほけても無駄だ、偽りの精霊よ！土道の人質に、我らを呼び出しておきなが……今さら言い逃れなどできん相談だな！」

「人質……代価を目的として、拘束すること……ですね。わたしはそれを否定します。わたしは一切、五河士道を拘束していません」

「反論。この仮想世界を支配しているあなたにとって、土道は人質以外のなにもありません」

「わたしは現状、五河士道に対して一切の権限を使用していません」

「どういうことなの？あなたが、私たちを土道を愛……ええつと、とにかく呼び出したんじゃないの？」

今、琴里ちゃん、愛するため場所恥ずかしいのか誤魔化しましたね。素直になればいいのに。でも、そこが琴里ちゃんらしいです。

「そういえば、さつき検索するとか言っていたよな、或守」

「はい。わたしは愛を知るため、五河士道と愛を育むための人材を検索、呼びかけました」

「やつぱり、皆はさつきまでのNPCじゃなくて本当に来てる……んだよな」

あれ？土道私たちのことをNPCと勘違いしていたんですか？さつきまでの、という事はNPCと対話をしたということ……本物と区別がつかないなんてかなり正確

に再現されているんですかね？」

「そうよ、ここにいる全員ね。メンバーも、わざわざそっちから指定があつたわ」

「はい。この世界で五河士道と愛を育む、その可能性かわあると設定されていた方々です」

「つまり、攻略ヒロインとして設定されていた面々というわけですね？」

あれ？自分で言っていて何故か違和感が……

「その通りです。だから、呼びかけたのです。五河士道が愛し、五河士道を愛することができ人間を」

違和感の理由がわかりました。これ、私も攻略ヒロインの中に入っているという事じゃないですか!?!精霊組と士道Loveの折紙さんはいいとして、私が入っているんですか!?!どうせ作ったのは令音さんでしょうけど!!最高難易度キャラとして作ったんでしょうけど!!

「言っておくけど、私はそういうのじゃないわ。あなたが目覚めないと、こっちの業務に差し支えるしね」

「……?では、五河琴里は五河士道を愛してはいないのですか？」

「そつ、それは!いい、妹として……家族、として……愛……その、えつと……」

「では、五河琴里に問います。愛とは、どのようなものなのでしょうか？」

反論に困っている琴里ちゃんに或守ちゃん？が質問します。

愛とは何かですか……

「或守はさ、その答えが欲しいみたいなんだ。どうしても、愛について知りたい……ってことらしい俺も考えてみたんだけど難しいよな。なんとなく、分かっているつもりだったけど、いざ言葉にしようと思うと……困ってさ」

「そうね……」

琴里ちゃんは言いたいけど言えないって感じの顔をします。まあ、難しいですよ。愛にも種類がありますし。寵愛、親愛、友愛、敬愛……それぞれで少しづつ意味も変わりますし、愛自体が感情なので、どうしてもふわっとした物になってしまいます。「他の方々は、どうでしょうか？あなた達にとつての愛とは……なんですか？五河士道を愛している皆さんは愛が分かりますか？愛とは、どういうものなのでしょうか？」

「む、愛というのはよく分からんが、シドーと一緒にいると楽しいのだ！それに、美味しいものをいつも食べさせてくれるしな！」

「十香……俺の価値は飯だけなのか……」

士道、ドンマイです。この答えは、十香ちゃんらしいと言えば十香ちゃんらしいです

けど、もう少し言い方があつたと思いますね．．．うん、十香ちゃんには無理ですね。

「つまり、美味しいものが愛の基準なのですか？それなら、夜刀神十香は例えばきな粉パンを五河士道と同じように愛をしているのですか？」

「うぬ．．．それは、また違うような．．．」

一瞬で論破されてしまいます。でも、十香ちゃんはきな粉パンを愛しているのは間違いないさそうですが．．．

「えっと．．．た、たとえばその人のことを考えると、ドキドキしたり、心が．．．暖かくなったり．．．」

「あはー！四糸乃はいつも、ベットの中で顔真っ赤にして士道君のこと考えているもんねー！」

「．．．っ！」

「心に温度変化が．．．？それは穏やかな気持ちや、多幸感のちやつた表現ですね。けれど、それは愛以外でも得られるのではないのでしょうか」

「うう．．．それは、そうかもしれないですが、他のこととは違って．．．る、よ
うな．．．」

「相手を、自分のものになりたいという気持ちではありませんの？体も心も溶け合って、1

つになって……互いが互いを求めずにはいられなくなる……」

ちよつと、時崎さん？この小説はR—18ではないですよ！概要欄をしっかりと見てく
ださい！！

「ちよつと、健全な高校生には早いんじゃないですかね！」

「まあ、一理あるかもしれないわね」

「うちの妹はなんで共感しちゃたんだよ……」

本当にですよ……

「お前の答えはなんなんだ？」

「そつ、それは……首輪を付けさせて、踏みつけた時に喜ぶ……？」

「なんでそんな妹に育っちゃったんだ……」

誰のせいですか！神無月さんのせいですわね、分かっています。

「では、八舞耶俱矢、八舞夕弦。あなた達はとうですか？」

「くく……つ、愛か。愛とは運命の邂逅。別離を許されぬ魂の半身よ」

「指摘。それは夕弦の事ではありませんか。今聞かれていますのは土道のことです」

「ぬ……土道への愛……我が、求め……えつと所有……物？」

「あら？わたくしと同じですわね。耶俱矢さんも土道さんと1つになりたいんですの
？」

「し、し、し、士道と一つ……そそそ、それはその……夕弦はどう?」
「回答。自分より相手を優先することです」

耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんは意見的には反対な感じになりましたね。

「ダーリンはどんな事があつてもファンでいてくれるって、そう言ってくれましたあ。それはずつと私のことを思ってくれてくれるってことですよねー」

「ファン。支持者ということでしょうか。支持や、忠誠心を持たれているということですか?それは、愛なのでしょうか?」

「言われて見るとなんか違う気がします……」

自分をずつと好きでいてくれる、見ていてくれるという事でもありませんけど、ファンという意味から掘り下げてしまうとかなり意味が変わってしまいますね……
「相手の要望を全て受け入れるのが愛」

折紙さんの答えはすごく偏ってますね。折紙さんらしいと言えば折紙さんらしいですが。時崎さんさえちよつと引いてるのが凄いなと思います。時崎さんも大概ですけど。「魂月千夜。あなたはどうか考えますか?愛とは一体なんですか?」

「そうですね……」

恋は下心、愛は真心と言いますから、愛は真心?いや、少し違いますね……いや、あつてますか?

愛、愛ですか……

「その相手についてとことん求める事……ですかね？」

「あら、千夜さんも、わたくしや耶俱矢さんと一緒ですよ？」

「私を混ぜるなし！」

「いえ、そうではなくて……相手に何かをして欲しいという事でもありませんけど、それと同時に相手がして欲しい事をしてあげたいという気持ちでもあると言いますか……」

「なんででしょう……愛ってこんなに言葉にするのが難しいんですね。やっぱり愛は感情なので実際に体験できれば早いのですが……」

「千夜姉、忘れているかもしれないけどこれ士道に対しての愛の事よ」

「あつ、そうでした。なら、一般的な愛の感情ということでお願ひします」

「おいー！」

「まあ、愛の種類によってしてあげたいの限度が変わるだけですし、あなたがち私が士道に抱いている愛、友愛や親愛という面で見ても間違っていない気もしますが。」

「うーん……一致するものなのかもどうかもよく分からないけどなあ。或守、どうだ？」

「今までの情報から、愛を理解するのは難しいと思われまます」

逆に出来たら凄いですけどね。

「やはり、実際に愛の形成・育成をシミュレートする。その方法で、愛を確認するしかないようです。みなさんに来てもらったのはその可能性を考慮したためです。この世界には愛を育成するイベントが数多く配置されています。シミュレートするにはそれらを使うのが最適だと思います」

「まあ、元々そういう世界だからね。．．．それに付き合わないと、土道と私達もこの世界から返すつもりはないってこと？」

「．．．．．? どういう意味でしょうか？」

「だから、あなたが愛について理解するまで、ここから出られないのかってことよ」

「．．．．．? 質問が理解出来ません」

「いや、ちよつと待て、琴里。或守．．．もしかしてお前は、別に俺たちを閉じ込めたつもりはないんじゃないのか？」

「私の目的はただ一つだけ――愛を知りたいのです」

「．．．．．でも、あなたの存在はイレギュラーよ。本来、いるはずのないキャラクターなの。この状況があなたのせいじゃないなら、なんだっていうの？」

「わたしには分かりません。私も全てのシステムを管理できているわけではありません
ん」

「なあ、琴里。本当に知らないみたいだぞ。そんなに怒っても仕方がないだろ」

士道はまたそうやって無条件に人を信用して……まあ、それが士道のいい所でもありませんけど……悪いところでもありませんね。

「仕方がないわね。どのみち、希望はこの子しかない」

「そうですわねえ……或守さんといいましたか？わたくしたちはどうすればいいのでしょうか？」

「この世界で五河士道と愛の形成・育成すること。私が望むのは、それだけです」

「要するに、いつもと変わらないってことですよねー？ダーリンと甘々な時間を過ごせるならオールオッケーですよー」

「仮想世界の時間が加速されていてよかったわ。何日か閉じ込められても、外では数時間の間経過でしかないはずだし」

「それでは、皆さんよろしく願います」

こうして、私達の愛の形成・育成シミュレートが始まりました。

少女はゲーム内で普段通りすごした

恋について考えたのはつい先程のはずですが今は朝です。気がつくと私はベットの
中で目を覚ましました。或守ちやんが何かしたんでしようか？

その後、琴里ちゃんと連絡を取り今後どうすればいいかを聞きました。琴里ちゃんが
言うには普段通りに過ごせばいいらしいです。なので、とりあえず学校に向かうことに
しました。

学校に登校し、しばらくすると十香ちゃんや折紙さんも登校してきます。他のクラス
メイトもいますがゲームの中なので全員NPCという事になります。とてもそうは見
えないです。物凄い再現度ですね……確かに土道が本物かNPCか分からなかつ
たのも頷けます。

そろそろ、チャイムが鳴りますね。で、なんで土道はまだ来ていないんですか？タマ
ちゃん先生の出席確認がいくらゆつくりでも土道の出席番号はかなり早いので、すぐ呼
ばれてしまいますよ。つと、来たみたいですね。或守ちゃんも一緒みたいです。

「おはようございます、五河君。ギリギリですよお〜？」

「ごめんタマちゃん……じゃなくて岡峰先生」

「本当は遅刻ですよ。でも、走ってきたみたいだから、許してあげます」

「ありがとうございます！」

「ふふ……だって、走って息が乱れて……汗をかいた男子高校生って……ドキドキしますから」

あれは、コンピュータ上の存在。タマちゃん先生本人ではない、限りなく思考は近くても本人ではない。そう考えないと、タマちゃん先生の尊厳が……いや、確かに考えてそうですけど……

「シドー！おはようのーだ！」

「土道、おはよう」

「おはようございます。土道」

「あつ、みんなおはよう。いきなり朝になって、混乱しなかったか？」

「ぬ……いや、それなら大丈夫だぞ。家を出る前に琴里が説明してくれたからな。普段通りに過ごせばいいと教えてくれたのだ！」

「私も琴里ちゃんに聞いてなんとなくは把握しています」

「こちら問題ない。私は土道の隣にいるために、ここに来た」

「そっか……ありがとうな」

「うむ！任せるのだ。シドーは私が守るからな」

そのまま、午前の授業は進んでいきました。或守ちゃんは現実では存在しないで席にちよこんと座って土道を観察していました。或守ちゃんがいて他のNPCは気にならないのかと思いましたが、気にしないような設定になっているようです。

午前の授業が終わり、昼休みになりました。いつも通り、十香ちゃんと折紙さんがどちらが土道と一緒に昼食をとるかで口論を始めました。そこに、耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんと加わっていきます。結局、いつもみんなで食べるんですけどね。

「落ち着け、お前ら！みんなで食べたほうがうまいだろ？机をくっ付けて食べようぜ」

いつも通り、土道がみんなを宥めて全員で食べることを提案します。いつもなら、ここでみんなが諦めて次は誰が土道の隣に座るかを口論し出すのですが、今日は違いました。いつもは居ないメンバーがいたためです。

「五河土道、質問があります」

「うん？どうした？」

「これは、俗に言うとり合いっこ。通称ハーレムと呼ばれる状況なのですか？」

「ハーレム!?!いや、一応状況的にはそう言えないこともない……か? いやいや、やっぱり違うー!」

「違うんですよ。或守ちゃんの言う通りです」

「ちよっ、千夜!?!或守、違うからな?」

「では、五河士道は1人を選択するべきでは？彼女達もそれを望んでいるように見え
ます」

「いや、こんな事でケンカするのはアホらしいだろ。それにな……さつきも言った
通り、ご飯っていうのは、みんなで食べたほうが美味しいもんなんだよ」

「なるほど。ご飯の美味しさは愛よりも優先されるといふ事ですね」

「すごい考え方をしますね……素直過ぎるのか、それとも、ひねくれているのか……
「いや、それはまた違う話だと思うが……それにまあ、言ってみれば何時もの風景
だよ」

「そうですか。いつもの風景ですか」

「そこで会話は途切れ皆は昼食へ移行しました。」

「一応、或守ちゃんの参考になるように士道の行動について補助しておきましょうか。」

「或守ちゃん、さつきの士道の行動に関してですけど……」

「はい。なんででしょうか？」

「士道に1人を選択するべきでは？って言ったけど士道がなぜ選ばないか疑問に思いま
せんでしたか？」

「はい。しかし、それは解決されました。ご飯の美味しさは愛よりも優先されるとい
う事ですね」

「違いますからね!? 言うなれば、選ばないっていう事も愛があるからなんです」
「どういう意味なのでしょう?」

「士道がもし1人を選択した場合選ばなかった人がどうしても出てきます。そうすると、その人が悲しい思いをします。士道はみんなを愛しているとまでは、いかなくとも好きだから傷つけないんですよ」

「それは、俗に言うヘタレとは違うのですか?」

「あつていますけど・・・まあ、そういう考え方もあると覚えておいて下さい」
「なるほど。大変参考になりました」

その後、いつも通り昼食を終えて午後の授業も終わりました。クラスメイトは次々と帰っていき、或守ちゃんは席をたち士道のもとへ向かっていました。

「五河士道。これで学校は終わりですか?」

「ああ、部活と入っていないしな。普段通りだからあんまり面白くなかったか?」

「面白いというのはよく分かりません。ただ、これでは、足りない」

まだ、情報不足ですか。まあ、1日でどうにかなるものではないでしょうですし、氣長に頑張りましたよ。

「私は愛を知りたいです。昼休みの五河士道を取り合う、そして五河士道の選択・・・あれはとても興味深かったと思います。けれど、五河士道が彼女達を選択しませんでし

た。だから、愛は形成されない。私はそう推測します」

「いや、あれを選べって言われても……」

まあ、土道には難しいでしょうね。ヘタレですから。ヘタレですから!!

「五河土道。私にあなたの選択を教えてください。そして見せてくれませんか？」

「見せるって……何を？」

「いつもの日常を離れた、非日常の中でも、五河土道とその相手は同じように惹かれ合うのでしょうか。愛の形を。愛とはなんなのかを。選択の先にある非日常で————」

そう言うと、或守ちゃんは光を纏い、私の意識はその光に飲まれていきました。

少女は中二病になつた

【土道視点】

「五河先生。ちよつと、いいですか？」

「はい、なんですか？」

同僚の岡峰先生に呼びかけられる。いったいなんだろうか？

「昨日の職員会議で話題に出た子がいたじゃないですか。その子、五河先生の話はよく聞くんじゃありませんか。だから、その子に五河先生からビッシつと言ってあげてください」

「えっ？でもー」

「副担任として生徒のケアをお願いしますよ。あと、今日までの提出のプリントも出していないので回収してくださいね。では、私はこの後合コンがあるのでよろしくお願ひしますね」

そう言って、岡峰先生は帰って行ってしまった。仕方がない、探すか。どうせあそこに居るだろう……

屋上の扉を開き外に足を踏み出し、数歩前へ歩いてから振り返り、入口の上を見る。そこには、うちの高校の制服の上にパーカーを羽織った白髪の少女がたたずんでいた。少女の手には包帯が巻かれており、片目は眼帯で隠されていた。

「お〜い、千夜」

「うん？ ああ、土道先生。 やつと、来ましたか」

この少女は魂月千夜。成績は優秀なんだがそれを帳消しにする程に問題行動が多い。「先生が来るのはわかってましたよ。霊が教えてくれましたから」

「……………今、来た事は霊は教えてくれなかったのか？」

「そつ、それは！ この眼帯で私の【死を導く瞳^{イヅイルアイ}】を抑えていたからで」

「それで、前まで付けてなかったのに眼帯なんか付けているのか……………」

そう、今のやり取りでわかるように、少女は中二病なのだ。隣のクラスの〈颯風の巫女〉の八舞耶俱矢と共に教師陣の頭の痛いところである。

「それで、何しに来たんですか？ 私は〈靈魂の導き手〉としての仕事が忙しいんですけど？」

「いや、岡峰先生に今日までのプリントを回収してきてくれて頼まれてな」

「今日までのプリント？ああ、あの神聖文字ヒエログリフで書かれた物ですか。あいにく、私の管轄外のため見送らせてもらいました」

そういう、彼女のポケットから一枚のプリントがこぼれ落ちた。それを、拾って開くと提出が今日を示していた。

「何が神聖文字だよ。ただの英語の復習プリントじゃねえか！」

「……そうとも言いかもしれませんね」

「そうしか言わねえよ……」

軽くプリントに目を通して見るが、間違いや空白が多い。これ、2割もあつてないんじゃないか？

「参考までに聞くが、前回のテストの点数はいくつだった？」

「合計421点でした」

「英語は？」

「……30」

「……今度、補習を開いて貰うか」

「いやです！それなら昆虫食を……いや、そっちの方が嫌ですね。英語を勉強するぐらいなら死にます！」

「そこまで!?というか、中二病の癖して横文字に弱いつてどうなんだ？」

「中二病ちやうし！本当に私には霊を導く役割があります！」

「落ち着け、口調がおかしくなってるぞ」

「それだけ嫌なんだよ……」

「なら、今度個人的に教えてやるよ。千夜の回答見ればある程度苦手傾向が分かるしな」
「土道先生と2人で……?でも、土道先生の時間をとってしまうのでは？」

「元々、副担任なんて仕事少ないし、部活の顧問もしていないからな。それに、大切な教え子に将来の選択肢を潰して欲しくないしな」

「……し、仕方がないですね。土道先生にも先生としての責務がありますからね。受けてあげますよ」

「そこまで、話したところで最終下校時刻の放送が入った。千夜は降りようとその場に立ち上がった。」

「ちよつ！千夜！」

「どうかしましたか？」

「スカート！」

「へ?……きゃあ!?!」

「元々高い所に居て、その場で立ち上がったため俺の視界にスカートの中が入ってしまった。千夜は、自分のミスに気がつきすぐさまスカートを抑えた。」

「……見ました？」

「いや、待て千夜！これは不可抗力だ！」

「つまり、見たんですね。そうですか、そうですか……ふつ、ふふつ、ふふふふふふふふ」

「……千夜？」

「その首、落としてあげますよ。大丈夫です、ちゃんと魂は大切にしますから」

千夜はそう言つて、入口の上から降りて近づいてきた。降りる途中で外した眼帯の下からは、吸い込まれそうな赤い瞳が現れ、こちらを捉えていた。

「千夜、待ってくれ！これは不可抗力で！」

「【首を狩る者】!!」

「ぐっへっ!？」

次の瞬間、鈍い衝撃が首に走った。そのまま、何もわからずにその場に倒れ込む。

「心配しないでください、峰打ちです」

「蹴りのどこに峰があるんだよ……!」

俺に蹴りを入れた千夜は、ゆっくりと近づいてくる。

「土道先生？私は優しいので選ばしてあげます。教育委員会に報告して、首を飛ばされて、刑務所に囚われるか。私に首を飛ばされて、私に魂を囚われるか」

そう千夜はにっこりと微笑んだ。

少女は現状を報告しあつた

．．．．あれ？今のはいつたい、なんだつたんでしようか？ここは．．．．教室？

「普段とは異なる関係、状況で五河士道と選択した対象の反応を観察していました」

今のは或守ちゃんがやつたんですか．．．．

でも、中二病にさせなくても良かったじゃないですか、それに、スカートの中を見られました．．．．うう、恥ずかしい．．．．

「．．．．千夜」

「違いますからね!!何故かあの時は妙にあんなふう演じないと行けない気がして、それに逆らえなかつただけですから!!決して、私の素ではありませんよ!!」

「〔靈魂の導き手〕だつたけ？」

「思い出さなくていいです！忘れてください、今すぐに！さもないと、貴方を殺してから私も死にます!!さっき言つたように首狩ります！」

「分かつた！忘れるから落ち着け」

「本当ですか？でも、やつぱり心配ですね．．．．ここは、やはり強い衝撃で記憶を．．．．」

「忘れるからー！」

ああああああああああああああああああ!! 考えるだけで恥ずかしい!!!

「私先に帰りますから!! 土道も気をつけて帰って来てください!!」

私はその場から脱兎のごとく逃げ出しました。

夕食後、琴里ちゃんの招集により全員が土道の部屋に集まりました。

「というわけで、1日経過したわけだけど、この世界で何か気づいたことはある？」

「うむー！」

琴里ちゃんの問いに対して十香ちゃんが元気よく手を挙げました。

「はい、十香。言ってみて」

「全然元の世界と変わらないのだ! シドゥーの夕餉も弁当もとても美味しかったぞ!」

確かに味覚へのアプローチが凄いです。食べ物を食べる感じに全く違和感がありませんから。

「いいですか？」

「はい、千夜姉」

「今日の放課後に白昼夢みたいなものを見ました。或守ちゃんが起こしたみたいなお口ぶりでしたけど……土道？あれから何か聞いていますか？」

土道にあつた事は言わないでくださいね？と表情で圧をかけながら質問します。

「ああ、その白昼夢みたいなのは或守が発生させているみたいだ。非日常的なシユチュエーションで愛の観測だとか」

「なるほど。イベント的なものってわけね。非日常的なシユチュエーションで愛の観測か……そうねら非日常デートってところかしら？やっぱり、或守がこの世界を支配下に置いている……管理者になつてるのは、間違いないみたいね」

「この世界で使えるかどうかは分かりませんが、私の〈破軍歌姫〉、あの子に試してみましようか？」

〈破軍歌姫〉の洗脳ですか……って、私の〈靈魂看守〉は使えるんでしょうか？後で試しておきましょう。

「……いえ、やめておきましょう。推測通りなら、相手も人工とはいえ、精霊。しかも、今いる世界は相手に完全に掌握されていると考えた方がいいわ。下手に手を出したら、何が起こるかわからない」

「そうですねえ。賢明な判断だと思えますわ。炎の精霊さん」

「あんたに言われると、なんだか腹が立つわね。」

「ケンカはやめてくださいよ?」

「分かつてるわよ、千夜姉。今はそんなこと言つてる場合じゃないからね。明日以降もこの世界について、そして或守について調査、観察を続けましょう」

「そうだよな、今のところ・・・それしかないか」

「じゃあ、解散。みんな油断しないように」

解散とは言葉だけで結局、みんな士道の部屋で話していて、何故か女子会みたいな感じになつています。

その中からそれで私は士道と話をしていました。

「愛の意味って言われても、やっぱり難しいよな」

「そうですね。愛のかたちは人それぞれですし、それによつて意味もその人ごとで変わってきますからね」

「そうだよな・・・或守にはどうやって答えればいいんだろうな、愛について」

「愛つて何なんでしょうね・・・」

「考えてみれば、俺たちを異性とまともに付き合つたことない訳だし、あんまり実感が

無いというか……」

「色んな美少女をとつかえひつかえしているのプレイボーイの土道君が言う事じゃないですね」

「うっ、……それはそれだろ。また、意味が違うというか……あつ」

「どうしました？」

「いや、結婚している人なら愛についてわかるのかな？」

「この中に既婚者はいませんし現状の解決には程遠いですね。もし、フラクシナスから通信がとれてもあのメンバーでは答えられるか微妙ですし……」

「……そうだな」

「まあ、頑張るしかありませんよ」

それから、土道が1階に降りた為、姿が見えなくなつてから、みんなの家捜しをしました。さすがに何も出てきませんでしたけど。

まあ、あつたらあつたで大変ですけど。だって、最低でも令音さんは土道のお宝の位置と種類を把握している事になりますからね。そんなことを土道が知つたら死にます。まあ、最近では電子媒体が多いみたいですし、本当にないんでしょうけど。

しばらくして、本当に解散になりました。連絡の取りやすいということで、全員精霊マンションに住むことになりました。

さて、あと何日でここから出れるのでしょうか……

少女は賑やかに昼食をとった

ゲーム内の2日目になりました。

昨日のうちに〈靈魂看守^{サリエル}〉を試してみて分かったことがあります。まず、「魂の記録書^{ソウルログ}」に記録してある魂、凛祢と万由里ちゃんがいませんでした。さらに、「魂を喰らう者^{タイター}」の吸収分も0になっていきます。つまり、何も触っていない状態になっているということですよ。他の機能も少し変わっていますが、気にするほどではありませんでした。

しかし、私が〈靈魂看守^{サリエル}〉を使えるのは少し不思議ですね。ラタトスクの誰かがそう設定していなければ出来ないはずですよ。……まさか、誰かにバレている？ 少し探らないと行けませんね。あつ、1度凛音の時に令音さんに話しましたっけ？ でも、それはリセットされているはずですよ。……

まあ、それは置いといて、今日も普通に学校へ登校します。ゲームしているのに勉強しに行くってなにか不思議な感じですね。

クラスに入るといつもと違う点がありました。私の隣に席が追加されているのです。

私の席の前は折紙さんで、その横に土道、十香ちゃんと続きます。つまり、土道の後ろの席が出来ているのです。昨日、或守ちゃんが座っていた席は他にあるので誰の席で

しようか? おっと、チャイムがなりましたね。そして、また土道は遅刻ですか。

「しゅ、出席を とりまゝす」

「みんな〜! 元気よく返事してねえ〜!」

私、寝ぼけているんでしょうか? 先生が四糸乃ちゃんに見えます。

「岡峰先生に変わって 今日から担任になった、四糸乃です よろしくお願ひしますっ」

「よしのんだよ〜よろしくねえ〜!」

寝ぼけてはいませんでした、現実でした。

「それと 転校生を紹介します」

「時崎狂三ですわ。皆様よろしくお願ひいたしますわ」

時崎さん、あなたこのクラスに転校してくるの2回目ですよね? 隣に誰が来るかと思ったら貴方ですか

土道を囲むように、十香ちゃん、折紙さん、時崎さん うん、波乱の予感しかしませんね。

まあ、大丈夫でしょう。 何かが立った音がした気が

「ちよつとスマン。俺は、ええつと……と、トイレ」

あつ、土道が逃げました。まあ、あの状況で対処できたら逆にすごいですが、無理ですよね。あれ？或守ちゃんもいませんね。土道について行ったのでしょうか？

さて、私はこつちをまとめますか。さすがにこれ以上は他の生徒の迷惑になるでしょうし。他の生徒はNPCだから気を使わなくていい気もしますが。

「ほら、皆さん。このままだと誰も土道と昼食を取れずに昼休みが終わってしまいますよ。結局、いつも通りみんなで食べる事になるでしょうし、食堂に移動しましょう。ここでは人数が多すぎます。私は土道と或守ちゃんを呼んでくるので、席を取っておいてください」

さて、土道を探しに行きましようか。

「土道、見つけました」

「千夜？どうしてここに？」

「とりあえず、向こうは一旦落ち着きました。行きますよ、或守ちゃんも」

無理やり土道の手を引いて食堂まで連れていきます。食堂の一角には美少女の集ま

りがあり、そこを目指していきます。

「皆さん、土道を連れてきましたよ」

「おお！シドー！こつちだ私の隣に座れ！一緒に昼餉を満喫するのだ！」

「食事には毒味が必要。土道が食べるものは、私が毒味する。安全のためには、それが最適」

「ほら、四糸乃！さつき考えた計画、やろうやろうよー！いつやるのさ！今でしょ！」

「で、でも恥ずかしいよ……」

「んもー！せっかく今日は四糸乃が先生何だから、大人として土道君に『あくん』ってするんでしょ！」

「う、う、恥ずかしい……」

「おお！それ、私もやってみたいのだ！シドー、ほら、これを食べてみる！」

「あら、それはいい考えですね。でも、土道さんには少し刺激が足りないかもしれないわ。ですから、わたくしと口移しはいかがでしょう？」

「それなら、私がやるべき。毒味と兼任することで、効率的な運用が可能。適切に咀嚼したものを口移しにすることで消化吸収も良くなる」

「ここまで来て、まだこんな感じになりますか……もうどうしようもない気がします。どうしたら、この状況を打破出来ますか？教えて！偉い人！スレ立て完了」

！……えっ？ ネット民に解決出来るわけない？ リア充は爆発しろ？ なんかすみませんでした。 ……あれ？ 皆さん、何をそんなに盛り上がっているのですか？ えっ？ 或守ちゃんの提案で料理対決をすることになった？ 勝った人が土道にあくんする権利を得る？

スレ立てして、質問している間に解決したようです。 或守ちゃん、あの状態から抑えるなんて、すごいですね。

せっかくなので、私も参加しましょうか。 さて、なにを作りましたか……

少女は耳かき店に勤めた

（士道視点）

「……か……」

俺は殿町の紹介で耳かき、耳マツサージ専門店に来ていた。今はネット等で耳かき音が流行っているらしく、バイノーラルやら、AMSRやらを1度聞いてみたが確かにリラックス出来た。それで、この耳かき、耳マツサージ専門店に興味を持ち、今日来てみたのだ。殿町が言うには、音だけとは比べ物にならないくらい気持ちがいいらしい。

和風で小さな屋敷のような外観の建物に入り、奥の個室に案内される。畳に襖という最近はあまりみない内装とその匂い、耳かき、耳マツサージ専門店という初めての空間に少し緊張する。

「失礼します」

声とともに襖が開かれ、着物をまとった白髪の少女が部屋にはいつてきた。

「今回の担当になります、魂月千夜です。本日は魂耳庵こんじあんにご来店いただきありがとうございます。どうぞ、ごゆるりとおくつろぎください」

やばい……すげえ可愛いな。

着物の少女に少し緊張しながらも頷き、そのまま話を聞く。

「本店では耳かきのみ、『お掃除コース』、マッサージのみの『揉みほぐしコース』、両方の『贅沢コース』とありますが、本日は『贅沢コース』でよろしかったでしょうか？」

「は、はい」

「かしこまりました。では、さっそく始めていきますので、私の太ももに頭を乗せてください」

「えっ……?」

膝枕されるのは音声では定番だが、まさか本当にして貰えるとは思っていなかった為、思わず声を出してしまった。

「どうしましたか?もしかして、照れているんですか?いいんですよ、遠慮しないでください。膝枕はどのコースでもしますのです。ほら……」

手を引かれて、そのまま膝枕をされる。後頭部に柔らかな感触といい匂いで、既に頭が回らなすがままになってしまう。

「それでは、始めていきます」

ゆっくりと、耳のマッサージが始まった。耳を細く柔らかな指が耳を刺激する。音声だけではなく、感覚もある分、さらに気持ちがいい。殿町がはまるのも納得がいく気持ちよさだ。

「どうですか？力は弱くないですか？」

「もう少し強くても大丈夫です」

「かしこまりました。では————」

次の瞬間、激痛が走った。

「痛だだだだだだだだだだ!!？」

「どうですか？」

「痛いです！」

「よく効いている証拠です」

「いや！すごい痛いんですが!？」

「生きている証拠です」

「こんな事で命を実感したくないですよ！」

「おそれいます」

「褒めてない！もう少し、弱くお願いします！」

「かしこまりました」

そこからは、普通の耳のマッサージだった。5、6分程続けた所でマッサージは終了した。

「次は、耳かきになります」

「あの？すみません」

「はい？どうかされましたか？」

「耳かき棒の持ち方がすごく怖いんですけど……」

具体的に言うと、人を襲う時の包丁の持ち方だ。

「大丈夫です。私、鼓膜を破った事はありませんので」

「何が大丈夫なんですか!？」

「私の耳かき、天に昇るほどって言われるんですよ？」

「気持ちよくてですよね!？生命の危機を感じるんですが!？」

「痛いのは最初だけです」

「痛いのが前提!？すみません!？ここまででいいです!!」

慌てて、起き上がろうとするが何故か起き上がれない。見ると、魂月さんが俺の体が
がっしりと片手で固定していた。

「大事な実験だ……ゲブンゲブン!……お客様をこのまま返すわけにはいき
ませんので」

「今、実験台って言いかけた!絶対、言いかけたでしょ!」

「それでは、ゆっくりとお楽しみください」

「いやあー!!」

少女は料理対決に参加した

「あれ？ここは……」

気がつくとも学校の廊下になっていた。すでに、窓から差し込む陽の色はオレンジになっていました。

確か、授業が終わって帰ろうとして……

「どうやらまた、或守の仕業で非日常デートとやらが発生したらしいな」

本当に急に始まりましたね。今回は、マッサージと耳かきでしたか。ちよつと、楽しかったです。

「し、土道。マッサージ、どうでしたか？気持ちよかったですか？」

「いや、まあ……うん。最初力ぐらいがちようどいいな」

「そうですか……また、やって欲しい時があったら言ってくださいね？他のマッサージも出来ますし、耳かきも」

「ははは……そうだな。ありがとう」

「では、料理対決の時に」

「ああ、また後でな」

士道と別れて、私はそのまま家へ帰りました。

家に帰ってから、みんなで料理勝負に使う買い物に行きました。途中、折紙さんが何か食品売り場ではなく、薬品売り場に行こうとしたり、折紙さんが士道が家のトイレでの眩きを知っていたり、折紙さんが「折紙さんばっかりじゃないですか！自重してほしいものですね……まあ、無理ですよ。」

それぞれ、食品を買い終え家に帰ります。士道の家のキッチンは一つしかないため、皆が精霊マンションで調理をするみたいです。私は家で作りましょうか。

我が家はオール電化！火の扱いが怖い、子供やペットが心配という、その貴方！是非オススメですよ！オール電化なら殆ど火事の心配はありませんので！

さて、材料を持って家に帰りましょうか。……あれ？或守ちゃんはお金がかかるのでしょうか？材料は多めに買ってきましたし（なんせ、ゲームの中だからお金がかからない↓普段よりもいい物を買うしかない！）或守ちゃんも誘ってみましょうか。

「或守ちゃん、或守ちゃんや」

「はい。魂月千夜、なんででしょうか？」

「千夜でいいですよ。或守ちゃんもなにか作りますか？材料はいっぱいありますし、このイベントに参加することで何か『愛』についてのヒントが得られるかもしれませんし」「成程……自ら攻略ヒロインとしてのイベントの経験をすることでの情報収集ですか。分かりました。では、よろしくお願いします。千夜」

「それじゃあ、行きましようか」

私は或守ちゃんの手を取って家に向かいます。

材料を机に置き、手を洗って作業を始めます。或守ちゃんにはある物はなんでも使っていると言っている自分で何かを作り出しました。

さて、私が作るのはフルーツスムージーです。みんな、何か単品で作ってくるでしょうし、どうせなら思考を変えて飲み物を作ろうと思いました。フルーツジュースとも迷いましたが流石にそれは手抜きすぎるかと思いきやスムージーにすることにします。そう言えば、フルーツジュースでフルーツの断面をプリントしているのは100%のジュースらしいです。

用意したのは、今が旬（9月）の林檎です。ちなみに、さんフジと言う高級な甘みが強い林檎と紅玉と言う皮を剥かなくても癖がなく食べれ、とても酸味が強い林檎を用意しました。他にもフルーツを買いましたが使いません！或守ちゃんに全部あげちゃいました。

さて、2つの林檎の他には無調整豆乳を用意しました。折紙さんいわく（盗聴）、土道は十香ちゃんに来てから栄養バランスが崩れ気味らしいです。十香ちゃんはガツガツしたものが好きですし、しょうがないですね。そこで、取り出したるは無調整豆乳！牛乳でもいいんですが、よりヘルシーな豆乳にしました。

さて、さっそく作りましょうか。……えっ？何、或守ちゃん？……ゼラチンがないかって？確かそのこの棚の中にあつたはずですよ？ありましたか？よかったです。

……よし、作りましょうか！

まず、さんフジと紅玉をくし形切りにします。さんフジは皮を剥いて、紅玉はそのままで。数は8：2ぐらいの量ですね。ラップまたはオーブンペーパーを敷いたバットに並べ、ラップをかけて凍らせませす。バットは野球のバットではありませよ？トレイみたいなやつです。

冷凍はそのままでもできますが、変色が気になるので塩水にさつと浸けて、水気をきってから冷凍します。

後は、凍った物と砂糖と豆乳をミキサーにかけて終了です。だから、凍るまで暇です！

「おい、千夜。調子はどうか？」

「土道? どうしましたか?」

冷凍されるのを待っていると土道が訪ねてきました。

「いや、何か出来ることは無いかなって」

「ないですね」

「うっ……暇そうだけど、もう完成したのか?」

「いいえ、今は仕込み中です」

「そうか、楽しみにしてるからな」

「え?」

私の料理を? 楽しみにしている? 土道が?

「なんでですか?」

「そりゃ、何気に千夜の料理って食べたことないし、四糸乃が前に美味しかったって言ったしな」

そう言えば、前に四糸乃ちゃんに料理をふるいましたね。それにしても、土道が楽しみにしてる……なにか変な感じがしますね。何ででしょう? でも、悪い気はしません。

「今回は簡単なものですから、また今度ちゃんとした物を作りますよ」

「おう、じゃあ楽しみにしてるからな。また、後で」

士道が家から出ていき、私一人が取り残されます。しばらくして、気合を入れ直しました。

「よし！張り切ってやりますか！」

「何を張り切るのですか？」

「うわあ!?!或守ちゃん!?!」

「はい。或守です」

そう言えば、いたの忘れていました。

その後、気を取り直して冷凍庫を開けましたが、まだ凍ってなくて、もう一度気を落としました。

……もう、四糸乃ちゃんに凍らしてもらおうかな？

少女は精霊達の料理に見た

料理を完成させて土道の家に移動します。テーブルの上には様々な料理があります。

それにしても、ものすごい量ですね……

「食いきれるかどうかも怪しい量だな、こりや」

「まあ、仕方ないわよ。八人分だもの」

十香ちゃん、折紙さん、四糸乃ちゃん、時崎さん、琴里ちゃん、八舞姉妹、美九さん、そして、私に或守ちゃんの分が置いてあります。なので正確には九人分ですね。

「まあ、中にはそれ以前に食べるかどうか分からないようなものも混じっているみたいだけど……」

「むむ、そんなものを作ったのは一体誰なのだ！」

「十香、言っちゃ悪いが、おまえがその筆頭だよ！これやつぱり外側が焼けてないぞ……中がほとんど生だ」

「ううむ……ちゃんと七輪で焼いたのだが……」

十香ちゃんの料理は……料理と言つていいのでしょうか？モンスターを狩ることで有名な某ゲームに出てきそうな肉塊です。これ、オーブンで焼かないと難しそう

すね。私の家のオープン、かなり大きいんですが、コレ3、4回に分けて焼かないといけなさそうですね……

十香ちゃんの料理の出来を見て、折紙さんが料理なっていないから失格にするべきと言いました。確かに、料理とは言いづらいですね。

さて、そういう折紙さんの料理は——

「野菜の煮物。黒ゴマソース和え」

一見まともそうですね……

「念のために聞いておくが……余計なものを入れすぎたから収集がつかなくなって、真つ黒にすることで誤魔化した……そんなことないよな？」

まあ、心配になりますよね、折紙さんですし。食品売り場ではなく薬品売り場に行くうとしていた、折紙さんですし。

「ゴマだけに」

黒でした（ゴマだけに）。

「やかましいわ！てかこれ、黒ごまの香りに混じって栄養ドリンクによくあるケミカルな甘みと妙な薬膳臭さがある！明らかに危険物だろ！」

「問題ない。精力抜群」

問題しかない。

士道は、テーブルに置いてある肉じゃがを指して、こういうのが料理だと思います。美味しそうな肉じゃがですね。誰が作ったのでしょうか？

「わ……私、です。す、すみません……少し、焦がしてしまつて……」
全然、いいですよ。四糸乃ちゃん。ああ、心がじょうかさされるんじやあ、
「あらあら、わたくしの料理が逆に浮いてしまつておりますわね。思つた以上に張り合
いがなくて拍子抜けですわ」

時崎さんの料理はポトフですか。とても美味しそうですね。そして、士道がサラッと
隠し味にワインを使つていることを見抜きました。

士道つて、料理に関することになると急に鼻が良くなりすぎじゃないですか？

「残念だけど、その料理が士道の口に合うとは限らないわよ？士道の好物は私が一番わ
かつてるんだし」

おつ、琴里ちゃんは妹として自信満々ですね。一体何を作つたんでしょうか？

「トーストに目玉焼きにサラダ……これ、朝食のメニューじゃないか」

「な、何よ……よく食べているでしょ？」

うん、よく食べるからと言って、好きつてわけでもないでしょうに……琴里ちゃ
ん、今日はなんだか少しポンコツになつてますね……

「ふははは。貴様らなど、恐るるに足らず！私と夕弦が丹精込めて作り上げたこの

ザ・マスタープラン
最高傑作に勝るものはない」

「確信。耶俱矢と夕弦が力を合わせれば怖いものなどありません」

八舞姉妹はオムレツに副食としてコンソメスープとごぼうサラダですか。この姉妹も何気になんでも出来ますよね。

さて、紹介していない料理はあと一品。．．．あれ、本当に料理ですか？士道も目を背けちゃってますよ。

「最後は、美九の愛情たっぷりカレーですよ」

カレー．．．匂いは確かにカレー。でも、これは．．．

カレーと呼ばれた物体は、形容しがたい凄惨な色しています。どうしたらこんな色に．．．？

「電話で聞いたみんなの意見を取り入れたら、なんかそうなっちゃいましたー」

成程．．．つまり、色んな人にカレーに何を入れると美味しいか聞いたわけです。カレーの隠し味と言えばチヨコレートやコーヒード豆、ヨーグルトなどがありますし、それぞれの家によって材料が変わってくるでしょう。それを全部、取り入れたらそうなるでしょう！隠し味が喧嘩しちゃって隠しきれませんよ！控えめに言つてカレーがお亡くなりになってます!!誰が作ってもだいたい美味しくなるカレーを殺すとかどんな才能ですか!?

「ほらほら、食べさせてあげますよ。口を開けてください、ダーリン」
死んだカレー・・・拷問かな？

「それなら、私も運ぶ」

薬品の大量に入った煮物・・・拷問かな??

その後、土道は次々と料理を口に押し込まれ完食しました。私は、十香ちゃんのお肉を焼きにキッチンに行っていましたのでしつかりとは知りませんが、1位は或守ちゃんのババロアだったそうです。

ちなみに、私のスモージーは2位でした。

少女は人工精霊の寝顔を見た

料理対決をした次の日。朝、五河家に行きました。琴里ちゃんと十香ちゃんは既に制服に着替えていてリビングにいましたが土道がまだ居ませんでした。

「2人とも、おはようございます。土道はまだですか？」

「ええ、今から起こしに行くつもりよ」

あれ？そう言えば或守ちゃんはどこに行ったのでしょうか？

そんな事を考えながらも、3人で土道の部屋に向かいます。扉を開けベッドの方を見て、私たち3人は驚くことになりました。

「なんじやこりやあああああああつっ!？」

「うわお!?!なんだおい!？」

「土道、これは一体どういう見なの？回答によってはただじゃおかないわよ」

「これは………なんとということだ………!？」

「琴里、十香、千夜………?これ………つて、なにが?！」

土道は現状を理解出来ていないようです。仕方ありませんね。

「土道。それでは、隣を見てみましょうか」

「なにが……えっ?ま、鞠亜……?何してんだ!」

そう、土道の隣では鞠亜ちゃんか寝てい……ちよつと、待つてください。今なんて言いました?或守ちゃんではなくて鞠亜ちゃん?一体どういうことですか?

しかし、そんな事よりも或守ちゃんの寝顔可愛い。写真撮って起きましょう。土道達が無か話してはいますが私は或守ちゃんの寝顔をこのスマホに納めなければなりません(使命感)!!

「……ん。……う。……ふう。……土道、おはようございます」
あつ、起きました。

「ああ、おはよう。起きたばっかで悪いけど、聴きたいことがあるんだが……」

「はい。なんででしょうか?」

「なんでここで寝てんだ?」

「何故……でしようか?」

「土道、あなたやつぱり、無意識のうちに或守を連れ込んで……」

「違うって!……違うよな?」

いや、そこで不安にならないでくださいよ……

そこに、或守ちゃんの助太刀が入ります。

「はい。私が土道のベットに自分で入りました。自発的な行動です」

「なんだと……！シドーと一緒に寝られるとは……羨ましいのだ！」

「うらやま……しい。五河士道を愛している貴方たちは、五河士道と床を共にしたいと考えますか？」

「うむ！きつと寝るときも一緒の方が、嬉しいし、温かいのだ！」

「わつ、私は別にそんなこと……」

「1番一緒に寝ているのは琴里だけだな」

「それは子供の頃の話でしょう!?今はしないわよ、そんなこと。この阿呆兄が変な気を起こしたら困るし！」

「おこさねーよ！」

「……ふうん。あつぞ」

「私は、士道とは寝たいとは思ってませんね。あつ、でも……いえ、それより或守、ではなく鞠亜ちゃん？も十香ちゃんみたいに、士道と一緒に寝たいと思ったのですか？」

「……そうなのでしょうか？愛に関連する行動をシミュレートした…….
はないのでしょうか」

鞠亜ちゃんもよくわかっていない見たいです。まさか、鞠亜ちゃんが士道に恋を!?……そんなわけないですか。いえ、でも士道ですし、もしかしたら…….

「それで、シドーと一緒に寝てどんな感じだったの？嬉しかったか？寝ている時のシドーはどんな感じなの？」

「温かかった……です。……後は、よく分かりません。でも、不快ではありませんでした」

あれ？これマジなやつですか？

「……あのさ、みんな、そろそろ部屋から出て行ってくれないかな……着替えたいし、飯もつくらないと……」

士道の不満？を受けて十香ちゃんは部屋から出ていきました。

「私の行動理由は不明でした。もしかすると……何らかのバグによるものかもしれない」

「バグ……？バグ……か」

バグという単語を受けて、士道はなにか思い出しているような態度をとりました。

「士道？なにか心当たりがあるのですか？」

「うん？いや……大丈夫だ」

うん、嘘ですね。まあ、深くは追求しないでおきましょう。士道の私たちを思つての行動でしょうし。

「……では、私も1階に行っています」

そうやって、鞠亜ちゃんは部屋から出ていきました。今は、私はと士道、琴里ちゃんだけです。

「ほら、2人も早く行けって」

「今までの或守からは、考えにくい行動ね……ねえ士道、なんだかあの子、段々様子が変わって来ていると思わない？」

「そう、かなあ……言われてみれば、そうかもしれないけど」

「私たちの情報を元に成長しているのかもしれないね」

「なんにせよ、変化があるのは悪くないわ。ここから脱出する手がかりになるかもしれないしね。現状、ここから出るには、或守の要求『愛を教える』に答える必要がある。でも、それが可能なのかも、わからない。ただ、或守が予想通りに人工精霊で、そして、精霊の力でこの電脳空間を支配しているなら、もうひとつ手がある。精霊をデレさせる……っていう、ね」

「昨日もそんなこと言っていたな……」

「でも、琴里ちゃん。ここはさつき言った通りゲーム内。士道が仮に鞠亜ちゃんをデレさせてキスをしたとしても封印はできないのではないのですか？」

「かもね。だとしても、デレさせれば、説得も可能になるでしょう」

「成程、それにデレさせれば、鞠亜ちゃんの『愛を教える』も達成出来るのではないです

か？」

「確かにそうね。と言うことで、士道。なるべく、或守の言うことには答えてあげなさい。．．．．．でも、今朝みたいなのは許さないからね。健全にいきなさい」

．．．．．キスをしろと言っている時点で健全じゃないと思うのは私だけですかね？
「．．．．．まあ、できるかはわからないけど、やってみるよ」

「頼んだわよ。ーーーーーじゃ、早く着替えて、朝ごはんお願いな、おにーちゃん」
「りよーかい。まったく．．．．．兄使いの荒い妹だよ．．．．．」

「ついでに、私の分もお願いますね。にーさん」

「お前は妹じゃねえだろ．．．．．」

こうして、ゲーム内での三日目がスタートしました。

少女はもう1人の人工精霊を見た

今日から鞠亜ちゃんは授業を見学者として参加するみたいです。前まではNPCからは居ないものとして認識されないように設定されていましたが、今日から変更したみたいです。

「おい、五河！」

教室に入った瞬間、殿町君が土道に詰め寄って来ました。

「その美少女は一体誰なんだよ!?!見るからに私服だし、転校生ってわけではなさそうだが……」

あつ、そうでした。NPCにも認証できるようになったんですね。それにしても、食いつき方が凄いですね……

「ええと……学校見学の子ってことになるかな。或守鞠亜だ。——鞠亜、殿町、馬鹿だ」

わく、説明雑。

「殿町、馬鹿と呼べばいいですか?わかりました」

わく、素直。

「俺はそんな名前じゃない！五河！ちゃんと説明してくれ！」

わく、正論。

「まあ、嘘じゃないだろ」

「のおおおおおお！」

わく、鬼畜。．．．うん、もういいや。殿町馬鹿君はそのまま走りさつていきま
した。

「おやおや、五河君、その子は？．．．まさか!!」

「．．．今ならまだ間に合う。親御さんの元に返してやりなさい」

「返しても有罪だけだね。悲しい事件だった．．．」

「人を誘拐犯扱いするな。鞠亜、こいつらは亜衣麻衣美衣だよ」

「ユニットみたいに言わないでくれるかな!？」

「しかも若干、昭和の匂いがするわ．．．もっと新しい感じにしてよ。AMM48と
か」

48人になった!？

「ダメよ！AMMだとクラスのみんなにミサイル迎撃ミサイルだと思われて、ちよつと
恥ずかしいわー」

「普通思われないだろ！どんなクラスだよ!？」

「AMM。ミサイル迎撃ミサイルで間違いないはず」

「いた!?!...つて、折紙か」

折紙さんはAST所属ですし、そういう発想が出てくるのでしょうか？

「今日、鞠亜は学校を見学してみるんだつてさ。よろしくな」

「理解した。かわりに或守鞠亜に要求がしたい」

「はい...なんですか？」

「せつかくの仮想世界。もつと私と土道が接近するイベントを発生させて欲しい。その方が、貴方の要求にも近道のはず」

「それが有用だと判断した場合、ご協力します」

「期待している。年齢制限なら外してもつて構わない」

だから、ダメですつて！...こは、R-15までなんですから！

そして、鞠亜ちゃんの授業見学が始まりました。四糸乃ちゃん大丈夫かな...
何故か不安になってきました。.....あつ、また何かがたつた音が！

「先程の英文ですが、誤用があるのではないのでしょうか？」

「え、ふえ．．．．．？あ、あの．．．．．一応、教本通りで．．．．．」
「鞆亜！」

土道が慌てて両手でバツテンを作つてストップさせます。土道が何かあつたら質問したらいいと言つたらまさかそんな高度なことを言つてくるとわ．．．．．私はさっぱり分かりませんけどね（ドヤア）。

「土道、今の質問に問題がありましたか？」

「あ、えーと、ちよつと内容が高度すぎるというか．．．．．教科書自体の間違ひは指摘しないでやってくれ」

「わかりました、改善してみます。すみません、先生。さきほどの質問ですが、使用している教材を変更してはどうでしょうか。現在使用しているものは海外では版がひとつ古く．．．．．」

「鞆亜！」

「またもや土道がストップをかけます。四糸乃ちゃん涙目になっちゃってますね。」

「こうすれば問題が解決すると考えたのですが．．．．．ダメだったでしょうか？」

「教科書つてそんなに融通が効くもんでもないんだよ．．．．．ほら、四糸乃が若干涙目だろ．．．．．」

「真実を告げてはならないなんて．．．．．授業は難しいですね」

「いや、なんていうかこう……違うんだ。とりあえず俺が悪かった。少し時間をくれ」

士道が身振りでも四糸乃ちゃんに授業を進めるように頼んでいる間に今の問題を少しだけ緩和しておきましょうか。

「鞠亜ちゃん、鞠亜ちゃんや」

「はい………なんででしょうか?」

「教科書はね、教育委員会がこれを教科書として使っていますよ。よって許可がおりた物じゃないとダメなんです。おりてないのは教材っていうんですけれどね。さっき言っていた版は最近出たばかりなんですよね?だから、まだ教育委員会の許可が出てないんですよ。………多分」

「………確かに、まだ教育委員会からの認定を受けていませんでした。成程、先程の質問は解決できました。千夜、ありがとうございます?」

「いえいえ」

さて、士道はこの子にどうやって授業を受けさせるのでしょうか?コンピュータ上の存在でネットに繋がっている訳ですから知識はもの凄く膨大ですし、人としての人格形成が出来たばかりのせいかな不安定ですからね。

「千夜、知恵をかしてくれ」

「いや、頼るんですか」

「すまん。鞠亜が授業に参加できるようにするにはどうすればいいと思う？」

「そうですね……」

「そうだ、鞠亜ちゃんをもっと凄く頭のいいこととして捉えましょう。そうすれば、考え方も変わって……」

「十香ちゃんの分からないところを教えてあげるようにすればいいんじゃないんですか？」

「うん？それじゃあ、授業に参加しているとは言えないんじゃない？先生みただし」

「そんな事ないですよ、生徒どうしの教え合いも立派な授業の一環です。やりませんか？教え学習みたいなこと。ちなみに、これは生徒のコミュニケーション能力を上げる役割もあるので先生の怠慢ではないですよ。まあ、普通やるのは中学生までが多いですが。それに、先生も授業に参加しているみたいなものですし」

「なるほどな、それなら千夜も一緒に教えて貰ったらどうだ？」

「えっ？」

「苦手だろ？英語」

「うっ……わかりました」

そして、私と十香ちゃんは鞠亜ちゃんに四糸乃ちゃんの授業の細かい所を説明しても

らいながら授業を受けました。なんか、前より英語がわかった気がします。

「士道、千夜それに十香……先程はありがとうございました。お陰で授業のあり方を少し知ることが出来ました」

「それなら、よかったですよ」

「うむ、私も或守の説明は助かったのだ」

「また、お願いしたいですね」

「はい。それでは士道、少し気になることかできましたので、しばらく教室を離れます」

「わかった。行ってこい」

「はい、ありがとうございます。それでは……」

鞠亜ちゃんはそくさくと教室から出ていきました。

「あつ、しまった。もう次の授業の時間になるよな？悪い十香、千夜。俺ちよつと行ってくる」

「私も行きます。探すのは人がいた方がいいですし、次の授業はだいたいもうわかってますので」

「お前本当に英語以外は強いよな……じゃあ、頼んだ。十香はもし遅れたら先生に伝えといてくれ」

「うむ、分かったのだ！」

私と土道は鞠亜ちゃんを探しに教室を出ました。

「……………いませんね。土道の方では見つかったのでしょうか？でも、電話は来てませんし……………えっ？私服の女の子と青髪の男子生徒が屋上に行くのを見た？ありがとうございます。名前も知らない女の子。」

情報をもとに屋上に行く途中で殿町馬鹿君とすれ違いました。

「殿町馬鹿君。土道と鞠亜ちゃんは屋上にいました？」

「馬鹿は止め……………いや、千夜に罵倒されていると思うとなんかゾクゾクと……………それで、五河は屋上にいたぞ。或守ちゃんは見てないな」

「わかりました。ありがとうございます」

「おう！千夜のお願いならいつでも聞けぞ」

殿町馬……………いえ、悦ぶので止めましょう。殿町君と別れ屋上に出ると土道と黒髪の少女がいました。

あれは……………鞠亜ちゃん？いえ、見た目こそ似ていますが何か違う存在な気がします。彼女は誰でしょうか？鞠亜ちゃんの姉妹かなにかでしょうか？それとも裏人格

?話している土道はかなり剣幕な表情ですが……

それにしても、あの鞠亜に似た少女……言いづらい、裏或守ちゃんにしましう。裏或守ちゃんの見えた目は二亜さんの霊装状態に似てますね……。黒髪の少女に修道服。鞠亜ちゃんは白いので気が付きませんでした。それに鞠亜ちゃんは何処かメカメカしいですし……

入口の影で2人を見ていると急に裏或守ちゃんが輝きだしました。そして、私の意識はその光に飲まれていきました。

なんか、これ前にもあつたような……

少女は少年の妹になった

【土道視点】

俺がホラー映画を見ていると、お風呂から出てきた妹がドライヤーを持って近づいて来た。いつもしている三つ編みはお風呂上がりのため解いており、水滴が白い髪を滴つて服に落ち、シミを作っていた。

「兄さん、頭を乾かしてください」

「またかよ……いい加減、自分で乾かしたらどうだ？それに、それ俺のジャージなんだが？」

「いいじゃないですか。別に減るものでもないですし……いい」

少し余った袖をプラプラさせながら妹はドライヤーを手渡してくる。

「分かったよ、千夜。ほら、座って」

「はい」

千夜を座らせ手慣れた感じに、髪を乾かしていくと、ドライヤーの風に吹かれて白い髪がなびき、いい匂いが香ってくる。

本当に不思議だよな……同じシャンプーを使っているはずなのに、こんなにも

匂いに差が出るなんて。女の子の不思議だ……

「どうだ？熱くないか？」

「んー、大丈夫ですよ」

気持ちよさそうに目を細めて千夜は返事をした。しばらくして、髪を乾かし終えてドライヤーをしまい、テレビの方へ意識を傾ける。

「兄さん、兄さんや。何を見ているのですか？」

「うん？ホラー映画だけど？」

「今のところ内容は？」

「ある日、町中の人達が急にゾンビ化して、学校の屋上に逃げ込んだ3人の女子生徒が、学校を拠点として生活している。資材確保のためにデパートに行ったら同じ学校の生存者を発見して帰ってきたところ」

「ふーん……面白？」

「まあまあ。ただ、キャラ達が問題を抱え込みすぎて見てるこっちが鬱になりそう」

「そんな、くだらない会話をしながら映画を見続けていると、時計はいつの間にか11:30を指していた。」

「俺は眠いから寝るけど、お前は どうする？」

「あと、ちよつとだから見切つてから寝ます」

「分かった、なるべく早く寝ろよ？」

「はい」

俺は自分の部屋のベッドに入り瞼を下ろした。

しばらくして、ガチャッと扉が開く音がした。寝付きかけていた所だったがその音で目を覚ます。体を起こすと、扉のところには千夜が自分の枕を持って立っていた。

「千夜、どうしたんだ？」

「兄さん……今日、一緒に寝てもいい？」

「どうしたんだ？別にホラー苦手じゃないだろ？」

「だって……し、が……」

「なんだって？」

「虫がうじゃうじゃと出て……」

「あゝ」

千夜の数少ない苦手なもの、虫が映画で画面を埋め尽くすほど出たらしい。たまに、ホラー系で出るけど、確かにあれは気持ち悪いな……

「ダメ．．．．．ですか？」

千夜は、涙目になりながら、枕を握りしめこちらを見てくる。断れるわけないだろ。お兄ちゃんなんだから。お兄ちゃんは無条件に妹に甘いものだ。

「いいぞ」

千夜は、ぱアッと顔を明るくして布団の中に潜り込んできた。

「あれ？今日布団干しましたか？」

「ああ、ふかふかだし、お日様の匂いがするだろ？」

「実際にはダニが死んだ匂いらしいですけどね」

「マジかよ!?!．．．．．そういうのは言って欲しくなかったな．．．．．あれ、千夜はダ

ニは大丈夫なのか？」

「見えませんから」

そんな、話をしていると千夜は安心してきたのかウトウトと船を漕ぎ出した。

「千夜、もう眠いか？」

「はい．．．．．もう、落ち、そう．．．．．です．．．．．」

途切れ途切れながら千夜は答え、俺に手を向けてきた。

「兄さん．．．．．手、繋いでくれませんか？」

「ああ」

千夜の小さな手を繋ぐ。ひんやりとして柔らかい手だった。

「ありがとう……ごさい、ます……」

そして、すぐにでも寝そうになりながら千夜は最後にこう言った。

「おやすみなさい。兄さん」

「ああ、おやすみ」

そして、俺の意識も闇の中に落ちていった。

少女は少年と人工精霊を探した

「……………土道、おかえりなさい」

「……………ただいま」

土道が五河家に帰ってきたのを出迎えます。非日常デートの後のせいで少し気まずいですが。次は妹ですか……………朝、鞠亜ちゃんと一緒に寝ていた事でひと悶着あったのに土道と自然な流れで寝てしまいました。……………まあ、確かに暖かったし、安心しましたが……………

「千夜はこつちに戻っていたんだな」

「はい。さっきの非日常デートが終わったあと気がついたらここにいました。それで、兄さん……………あっ」

「へ？」

「間違えました。忘れてください」

不覚。朝、からかう為に言ったのと違って今回は本気で言い間違えました。

「まあ、土道が本当に兄さんでもよかったです」

「ん？何か言ったか？」

「いえ、なんでもありません。それよりも、士道。鞠亜ちゃんがまだ帰ってきていないです」

「鞠亜が？」

「はい、知りませんか？」

「そう言えば学校でいなくなつて探している途中だったな」

「琴里ちゃんに聞きましたが、もつと学校を見てから帰りたいと言つた見たいです」

「じゃあ、迎えに行くか」

「士道、私も行つていいですか？」

裏或守ちゃんのことにも気になりますし。

「ああ、助かるよ。人手は多い方が嬉しいしな」

「いえ、私は士道ともう少しいたいので（話したいので）」

「そうか。……えっ？」

「どうかしましたか？」

「いや、千夜らしくないなつて思つて？」

「ダメだったでしょうか？」

「い、いや、別にダメじゃないけど……」

士道の様子がおかしいですね？どうしたんでしょうか？

「それでは、行きましようか」

私たちは学校へ向かって歩を進めました。学校へ向かう途中、予定通り鞠亜ちゃんの話になりました。

「千夜は、鞠亜は何を考えているんだと思う？」

「と、いいますと？」

「俺はさ、鞠亜の求めているものを、上手く見せることが出来ているのかなって」

「大丈夫だと思えますよ。士道は士道が思う事を一生懸命成せばいいんです。昔の人も成せばなる成さねば成らぬ何事も成らぬは人の為さぬなりって言ってますし。ただ、取り返しがつかなくなる前に相談ぐらいはしてくださいね？」

「……ありがとうございます。千夜」

裏或守ちゃんについて話す前に学校に着いてしまいました。そして、鞠亜ちゃん捜索を開始した訳ですがすぐに見つかりました。

「見つかってしまいました」

かくれんぼしていましたっけ？

「どうしたんだ、鞠亜。学校に何か気になるものでもあったのか？」

「……はい。気になることがありました」

「気になる事？」

「それよりも……土道が探しに来てくれて、嬉しいです」

鞠亜ちゃんが土道に突然、抱きつきました。あれ？デレ気来ました？

「……ま、鞠亜!? どうしたんだ、突然……!?!」

「やはり、予想通りの反応です」

「……よ、予想通り? どういう事だ?」

「こうすれば、土道が探しに来てくれると思いました。ゲームでは、こうすることです
キツとするものなのでしょう? 土道のそういう反応が、見たかったのです」

「鞠亜……」

デレてはないようですが、鞠亜ちゃんはやはり少しづつ変わってきているみたいで
す。これがいい変化に繋がればいいのですが……それにしても、この2人私を忘
れてイチャイチャしてやがりますね……

「じー」

「はっ! 千夜、違うんだ」

「何が違うんですか? 私は何も言ってますんよ?」

「なんか、目が凄い訴えてきているから!」

「気のせいではないですか? さて、鞠亜ちゃんも見つかりましたし帰って夕飯にしましよう」

私が先導して歩き出すと2人はその後を着いてきます。2人を見ると鞠亜ちゃんが士道の手を取りました。やっぱり、鞠亜ちゃんは変わってきていますね。

それはそうと、私だけ手を繋いでいないというこの状況、もの凄く仲間外れ感がします。私は士道の隣に移動し、鞠亜ちゃんと反対側の士道の手を取りました。

「千夜!」

「仲間外れはいけませんよ? にーさん?」

「それはもういいから!」

仮想世界の夕焼けの中、3人が手を繋いだ影が伸びていました。

少女は仲間とカラオケに行った

鞠亜ちゃん搜索の次の日、ゲーム世界で4日経ちました。

今日は学校は休みで、朝は鞠亜ちゃんの手作り料理を食べました。朝から土道の代わりに鞠亜ちゃんが料理を作っているのを見た時は驚きましたよ。その後、朝ごはんを作った鞠亜ちゃんの頭を土道が撫でて褒めてから、私も頭撫でて合戦が始まったのはまた別の話です。

りようりは、とてもおいしかったです、まる。

「さて、朝から色々あったけど、なんとか飯も終わったし。今日は何をするかな」

「シドー！提案がある！」

十香ちゃんが元氣よく手を挙げます。

「お、元氣がいいな。それなら、夜刀神十香さん。提案をどうぞ」

「うむ。デートに行くのだ！」

「や、やっぱり。言うとは思っていたが……」

「む、むう。駄目か？」

「いや、駄目ってことは無いけど……せつかくみんないるんだし、出来れば大勢で

出来る方がいいんじゃないか？」

今、絶対に途中で誰かを選ばないといけなくなつて揉めるから避けたい、つて思つていましたね。

「おお、成程……」

「それなら、いい提案がある」

次に折紙さんが声を上げる。いい提案？ 碌でもない提案の間違いでは？ えっ？ 決めつけは良くない？ はっはっはっはっ……今までの折紙さん見てたら、そう思うのもしょうがないですよ。

「私と土道がデートをする。残りの者はそれを後ろから眺めている。これで全員が参加できる」

ほら……やっぱり、こうなる。そして、流れるように十香ちゃんとの口論……うん、もう一種の形式美ですね。

結局、琴里ちゃんとの提案でカラオケに行く事になりました。カラオケルームに入るといつかの王様ゲームを思い出しますね。さて、カラオケは久しぶりに来ましたし、何を歌いましょうか。あつ、その前に採点を予約しておかないといけませんね。

機器を捜査し採点を予約しました。誰が一番高得点を取るのでしょうか？ 歌なら、やはり本職である美九さんが、強いでしょうか？ しかし、王様ゲームの時の八舞姉妹の

デイエットも美味かったですし、折紙さんもアカペラをたまちゃん先生に頼まれていた事ありましたね（凜祢ユートピア参照）。十香ちゃんも、天竺祭の時の歌上手でしたし、これは期待できますね。

あつ、耶俱矢ちゃんが美九さんに歌の勝負を挑んで負けました。やっぱり、美九さんが強いですね。持ち曲を歌えば高得点は間違いないはずですし。グループで歌っている曲だと本人でも100点を取りづらいらしいですけど、美九さんはソロですからね。

まあ、カラオケなんて要点さえ掴めば100点なんて楽勝……なん……だと……92点。くっ、ピブラートのかけが弱かったですか。

あつ、土道がトイレから帰ってきましたね。土道が帰ってきてからすぐに、私の隣に座って欲しい合戦が始まります。

選ばれたのは鞠亜ちゃんでした。まあ、妹様をお願い（強制）がありましたので仕方が無いでしょう。

「千夜、一緒に歌わないか？」

「私ですか？ 鞠亜ちゃんを放っておいていいのですか？」

「ああ、鞠亜が俺が誰かと歌っているのを見たいらしくてな」

「それなら、この中から好きな曲選んでください」

私は、持っていたウオークマンを渡します。

「えっと……なあ、千夜。わかる曲全てアニソンなんだが？」

「その中にはアニソンしか入ってませよ？」

「いや、女子なら他にも曲を聞いていると思っただが……」

「土道は女子に無駄な希望を持ちすぎですよ、もう既にわかっていますよね？ 周りにこれだけ濃いメンツが集まっているのですから。それに、これからアニメ好きの精霊も出るかもしれませんし」

二亜さんとか。

「そうだな。よし、じゃあ、これで」

「わかりました。じゃあ、入れておきますね」

こうして、私達は何曲かデュエットで歌いました。

カラオケからの帰り、気がつくくと土道と鞠亜ちゃんはみんなと少し離れたところを歩
きながら話していました。

何を話しているのでしょうか？

「鞠亜……まさか!？」

「もう少しで、わかりそうな気がするんです。だから、私に見せてください」

あつ、この流れは……

私の予想通り、意識が闇に飲まれていきました。飲まれる前、土道と話していた鞠亜ちゃんの表情は笑顔だった気がしました。

少女は角と尻尾を生やした

【土道視点】

「おはようございます」

俺は最初、目を疑った。よく、朝飯を貰いに来る隣人の幼馴染、魂月千夜。今日もいつも通りに我が家にやってきた訳だが、いつもと違うところがあった。

「土道、どうかしましたか?」

彼女の頭には大きな渦巻く角が対に生えており、腰からは悪魔のような黒い尻尾がまるで彼女の動きに同調するように動いていた。

「千夜!?それは、一体どうしたんだ!!」

「日朝（日曜の朝）から大声出さないでください。ただでさえ、今日は起きてから頭が重たいというのに……」

本人はまるで気づいておらず普通に過ごしていた。

「いや、お前一回鏡みてこいって!」

「うるさいですね……わかりました。行けばいいんですね?———なんじゃこりゃー!!!」

叫び声が家全体に響き渡り、その声を聞いて琴里と十香が慌ててやってきた。

「士道！どうかしたのか!？」

「一体何があつたの!？」

「いや、実は……」

そう言つて、事態を説明しようと思つたところで少し考える。これは、あまり大騒ぎにしない方がいいのではないかと。

「いや、なんでも……」 「なんか生えてる!？角！あと尻尾!？生えてる、生え揃つてる！…意思で動く!？」

「む？向こうで千夜がなにか叫んでいるぞ？大丈夫なのか?」

「俺が見てくるから、お前らは朝飯食べていてくれ」

十香達を置いて、洗面所に行くと千夜が鏡の前で固まっていた。そりやあ、急に自分に角や尻尾が生えたら驚くよな。

「し、士道！これ、どうしましょう!？」

そりやあ、不安になるよな。まずは、なんとか落ち着かせないと。

「ちよつと、カツコイイです!」

「……は?」

「いえ、間違えました。このままだとハロウィンなんてまだ先なのに既にコスプレして

いる痛い人になってしまいました」

「そうだな。それにしても、これ本当に本物か？」

「ひゃん!？」

興奮している千夜に合わせて激しく動いていた尻尾を掴むと、千夜がビクンツ! っと反応をした。

「わ、悪い! 痛かったか？」

「い、いえ、ちよつとくすぐたかったです」

さて、そろそろ本題の問題解決に入っていこうか。

「千夜、どうしてそんな姿になったか心当たりはあるか？」

「ありませんね。むしろ、私が聞きたいぐらいです」

「本当か? いかにも禁書って感じの本を読んだり、落ちていたアタツシユケースに入っていた怪しい薬品を飲んでたりしてないよな？」

「してませんよ! 私をなんだと思ってるんですか!？」

本人に記憶がないとしたら理由を見つけてるのは中々難しいぞ。

「あつ、そういうば夢で何か見た気がします!」

「夢? それが何か関係あるのか?」

「あつた気がします……この辺、この辺まで出かかっているんですが……」

そう言って、千夜は自分のへそ辺りを指した。

「いや、殆ど覚えてないじゃねえか！」

「違います。消化が終わりそうなんです」

「そっち!?!」

「あつ、思い……出しました！夢でお前は魔族の家計の子孫だ。先祖返りを起こしたとか言っていました」

成程、先祖返りか……ん？魔族？

「魔族っているのか？」

「さあ？でも、精霊なんて存在もいませんしね」

「確かにな。精霊がいるんだし魔族も居そうだな。他には何か言っていなかったか？」

「えっと、相手の夢の中に入れるとか、魔法少女の生き血を邪神像に備えろとかですかね？」

「なんか、急に殺伐とした内容になったな!?!?つか、魔法少女もいるんだな……」
もう、なんでもありだな……

「魔法少女の血には魔力が含まれているらしいです。それを、邪神像に捧げると魔族にかけられた呪いが解けるそうです」

「成程な。ところで、千夜。何か呪われている気は？」

「ないですね。めちやくちや順風満帆です。それに、御先像なんて家にはないですし」
そんな、話をしていると千夜がジリジリと寄ってきた。その目はまるで獲物を狙う肉食獣だ。

「千夜さん？」

「いや、魔力も霊力も一緒かなと思ひまして。それなら、魔法少女じゃなくても土道の生き血でいい気がして」

「待て！考え直せ！」

「土道、お覚悟を！」

そう言つて、千夜は俺に襲いかかつてきたのだつた。俺はその場から一目散に逃げ出した。

少年は人工精霊に選択を迫られた

【土道視点】

「………、は？」

周囲を見回してみても、同じような景色が続いている。まるで、映画の世界のような、
電脳世界そのものだった。

「どうしたの？そんな驚いた顔をして」

「或守………？おまえ、どうして………」

目の前にいたのは、黒い或守だった。

「………つていうか、ここは一体？」

「………このままじゃ、中途半端で終わってしまう。何も実ることはなくて、いつまでも答えは出ない」

「中途半端？どういう意味だ？」

「もっと、先………もっと先を見せてあげて」

「もっと、先？どういう意味だよ、おい、或守………」

俺の視界は光に飲まれ、気がつくつくと街に戻っていた。

「……って、ここは……カラオケ屋の前、か？元に戻った……のか？」

でも、さっきの場所は一体……一応、元に戻ってこれたみたいだが……

「五河士道。あなたに、決めて欲しいことがあります」
「或守……じゃなくて、鞠亜か？みんなはどうした？決めて欲しい……ことつてなんだ？」

「士道はわたしに愛を教えてくださいます」

「あ、ああ。だから、みんなと一緒に……遊びに行ったり、いろんなシュチュエーションをやったりしているんだよな」

「はい。そうすること、様々な情報を知ることが出来ました。ですが、わたしは……まだ、愛がわかりません」

「うーん……それは、そう……かもな。俺にも、分からないんだし……」
「だから……士道に選んで欲しいのです」

「選ぶ？前にも、言っていたよな、それ。選ぶって……」

「少なくとも、ここに来てくれたみなさんは、五河士道に好意を抱いている。それは、間違いないことです。五河士道の側にいたい、自分のものになりたい……それが、愛ですか？」

「それは……それだけじゃ、ない……とは思う」

「わたしも、そう考えます。けれど、この世界には結実した愛がありません。だから……わたしはその先を知ることが出来ない」

「……先、か。さっきの『或守』も、そんなこと言つてたな。」

「だから、選んでください。愛を誓つた相手になるかどうかを……」

「選ん、なんて……俺には……俺……は……」

「そして……見せてください。わたしに、未来を……愛が、深く結びつくところを。ありえたかもしれない、ありうるかもしれない、五河士道と彼女の……行く末を」

少女は人工精霊のいる生活を始めた

私は布団の中で目を覚まします。

あれ？さっきの昼じやなかったですか？先程、みんなと愛について語ってから気がつくのと、朝になっていました。あれは、夢だったのでしょうか？

そう思いましたが、残念なのが違うようです。学校へ行く用意をして外に出ると、土道に琴里ちゃん、十香ちゃん、四糸乃ちゃん、耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃん、そして、或守ちゃんが外にいました。

或守ちゃんは愛を知るために転校生としてうちのクラスに来るみたいです。四糸乃ちゃんも先生として、琴里ちゃんは飛び級をして雷禪高校に来るみたいです。

その後、通学路の途中で時崎さんと、校門の前で美九さんと合流し学校に入っていきます。時崎さんはまたウチのクラスに戻り、美九さんは交換留学生として三組に来るみたいです。

それにしても、或守ちゃんってあんな表情豊かでしたっけ？さつき話している時はあそこまで人間らしくなかったような気がします。

まあ、気にしても仕方が無いですね。さて、HRまでにいろいろ準備をしましょう。

「み、みなさーん．．．．静かにしてくだ、さい！今日は、転校生を紹介．．．．しますー！」

「或守鞠亜です。よろしくお願いします」

或守ちゃん鞠亜ちゃんって言うんですか。あれ？そう言えば、土道は既にそう呼んでいましたね。いつ知ったのでしょうか？

「しつもん。或守さんはどこから来たんですか？」

殿町君が定番とも言える質問をします。でも、鞠亜ちゃんの場合なんというのでしょうか？仮想世界から？いや、でもここが仮想世界ですし。

「どこから．．．．？それは、土道の家です」

成程、そういう切返りーいや、ちよつと待ってください。それを言っちゃうのはちよつと不味くないですか？

「ど、とういうことだ五河!?またか．．．．まさかまたなのか!？」

「何を言っているのかわかりませんが、そのままの意味です。土道の家で朝食を食べて、一緒に登校してきました」

「どどど、どういう事だ五河!? 説明しろ……説明しろお!」

「二回言うな! えーと……とりあえず鞠亜。今の質問はだな、転校する前にどこに住んでいたか、みたいな意味だったと思うぞ」

「成程。質問の字義通り解釈してはいけない例でしたか。ですが、私を印象づけるには正解だったようです」

正解……なのでしょうか? まあ、本人が満足そうなので気にしませんが。

「五河君の家から……どういふことかしら? しかも朝ごはんも一緒って……」
「すでに親しげに話しているし、これは怪しいわ。十香ちゃんに新たなライブ出現の予感?」

「転校生が転校生してくる前に手を出すとか……マジ引くわー」

「くっ……違うんだ。これは、えつと鞠亜は海外在住で、急に日本に引っ越しが決まったんだよ。でも両親が仕事の都合で引っ越しに間に合わなくてだな。で、鞠亜だけ先に日本に来て、しばらく家で預かることに……」

土道が必死に弁明をしようとするが、日頃の行いからかみんな怪しんでいます。そこで、土道は鞠亜ちゃんに助けを求めました。

「な……な! 鞠亜!」

「……ふむ」

いや、難しいのでは無いでしょうか？鞠亜ちゃん、愛について討論してた時もなんでも本当の事をズバズバ言っちゃてましたし

「……土道の言う通りです。両親の仕事の都合がつくまでという条件で、土道の家でお世話になっています。わたしの両親と、土道の両親が知り合いですので」

「なに!? そうだったのか!？」

いや、なんで事情を知っている十香ちゃんが驚くんですか……それにしても、鞠亜ちゃんってこんなに柔軟な対応が出来たんですね。

その後、普通に授業が始まり進んでいきました。まあ、普通と言っても十香ちゃんと折紙さんがどちらの方が土道の席と近いかで喧嘩したり、時崎さんが土道を誘惑したりしていましたが。いつもの十香ちゃんと折紙さんの喧嘩に時崎さんがプラスされて、土道の周りは凄くカオスでした。鞠亜ちゃん忘れてましたけど、時崎さんもいるんですよ。

鞠亜ちゃんも普通に授業を受けています。ノートを取らずに姿勢を正して黒板を見ている独特な授業態度ですけど。

「え〜つと、じゃあ、この問題わかる人？」

たまちゃん先生が授業の途中で質問をしますけど、高校生にもなって手をあげるような人はいません。

「……………」

「お? おお?! 鞠亜ちゃんがピンツと手をあげました。」

「あ、或守さん。分かりますか?」

「設問に回答する前に、質問があります」

「は、はいっ?! なんでしょう?」

「教科書の文法が記述として乱文になっています。また、意図的に内容を隠している部分も多く、これでは正確な知識を得ることが出来ないのではないのでしょうか」

教科書に対する意見……………やっぱり、あんまり融通が聞いてませんね。先生も困ってあたふたしてしまっています。

士道もさすがにまずいと思ったのか、鞠亜ちゃんに声をかけています。

「……………? ああ、そうでしたね」

士道が声をかけただけで何かに納得したような声をあげます。

「先生、すみません。ここは授業に関係ない点でした。それ自体を問題にするのは間違っていました。私自身、もっと勉学に励みます」

そう言つて、鞠亜ちゃんは席に着きました。やっぱり、さつきまでとは全然違います。かなり人間らしくなっていますね。それに、さつきの『そうでしたね』つて、まるで前に同じことを言われたみたいない方……………何か引つかかりますね……………

そんな事を考えている間に授業は進んでいき、気がつくとも学校が終わっていました。

・・・・あれ、土道は？えっ？鞠亜ちゃんと出ていった？まさか、デート？まあ、鞠亜ちゃんに『愛を教える』と言うのには沿っていますけど・・・相変わらず手が早いですね。

さて、私も帰りますか。

少女は人工精霊の成長を感じた

ゲーム内で過ごす2日目。

いつも通り登校するといつものメンバーと校門の前で出会いました。あれ？でも、士道と鞠亜ちゃんは学校の当番で早く出たつて琴里ちゃんが言っていましたし……あつ、登校デートですか。

みんなも琴里ちゃんからそう聞いていたみたいでワラワラと士道の元へ集まってきました。

「士道くん、いけないなあ。さてはみんなに内緒で、或守ちゃんとお出かけー？」

「……こういうことに関してはやけに鋭いな、よしのんは」

いや、それを言ったら認めたようなものじゃないですか。まあ、誤魔化せそうにもないですけど。

「これはどういうことですか、士道さん」

「ダーリン、酷いですうー。家まで迎えに行ったらもう出ちゃったつて言われたんですよー？それが或守さんと2人でデートしてるなんて」

「士道。釈明を求めろ」

士道の周りを6人の美少女が取り囲む。みなさーん、もう少し中に行けません？校門、殆ど塞いじやつているんですけど？

そんなこんなしてたら、琴里ちゃんも来ました。

「間の悪い男ね……このままだと遅刻するわよ？そんな訳で、私は先に行くわ」
あつ、助けないんですね。

「では、私もこれで……」

「千夜、助けてくれ！」

士道、強く生きてください。

授業はいつもどうり進んでいき、昼休みになりました。今日はみんなで屋上で昼食となります。

「さあ、シドー！昼食の時間だぞ！」

「士道。不覚にも箸を落としてしまった。これはもう士道に食べさせて貰うしかない」
絶対に謀ったでしょう。それにしても……

「し、士道さん。私もおかずを……作ってきました。よかったら、食べて……」

ください」

「土道さん……今日は少し気分が優れませんの。すこし撫でていただけませんか？」

「土道、おしぼり取って」

「……この人数になると、やはり騒々しいですね。」

「我ら八舞の調理に恐れをなすなよ、土道。この究極の一品を分けてやろうではないか」
「注釈。作ったのは殆ど夕弦です。耶俱矢は結局、殆ど盛りつけ他だけです」

「わ、私も働いたしつ。レ、レタスをちぎったり、お惣菜をレンジでチンしたりしたし！」

子供のお手伝いかな？

「はい、ダーリン。あーんしてください」

「請願。土道、夕弦達のも食べてください」

「し、土道さん。私のも、どうぞ……」

「よし、土道くん！いつきにかーっていつちやいなよ！」

「よし、次は私の番なのだ！」

次々とあーんをされる土道はもう無心で食べていました。朝のことでみんなを少し怒らせてしてしまったのでその償いのつもりでしょうか？それにしても、あーんのペー
ス早くありません？土道がハムスターみたいになつてきましたよ。

「土道、無理して他の女の物を食べることは無い。土道の食べる物は、栄養バランスを考えて適量を私が口へん運ぶ」

折紙さん？箸を落としたんじゃありませんでした？

「あら、せつかくですから、わたくしのもいかがでして？」

時崎さんも気分が優れないんじゃないですか？

その後、数分間あーんが続きました。他の男子が見れば羨ましい光景なのかもしれないが、ほぼ休み無しで口に押し込み続けられる、中々の苦行です。

「あれー？ダーリン。もうおしまいですか？」

「何人前くわすつもりだ、お前らっ。もういい、腹いっぱい！ごちそうさまー！」

「では土道。食後には軽い運動が必要。さあ、私と向こうに……」

何が、ですか！

「土道くん。四糸乃せんせーと進路指導室でお話しない？2人つのナイシヨのお話だよー？」

「よ、よしのん！……そんなこと、いつちゃ……」

時崎さん、折紙さん、よしのん。この3人は要注意人物ですね。何度も18禁方面へ持っていくとうします。

「土道、どうぞ」

疲れきった、士道に鞠亜ちゃんがお茶をわたします。なんか、この感じ凜音の時に似てますね。十香ちゃんと折紙さんがお弁当を詰め込みすぎて凜音がお茶を慌てて士道に渡したんでしたっけ。

「指摘。解せません。或守が正妻気取りです」

「そもそも或守は、さつきからずつとちやつかり士道の隣を占領していてずるいじゃん！」

そう言えば、ちやつかり士道の隣を占領していましたね。あーん、には参加してませんでした。

「わたしは、士道のことを考えて行動しているだけです」

「なるほど……確かに、今のは絶妙なタイミングでしたわね」

「みなさんが集まれば、こうなるのは明白でした。誰か一人を鼻屑できないのが士道ですから」

「ぐっ……なんだ、この余裕は」

「驚愕。ポイントの稼ぎ方を心得ています」

そうですね。今の行動は私的にもポイント高い！それにしても、一日でここまで士道について把握するとは……

「なんだか、すごーく距離が近い感じですよ」

「はい、それは間違いありません。今朝も一緒に登校したのもそうですが、朝、目覚めたときも一緒でしたので」

思わぬタイミングで鞠垂ちゃんが爆弾を投下しました。ただの爆弾ではなく、核級です。

朝、一緒に起きた？つまり……朝チュン？いや、ヘタレの土道です。そんなはずは……

「土道さん……どういうことですか？」

「違うんだ、四糸乃。誤解しないでくれ……」

「土道。私は責めるつもりはない。ただし、平等を期するため、私とも朝の情事をするべき」

「してねえよ！別になんでもないんだって。何も起こってはいないだ」

まあ、そうですね。

「そもそも先程のみなさんは自分の欲求ばかり優先して、土道のことを考えていません。そこも気遣うべきかと」

うわあ……的確な正論。誰もその事に反論できません。

「でも、それとダーリンと一緒に寝た事は話が別じゃないですかー？」

美九さんの苦し紛れの反論から、また口論が再開しました。

ワーワーギャーギャー

「……………いつもどうり收拾つかなくなつて来ましたね。

「こ、琴里つ、千夜、助けてくれ……………」

土道がこつちに助けを求めてきますが、琴里ちゃんはどうするのでしょうか。朝は見捨てましたけど。

「じゃ、おにーちゃん。あんまりやっていると遅刻しちゃうよー？私、先に教室帰るからね」

流れるように見捨てましたよ。なら、私も……………」

「土道、フアイトですよ！」

私にも見捨てられたと分かった土道は一目散に逃げ出しました。

「あつ、待つのだシドー！」

「待つて、土道。それと、布団に潜り込んでいい日は枕を縦にしておいて」

「……………それ、どこで確認するんですか？」

「逃しはせんぞ。土道の所有権は我ら八舞にありつ」

「追走。どこまでも、追います。土道」

「し、土道さん、待つてください」

「ああん、ダーリン。逃げてても無駄ですよー」

「全く、騒々しいですわね……」

そして、屋上には私と鞠亜ちゃんだけが取り残されました。

士道は休み時間だけでなく授業中まで使つてみんなのご機嫌取りをしていました。その後、放課後は鞠亜ちゃんとデートに行つたみたいです。全く、モテる男は辛いですね（棒）。

それにしても、やはり鞠亜ちゃんの成長は著しいですね。1日目である程度の常識を弁え、2日目では相手のことを心遣うなんて。

この調子で行けば、ここから出られる日はそう遠くないですね。

少女は仲間と遊園地で遊んだ

ゲーム内で過ごす4日目。

昨日は〈靈魂看守〉で試してみたいことがあり、休日だった為ほとんど家にいました。その間に、土道と鞠亜ちゃん、十香ちゃん、耶俱矢ちゃん、時崎さん、美九さんが一緒にシヨピングに行つたみたいです。その時に鞠亜ちゃんの服をコーディネートしたみたいでその写真が土道から届きました。めちゃくちゃ可愛かったです。

さて、今日は昨日行けなかったメンバー、私と琴里ちゃん、四糸乃ちゃん、折紙さん、夕弦ちゃんが土道と鞠亜ちゃんと一緒に遊園地に行きます。

外に出ると、既に土道と琴里ちゃん、鞠亜ちゃんが外にいました。

「おはようございます。お待たせしましたか?」

「いや、俺らも今出てきたところだ」

「千夜お姉ちゃん!今日は楽しもー!」

「とても楽しみです」

いつも通りの土道に白リボンの琴里ちゃん、そしてさらに表情が人間らしくなりソワソワしている鞠亜ちゃん。なんか、琴里ちゃんと鞠亜ちゃんを見ていたらこっちまでウ

キウキしました。

「あの、おはようございます……」

「やあやあ、お待たせしちやつたかなー?」

私が来てからすぐに四糸乃ちゃんが合流しました。

「四糸乃つたらさあ、昨日は興奮してなかなか眠れなかつたんだよー、ね?」

「う、あの……その……」

遠足前の子供ですか……。いや、子供でしたね。可愛いですね。

その後、折紙さんと耶俱矢ちゃんとの別れを惜しんで遅れていた夕弦ちゃんが合流し遊園地に向かいました。

で、遊園地に着きました。

「ここが遊園地……。人がたくさんいて、とても賑やかですね。たくさん笑顔が溢れていて、私も笑顔になってしまいそうです」

鞠亜ちゃんが目に見て分かるぐらい興奮しています。やばい、可愛い。無表情の時も可愛かったですが、やはり女の子は笑顔が一番です。

「それはいいことなんだ、鞠亜。笑顔でいれば誰かが笑顔になってくれる。その分の嬉しさとか楽しきとか、分けてやれるんだよ」

「では、たくさん笑った方が皆さんにとっても良いことなんですネ」

「あの……私もそう、思います……土道さんが笑ってくれると……私も嬉しく、なりますから……」

「……四糸乃のいうこと、わかります。私も同じです」

えっ……?それって……

「もう、鞠亜ちゃんてば四糸乃と同じーなんて、もしかして土道くんのことー」

そこまで言ったよしのんの口を四糸乃ちゃんが塞ぎます。でも、もし本当にそうなら、この世界から抜け出せるのは本当に近いのかもしれない。でも、それだと鞠亜ちゃんと別れることになってしまうので少し寂しいですね。

「よし。それじゃ、まずどこへ行こうか?」

「まずは……ホラーハウスではどうでしょうか?」

「えっ!?ほ、ホラーハウスか……わ、私は……急用を思い出したからここで待ってる!」

琴里ちゃん、お化け苦手ですもんね……

結局、琴里ちゃんと一緒に夕弦ちゃんも外に残り、あとのメンバーでホラーハウスに

入ることになりました。

「なんか思った以上に暗いなあ……鞆亜、どこにいる？」

「ここです。ホラーハウスというだけありますね。室内の光度と温度を下げ、恐怖を演出してやるようですよ」

鞆亜ちゃんは怖いと言うより興味津々って感じですね。それにしても、よく出来ていますね……そう言えば、こういう所って本当に霊が集まりやすいって言いますけど本当なんでしょうか？

「四糸乃は大丈夫か？」

「……は、はい！何とか……大丈夫、です。でも、士道さん……手を握っても、いいですか？」

「え、手？ああ、いいぞ。暗いし危ないからな」

「士道、私もいいですか？」

「鞆亜もか？いいぞ、ほら」

「……待つて。私も手を繋いで欲しい」

「待て、折紙。もう手は空いてないぞ。というか、全く怖そうに見えないんだが……」
「そんなことはない。恐怖でひどく怯えている」

サラツと嘘をつきますね。私、士道の周りを見ているとお化けよりも人間が怖いで

す。あれ？ホラーハウスも言ってしまうえば人が驚かせている訳ですから、怖いのはお化けではなく人間？つまり、人間がいちばん怖いということになりますね！Q. E. D.。その後、色々ありながらもホラーハウスを脱出し、琴里ちゃんと夕弦ちゃんにバトンタッチしました。土道、鞠亜ちゃん、琴里ちゃん、夕弦ちゃんはコーヒーカップに乗りに行きました。私たちは休憩です。

そういうえば、なぜコーヒーカップって名前なんでしょうか？

コーヒーカップを終えて次は遊園地の目玉、ジェットコースターへみんなで向かいました。

えっと、げっ……待ち時間60分。つまり、1時間ですか。長いですね……まあ、みんなで話していれば割とすぐでしょう。

「ふっふーん。四糸乃と一緒にクジを作ったのだ！これで、どういうペアで座るか決められるのぞ」

「う、うまくできたと思います」

クジですか。私としては鞠亜ちゃんに土道の隣に座って欲しいですが、みんなが納得しませんでしょうし、大人しく引きましょう。

「あれ？琴里ちゃん？今なにか隠しましたか？」

「ぎ、ぎくう。か、隠してなんかいないぞ……」

「それなら左手を前に出しましょうね？そこに、当たりくじを持っているのでしょうか？」
「これは、クジを失くした時の予備で……」

そんな訳ないでしょう。

「琴里、せっかく作ったクジなのですから、ちゃんと使った方がいいのではないのでしょうか？」

「んー、そうだよね。ごめんなさい」

「では、せーので引きますよ。せーの」

結果、3列目に私、夕弦ちゃん、折紙さん。2列目に四糸乃ちゃん、琴里ちゃん、鞠亜ちゃん。1列目に土道となりました。このジェットコースター変わった形していませんね。まさか、1番先頭が1人だけなんて……

「このコースター、先程見ていたものより、だいぶ遅いのではないのでしょうか？」

「ジェットコースターは最初からの速度じゃなくてだ……えっと、説明するより
実際体験した方がいいよな。ほら、ここから加速するぞ」

「……なるほど。少しずつ早くなっていくということでしょうか？」

「いや、そういうわけじゃないんだが……よし、鞠亜。心の準備はいいか？」

「心の準備、ですか？」

「ああ、そうだ。一気にくるぞ！」

「一気に……?それはどういふことで————」

中々、この落下長いですね。

「————ツ!!?」

「う、うつ……………」

「こ、琴里さん……………」

2列目にはちよつと怖いのを我慢しているみたいですね。で、3列目は————

「中々のGがかかっている」

「同意。あんまり口を開くと舌を噛みそうです」

かなり余裕そうです。折紙さんは訓練で慣れているようですし、夕弦ちゃんは耶俱矢

ちゃんとの勝負で遊園地をどちらの方が楽しめるかというのがあったそうです。本当

に幅広いですね、その勝負。

「うおおおおおおお!! (土)」

「きやああああああ!! (鞠)」

「いやああああああ!! (琴)」

「ぴやああああああ!! (四)」

「…………つ、きやあ! (折)」

「きやああああああ!! (夕)」

「わああああああああ!! (千)」

みんなで、声を上げながらジェットコースターを楽しみました。うわっ……足下がフラフラします。

「ふふ、楽しかったですね」

「まだ、ジェットコースターの醍醐味は終わってないぞ?」

「ああ、隠し撮りですね。……変な顔になってないといいいのですが」
「なるほど。気になります」

「よし、じゃあ行くか」

「はいー!」

みんなで写真売り場に行きます。えっと、私達のは……あつ!ありました。

「はは……見事に顔が引きつてんな」

「はい、でもとてもいい写真だと思います」

そして、全員でその写真を買うことにしました。この写真、向こうにどうにかして持って帰れるといいんですが……

「ほら、鞆亜。無くすなよ?」

「……はい。大事にします」

鞆亜ちゃんは満面の笑みを浮かべて土道から写真を受け取りました。

いつの間にか鞠亜ちゃんは、もうすっかりと私達の友人としてそこに居ました。鞠亜ちゃんが愛を知った時、鞠亜ちゃんはどうなるのでしょうか？私にはまだ分かりません。しかし、どうか、この少女の物語の終幕が幸せでありますように。私は、心からそう思いました。

少女は仮想世界での異変を見た

ゲーム内、5日目。

今日は朝から土道と鞠亜ちゃんがデートに行きました。鞠亜ちゃんがデートに行きたいという他の子に必死に頼み込んでいました。それから、意味深なことを言っていましたね。確かーーーーー

「ーーーー最後の、デート……」

意味通りなら、デートを終えた鞠亜ちゃんは『愛』について理解をし私達は現実世界に帰ることができます。それを望んでいたはずなのに、やはり寂しいですね。

さて、もう日が暮れて外は真つ暗になつてきましたが、土道と鞠亜ちゃんが帰ってきましたね。そんなことを考えているときでした。

辺りが昼のように明るくなり、そして世界が崩れ始めました。

崩れ始めたと言う表現が正しいか分からないですが、あちらこちらの空間がブレて、かたちを維持出来ていないのです。

明らかかな、非常事態に精霊マンションにいた全員と合流します。そこで、令音さんから連絡が来しました。

『琴里。聞こえるかい?』

「令音?! ロックは破れたの!?!」

『いや、破られたという方が適切かな? 現在その仮想世界は人工精霊によって強制的に崩壊をして行っている。このままだと君たちの意識が現実世界に戻れない可能性がある』

「ちよつと、待つてください! 人工精霊って、まさか……」

「鞠亜がこれを起こしていると言うのか!」

「信じ、られ……ません」

『いや、或守鞠亜がこの状況を起こしているのではない』

「では、一体誰がこれを?」

「まさか、隠された真の世界ワールド・アドミニストレータの管理者がいたという訳ではあるまいな」

『いや、まさにその通りだ』

「困惑。鞠亜以外にも人工精霊がいたということですか?」

『ああ、今回の事件は本人が言うには或守鞠奈という黒色の或守が原因だ。今回のイレギュラーは全て或守鞠亜ではなく或守鞠奈が原因だったんだ』

「それなら、鞠亜さんは一体何者なんですか?」

「そうですね、鞠亜さんは一体どこから来たのですか?」

『或守鞠亜はフラクシナスの管理AIだ。恐らく、未知の敵に対抗するためその情報をトレイスした存在を自身の中に作りだしたのだろう。今回の事件の流れは或守鞠亜のアタックによりプロテクトが1部が破られ侵入され、或守鞠亜を逃がさないためにプロテクトをかけ直したことによりシンが閉じこめられたようだ』

「とりあえず、士道と鞠亜と合流するわ！令音、案内して」

令音さんのナビゲートで士道と鞠亜ちゃんの元へ私と琴里ちゃんだけで向います。他の子は一時待機です。移動する間に軽く現状説明を受けました。フラクシナスのシステム9割乗っ取られているっつてだいぶヤバい状態ですね……。それを何とかこれ以上奪われないように頑張っているのが神無月さんっつて言うのは何か納得いきませんが。とりあえず、説明を受けて或守鞠亜を倒せば全て丸く収まることは分かりました。つと、士道が見えてきましたね。

「士道！それに鞠亜も！」

「無事でしたか?!」

「琴里！千夜！よかった、無事だったんだな。この状況のことは——」

「大丈夫認識しているわ」

「令音さん、状況に変化はありませんか？」

『ああ、先程と同じだ。既に9割方抑えられている。小細工で時間稼ぎをしているが、そ

れ』

世界そのものですか．．．．また、厄介ですね。

「そういうえば、さつき、鞠奈を止めようとした時急に動けなくなっただ」

「それ、詳しく話して。現状、敵のデータはあまりにも少ないわ」

「なんだか身体の自由を奪われたような．．．．」

『．．．．うむ。美九の〈破軍歌姫^{ガブリエル}〉のような力かい？』

「洗脳？いや、でも聞いている限りでは金縛りや言霊に近い感じでしようか？」

「．．．．プレイヤーへの干渉ですね。フラグ発生のため、行動を意図的に制限できません」

何それ、厄介すぎませんか？

「つまり、美九みたいに洗脳するんじゃないやなくて行動そのものを操る．．．．つてことか？」

「はい。この世界において、設定は大きな縛りです。直接的に力を使わなくても設定の追加・制限するだけでかなり行動を縛れます。それを打ち破るには、必ず私の力が必要になります。わたしが果てようとも、色々な事教えてくれた皆さんに．．．．士道に少しでも恩を返します」

鞠亜ちゃん．．．．

「ですから、途中で気が変わったというのは絶対にダメですよ。この世界で過ごし、私がもらったもの。それは、データだけでは得られない実感、感情、絆。目には見えないけれど、形あるもの。私は……皆さんが好きだから、助けて。それだけなんです」

「その気持ちは絶対みんなに届く。だから、頑張ろう」

「よし、じゃあ行くわよ。令音、他のみんなはどう？」

「……ああ、霊装と天使の顕現は終わっている。ピンポイントだが、彼女は私をそこに転送しよう」

「上出来よ、あとは目的を果たせばいいのね。令音、フラクシナスは頼んだわよ」

『ああ、任された』

そして、みんながそこに集まったのでした。

「さあ、私たちの戦争を始めましょう！」

少女は仮想世界での戦いを始めた

はい、私です。魂月千夜です。みんなに置いていかれました。

いや、確かにみんなから見たら私は一般人かもしれませんが、ここは普通全員で行くところじゃないですか？

まあ、もういいですよ……。勝手にいきますから。

「さてと、〈サリエル靈魂看守〉【サイ魂の観測】」

皆さんはどこからマザールームに行ったのでしょうか？ナビゲート無しだとキツイかもしれませんが、やるだけやりますか。おっと、ここみたいです。

私は世界の歪みの中へ足を進めていきます。足下には地面の感触はありますが油断していると自分がどこを向いているか分からなくなりそうです。

どこまでも続いているような空間を進んでいくと十香ちゃん達が戦っている場所まで来ました。障害物がないのでこれ以上近づくと見つかってしまいそうですね。それにしても、黒色の或守ちゃん……或守鞠奈さん数多くないですか？時崎さん並にるんですけど……。コピペでもして増やしたのでしょうか？

なんでもいいですね。私も私で数を減らしていきます。

「さあ、私の戦争を始めます」

「……………すみません。1回言ってみたかったです……………あつ、見つかつてしまいました。」

「君は魂月千夜だね？へりパーの正体がこんな所で掴めるなんて。これで、さらにお父様に褒めてもらえる」

「やはり、貴方はDEM社から来たのですか？」

「そうだよ。あつ、でも貴方はここで消えるから正体を知っても意味なかったか」
「随分と余裕ですね」

「キミの能力は靈力に干渉するところが多くて、それ抜きにすると他の精靈よりも劣っているからね。この空間では靈力は限られているし」

「確かにそうですね。でも、諦める理由にはなりませんねっ！」

私は地を蹴り大鎌を振り下ろします。が、何故か或守鞠奈に当たることなく通り抜けてしまいました。

「あはははっ！スピードは大したものだけど、いつまで続くかな？」

「くっ！」

連続で大鎌を振り回しますが当たる気配がしません。チートやチーターや……いや、本当にどうしましょう？攻撃が当たらないって卑怯じゃありません

? 当たり前判定仕事しましょう? あなた方に休みは無いですよ。

「こないの? じゃあ、こつちから行くよ」

「つっ!」

「はらはら」

或守鞠奈の攻撃を防ぐことしか出来なく防戦一方です。

自分だけ情報いじるとかずるいです! ……ん? 情報? そうか、情報です!

私は攻撃をわざと受け或守鞠奈の腕を掴みます。攻撃ではなかつた為か、当たり前判定がありました。やったね!

それでは、早速……

「……………」
【魂コネクトの接続】!」

今の内に管理権限を拝借しましょう! 管理権限がダメでも何か奪い取ります。

或守鞠奈はプログラムではありませんが、ちゃんと生きています。生きています。生きています。魂がそこに存在しているということ。だから、直接ハッキングして鞠亜ちゃんに権限を移し替えることが出来ればこの戦況を少しでも変えられるハズです。

よし、もう少しで……

「残念でした。たった今、権限を全て掌握したわ。いい考えだったけど少し遅かったわね」

瞬間、私の頭の中に大量の情報流れ込んできました。

寂しき、怒り、憎しみ……そういつた負の感情の情報ばかりです。

「じゃあね。バイバイ」

その声と共に私の意識は暗転しました。

千夜スベクター

少女は目覚めなかった

（土道 side）

電脳世界で事件が起こった1件から3日後。俺たちは無事に帰ってこることが出来、今はフラクシナスの復旧の手伝いをしていた。

結局、鞠奈を完全に助けることは出来なかった。鞠奈が残してくれた鞠亜は「鞠奈は救われましたよ」と言ってくれるが出来ることなら鞠奈には消えて欲しくなかったのが本音だ。

そして、帰ってきてから問題があった。それは――

「令音さん。千夜の調子はどうですか？」

「決していい状況では無いな、3日前と同じ状態だ。回復も悪化もしていない。帰って来てからの変化といえば髪の毛が黒色になったことぐらいかな」

「そう、ですか……」

電脳世界から帰ってきた3日前から千夜は目覚めていないのだ。他のみんなはちゃんと目覚めている。なのに千夜だけいつまでたっても目覚めないのだ、髪の毛の色は昔

と同じ黒色に戻って。一体何が起きているんだ……

「最低限の生命活動は維持できているが、いつまで続くかは分からない」

「理由は、理由は分かっているんですか？」

『それは、私から説明します』

スマホから鞠亜が声をかけてくる。本当は鞠奈と一緒に消えたはずだったが鞠奈が最後の力を使って俺のスマホに潜り込ませたらしい。

『千夜は鞠奈とどうやら接触をしていたみたいです』

「鞠奈と!？」

あの戦いに向かう際、精霊の力やASTの装備を持つていない千夜には待機して貰っていた筈だ。鞠奈から千夜に向かっていくとも考えにくい。となると――

『千夜は自ら鞠奈に会いに行つたみたいです』

「やっぱりか……」

『鞠奈と接触した際、何らかの原因で鞠奈の情報が大量に千夜に流れた記録がありました。それによって、多大な負荷がかかったのが原因かと思われます』

「……千夜はなんでそんな所に行つたんだ？」

『分かりません。私も僅かに残っていたあの世界のデータを元に推測したのでそれ以上のことは……申し訳ありません』

「いや、いいよ。ありがとうな、鞠亜」

『ただ、ひとつ言えるのは……彼女は、千夜は土道、きつとあなたの為に行動したのだと思います。だって、それが【愛】ですから』

「じゃあ、俺のせいだ……」

そう呟いたところで後頭部に衝撃が走る。振り返ると黒リボンの琴里が立っていた。

「何すんだよ!?!」

「どおせ、あんたの事だから自分のせいとか言い出すんでしょ?」

「だって、そうだろ!?!俺が!!」

「黙りなさい。それを言うなら千夜姉に土道を助けること頼んだ私のせいでもあるわよ」

『そもそも、千夜をあの世界に呼んだ私のせいでもありませんね』

「違うっ! お前らは悪くない!」

「そう、そして土道も悪くないわ。罪の出所を言っただけじゃないでしょ? 今は、千夜姉を起こす方法を考えないと。起こったことをクヨクヨ悩んでいてもしょうがないでしょ?」

「……そうかもな」

『それに、千夜が見たら多分こう言います。「自分のことは気にしなくていいから土道は

次の精霊をデレさせたり、十香ちゃん達のケアをしつかりしてください」と

「……ははは、あいつなら言いそうだな。ありがとうな、鞠亜、琴里」

『はい』

「全く……しゃんとしなさいよね」

その時、けたたましくサイレンが鳴り響いた。

「空間震警報！」

「座標、出ます！」

「土道、仕事が出来たわよ」

「ああ、行ってくる」

『私もフラクシナス本体に戻ります』

各々が自分のやる事に向かっていく。千夜、待っているよ。絶対に目を覚まさせてやる。

「さあ、私（俺）たちの戦争デイトを始めましょう（よう）」

く 臨界 く

暗い、暗い……ここはどこでしょう？

————あたしは壊す、全てを壊す。

————だって、それしかないから。

————あたしは現実に触れられないから……

これは……なんでしたっけ？そもそも、私は何を？

————分からない、あたしにも分からない!!

私は何かをしようと……なんでしたっけ？もういいや、ここは……闇の中は心地がいい。

————あたしは所詮マガイモノだ。

そう、この私はマガイモノの私。ニセモノの私。

——もう私は戻れない。

——どっちにも戻れず中途半端……

あれ？そもそも、本当の私ってなんでしたっけ？

——あたしはお父様さえいればいい。

——あたしを、作ったのも、

——目的をくれたのもお父様だから。

父親も母親もない私はどうしたらいいの？

——ああ、あたしはいつからおかしくなった？

さあ？でも、きつと——あの時から……

——このままなんて嫌……

——誰か、あたしを……消して！

亡霊は絶望の産声を上げた

〈土道視点〉

「嘘っ!? 反転体!?!」

「なんだって!?!」

精霊の反転。精神的負荷が大きすぎると起こる現象だ。天央祭の際、DEM社に連れ去られた十香がしていたのを思い出す。

「最初から反転しているなんて事ありえるのか!?!」

「いや、少し待ってくれ。これは……一体どういうことだ?」

「へりパー」の反転体……」

「へりパー」だって!?!」

「へりパー」、狂三以上に素性が分かっている精霊だ。万由里の事があった時からまともにあつていなかったが……

「まさか、へりパー」が反転体で現れるなんて。へりパー」|| 千夜姉疑惑があつたけど……取り越し苦労だったみたいね」

「AST接触します!」

A S Tが攻撃を開始した。A S Tの方は反転について知らないみたいで完全に別個体として扱っているようだ。それにしても——

「あの精霊、〈ヘリーパー〉と言い方を被らせると言いづらいし……そうね、〈スペクター〉は全然、反撃しないわね」

「四糸乃みたいだな」

り、〈スペクター〉はA S Tに攻撃することなく、ただ逃げ回っているだけだった。その姿は酷く脅えているようで、四糸乃を思い出させる。って、あれ？

「琴里、〈スペクター〉の顔をハッキリ映せるか？」

「えっ？ええ、画像拡大お願い」

「画像拡大します。……出ました！」

「なっ!!」

「これは……」

「やっぱり、千夜にそっくりだ」

画面に映し出された〈スペクター〉の顔は大部分が隠れているが間違えなく千夜だった。

「令音！千夜姉は!?!」

「ずっと、医務室にいる。先程から目は覚ましていない」

「じゃあ、あれは一体……まさか、でもありえるの?」

「とにかく今から彼女のもとへ向かう、転送の準備をしてくれ」

「分かったわ。ただ、戦闘中だから離れた場所に転送するわ」

「対象、ロスト消失しました」

「へスペクター」との初面会はまだ先になりそうだった。

く???
く

ここはどこ?!

わたしが目をさますと、ボロボロの町が目に入りました。まるで、あの時のようです。

しばらくすると、空から変な女の人たちが飛んできました。なんなんでしょうか?

「精霊確認!・全員撃てつ!!」

「つつつ!!?」

なんで、わたしをいじめめるの? わたしが悪い子だから? わたしがちゃんとお姉ちゃんをできなかつたから?

ごめんなさい。あやまるから、ゆるして下さい。悪い子でごめんなさい。ちゃんとお

なさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
めんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

—————妹を、ハルちゃんをみすてて、たすけられなくて、ごめんなさい……

少年は悪夢と協力することにした

〈side 士道〉

どうすればいいんだ……

俺は〈スペクター〉との接触方法について悩んでいた。その後、数回〈スペクター〉は現界しているが1度も接触に成功していない。十香や四糸乃の時は屋内へ逃げ込んだ時に話すことが出来た。狂三や琴里の時はあちらから接触をしてきたし、耶俱矢や夕弦、美九の時はASTがいなかった。だから、精霊達と接触し話すことが出来た。しかし、今回は違う。〈スペクター〉は屋内へ逃げ込む前に消失してしま^{ロスト}うし、勿論向こうからは来てはくれない。ASTも絶対に出勤して来る。本当は戦闘中の中に飛び込んででも彼女を助け出したいが、それは妹様が許してくれない……

「一体、どうしたらいいだよ……」

「あらあら、随分とお疲れのようですね。士道さん？」

「つつ!? 狂三!？」

「そんな反応なさるなんて酷いですわ」

狂三はわざとらしく戯けた後、少し真面目な顔をして聞いてきた。

「それで、千夜さんは大丈夫ですか？」

「なんで、お前が知っているんだよ!？」

「あんなに激しくしていれば誰でもわかりますわ」

「激しく?何を言っているんだ?千夜は鞠亜の1件から目を覚ましてないぞ?」

「それは本当ですか?なら彼女は一体……」

「狂三、何か知っていることがあるなら教えてくれないか?」

「いえ、千夜さんが意識不明と言うなら私の見当違いのようですわ。しかし、あの精霊とのデートのお手伝いをして差し上げてもよろしいですわ。きっと千夜さんと無関係という訳では無いでしょうし、今月分をまだ千夜さんには頂いてないですからね」

「今月分?いや、あの精霊。〈スペクター〉の封印を手伝ってくれるのか?」

「ええ、この状況にも興味がありますし、千夜さんには恩も多少ありますからね。次の〈スペクター〉が現界した時、ASTの足止めは任せてくださいまし。それでは、土道さん、(キ)きげんよう」

狂三はそのまま影の中へ沈んで行った。

「つと、琴里に連絡を入れないとな」

俺は直ぐに携帯を取り出し、琴里に電話をかける。2、3コールして琴里は電話に出た。

「琴里、ちょっといいか？」

『どうしたの、士道？まさか、〈スペクター〉を拾ったとか言うんじゃないでしょうね』
「流石に、それはねえよ。で、本題だか……狂三の協力がえられることになった」
ドツカラ、ガツシャン!!と電話の向こうで凄いい音がして、直ぐに琴里の大声が返ってきた。

『士道！アンタ馬鹿じゃないの!?!狂三に狙われている自覚はあるの?』

「それは……スマン。だけど、せつかくの突破口だから俺はこの機会を活かしたい」
『はあ……まあ、いいわ。どうせ言っても聞かないんだろうし』

「よく分かってるじゃないか」

『何年、士道の妹をやっていると思っているのよ。それで、狂三は?』

「ああ、次の〈スペクター〉の現界時にASTの相手をしてくれるらしい。その間に俺は〈スペクター〉の所へ行く」

『あの狂三が、メリット無しでそんな簡単に手を貸してくれるとは思えないんだけど……』

「なんか、千夜に恩だとか今月分だとか言っただけはいたけど」

『とりあえず、次の〈スペクター〉現界時に向けてしっかり休んでおきなさい。十香達の相手はこつちでやっておくから。正直に言うとう香達の相手に物凄く千夜姉が欲しい

わ。さっさと目覚めてないかしら
『そうだな』

なんだかんだで千夜の存在が大きかったことを感じさせられる。

人って失ってから大切な物の重要さに気がつくって言うけど本当だな。精霊のみんなに意識を向けすぎて千夜の事を全然意識できてなかった。

『とりあえず次、頼んだわよ。士道』

「おう！」

待っていてくれへスペクター。俺がお前を絶対に救つてみせる。

く臨界く

やっぱり、この場所はとても楽です。

わたしをせめる人は誰もいない。

わたしをねらう人は誰もいない。

わたしをきずつける人は誰もいない。

わたしをいじめる人は誰もいない。

でも、同時にこの場所はとてもさびしい。

わたしをなぐさめる人も誰もいない。

わたしを元気づけてくれる人も誰もいない。

わたしを勇気づけてくれる人も誰もいない。

わたしを救ってくれる人も誰もいない。

だから、わたしは探すため、見つけてもらうため外へ行く。さびしさをうめるために希望をもって外に向かう。

何度も何度も。

でも、その人は現れない。

もう何度も、あきらめようとした。でも、頭の中にひびいてくる。

————もう大丈夫だ。

————お前を絶対に守ってやる！

————俺が絶対に救ってみせる！

————絶対にだ！

その声が誰のものかは、わたしには分からない。でも、その声は、とてもあたたかく

て、ここちがいい。

だから、わたしはまた外へいく。

こわいけども、きつと彼が見つけてくれるから。

そう、しんじているから。

だから、早くーーーーー

ーーーーーわたしを助けて？

亡霊は亡者と暴走をした

～フラクシナス～

「司令！空間震警報発令されました！精霊はへスペクターです！」

「ASTの出撃確認！」

「へナイトメア」時崎狂三がASTと接触！」

「概ね、計画どおりね。士道、準備はいいかしら？」

「……ああ」

「さあ、私達の戦争^{デート}を始めましょう」

～士道視点～

フラクシナスの転送装置でへスペクターの近くに降りる。へスペクターを探すと割とすぐ側にいた。

「琴里、どうぞ」

『選択肢を表示します』

- ① こんな所で何しているんだ？
- ② こんにちはは、俺とお話しないか？
- ③ ねえ、君のパンツは何色かな？

『総員選択！』

- ① 40%
- ② 50%
- ③ 10%

『結果は②ですね』

『少し馴れ馴れしいかもしれないけど、まあいいわ。で、何故か③を入れているのもいるけど……土道、②よ』

琴里の指示を受け〈スペースター〉に近づいていく。向こうはこちらに気がついたみたいで、目が合った。その顔は見れば見るほど千夜にそっくりだ。

「こ、こんにちは、俺とお話しないか？」

「お話し……ですか？あなたは……わたしをいじめませんか？」

「いじめる？」

「はい。みんな、わたしをいじめるので……」

「俺はそんな事しないよ。君を救いたくてここまで来たんだから」

「わたしを……すくいに？」

「ああ、だから俺とデートをしないか？」

「……デート？」

さて、どうなるか……

これに応じて貰えなければ話にすらならないのだけど。

「でも、ハルちゃんに知らない人について行っちゃダメだって……」

「ハルちゃん？」

「あつ！えつと……なんでもありません！お、お兄さんの名前は何ですか？」

「えつ？俺か？俺は五河士道だ」

「五河……士道……？」

『士道！へスペクター』の精神状態が不安定になってるわ！』

「なっ!？」

自己紹介をしたただけだぞ?!名前に反応したってことか?それなら、俺は前にこの子に会ったことあるのか?

「……士道君？」

「あ、ああ。そうだ、士道だ。えつと……」

「?」

「君の名前を聞いてもいいかな?」

「……その……わかりませんか?」

「いや、その……ごめん」

「そうですか……そうですね……」

『へスペクター』の機嫌が低下しているわ! フォローを入れなさい!』

インカムから琴里の指示が飛んでくる。とりあえず、名前を聞かないことには始まらないし思い切って聞こう。

「本当にごめん、覚えがないんだ。よかったら、君の名前を教えてくださいませんか?」

「わたしも最初は気づきませんでしたのでお相子ですね。……わたしは千夜。魂月千夜です」

彼女の言葉に俺は耳を疑った。俺だけじゃないフラクシナスにいる琴里やクルーの人達もだろう。へスペクターは顔だけでなく名前まで千夜と同じであったからだ。

「魂月……千夜だって……?」

「はい、そうです。お久しぶりですね、士道君」

「いや、でも千夜は……」

「……士道君? どうかしましたか?」

「い、いや、なんでもないよ……」

千夜？魂月千夜だつて？顔だけじゃなくて名前も同じ、どうなつてんだ……まさか、千夜が〈ヘリーパー〉で〈ヘスペクター〉なのか？よくよく思い出すと喋り方は昔の千夜に似ているな……でも、千夜は今でもフラクシナスの医務室で寝ているはずだし。本当にこの子は何者なんだ……？

「そ、それでデートの事ですが……ハルちゃんじゃなくていいのですか？」
「ハルちゃん？」

さつきも出ていたが一体誰なんだ？聞き覚えがある気がするが……思い出せないな。

『鞠亜、選択よ！』

『選択肢、表示します』

①ハルちゃんつて誰だ？

②ハルちゃんよりも千夜とデートしたいんだ。

③春はもう過ぎてるよ。もう秋だよ。

①50%

②50%

③0%

『①か②ですね』

『へスペクター』は、まだ未知なところが多いです。相手を知っていくためにも、やはり①でしょ』

『いや、だからこそ②で無難に行くべきです』

『今は相手の事を知りたいわね。千夜姉とどれぐらい同じなも知りたいし。土道、①よ』
「分かった」

俺自身も気になる、ハルちゃんとは誰なのか、それが目を覚まさない千夜に関係する人物なのか。

「千夜、その……ハルちゃんって誰だ？」

「……えっ？」

千夜の顔から表情が消えた。

『機嫌が急激に低下！危険です！』

『土道！逃げなさい！』

インカムから危険を知らせる声が聞こえる。逃げなきや。でも……本当に逃げているのか？

「土道がハルちゃんを忘れた？ダメです……土道が忘れたら、ハルちゃんは……わたしは……」

千夜の目からはハイライトが消え、ブツブツと何かを呟いている。ダメだ、このまま放置することは出来ない。

「千夜！」

『何やってるの、土道!!ダメ!逃げなさい!!』

琴里の叫び声が聞こえたのと同時に千夜はボソリと呟いた。

「………〈生死叛徒〉—————」【顔無しジョの亡者達ドク】

千夜は白い骨出てきた様な剣を召喚し、地面に突き刺した。地面が次々と盛り上がり、ゲームに出てきそうなゾンビが這い出てくる。大きさはまちまちで大人から小学生ぐらいの子もいる。

「「「アアアアアアアアアアアア!!」」」

ゾンビたちはまるで苦しむような声を上げながらゆっくりと近づいてくる。顔は原型を留めておらず性別も年齢も分からない。ただ、どのゾンビも苦しそうな悲しそうな顔をしているのだ。

「くっ!〈塵殺公〉!うおおお!!」サンダルフオン

ゆっくりと近づいてくるゾンビをなぎ払う。ゆっくりな為当てるのは造作もない。しかし、ゾンビを倒した瞬間、頭の中に情報が流れてくる。それは————

少年は妹と昔を思い出した

↳ 士道視点↳

「士道、大丈夫？」

「ああ、何とか……千夜は？」

「へスペクターロストの方なら消失したわ」

「そうか……」

あのゾンビを斬った時に流れ込んできたのは、琴里がヘイフリートトとなった日。5年前の大火災の状況だった。それも、1人だけじゃない、複数人の記憶や思いが流れ込んできた。あれは、実際にあの火災で亡くなった人の記憶なのか？

「士道？どうしたの？」

「ああ、実は……」

琴里にさっきのゾンビについて話をしてみる。

「確かに、有り得なくはないわね。ヘリーパートだった時の特性は私たちが知る限り霊力への干渉だったけど、反転によって変わった可能性もあるし」

「なら、あれは……」

「ええ、少し非科学的だけどあの火災の被害者の魂かもしれないわね」

「精霊の存在自体が非科学的だけどな」

「それもそうね」

さて、ゾンビについての考察は終わったし本格的に“ハルちゃん”について考えていけないとな。

「琴里はハルちゃんって子に覚えは？」

「実は私も引つかかっていたのよ。どこかで聞いたことがあるような気がするけど思い出せない……そんな感じよ」

「俺と似たような感覚か」

2人とも聞き覚えがある、その呼び名。なら、やっぱり昔を思い出していつてみるしかないか。

「とりあえず、小学校の卒アルでも開いて対応しそうな子を探すしかないか」

「そうね。私は家族アルバムの方をあたってみようと思うわ」

「とりあえず、帰ってメシにしようぜ」

俺は、1度家に戻ることにしたのだった。

「よししよつと……よし、こんなもんかな?」

「土道!なんだそれは?」

「写真が……いっばいです……」

「でも、知らない子が多いね!ああ!小さい土道君がいるよ!」

「ああ、これは俺が小学校の時の卒業アルバムと家族アルバムだ」

夕食後、リビングにアルバムを持つてきて開いていた。今は小学校の卒業アルバムだ。そこに、十香と四糸乃、耶俱矢に夕弦が興味深そうによつてくる。

「ハル……ハルは……」

「土道!この千夜にそっくりな幼子は誰だ?」

「驚愕。2人もいます」

1組から順に名前を読もうとした所で、耶俱矢と夕弦に呼ばれ示された写真を見た。家族アルバムの方を開いていたみたいで、そこには小さいころの俺を挟むように立った大人しそうな黒髪の少女と活発そうな金髪の少女が写っていた。

「ああ、この黒髪の方が千夜だ」

「これが千夜なのか?髪の色と目の色が違うでは無いか」

「本当です……今の千夜お姉ちゃんとは違います」

「どうして、こんなに変わっちゃたんだろうねー」

「さあ、それは俺にも分からないな。再開した時にはもう白髪だったし」

「土道！我らの質問はまだ終わってないぞ！この黒髪が千夜なのはいいとして、こちらの金髪は誰なのだ」

「催促。さっさと言っ飛ばしてしまってください」

「ああ、これは……千夜の双子の妹だ」

部屋の中は一瞬静まり返り、そこから各々呟いた。

「千夜には妹がいたのか……」

「知りません……でした」

「ふむ、彼奴の妹か……1度会ってみたいものだな」

「納得。だから、面倒見がいいのでしょうか？」

そこで、十香がある事を思い出した。

「む？しかし、千夜は妹は居ないと言っていなかったか？」

「あつ……そういえば、真那さんが始めてきた時に……言っていました」

「そういえば、そうだったねー」

「それはどういう事だ？これは千夜の妹ではなかったのか？」

「質問。士道、この方の今は……?」

「ああ、この金髪は魂月千陽たまつきちほるって言うんだけど、千陽は5年前に災害に巻き込まれて……死んだんだ」

「「「なっ……?!」」」

全員、言葉を失い黙ってしまふ。これを知ったからには注意をしておかないといけない。

「みんな、これは千夜に言うなよ。今のアイツは記憶を押しえつけている。下手に刺激すると思いつくかもしれないからな」

「分かり……ました!」

「ああ! 我も夕弦を失ったらと思うとどうにかなくなってしまいそうだからな。その気持ち
が痛いほど分かる」

「同意。夕弦もです」

「みんな……」

「……本当にそれで良いのだろうか?」

「十香?」

1番に分かったと言いつつ十香がそういつたことに驚いた。

「十香、なにか思うところがあるのか?」

「うむ……確かに大切な人を失ったのは辛いかもしれん、しかし……その妹との楽しかった時の記憶まで失うのは……千夜にとって幸せなのだろうか」

「確かに……そうですね……」

「これは、中々に難しい問題ぞ」

「想起。私も耶俱矢との思い出を消したいとは思いません」

確かに、考えたこともなかった……千夜にとって今の状況が一番いいと言えるのか？向き合っていくべきじゃないのか？

もちろん、千夜にとってそれがいいとは思っていたが、今まで千夜に千陽の事を言わなかったのは、俺が千夜を傷つけたくないと言う、自分本意な考えだった。今の十香の考えで、本当に千夜にとって一番いいと言える選択は他にもあるのではないかと思うようになった。

これは、もう一度しっかりと考える必要があるな……

「ただいま……って、何これ？ぐちゃぐちゃじゃない。もう少し綺麗に見なさいよ」
「琴里、おかえり」

考えをまとめた所で、琴里が帰ってきた。これから、琴里も“ハルちゃん”を探すのに加わる。

「で、今どんな感じなの？少しは進んでいるでしょうね？」

「いや、ちよつと……千陽について話している」

「千陽姉？また、珍し、い……」

「ん？どうした、琴里？」

琴里はなにか思い出したようなハツとした表情をして止まったのだ。

「ねえ、土道。千夜姉と千陽姉ってお互いになんて呼んでいたっけ？」

「えっ？えつーと、確か……やーちゃんとハルちゃ……あつー！」

そうだ、あの二人は、お互いをやーちゃんとハルちゃんと呼んでいたんだった。

「私達が呼ばないし、長年聞いていなかったから思い出せなかったみたいね。でも、これで問題は解決したわ」

「ああ、次こそへスペクターを攻略してみせる」

「へスペクター？？」

「あつ……」

この後、全て白状して怒られた。

少年は亡霊を迎えに行つた

（土道視点）

次の日に〈へスペクター〉は現界した。初めて現界してから1週間、毎日現界している。ASTが今日も出撃してくると思つていたが、少し違つた。〈へスペクター〉のもとへ向かつている人の中にエレンがいたのだ。真那に確認を取つたところ今回のメンバーのほとんどがDEM社の人らしい。

DEM社が〈へスペクター〉に接触する前に俺はフラクシナスの転送装置で彼女のもとへ向かつた。

「……っ!?誰ですか!」

「お、俺だ千夜。土道だ」

「土道……君?」

千夜はびつくりしたような表情してからすぐに俺のもとへ駆け寄つてきた。琴里からは機嫌の低下はないと連絡が来ている。ひとまず、安心だ。

「お久しぶりですね。土道君」

「えっ?昨日あつただろ?」

「千夜！」

「は、はいい？」

「向こうの人目に見つかりにくい所に行くぞ！」

「えっ? ええ!?! し、士道君!?!」

千夜の手を引き、崩れた建物に隠れようとするが千夜が抵抗してきた。

「し、士道君? そ、そういうのはちゃんと付き合ってからじゃないと……」

「今じゃないとダメなんだ」

「今すぐ!?! ということは外でつて事……士道君ってかなりアブノーマルなんです
ね……あの、わたし初めてなので優しくしてくださいね?」

「なんの事を言ってるんだ?」

「えっ? その……あ、青○するつもりなんじゃないんですか?」

「するか!」

「そうですか……」

『士道、機嫌値が低下しているわよ』

「なんで!?!」

「随分と、賑やかですね」

どうやら、モタモタしているうちに追いつかれてしまったようだ。

空を見るとエレンをはじめ数十人のウィザードが俺たちを包囲していた。

「さて、彼女を渡してもらいましょうか。アイクがとも欲しがっていますので」

「渡すわけがないだろ！千夜は、俺の大切な幼馴染だからな！」

「士道君……」

「そうですか。なら、力づくでー！ー！ー！つ！」

エレンがブレードを振りかざした瞬間、紫の斬撃がエレン目掛けて走った。この攻撃は！

「士道！」

「十香!？」

「士道……さん……」

「助けに来たよー」

「かかっ！我ら颯風の巫女の力を見せてやるぞ」

「同調。やってしまいます」

「こんなこと黙ってるなんて、ダーリンのいけずう」

「四糸乃、耶倶矢に夕弦。美九まで……っ！どうしてここにっ!？」

「どうしたもこうしたもないだろ。士道と千夜がピンチだから飛んできたのだ！」

「士道さんと千夜お姉ちゃんをいじめるのは……許しませんっ！」

「千夜のは我らの仲間だからな。助けるのは道理だろ？」

「興奮。こういう展開、漫画で見た事あります。夕弦達は仲間のため強敵に立ち向かうのです」

「皆さんから昨日聞いたんですよお。千夜さんは私の最初の本当のお友達です。だから力になりたいんです」

「みんな……よし！絶対に千夜を守るぞ！」

「！！！！！！」

そして、戦いが始まったのだ。

少年は亡霊を守った

く士道サイドく

十香達とウィザードを倒していく。やはり、みんな精霊だけあつてウィザード達を
圧倒している。ただ一人を除いて――

「はあああああつ!!」

「くっ! あああ!!」

「十香さん!」

「よそ見していいのですか?」

「つつ!!」

「四糸乃! おのれ!」

「憤怒。許せません!」

「甘い!」

「くっ! 大丈夫か、夕弦?」

「返答。耶俱矢こそ大丈夫ですか?」

十香が吹き飛ばされ、動揺した四糸乃もスキをつかれて吹き飛ばされた。耶俱矢と夕

弦が2人で応戦に行くも攻撃が通っていない。

「美九！みんなのサポートに行つてやつてくれ！」

「でも、それだとダーリンが……」

「俺なら大丈夫だ。みんなを頼む！」

「……分かりましたわ。〈破軍歌姫〉〔進行曲〕！皆さん、大丈夫ですか！」

美九がみんなのサポートに行つたためここにいるのは俺と千夜だけだ。たまに流れ弾や瓦礫が飛んでくるが、俺は〈塵殺公〉サンダルフォンを使って、千夜はよく分からない骨の様な宙に浮く物体で防いでいる。

「あの女の人はなぜ、わたしをねらっているのでしょうか……？」

「分からない。でも、もう大丈夫だ。俺達がお前を絶対に守つてやる！」

「果たして、上手くいくでしょうか？」

「エレン!? どうして！」

「どうしてと言われましても。普通に来ただけです」

「琴里！十香達は!?!」

『無事よ。ただ、他のウィザードと戦つていてそつちに行けそうにないわ』

十香達の無事を確認でき安心したところで〈塵殺公〉サンダルフォンをエレンに向ける。

「さあ、その精霊をこちらに渡してください」

「断る！千夜は、俺が絶対に救ってみせる！絶対にだ！」

「生身の人間が私に勝てるだけでも？舐められたものですねっ！」

「くっっ！」

ブレードを受けめ押し飛ばされ地面を転がる。瓦礫によって切れた皮膚は琴里の〈灼爛殲鬼〉の炎により燃え出して再生していった。

「そういえば、再生能力を持っていたのでしたね」

そう、俺にはこれがある。十香の剣が、四糸乃の氷が、琴里の再生能力が、耶俱矢と夕弦の風が、美九の音が————今まで封印してきた精霊達の力を少しだけ行使することが出来る。

俺一人ではどうしたって勝てっこないが、みんなの力を借りれば、どうにかなるかもしれない。

「行くぞー！」

風で体を押し速度を上げてエレンに突っ込んでいく。

「うおおおおおっ!!」

「つー————はああああっ!!」

〈塵殺公〉とブレードがぶつかり合い火花を散らした。エレンは一旦後ろに下がり斬

撃を放ってくるが、音と氷でそれを防ぐ。

いいぞ、何とかギリギリだけど戦えている！

この時の俺はエレンとの戦いに専念しすぎて気が付いていなかった。

「これだけ離れればいいですかね」

千夜から離れすぎた事を。

「はあああああ!!」

「ぐっ……しまった!千夜!」

エレンによつて俺は吹き飛ばされ千夜からより遠くに来てしまった。その間にもエレンは千夜に向かって行く。

俺は風の力を全力で使い氷の上を滑って行く。エレンは既に千夜のもとについていてブレードを今にも振り下ろそうとしていた。

このままじゃ、間に合わない。考えろ!どうにかして間に合うには……

「うおおおお!!」

俺は地面をへ塵殺公^{サンダルフォン}で叩きつけ前への推進力に変えた。そのまま、千夜とエレンの

間に飛び込んだ。

エレンのブレードは千夜には届かず俺を切り裂いた。

「土道……君?」

「に、逃げろ……千夜……」

「で、でも士道君が！」

「いいから逃げろ！」

「っ!!」

千夜は俺の言葉通りその場から離れていった。

「エレン、もう少し相手してもらおうぜ」

俺は〈サンダルフォン塵殺公〉を杖にしながら対する彼女を睨みつけた。

少年は亡霊を救い出した

また、わたしのせいで人が傷ついた。

土道と一緒にいた名前も知らない女の子達は戦っていました。わたしは怖くて何も出来ない中、彼女達は戦っていました。

わたしもあんな風になりたいと思った。だけど、無理でした。昔からわたしはおくびようで何時も自分のからにこもっていました。そんな、わたしを引っ張ってくれたのはハルちゃんと土道君でした。

でも、ハルちゃんはわたしをかばって死んでしまいました。そして、土道君もあんなに血を出したので、きつともう……

……………ヤーちゃんのせいで……………

……………千夜のせいで……………

2人は居ないはずなのに、そんな風に声が聞こえた気がします。

「……………なんで、助けてくれなかったの？」

「……………お前がちやんとしていれば!!」

「ごめんなさい、ごめんなさい……………ごめんなさい……………」

「士道 side」

「なんだ……………あれ……………」

千夜が逃げた方に赤黒いドームが出来たのだ。赤黒いドームの周りには赤い液体が流れ回っていた。それを見たエレンは何故か帰って行ってしまった。

『士道、聞こえる?』

「ああ」

『あのドームの中心に「スペクター」、つまり千夜姉の霊力を感知したわ』

「あれは千夜が起こしたのか!？」

『恐らくね。それとそのドームなんだけど、ドームに近くなればなるほど生命力を吸う力が強くなっているみたいなの』

「どういう事だ？」

イマイチ理解が出来なく琴里に聞き返す。

『ドームを中心にして草木はほとんど枯れていつてるし、コンクリートや建物は粉々になっていつてるの。ドームに近いほど酷い感じね。あの中に入ったらどれだけ生命力を吸い取られるか……』

「……俺、千夜を連れ帰ってくる」

『士道！今の話聞いていたの!?あの中に入ったら一溜りもないのよ!』

分かっている。四糸乃の吹雪のドームよりも、狂三の【時喰^{とき}みの城】よりも危険だった事は……でも……

「だけど、千夜が待っている」

『そうだけど……』

「この状態だからASTも手を出せないだろうから十香達を頼む。エレンが戻って来ない心配だしな。じゃあ、行ってくる」

『ちよつと、士道！待ちな……』

インカムを耳から外し捨て、赤黒いドームへ向かった。ドームに近づくほど息苦しく、体中がだるくなっていく。

何とか、ドームの前までつくことが出来、中へ入っていく。赤い川を渡ってドームに

手をかけるとすんなりと入っていくことが出来た。

「なっ!？」

ドームの中は一面、彼岸花で覆い尽くされており、赤い月が浮かんでいた。その中心に白い影を見つけた。千夜だ。

ドームの中でさらに強くなった生命力の吸収に耐えながら中心に向かう。

「千夜!」

「えっ?・・・土道、君?うそ・・・生きて」

「千夜、迎えに来たぜ。一緒に帰ろう」

「だ、ダメです。わたしといた土道君が不幸になります」

「そんな事なーーーーー」

「あります!!」

昔の千夜らしくなく声張り上げて否定した。

「わたしのせいでハルちゃんやんは死にました!わたしがもつとお姉ちゃんらしくしてれば死ななかつたんです!土道君もそうです!わたしをかばって大怪我して・・・もう嫌なんです、誰かを失うのは!怖いんです、私のせいだと他の人に責められることは!誰も千夜を責めたりなんかしない!」

「でも!聞こえてくるですよ!ハルちゃんがヤーちゃんのせいでって言う声が!」

きつと、それは千夜自身が自分を責めるあまりに生み出した幻聴だろう。

「わたしはダメなんです！弱虫で内気でおくびようでみんなに迷惑をかけるダメな人間なんですよ！」

「そんな事無い!!」

「つつ!?!」

「俺の知っている千夜はダメ人間なんかじゃない！」

「そんな筈は……」

「俺の知っている千夜は誰かの為に動けるとても良い奴だ！優しい奴なんだ！絶対にダメなやつなんかじゃない！」

千夜は固まってしまっているがそのまま構わず続ける。

「失うのが怖い？なら、俺がずっと傍にいる！責められるのが怖い？なら、俺が庇ってやる！困ったら俺に言え！俺を頼れ！」

「でも、それだと土道君に迷惑が……」

「迷惑なんかじゃねえ！俺が千夜の力になりたいんだ！一方的に嫌なら俺が困っていたら助けてくれ」

「わたしなんか役に立たないよ……」

「そんな事ない！」

もし、本当に千夜が〈ヘリーパー〉なら今まで何回も救われてきた。

「今まで俺は何回も千夜に救われてきたんだ。だから、その恩返しをさせてくれ」
少しの間、静寂が続く。それを打ち破ったの千夜の方だった。

「わたしは、ダメな人間じゃないんですか？」

「ああ」

「わたしは、士道君の役に立っていましたか？」

「ああ」

「わたしを……わたしを助けてくれますか？」

「ああ！」

「えへへ……そうですか……士道君」

「なんだ？」

千夜に手招きされて近づいていく。瞬間手を引つ張られ、頬にキスをされた。

「なっ?! なあ?!」

「今はこれで勘弁してください。ありがとうございます、士道」

そう言って、千夜は光の粒となって消えていった。

少女は目を覚ました

長い夢を見てた気がします。とても悲しく、とても苦しい夢。でも、最後はとても暖かく心地のいい夢でした。

はて、ここはどこでしょうか？

周りを見渡すと保健室のような空間にいました。置いてある機器的にフラクシナスの医務室でしょうか？今は、何時でしょうか？

時計を探し見つけると変な点に気が付きました。

時間は普通です。まあ、ゲームの中にいたのでどれだけたっていたか分かりませんが。問題は日にちです。ゲームに入った日から1週間近く経っているのです。

ヤバい、寝過ぎした。いや、寝過ぎしのレベルを超えていますね。どうなっているんですかコレ？

まあ、とりあえず船首まで行きましようか。琴里ちゃん達に優しく迎えてもらいましよう。1週間近く寝ていたので起きたと知ったら喜んでくれるでしょう。

そう思っていた時期も私にはありません。

はい。現在の状況はフラクシナスの船首で私は正座しています。そのまわりを取り囲むように、土道達を取り囲んでいます。

いや、なんで私正座させられているんですか？「おはようございます！」って元気よく船首に入ったら琴里ちゃんに有無も言わさない表情で「正座」って言われたから、正座しましたけどこれする理由なくないですか？

「あ、あの……正座させられている理由が分からないんですが……」

「そう、まだ恍けるつもりなのね？千夜姉。いや、〈リーパー〉とよんだ方がいいかしら？」

あれれ〜おかしいぞ〜……えっ？本当になんでバレているんですか？まさか！密兵が！いや、私には兵はいませんでした！

「何のことですか？」

心の中は騒がしくても決して顔には出しません！どんと来てください！私の表情筋舐めないでくださいよ！

「じゃあ、これを見ても惚けれるかしら？」

琴里ちゃんがそう言うで大画面に見たことの無い精霊が映し出されました。

へえ、私が眠っている間に新しい精霊が……あれ？この精霊の顔、まんま私じゃないですか!?!合成ですか?合成ですよ?

これには私の表情筋も動き出してしまいます。だって、正体バレたと思つたら全く知らない証拠挙げられたんですよ。びっくりするなつて言う方が無理ですよ!

「私は知りません。それにそれは〈ヘリーパー〉では無いじゃないですか?」

「確かにそうだけど、これは〈ヘリーパー〉の反転体〈スペクター〉なの」

「反転……体?」

えっ?私、いつ反転した?

「私は寝ていたのでは無いのですか?」

「確かにこの1週間近く眠っていたままだったわ。でも〈スペクター〉は自分自身を魂月千夜と名乗っていたし、〈スペクター〉が消えてから千夜姉は目覚めた。これで、完全に無関係とは言えないんじゃない?」

確かに……苦しい……いや、でも記憶ないですし……こうなつたら、とことん惚けます。

「世界には同じ顔の人間が3人いると言いますし、私とは限らないんじゃないですか?その人が私を騙つただけかも知れませんが、起きたタイミングも偶然ですね!」

キツイ。いや、分かつてますよ?この言い訳がだいぶきついことは。でも、納得して

もらうしか……あれ？そもそも、内緒にする必要ありましたっけ？なんで、私が〈リーパー〉だということを内緒にしていたんですっけ？いつその事〈リーパー〉だということ伝えて堂々と協力した方がいいのでは？よし、なら早速……

「分かったわ。千夜姉は〈リーパー〉では無い。これでいいわね？」

「えっ？あ、その……」

「どうしたの？」

違うと言った手前、やっぱりそうだと言いつらいです。

「疑って悪かったわね」

「イヤイヤゼンゼンキニシテナイデスヨ」

本当にすみません……

く士道視点く

「琴里いいの？〈リーパー〉は絶対千夜だと思うぞ」

「実際に関わった士道が言うなら確かに信憑性は高いけど、千夜姉が言った通り、確実に千夜姉と言える証拠がないのも確かだし……まあ、〈リーパー〉に千夜姉がなら

か関係しているのは確かだね」

「今すぐにも封印はしなくてもいいのか？」

「もし仮に千夜姉がヘリーパーだとしても狂三や美九以上にこの世界に溶け込んでいるし、逃げる心配もない。しっかりと尻尾を掴んでからでも問題ないわ」

「そうか」

「令音！千夜姉の監視を強化してちょうだい」

「了解した」

凜緒リンカーネーション

少女はご都合主義の結界を見た

「目覚めてから2日後の朝」

あれから、自分なりに土道達に正体を明かさないと理由を考えました。別に、言えなかったから無理に理由付けしようとしている訳ではありませんよ? 本当ですよ?

私が土道達に正体を明かさないと理由はズバリ、凜音と万由里ちゃんが存在です。私が正体を明かせば土道は私を攻略しに来るでしょう。さらさら、攻略させるつもりは無いですが、万が一、億が一攻略されたとすると本当に2人の肉体を再現する方法が無くなります。それは、私的に許せません。だから、土道達に正体を明かさないので!

2人の肉体を作り出す方法は現状は「生命の満欠」のフエイト・オフ・ライフ（望月）パースで作りに出さないわけですが、これは元々は魂を生成するのであって肉体を作るものじゃないんですよ。よしのんは元々あったパペットに魂を付与しただけですし、死神達は霊力の塊であってしつかりとした肉体構造はできていないのです。なので、1人の人間として作り出すのは難しいのです。

あつ、今更ですけど死神たち一体一体にも魂は宿っていますよ。自我がないだけで経験で成長もします。一体をコピーして大量に作って経験と魂を集結させてまたコピーを繰り返してるので少しづつですが強くなっています。

……そろそろ現実逃避を止めますか。

言えなかつた事の現実逃避ではありません。実は今、この天宮市で問題が起きています。いや、まあ問題が起きていない方がすくないですけど……

さて、その問題ですけど……なんで、また^{ご都合主義の結界}〈凶禍樂園〉が発動しているんですか？

ご都合主義の結界……前に凜音が土道を死なせない為に土道が死んだら世界を繰り返すように張った結界であり天使、^エ〈凶禍樂園^デ〉が発動しているんです。

とりあえず、凜音に意見を聞いてみましょうか。どう思いますか？凜音……
……返事がない。ただの屍のようだ。

いや、魂ですけど。つて、あれ？本当に凜音が居ないんですけど!?!どこ行つたんですか、凜音の魂!!あと、万由里ちゃんも居ない!!

とりあえず、もう学校に行く時間なので帰ってきてから考えましょう。……消えてないですよね？

そんな不安を抱えながら扉を開き外に出ると私に不安は困惑に変わりました。

なんで、凜音と万由里ちゃんと鞠亜ちゃんが現実にいるんですか!!?

魂だけの存在となっていた、凜音と万由里ちゃん。データ上の存在である鞠亜ちゃん。現実には存在しないはずの3人が土道と話していたのです。

「いったい何が起こって……これも〈凶禍樂園^{エデ}〉の影響でしょうか?」

「おつ、千夜おはよう」

「えつ、ああ……おはようございます」

私が玄関前で固まって眩いていたところを見つけた土道が声をかけてきました。私はそれに対して何とかあいさつを返しました。

「千夜ちゃん、おはよう」

「おはよう、千夜」

「おはようございます、千夜」

「……おはようございます」

3人も続いてあいさつを返し、混乱した頭を落ち着かせます。とりあえず、3人からは……いえ、4人からは色々と聞かないと行けませんね。

「3人も後でお話があります。よろしいですか?」

「わかった、私は大丈夫だよ」

「あたしも確認したいこともあるし」

「はい。私も問題ありません」

「話は終わったか？」

終わっていませんが話を切り上げます。後でLoneで会話の続きをしないと行けませんね。

こうして、私の〈凶禍樂園〉内での2回目の生活が始まりました。

——あれ？そういえば、みんな初対面でしたよね？なんでもう仲良くなっているのでしょうか？まあ、仲がいいのは良い事ですし、気にしないでいいですね。

少女は現状を確認に動いた

この世界では、凧音はしばらく両親に顔を見せに行っていたということになっていて何故か耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃん、美九さんと面識があることになっていました。次に万由里ちゃんは凧音の親戚として凧音と一緒に暮らしている事になっていて、凧音と一緒に両親に会いに行っていたことになってました。最後に鞠亜ちゃんは先週から土道の家にホームステイに来た、外国に住んでるハーフの女の子になってました。

それぞれの設定は確かに私の頭の中になりました。とりあえず、変化についてはまとめることが出来ましたね。あとで、鞠亜ちゃんにもう一人について聞かないといけませんけど……

さて、学校に着きました。

なぜか、時崎さんが普通にいましたが、ある程度予想をしていたので驚きませんでした。でした。

凧音と鞠亜ちゃんは一緒のクラスになりました。これも予想通り。

万由里ちゃんは耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんと同じクラスになりました。なんで、あただけ別のクラスなのよってむくれていました。

クラスに3人（時崎さん・凜音・鞠亜ちゃん）が増えたためカオスになると思いましたが、凜音と鞠亜ちゃんが周りをなだめたりしていたので何時もよりクラス内は穏やかでした。

さて、朝言っていたもう1人について話をしておきましょうか。

「鞠亜ちゃん、ちよつといいですか？」

「千夜？はい、どうかしましたか？」

「ちよつと、話したいことがあるんだけどいいかな？」

「?ここではダメなのですか？」

「んー……ちよつと……ね？」

「分かりました」

鞠亜ちゃんと廊下に出て話します。周りには誰も居ないみたいなので普通に喋れます。

「まずは、私の正体についてなのですけど」

「はい、それは土道には伝えていません。もし、脅威が現れた際にしつかりと味方と分かる完全な精霊がいるのは心強いのです」

あつ、成程……確かに、土道のボディガードの意味合いも持てますね。

「これからもお願いしますね？それで、本題に入りますが……鞠亜ちゃん」

「はい」

「鞠奈さんもいるんですね？」

「!!?、それは……」

鞠亜ちゃんを見た時に一つの体に2つの魂が入っているのを確認出来ました。鞠亜ちゃんに関連する人といえは少ししか話したことはありませんが或守鞠奈、彼女の姉ぐらしいか思いつきませんでした。まあ、2つの魂はとても酷似しているので十中八九そうでしょう。

「……はい。確かに私の中に鞠奈はいます」

「やっぱりですか。鞠奈さんは今、起きていることこの理由は知ってそうですか？」

「分かりません」

「そうですか。私は私でこの状態について調べるので、もしなにか分かったら教えてください」

「分かりました」

では、次に万由里ちゃんと話しましょうか。隣のクラスに行き……って、こっちに来てますね。

「万由里ちゃん、今いいですか？」

「千夜？何か用？」

「ちよつと、今の状態について……」

「わかったわ」

はい、廊下に移動です。

「今回のこれはヘシテムゲルブは関係ないのですか？」

「なんだ、その事ね。てつきり、あたしの肉体についてかと思つたわ」

「まあ、そつちは……ポチポチと」

「それで？ヘシテムゲルブが関係しているかどうかで話しよね？それは無いわ。元々あれは大量の霊力を持つのにふさわしい人格の持ち主かを調べるこの世界のシテムであつて、精霊とは関係が薄いのよ」

「そうですか。こつちでも探るので何かあつたらお願いします。あと、土道にうつかり私の情報を流さないでくださいよ？」

「わかつているわよ。そんなへましないわ」

万由里ちゃんは教室に帰っていききました。よし、最後に凜音と情報交換です。

「凜音。少しいいですか？」

「千夜ちゃん？どうしたの？」

「少し、向こうで話しませんか？」

「ああ……わかつた。今行くね」

またしても、廊下！

「凜音は〈ヘルラー〉では無いんですね？」

今の凜音からは霊力を感じないのです。なので〈ヘルラー〉である確率はものすごく低いです。一応、確認のために聞いておきます。

「うん、私は〈ヘルラー〉じゃないよ。その言い方だとやっぱりこれは〈凶禍楽園^{エデ}〉なんだね。何となくだけど私もそうじゃないかなって思ってた」

「そうなんですか。まあ、一応犯人の目処はたっていますけど……」

「えっ!? 誰!？」

「いや、顔も会ったこともないから分かりませんが……でも、凜音と同じ霊力をこの天宮市内で観測したんです」

「そう、なんだ……」

「今度、接触を測ってみますね。そちらでも、わかった事があつたら共有お願いします」

「うん、わかった。あつ! そういえば! あの時大丈夫だった?」

「あの時?」

どの時でしょう?

「反転した時だよ。いくら呼びかけても反応無いから心配したんだからね?」

「やっぱり、私反転してたんですね……土道達はどれぐらい怪しんでいるでしょう」

か？」

「うーん……琴里ちゃん達はともかく土道は100%千夜ちゃんだと思っ
ていてもおかしくないけど……」

「そうですか……まあ、もしここでバレても〈凶禍樂園^エ〉が閉じられればみんな忘
れるんですけどね」

なので、今回は派手に動けます。

「もー千夜ちゃんたら……無理だけはしないでね？」
「分かっていますよ」

こうして、歪な存在の3人と情報を交換したのでした。

少女は鉄板をみんなで囲んだ

本当は〈凶禍樂園^{エホドレン}〉の使用者に会いに行くつもりでしたが、何かと用事が重なり行けませんでした。

今から晩御飯なのですが、凜音が帰ってきたということで鉄板焼きパーティーになった為、私はそこに参加していません。

参加メンバーは私、土道、琴里ちゃん、十香ちゃん、折紙さん、四糸乃ちゃん、時崎さん、凜音、耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃん、美九さん、万由里ちゃん、鞠亜ちゃんです。すごい人数ですね……

「四糸乃ちゃん、今日も可愛いですねー。1週間でのどの日が一番可愛いんですかー？」

「え、えつと……わ、分かりません。ゆ、夕弦さん……こういう時はどう答えたら……」

「指南。マスター折紙も言っていました。自分が可愛くない時などない、女はいつでも好きな人のために可愛くなると」

「おー、それは折紙ちゃんかっこいいねー！四糸乃もズバツと言いつつちやおう、ズバツ

とー!」

「え、ええええええええええ私、どうしたら……」

「ほう……これが今宵、灼熱の業火をもたらすという漆黒の大盾か。これでじわじわと贄を焼き尽くすわけだな……」

「では、試しに耶俱矢を鉄板に上げてみましょうか。折紙、耶俱矢を縛ってください」「任された」

「ちよ、ちよつと待て!贄が私なんて一言も言っていないし!」

「それなら邪魔せずにあつちで他の人と戯れていてください。油が引けませんので」「わ、わかった!く、くつくつく……我は今宵の晚餐を静かに待つとしよう」

「では鞠垂、私はこれを縛って外に出してくる」

「ご自由にどうぞ」

「どうしてええええええええ!!?」

「凜祢おねーちゃん、もつとお皿ですか?」

「お皿はもう大丈夫かな。これ以上置いちやうと狭いだろうし。足りなくなったら、汚れたのと交換で持ってくるから」

「その方がいいですわね。この人数ですし」

「こんなにつばい食べ物があつて、たくさん人がいるなんて凄いな！」

「確かにすごい人数ね……土道。アンタ、この鉄板焼き？つていうののやり方を教えてくれる？」

「別に難しいことは無いぞ？好きな食べ物を焼いて焼いたら食べるだけだ」

「焼くのはなんでもいいの？」

「ああ」

「なに!?なら、きな粉ぱんも焼いてもいいのか!？」

「いや、それはちよつと……」

賑やかですね……

元々、この鉄板焼きパーティー、もとい凧祢おかえりパーティーは十香ちゃんの提案で決まりました。こういう時に率先してこういう案を出してくれる子は助かります。凧祢とか遠慮して自分からは言わないでしようし。

「準備完了だぞ、おにーちゃん！家主として音頭は任せた！」

「はいはい、わかったよ。任せろ」

準備が終わったみたいですね。

「でも、乾杯の前に凜祢から一言。いいよな？」

「ええと……私？」

「お前以外に誰がいるんだよ。凜祢のためにみんな集まっているんだぞ？」

「え、えつと……それじゃあ……みんな、私のために集まってくれてありがとう。今度は本当に、お友達になりたいな」

凜祢がそう言った瞬間、士道の顔が強ばる。多分、私の顔を少し強ばっているでしょう。その言葉の意味をこの中で理解できるのは士道と私、鞠亜ちゃんと万由里ちゃんです。

凜祢の言葉はみんなとの繋がりが自分から偽物であると言っているみたいなので、でも、凜祢がみんなと正面から向き合うと決めたのでしょう。なら、私はそれを応援するだけです。

「ん？凜祢は何を言っているのだ？私たちは既に友と言える関係ではないか」

「……あ、そうだね。ありがとう、十香ちゃん。改めて、みんなよろしくね」

「うむ、よろしくな！」

「あなたは私の乗り越えるべき壁。簡単な理由で去ってもらっては困る」

「……よろしく、お願いします。私こそ……凜祢さんには、お世話になって

ます」

「凜祢ちゃんよろしくう！」

「よろしくお願いしますね、凜祢さん。凜祢さんがいると、士道さんのまわりがいつもり面白くなるので興味深いですわ」

「我が従僕としての自覚が足らぬようだな。既にお主は我から離れたくとも離れなれない……そのような存在になっていることに気がつかんとは」

「確信。夕弦も耶俱矢も凜祢を大切な友人だと考えています」

「凜祢さんとは目が合った瞬間からお友達ですよお。とーっても可愛い女の子ですしー」

「……そうですね。凜祢も、私と気軽に話してくれると嬉しいですよ」

「まあ、アンタとは何だかんだでそこそこ長い仲だし……これから、よろしく」
「みんな……ありがとう。凄く嬉しい……」

今、言ったのはみんなの本心でしょう。たとえその感情が出来るまでの過程が作られた物でもこれから本物にしていけばいい。私はそう思います。

ところで、さつきー人のおかしい人いませんか？どこかのポ○モントレーナーみたいなこと言っていましたけど……まあ、いつも通りですか。

「それじゃあ、いくぞ！乾杯!!」

少女は少年の娘を見た

うつぷ・・・食べすぎました・・・

みんなで仲良く鉄板を囲んで食事をし、たくさん食べました。凜祢も万由里ちゃんも鞠亜ちゃんもみんなに混ざり楽しそうにしていました。

話の途中で十香ちゃんが凜祢に料理を教えて欲しいとお願ひし皆がそれに同調して、凜祢のお料理教室が開催されることになりました。ちなみに、精霊ちゃん達の料理の上手さはこんな感じですかね？

凜祢＜土道≡鞠亜＞折紙≡時崎＜夕弦＞四糸乃＜琴里≡耶俱矢＞＜「越えられない壁」＞
十香≡美九

万由里ちゃんは出来るか分かりませんがどうなのでしょう？

「で、どうなんですか？」

「さあ、でもアタシはあの6人の霊力から生まれた存在だから、あの6人の平均ぐらいだと思います」

「それって、食べれるレベルなんですか？十香^マちゃん^イと美九^ナさん^スがかなり大きいと思いますか？」

「うるさいわね。そういうアンタはどうなの?」

「私ですか? 一応、凜祢から免許皆伝してもらっています」

そう、一応料理はできるのです。なぜ、自分で作らないかって? 凜祢達の料理が反則的に美味しいからですよ。あと、めんどくさい。

あつ……だいぶ、お腹が落ち着いてきました。あれ? そういえば土道は?

靈力を辿って土道を探すと外にいるみたいです。つて、高台まで行ってますね……どこまで散歩行ってんいるんですか。あれ? 土道に近づいて行っているこの靈力は……っ!!

慌てて、外に飛び出しみんなから見えないところで〈靈魂看守〉を召喚し土道のもとへ急ぎます。

土道に近づいていた靈力。それは凜祢の〈凶禍樂園〉とほぼ同じ靈力だったからです。高台上空につきました。靈力をほぼ発して居ないのでフラクシナスには気づかれていないでしょう。

土道と一緒にいたのはピンク色の髪の幼い女の子でした。見た感じ四糸乃ちゃん並に幼いです。そして、凜祢に何となくですけど似ている気がします。〈凶禍樂園〉を使用者だからでしょうか?

2人の会話を聞こうと茂みに隠れて耳を傾けます。

「りおはわかってているよ？いつかはどうは、パパなの。りおのパパのなまえだよ？」

「……Why? パパ？」

私が困惑していると、後ろから声をかけられました。

「盗み聞きは感心しないわよ」

「えっ？うわっ——むぐ?!」

「ちよつと、声をあげないでくれる？」

「鞠奈さん？」

そう、後ろにいたのは或守鞠奈。鞠亜ちゃんのお姉ちゃんです。なんでここに？と言うか、活動交代できたんですね……見た目もしっかりと変わってますし、魂によって肉体が変化するのでしょうか？

「そうよ、他の誰に見えるの？キミの目はお飾りなのかな？」

「酷い言いようですね……って、二人の会話の続きは——」

会話を中断し慌てて、土道達の方へ耳を傾ける直します。

「みんながしあわせになるためにはね？『いちばんだいたいなもの』をみつけないとだめなんだよ」

「えっ？みんなの幸せに……一番大事なものの？」

「それじゃあ、いくね！ばいばい、パパ！」

「君は一体……」

「りおは……凜緒つてなまえだよ？園神、凜緒！それじゃあ、またね！」

そう言つて、トテトテと凜緒ちゃんを走つていってしまいました。

園神……凜緒と同じ苗字。園神凜緒……彼女は一体何者なんでしょうか？

「ちよつと、アタシの事忘れてない？」

「あつ……いいえ」

「今、『あつ』つて言つたでしょ！まあ、いいわ。どうせあの子を追うんでしょ？なら、これだけは約束して。あの子を傷つけないで。もし、何かあつたらアタシはキミを許さない」

そう、睨みつけてくる鞠奈さんの目には電脳世界ではなかった、優しさや温かさが感じられました。土道が鞠奈さんが鞠亜ちゃんを助けたつて言つて言つてましたけど、本当のようですね。私が倒れてから何があつたんでしょう。土道、恐るべし……

「分かりました。鞠奈さんは土道と存分にイチヤイチャしてくださいね？」

「何言つてるの？キミ、アタシに喧嘩売つてるの？」

「そんなことないですよ。では、また機会があれば」

私は靈力を辿つて凜緒ちゃんを追いしました。割と近くにいたためすぐに発見するこ

とが出来ました。私はゆつくりと凧緒ちゃん前に降ります。

「あなたはだれ？」

「私はそうですね……土道の友達です」

「パパの？」

「そうです。良かったらお話しませんか？」

「うん……でも、りおはいちばんだいじなものをさがさないといけないんだよ」

「じゃあ、お姉ちゃんも一緒に手伝ってあげましょう」

「いいの!? ありがとう、しにがみさん」

凧緒ちゃんはニコツとこちらを向かって笑顔を見ました。守りたいこの笑顔。

「飴ちゃん食べる？」

「たべる!」

こうして、私は凧緒ちゃんと話しながら『いちばんだいじなもの』を夜通し探し続けました。

少女はクラスで親睦を深めた

ね、眠い……

昨日、夜遅くまで凜緒ちゃんに付き合っていたのであんまり寝れていないので、物凄く眠いです。凜緒ちゃんっていつ寝てるのでしょうか？

私は琴里ちゃんの救援要請を受けて土道の家に行くのと眠気が吹き飛びました。机の上には、和食・洋食・中華と様々な料理が並んでおり、その量は数十人分あります。

……何この量？

どうやら、凜祢のお節介と鞠亜ちゃんの探究心がこの悲劇を呼んだそうです。凜祢がみんなの食べたいものを次々と作り、鞠亜ちゃんが初めて作る料理に対して楽しくなって歯止めが聞かなくなつたそうです。万由里ちゃん？今起きたばかりですよ？

この量は女子ばかりのメンバーで食べ切るのは……あつ、十香ちゃんがいるから余裕ですわ。

他の琴里ちゃんのSOSを受けた、十香ちゃん、四糸乃ちゃん、耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃん、美九さんが到着しました。

これだけ居れば大丈夫でしょう。少しぐらいなら冷蔵庫で保存出来るでしょうし。

私達は朝食を食べ始めました。

やっぱり、食べすぎました。昼食いきりませんね、これ。

学校の休み時間になり、私達は鞆亜ちゃんの席の周りに集まって話をしていました。内容は今日の朝についてです。

「まあ、今朝はそんなことがあつたんですの？わたくしも是非参加したかったですわ」「気がきかずにすみません。狂三と折紙はすぐに呼び出すのは難しいかと・・・」

「残念。私は呼ばれたらすぐに行く準備は出来ていた。今度は一報貰えたら嬉しい」
この2人なら呼んでも本当にすぐ来そうですね。時崎さんはザフキエルで時間を操作して、折紙さんは先読みで行動して。

「はい、そうします。そういうえば折紙の連絡先は聞いていませんでしたね。あとで教えて貰えますか？」

「わかった。後で送っておく」

「え？送っておくって・・・。鳶一さん。なんで鞆亜ちゃんの連絡先を・・・」

「企業秘密」

怖っ……くはないですね。もう慣れました。どうせ、土道関連の情報を探っている時に手に入れたのでしょう。まあ、慣れてない凧祢は大分困惑しますね。

「そ、そう……あんまり気にしないようにしておくね。あはは……」

「しかし、本当にすごかった。凧祢の料理も、鞠亜の料理も絶品だったのだ。箸がずっと止まらなかったぞ」

箸がずっと止まらなかった？……いつも通りでは？

あつ、料理と言えば凧祢ちゃんは何食べているのでしょうか？今度、何か持っていくましよう。

「私たちが失敗しちゃったのを助けてくれてありがとう。でも、喜んでもらって良かった」

「しかし、夜刀神十香はもう少し自重を覚えるべき。たくさん食べる女性が男性に好まれると勘違いをしている。実は土道は裏で引いている」

「な、なんだと鳶一折紙！シドーはそんなことは一言も言っただぞ！」

持つていくのは何がいいですかね？凧祢ちゃんの好みって知らないですし……

「そうだよ、鳶一さん。土道は自分の作ったものを笑顔でたくさん食べてくれた方が嬉って思うから。私と同じで、ね」

「おう、そうか！そうだな！ふふん、どうだ鳶一折紙」

「やられた……園神凛祢、やはり放置できない存在。隣に住んでいる幼馴染というアドバンテージは絶対的」

「あらあら……折紙さん？他人を貶めるやり方を反省した方がよいのではありませんか？」

「あなたにそれを指摘される筋合いはない」

「2人とも、落ち着いてください。では、今度はホットケーキパーティーなんてどうでしょう？それなら午後のおやつとして、学校の後でも大丈夫ですし」

ホットケーキ？……なるほど、甘い物がいいかもしれませんね。デザート類が嫌いな女の子は少ないですし、甘くて美味しいは正義ですから。

「まあ、それはいい案ですわ。ねえ、折紙さん？」

「私も参加する。そういった場合はフエアでべき」

「それには同意しますわ。ただでさえ、凛祢さんや鞠亜さんは、琴里さんや千夜さんを除けば、士道さんに一番近い方々ですから」

「それを指摘されてもどうしようもありませんね、凛祢」

「そうだね。……あれ？なんで千夜ちゃんとは別なんだろう？」

よし、そうと決まれば何か作って行きませうか。マドレーヌとかがいいでしょうか？比較的簡単に作れて、美味しいですし。

「よし、それでは次はほっとけーきだな！楽しみだ！」

「はい、私も楽しみです。来週あたりがいいかもしれないね」

「あつ、そろそろチャイム鳴っちゃう。席に戻らないと」

いや、ここはもつと凝った方が……

「千夜ちゃん？」

いや、でも……

「千夜ちゃん！」

「はっ！はい！……なんですか？凜祢」

「なんですか、じゃないよ。どうしたの？なんかぼーとしてたみたいけど……

大丈夫？」

「すみません、大丈夫ですよ。……凜祢」

「何かな？」

「凜祢って姉妹いましたっけ？」

「えっ？いないよ。千夜ちゃんもよく知っているよね？」

「やっぱり、そうですね。凜緒ちゃん、一体どういう存在なのでしょう。かわいいのは分かります。それ以外が分かりません。」

「凜祢、マドレーヌ好きですか？」

「えっ？う、うん・・・普通が好きだけど」

「分かりました。ありがとうございます」

「う、うん・・・？」

よし、今度マドレーヌを作りましょう!!

少女は少年を振り回す娘を見た

早速、材料を買うために駅前のでパートまで来ました。

のんびりと、買い物をしていると士道と会いました。凜緒ちゃんを連れてた。

「よ、よう……千夜」

「士道？その子はどうしたんですか？」

「この子は殿町の親戚なんだ。今日は俺が預かることになってだな……」

殿町君の親戚？そういうえば園神家は殿町君の親戚つて設定がありましたね。

「初めまして、私は魂月千夜です。あなたは？」

「りおはね、りおっていうんだよ！よろしくね、ちやちゃん！」

「はい」

「……うーん」

「どうした、凜緒？」

「ほんとうにはじめまして？」

えっ？バレた？早くないですか？まあ、そんなわけ……

「ああ！しにがみのおねえちゃんだ！」

バレていらつしやるう!!

「しにがみ? 凜緒、千夜と会ったことがあるのか?」

「うん! きのうねー!」

「凜緒ちゃん! 飴ちゃん食べる?!」

「えっ……うん! たべる!」

飴を手渡す為にしやがんだ時に凜緒ちゃんに耳打ちをします。

「凜緒ちゃん。会ったことは2人の秘密ね」

「え〜? なんで?」

「女の子は秘密が多い方が魅力的になるんですよ」

「そうなの? じゃあ、わかった」

「偉いね。そんな凜緒ちゃんにはもう一粒プレゼント」

「わーい」

よし、買収完了!

「それで、凜緒は千夜と昨日? あったのか?」

「ひみつだよ。ねー」

「ねー」

「何だよそれ……」

その後、みんなであちらこちら買い物しながら、お話しました。時間の流れは早い物で、すぐに日が暮れて来ました。

「りお、もういかないと。ちやちゃん、パパ！きようはたのしかったよ」

凧緒ちゃんはそう言い、最後に土道に耳打ちして帰って行きました。

「さて、俺らも帰るか」

「そうですね。土道、それで園神凧緒ちゃんは何者ですか？」

「えっ?」

昨日や今日、私が会う前に色々と話していたみたいですし、情報を集めておきたいです。

「なんで、そんなことを聞くんだ?」

「じゃあ、凧緒に凧緒ちゃんのことを聞いていいですね。同じ苗字で同じく殿町君の親戚。凧緒が凧緒ちゃんのこと知らないはずがないですし」

「うっ……それは……」

「前に言いませんでしたか? 土道の嘘はわかりやすいと。それに、1人で問題を抱え込まないと約束しましたよね? 私を頼ってくれるのでは無かったんですか?」

ん? あれ? 私を頼る約束はしましたっけ?

「……わかった、降参だ。凧緒について俺が知っていることは教えるよ」

それから、凜緒ちゃんに関する情報を貰いました。簡単にまとめると

・名前は園神凜緒。

・土道をパパだと言っている。

・ママは凜祢。

・みんなが幸せになる為に『いちばんだいじなもの』を探している。

・凜緒ちゃんのを鞠奈さんがしている。

うん、だいたい知ってました。ただ、ママが凜祢ね・・・これ、他の子が聞いたら大変な事になりそうです。

「とりあえず、他の子の前で凜緒ちゃんの両親が土道と凜祢であることを知られないようにしてください。それから、今後ホウ・レン・ソウをしっかりとお願いしますよ。物理的に力になれなくとも、精神的には支えられるように頑張りますので」

「ああ」

そうして、私達はそれぞれの帰路についた。

少女は家族団欒？に加わった

〈凶禍樂園〉が発生して三日経ちました。

今日は朝から土道は何処かへ出かけてしまいました。多分、凜緒ちゃんのところでしょう。まあ、鞠亜ちゃんがこつそりついて行ったので大丈夫でしょう。

残り組は凜祢のお料理教室です。私も手伝っていたのですが、そこまでやるのがなかったので隣でお菓子作りを始めました。

作るのはマドレーヌです。プレーンにココア、チョコレートそして抹茶味を作りましょう。

マドレーヌは比較的簡単なので誰でも作れます。まあ、マドレーヌの定番の貝殻型にするには専用の型が必要ですが。

よし、気合い入れて作りましょう。

結構作りましたね……

今は第7弾を焼いているところです。あつ、今のうちに冷えたのを袋に詰めて持っていきましよう。

私はマドレーヌを袋に詰めて五河家へ持っていきます。合鍵を使って開けると凧が中から顔を出しました。

「あれ?千夜ちゃん、どうしたの?」

「凧だけですか?土道はまだ戻っていませんですか?」

「うん、だからご飯だけ作っておこうと思って」

「そうですか。上がらせてもらいますね」

「私の家でもないんだけどね」

凧とすれ違い中へはいると、玄関の方から音がしました。土道達が帰ってきたみたいです。凧は小走りで玄関の方へ向かいます。そのうち、こつちに來るでしょうから私はこのまま作業を――

「――ママツ!」

ん?今、凧ちゃんの声が聞こえたような……

しばらく、玄関の方から話し声が続き、話し声が途切れたら扉が開きました。奥からは凧、土道、凧ちゃん、鞠奈さんが順に入ってきます。

「おかえりなさい。それから、こんばんは」

「ああ、千夜もこつちにいたのか」

「ちやちゃんだ。こんばんは」

「これから、みんなで晩御飯を食べるんだけど……千夜ちゃんもどう？」

「それはありがたいですが……明らかに量が足りませんよね？」

「元々、土道と凜祢の分しかないため明らかに量が足りません。」

「あつ……そうか。どうしよう」

「よし、じゃあご飯をおにぎりにしよう。そうすればたくさん食べれるから、みんなでおかずを分けてもお腹いっぱいになるだろう」

「おにぎり？うん、りお、おにぎりたべたい！」

「それじゃあ、早速作っちゃうね。ちよつとだけ待ってて」

「いえ、私が作りますよ。凜祢は凜緒ちゃんと親子仲を深めていてください。土道、手伝ってください」

「ああ。ということでもこつちは俺たちに任せてくれ」

「そうだよ、ママ。ママはりおのとなりでおはなししよ？」

「わかった。それじゃあお話ししようか、凜緒ちゃん」

凜祢と凜緒ちゃんが話を始めると、鞠奈さんがキッチンの方へやってきました。

「あたしも手伝う」

「どういう風の吹き回しだ?」

「ほんつと、キミはこういうとき鈍いわよね。親子水入らずの時間、作ってあげた方がいいでしょ」

鞠奈さんつて、やっぱり変わりましたね。電脳世界の時はこんな優しく笑うなんて想像もつきませんでした。土道と鞠奈さんが話している間に必要なものを出しておきます。とは言つても、米と塩と海苔だけなんですけど。

「2人とも、作り始めますよ」

「ああ、そうだな。ところで……」

「……何よ、じつと見て?」

「おまえ、そもそも料理できるのか?」

土道の疑問はもつともです。何度も世界をやり直し土道の料理のデータをラーニングした鞠垂ちゃん料理をできるのは分かりますが、それをしていない鞠奈さんは料理が出来るのでしょうか?

「五河土道……人を莫迦にするのもいい加減にしなさいよね。もういい、キミは手を出さないで!」

プライドを傷つけたのか鞠奈さんは怒り、土道を叩きました。土道つて、デリカシーがないですよ。さて、私は私で作りますよ。

「魂月千夜！キミも手を出さないで！」

えー、こつちまで飛び火が来たんですけど・・・下手に手を出して怒られるのも嫌ですし凜祢と凜緒ちゃんの会話に耳を傾けましょうか。

「それでね、はじめてはみれすにいったんだ。パパといっしょにがんはつてたべたの！」
はみれす？・・・ああ、ファミレスですか。

「そっか、よかったね。土道・・・じゃなくてパパとは何を食べたの？」

「うんと・・・はんばーぐでしょ？おむらいふでしょ？あとね、みーとそーす！」
「わあ、凄いいね。美味しかった？」

「とつてもおいしかった！パパとまりなおねえちゃんがいっしょだったから、すつごくすつごくおいしかったよ！」

今日、土道と鞠亜ちゃんは凜緒ちゃんとファミレスに行つてたんですね。

「・・・はい、できたわよ」

鞠奈さんがおにぎりを握り終えたみたいでお盆にのせて持つてきました。おにぎりの大きさは小さく凜緒ちゃんの手にすっぽりと入る大きさでした。ここにも、鞠奈さんの気遣いをかんじます。

「わー、おにぎり！ありがとう、まりな」

「なんで鞠亜はお姉ちゃんであタシは呼び捨てなのよ」

「まりなは……おねえちゃんっぽくないからかな?」

「はいはい、そうですね。全く、いい加減なだから」

あれ? 私もお姉ちゃん呼びじゃないのはお姉ちゃんっぽくないから? いや、そんなはずは……

「そろそろ、第7弾のマドレーヌが焼ける頃合なので、ちよつと失礼します」

私はマドレーヌを入れている家のオーブンまで行きました。ちょうど、焼きあがったところで終了を知らせるオーブンのブザーがなり始めました。

型を取り出し、生地を外して冷やします。とりあえず、生地は全部使いきれましたね。さて、五河家に戻りましょうか。

私が五河家に戻ると少し暗い雰囲気になっていました。あと、鞠奈さんが鞠亜ちゃんになっていました。

「えつと……何かありました?」

「いや、ちよつと鞠奈と凜祢が衝突してな……」

「大丈夫ですか? 2人ともあまり感情を表に出さないタイプですよね」

「ああ、だからよけいに心配だ」

「なら、早めにケアが必要ですね……」

何かいい案はないかと考えながら晩御飯を食べ終わり、それぞれの家へ帰る時間にな

りました。

「では、そろそろ帰りますね。あつ、凜緒ちゃんこれ良かったら食べてください」「ちやちゃん、ありがとう」

「私も、そろそろ帰るね。凜緒ちゃんと鞠亜ちゃんも、おやすみ。またね」

「はい、おやすみなさい、凜祢」

それぞれの家へ戻ろうとした時、凜祢を引き止める声が上がりました。

「……ママ、いつちやダメ」

「凜緒ちゃん……?」

「きょうはね、まりなもないから。あしたになるまで、いつしよにいいよ?」

「ええと……どうしよう。困ったな……」

「凜祢がいいなら、それでいいんじゃないか?」

「そうですね。凜祢に任せます。凜緒は私と一緒にいるのは嫌みたいですから」

「そんなことないよ? りおはまりあおねえちゃんだいきすぎだよ?」

「ふふっ……わかつていますよ。今日は思う存分、凜祢と一緒にいてください」

「うん! りお、ママといっしょにおやすみする!」

「折角ですし、土道と3人で寝てはどうですか?」

「千夜(ちゃん)!?」

「うん！パパともいっしょがいい！かぞくだんらん？かわのじになって、いっしょにねるんだよ！」

「あ、あはは……どうしよう、土道」

「うーん、困ったな……」

戸惑っている2人に向かって鞠亜ちゃんの援護射撃が入ります。

「別にそう難しく考えなくて良いのでは？寝ればいいでは無いですか」

「え？ちよ、ちよつと鞠亜ちゃん!?土道と一緒に寝るってそんな……何言ってるの!？」

「私は既に経験がありますので、何も起きないことは明白です。それに凜緒は小さいですし、ベッドに3人で寝るのは不可能ではありません」

「土道、私のいない時にそんなこと……」

「い、いや、あれだぞ？鞠亜が寝ぼけて入ってきただけで……」

「私の時は許可を貰って入りました」

「千夜!!？」

火に油どころかガソリンをかけていくスタイル。

まあ、私の場合は特殊な事例ですけど。

「ふうん……そっかあ」

わあ……珍しく凜祢が妬いていますね。

「ねえねえ、パパ、ママ、ダメ……?」

「仕方ないなあ……特別だよ?」

「ほんと!?!」

「お、おいおい、凜祢……」

最終的に土道と凜祢が折れて3人で寝ることになりました。

「やったあ!ちやちゃん、まりあおねえちゃん、ないすだね!これできようパパとママと
いっしょ!」

「でしよう。ふっふっふ……」

「良かったですね」

「それじゃあ、私の家に行こっか。土道の部屋だと片付けとか大変そうだし」

「あ、ああ、俺はいいけど……って、別に変なものは置いてないぞ!」

「ふふ……そんなこと言っていないってば。でも、そんな反応するなんて、本当は何
か心当たりがあるのかな?」

「だ、だから、ねえって!」

「ふふ、冗談だよ」

「じゃあ、ママのおうちいこ!」

「そうだね。一緒にお風呂入ろっか。それじゃあ……土道は1時間後くらいに来てくれる?」

「わかった。1時間後な」

「あれ? パパとママ、おふろいつしよにはいらなの?」

「えっ!?!」

こうして一日は幕を閉じていきました。

少女はいちばんだいじなものを探した

朝、いつもより早く目が覚め外に出ると凧緒ちゃんがちようど園神家から出てきました。

「凧緒ちゃん、おはようございます」

「ちやちゃん、おはよう！」

「……………土道と凧糸に一言言っただけでいいのですか？」

「うん……………もうじかんがないの。はやく、いちばんだいじなものをみつけないと、みんながしあわせにならないの」

いちばんだいじなもの……………それが一体何かは分かりません。ただ、〈凶禍楽園〉の消滅が近いみたいです。凧緒ちゃんや鞠奈さんの話を聞く限り、いちばんだいじなものが最後のキーとなり〈凶禍楽園〉は完成するのでしょうか。

「よし、今日はお姉ちゃんが一緒にいちばんだいじなものを探してあげる」

「いいの？」

「お姉ちゃんに任せなさい」

そう言い残して、家に戻り準備を整え表に出ます。

「さて、行きましょう」

「うん。よろしくね、ちやちゃん!」

彼女はそう無垢な笑顔を私に向けてきました。

「みつからないね……」

「そうですね」

一日はあつという間に過ぎてしまい、日が暮れてきました。そろそろ、鞠奈さんの活動時間になるのでバトンタッチですね。

それにしても、最後のキー、『いちばんだいじなもの』は何なんでしょうか。土道と凛柊に關係があるものなのでしょうか? 土道はともかく凛柊の方は……あつ、そうか! 凛柊は1度この世界から消えています。その凛柊に關係があるもの、つまり凛柊がこの世界にいたという証明が出来るものが『いちばんだいじなもの』の正体です。まったく、自分でよく言ったものです。

「……最後の鍵キですか。」

凛柊に関するものが消えた世界で唯一残った凛柊がいた証拠。それは、土道が凛柊に

渡した合鍵。それが、『いちばんだいじなもの』の正体。そういえば、凧柙は合鍵をとっても大事そうにしていましたね。

「あつー！まりなだ！」

凧柙ちゃんの声に反応して、その方向を向くと鞠奈さんが来ていました。鞠奈さんは少し気まづそうにこちらに来ました。

「魂月千夜。凧柙の面倒を見てくれてありがとう」

「いえ……これから凧柙ちゃんを土道と凧柙の所に連れていこうと思いますが……いいですね？」

「……かまわないわよ」

「そうですね……鞠奈さん、もしあなたが迷っているなら自分と向き合ってくださいね？」

鞠奈ちゃんから聞いた話では、鞠奈さんのこの世界での立ち位置は凧柙ちゃんのガーディアン。凧柙ちゃんを守ることが仕事です。今の鞠奈さんの感情は、ガーディアンとして凧柙ちゃんの願いを叶えたい思い、この世界に本来居ない私達は消えるべきだと言う思い、それでも消えたくないという思い、それぞれが複雑に絡み合っていて、それが爆破した結果、凧柙との衝突となったみたいです。

「なんのことが分からないね」

本人は認める気はないそうですが。

「なら良かったです。後悔だけはしないように……凛緒ちゃん、土道。パパと凛柊ママのところに行こっか？」

「パパとママのところ？うん！いく！」

私達は土道達がいる高台へ向かいました。

少女は守護者と対話した

「ねえ」

「なんですか?」

士道と凜祢がいる高台へ、凜緒ちゃんと鞠奈さんと向かっている最中、鞠奈さんが声をかけてきました。凜緒ちゃんは少し先を進んでいて聞こえていなさそうです。

「キミの精霊の能力に魂を保存する機能があるよね?」

「確かにありますが……それが、どうかしたのですか?」

もしかして、自分を保存して欲しいって事でしょうか?別にそれなら、構わないですけど。と言うか、やるつもりでしたし。

「それなら……凜緒を消える前に保存してくれないかしら」

「凜緒ちゃんをですか……」

「凜緒はこの後どうなっても消える。へ凶禍楽園この世界が完全なものになって続こうが、続く

まいが」

「えっ?」

凜緒ちゃんが消える?続かなかった場合はなんとなく想像していましたが、続いても

ですか。

「そうですね。私もそれがいいと思います」

「それならー」

「でも、ダメなんです」

「なっ、なんでよ！キミも凜緒を助けたいと思ってるんですよ!」

「ええ、確かに凜緒ちゃんにも消えて欲しくないと思います。凜祢も万由里ちゃんも鞠亜ちゃんもそして、貴女も消えて欲しくない私は思っています」

「なら、なんでダメなのよ!」

「ダメと言うより……出来ません」

「出来、ない?」

そう、私は元々この世界にいないはずの全員を保存するつもりでした。しかし、凜緒ちゃんだけは出来ないのです。

「いえ、出来ないも少し違いますね。実は、凜緒ちゃんの魂は物凄く、不安定なんです。魂を保存しても、記憶や人格が消える可能性があります。それに……凜緒ちゃんは凜祢の魂の一部から出来ているんです」

「それは……っ!」

鞠奈さんは心当たりがあるのか言葉につまります。

「凜緒ちゃんと凜祢。2人の魂を別々に保存した場合、2人とも人格や記憶が消滅、もしくは欠損するでしょう……」

「だからって、諦めろって言うの!」

「私だって、どうにかしたいですよ!!」

「っ!?!」

「ふたりとも、どうかしたの?」

「!?!」

気がつくまで凜緒ちゃんが近くまで戻って来ていました。凜緒ちゃんは心配そうにこちらを覗き込んでいます。

「な、なんでもないわよ」

「そ、そうですよ」

「けんかしてたの?けんかはだめだよ?」

「……そうね」

「はい、そうですね……土道のもとへ急ぎましようか」

「うん」

凜緒ちゃんはまた先行して歩いていきます。まだ、鞠奈さんに伝えていないことが一つあったので今のうちに伝えときましよう。

「鞠奈さん、あなたの魂も不安定です。と言うより、足りていないが正解でしょうか？」
「……………あたしの事はいいのよ。それよりも、凜緒の事をどうにかしなさい」
「……………わかりました」

鞠奈さんの魂は大部分が欠如しています。主要となる部分はありますがその他が無く、鞠亜ちゃんの魂を借りている状態です。凜緒ちゃんよりは問題レベルが低く、凜柀よりは高いです。

鞠奈さんは、自分よりも凜緒ちゃんを助けて欲しいみたいです。

どうか、全員を助け出す方法はないのでしょうか……………

少女は結界の終わりを見届けた

微妙な雰囲気になりながらも高台へ到着しました。視線の奥には凜祢と土道がいました。そして、土道の手にはいちばんだいじなもの、凜祢の合鍵がありました。

鞠奈さんはそれを見つけると、走り出し土道の手のひらから鍵を奪い去ります。

「もーらい」

「鞠奈っ!？」

「やっぱり、こういうものだったのね。予想通り過ぎて、なんだか拍子抜け。凜緒は園神凜祢の記憶の残る場所にあると思ってたみたいだけど、園神凜祢の感情を考えれば、それは五河土道に近い場所にあつて当然。やっぱり、見た目通りまだまだ子供ってことね」

「鞠奈……おまえ、どうして……?」

「本当はこんなことしたくないんだけどね。でも、この子の頼みだから。ごめんね、土道」

「ありがとう、まりな。……パパのおかげでみつけたよ。いちばんだいじなもの!」
鞠奈さんは凜緒ちゃんに鍵を渡し、凜緒ちゃんはその鍵を大事そうに胸に抱きまし

た。

「これでみんなしあわせになれるね。とつてもとつても、しあわせになれるんだよ！」

「駄目だ、凜緒……この世界は、続けるべきじゃない」

「どうして？ だつてこのままだとパパもかなしくなつちやうよ。ママともあえなくなつちやうし、まりあおねちゃんもまりなもいなくなつちやうよ？」

「……それでも、駄目だ」

「……ならば、すべてがかなうよ？ しあわせなゆめをみて、しあわせなまいにちをすごして、しあわせなおわりから、しあわせなはじまりをするの」

士道に凜緒ちゃんの説得を任せて私は私で準備をしましょう。今回は、凜祢の時みたいに戦うことにならなければいいのですが……あの時の〈ガーディアン〉の大量発生は厄介でしたね。今回は鞠奈さんが増えるのでしょうか？ 電脳世界の時もコピーして増えていましたし。

ギリギリまで凜祢、凜緒ちゃん、鞠奈さんを救う方法を考えませんと。どうかして、欠損部分を埋める方法は……

鞠奈さんには無理とは言いましたが確実性がないのでそう言っただけで100%無理な訳ではありません。私はギリギリまで粘るつもりです。

よく思い出して、自分の能力を最大限応用して、それで全員助け出す、そのために考

える。今の私にできる最大限を尽します。

お互いの欠損を埋めるにはどうすれば……同時に2人を取るとダメになる。お互いが足りない状態になってしまう。

機械みたいに予備パーツを他から持つてこれれば楽なのですが……ん？……予備パーツ……コピー……複製から情報の書き換え……

あれ？これ、もしかして死神達みたいにコピーを使えば、いけるのでは？

まず、凜祢を完全な状態で保存してコピーします。その後、凜祢と凜緒ちゃんを分裂させて足りない部分をコピーした魂で補充し、浸透させてゆつくりと馴染ませる。必要な情報の選択や魂の結合でかなり時間がかかる間もしれませんがこれなら……

しかし、万が一失敗したら……いえ、失敗したらじゃないです成功させるんです。全員助ける為に……

「千夜」

「……あつ、鞠亜ちゃん？」

「はい、鞠亜です。私のお姉ちゃんをお願いできますか？」

「その様子だと、土道は凜緒ちゃんの説得には成功したみたいですね」

「はい、今は凜緒は凜祢の中に戻り、凜祢は土道と一緒にいます」

「そうですか。鞠奈さんの魂を保存する際、あなたの魂も一緒に保存しますがよろしい

「でしようか？」

「大丈夫です。この世界での私と鞠奈の存在は混ざっていますし、鞠奈だけと言うのが難しいのも頷けます」

「じゃあ、始めますね？〈靈魂看守〉—————【魂の接続】」

鞠亜ちやんに触れて魂を【魂の記録書】と接続させます。さて、仕上げですね。

【記録保存】

鞠亜ちやんと鞠奈さんの魂を保存しました。と言うか、凜祢や万由里ちゃんの時もこうすれば良かったですね……

さて、次は凜祢の番ですね。

凜祢と土道の元へ行くと、凜祢の体は少し発光していて、タイムリミットが近いことを感じさせます。

「今度はちやんと言える。さよなら—————凜祢」

「うん。さよなら、土道」

私は別れを告げた2人のもとへ姿を現します。土道は警戒をしていますね。しようがないと言えばしようがないですけど。

「りん—————」

「土道！さっきの言葉取り消すね！」

土道の言葉を遮り、凛祢は私の方へ走りながら土道に向かって言いました。

「またね、土道！」

【記録保存】

そして、〈凶禍楽園〉は崩壊しました。

少女はその花の意味を知った

『それで？あたしに何も言わずに色々やっていたわけ？』

「申し訳ないです……」

万由里ちゃんの魂の回収をすっかり忘れていましたが、ちゃんと元に戻っていました。元に戻ってから万由里ちゃんに色々問いただされました。

『まあまあ、万由里ちゃんその辺にしてあげて、ね？』

『凛祢？これについてはアンタも同罪なだけど？』

『うう……それは、ごめんね』

『はあ……まあ、いいわ。悪いと思ってるなら早く、あたしの体をどうかしなさい』

「はい……」

『それじゃあ』

そう言つて、万由里ちゃんは出てこなくなりました。

『あはは……怒られちゃったね』

「そうですね……」

『それで、鞠奈さんと凜緒ちゃんは．．．．』

「まだ、時間がかかりそうですね」

凜糸は割と直ぐに魂が安定したため普通に話していますが、鞠奈さんと凜緒ちゃんはまだまだ時間がかかりそうなのです。

『そつかあ．．．．どれぐらいなのかな?』

「鞠奈さんは意外と直ぐに構築が終わって、後は安定化すれば出てこれると思います
が．．．．凜緒ちゃんはまだ、構築が終わって無くて．．．．まだまだかかります
ね。年単位で」

『年単位なの!?!』

「まあ、待つしかないですね」

『うん．．．．よろしくね?』

「はいーはあ．．．．」

本を閉じて、通話を終えます。これから、どうしましょうかと本を消してその場から
動こうとした瞬間、声をかけられました。

「どうしたんだ? 千夜」

「し、し、土道!?!」

「本当に、どうしたんだ!?!」

えっ、いつから見られてました？もしかして、本を消したのも見られた？

「いつから、見てました？」

「いつから？いや、今来たばかりだけど？」

「そうですか」

見られていなかったみたいです。良かったです。大袈裟な反応してしまったのでどうかして話を逸らしたいですが……ん？

「土道、そんなのつけてましたか？」

私は鍵に付いた見覚えの無いキーホルダーが目に入り、指摘して話をそらします。花の名前なんでしたっけ……多分、勿忘草？

土道にしては可愛らしい物をつけていますね。

「ああ、俺もよく覚えていないんだが、机に入っていた合鍵に付いていてな。折角だから使おう思ってたな」

「そうですか」

「なんともないみたいだな、よし学校行こうぜ」

「はい」

机の中に入っていた合鍵という事は……凛柊の鍵つてことですよ。という事は、凛柊がああ勿忘草のキーホルダーをつけたのでしょうか？

私はふと、気になりスマホであるワードを検索にかけました。

『勿忘草 花言葉』

検索の結果は『私を忘れないで』そして――

『『真実の愛』ですか』

「どうしたんだ？」

「いえ、なんでもありません」

これは、後で凜祢をいじるしかありませんね。そう考えながら、私はいつも通りの道を歩いていきました。

千夜トレーニング

死神は自身の能力を見直した

私は、今後の為に他にも〈靈魂看守〉で出来ることがないか模索することにしました。そして、1つ新しい技を手に入れました。えっ？特訓シーンは？つて？ハツハツハ、知っています？少年漫画で1番人気がないのは特訓シーンなんですよ。つまり、そういう事です。

出来た技は「月喰狼」^{ハテイ}と名付けました。

この技は、死神作成の時の魂を利用して貯めた経験値を1つの魂にインプットして作り上げた狼です。さらに、死神くんと違って自分で考えて動くことができます。つまり、自律型ですね。

能力としては「魂を喰らう者」^{タイ}「魂を狩る者」^{タイ}「魂の接続」^{コネクト}などが使えます。

使い方は、対象を襲わせて霊力を奪ったり、周りの霊力を回収したり、対象に霊力を分けたり、対象と魂を繋いで連絡をとったり・・・etc・・・

まあ、かなり多岐にわたって利用することが出来ます。

『へえ、なかなか便利そうじゃないの』

「ま、鞠奈さん!? 安定化が終わったんですね」

『お陰様でね。それで、凜祢はどうなのかな?』

「まだ、時間が掛かりそうですね」

『そう・・・その・・・ありがとうね』

「えっ!? なんて言いました? 保存用、布教用、観賞用で欲しいので、もう3回お願い出来ますか!」

『う、うるさい! あたしは戻るから』

そう言っつて、鞠奈さんは反応を示さなくなりました。すると、次は凜祢が出てきます。

『もく千夜ちゃん。あんまり鞠奈さんをいじめちゃダメだよ』

「悪いとは思っていますが、反省はしてません! それより、凜祢もなかなか洒落たことしますね」

『えっ? なんのこと?』

「勿忘草」

『・・・』

「あれ? 凜祢?」

『あんたが、からかうから奥に引つ込んだわよ。遊んでないで、早く肉体をどうにかしなさい。もぐわよっ!』

「何を!？」

最後に出てきた、万由里ちゃんに怒られたので特訓に戻ります。

では、反転体に無理やりなってみましょうか。

現在の〈サリエル靈魂看守〉では限界がありますが、もう1つの〈サリエル生死叛徒〉ならまだわかりません。なので、まずは反転することを目指します。

反転の発生理由は精神に負荷を掛け崩壊することで、十香ちゃんは土道が目の前で斬られることになってましたが・・・なにそれ? 余程のDMじゃないと自分からなれないじゃないですか!

よし、考え方を変えましょう。反転は靈力、もしくは靈波がマイナス値を示している状態でした。これを意図的に作り出せば・・・あれ? 出来ることないですか?

【フォールン反転】は靈力のプラマイをひっくり返すことで攻撃を反射する能力ですが、靈力の性質をひっくり返すことが出来れば、自ら反転体になることが出来るかもしれません。

では、早速—————

【フォールン反転】!!

鎌の石突きのみ自らに突き立て、【フォールン反転】を発動させます。

「ぐつ、ああ、があああああああ!!?」

身体がひっくり返るような痛みに襲われます。それと同時に身にまとっていた霊装の色が黒から白へと変化しました。

「はあ……はあ……なんとか、成功?ですか」

にしても、このフォームはやばいですね。なるだけで大変なのに、なった後もかなり意識がぼうつとしますね。早く戻らないと、意識が持ってかれそうです。これは、少づつ慣らしていく必要がありますね……

もう一度、^{フォーレン}「反転」を使用し反転体から元に戻ります。

「ふう……」

『千夜ちゃん、大丈夫!?!』

『ちよつと、無茶しすぎ!』

『ごめん。あたしが急かしたばつかに……』

「大丈夫ですよ。痛みも肉体的より精神的にでしたし。腕を千切られるぐらいの痛さですから」

『『全然、大丈夫じゃない!?!』』

3人のお小言を聞き流しながら私は今後の反転^{コレ}との付き合い方を考えるのでした。

少女は大人の魔女と出会った

特訓を終えて家に帰る途中、土道に封印されていない時崎さんと二亜さん以外の霊力を感じました。当たりを見渡すと、魔女のような格好をしたお姉さんを見つけました。

Q：ハロウィンでしょうか？

A：いいえ精霊です。

と言うか、今日は10月1日ですから、ハロウィンはもう少し先ですね。
「どうも、お姉さん綺麗ですね！」

Q：ナンパですか？

A：違います。

いや、なんですか？このやり取り。

「あら、ありがとう」

魔女っぽい霊装を身にまとった精霊のお姉さんは私の声掛けに反応して、こちらに視線を向けて微笑みました。とんがり帽子の下からは綺麗な顔が覗き、翡翠色の目がこちらを捉えています。

「お姉さんハロウィンにしては少し早くないですか？でも、似合ってますね。とても綺麗です」

「そ、そう！そうでしょう？」

「ど、どうしたんですか？」

「あっ……ごめんなさい。少しテンションが上がっちゃったわ」

「そうですか」

精霊のお姉さんは身長は士道と同じぐらいで、私からだと見上げる体勢になります。さらに、目を引くのはそのプロポーシオン。まさに、ボンキュツボンを体現したらこんな感じになるでしょう。美九さんも体型だけならいい勝負していますが、顔つきと身長の違いか、こちらのお姉さんの方がお姉さんっぽいです。

お姉さんの精霊はいなかったので少し新鮮な気分ですね。えっ？二亜さん？あれは、ダメな大人の例です。理想の大人なお姉さんではありません。

「自己紹介をしていませんでした。私は魂月千夜って言います」

「千夜ちゃんね？ 私は七罪、よろしくね」

「七罪さんですね。よろしくお願いします」

その後、少しの間だけ七罪さんを褒め続けることになりました。七罪さん、褒められると嬉しがって他には？ ？ ？ 求めてくるので大変でした。

そう言えば、霊力の感じ方が変でした。2段構造みたいに体から発せられる霊力の他に、体の周りを覆うように霊力がありました。なんらかしらの能力を使用していたのでしょうか？

この2段構造は、新しい技に活用できるかもしれませんね。覚えておきましょう。

そう言えば、今まで出会った精霊は何人でしたっけ？ そもそも、精霊って何人いましたっけ？ 手元の資料（スマホの中）に琴里ちゃんから貰った今まで出現したことのある精霊の情報が入っているので合わせてみていきましょう。

えつと、私が（ヘリーパー）、十香ちゃんが（プリンセス）、四糸乃ちゃんが（ハーミット）、時崎さんが（ナイトメア）、琴里ちゃんが（イフリート）、耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃ

んがへベルセルク、美九さんがへディーヴァ、二亜さんがへシスター、なのは確定です。七罪さんは見た目的にへウィッチでしょう。

あと、会っていないのは始原の精霊と思われるへファントムです。あれ？資料が増えているへスペクター？……誰でしょうか？……ああ!!反転体の私ですか!?

凜祢、凜緒ちゃんはへルーラーと呼ばれていましたが誰も覚えてませんし、万由里ちゃん、鞠亜ちゃん、鞠奈さんにいったつては識別名が無いですからね。資料はほとんどないですね。

あつ、令音さんがいましたね。あの人はどうなんでしょう？もしかして、へファントムだったりして……まあ、それは無いですか。

さて、2段構造をどう活かしていきましようか。もう少し、どんな感じで能力を使っているか分かったら参考になるんですが……

かなりいい線をついていることは気が付かず、私は新技の構想を練るのでした。

少女は悪夢から記憶の情報を得た

七罪さん会った数日後、何度も反転体になりましたが、体は一向に慣れませんでした。今日も特訓をし、特訓を終えて家に帰る途中よく知った霊力を感じ取ります。

「……………どうしたんですか？時崎さん」

「あらあら、気づかれてしまいましたか。やはり、千夜さん相手だと隠れるのは無理そうですね」

影からヌルツと赤と黒のドレスを身にまとったツインテールの少女、時崎狂三さんが現れました。

霊力を感じ取った結果、過去か未来かの時崎さんのようですね。

「それで、どうしたんですか？霊力供給はまだ先のはずですよね？」

「ええ、そうですね。今日はそれとは別件で来ましたの」

「別件？」

パツとこれといった事柄を思いつくことが出来ず首を傾げます。

「ええ、千夜さん。あなた、何やら興味深いことをしているそうですね？」

「……………反転のことですか？」

「その通りですわ」

何処から仕入れたのか……いや、自分でですね。それにしても、時崎さんが反転に興味を持つのは意外でした。〈フアントム〉を倒すこと以外に興味はないと思っていましたが……勘違いだったようですね。いや、思い出してみると色々やっつてましたね。

「それで？ 反転がどうかしたのですか？」

「いえ、ただ上手くいっていないのでは無いのではと思ひまして」

「上手くいかない原因を知っているのですか!？」

「いいえ、知りませんわ」

知らないんですかい。

「じゃあ、一体なんのために来たのんですか？」

「それは……まあ、わたくしの取り越し苦労だったようですわね」

「だから、それは一体どういうことなんですか？」

「そんなことよりも、少しは過去を思い出すことは出来まして？」

そんなことって……確かにそつちも大事ですけど、露骨に話を変えてきましたね。こうなると時崎さんは絶対に話さないでしょうね。

「時崎さんは知っているのですか？ 私の過去を」

「ええ、知ってますわ。それも、かなり核心的なところまで」

「それなら、教えてくれませんか？」

「そうですわね……私から言うのは面白くありませんし、それに何よりあなたの為にもなりませんわ。なので、ヒントになる事だけをおうしえしますわ」

「ヒント……ですか」

「ええ、士道さん達を知っているのは誤った真実。正しい真実を知るのはDEM社の関係者のごくわずかな人達だけですわ」

「なぜ、そんなこと知っているのですか？」

「さあ？何故でしょうね？」

時崎さんはくすくすと笑いながら少しずつ影の中に戻っていきます。

「待って！」

「それでは千夜さん。早く真実を知り、そして真実から目を背けないように頑張ってくださいまし」

引き止める私を置いて時崎さんは影の中へ完全に姿を消しました。

「真実を知るのはDEM社の関係者のごくわずかな人達って……どうすればいいんですか……」

私の呟きに言葉を返す人は誰もいなかった。

少女は年上に振り回された

（10月10日）

あれから、結局反転体に慣れることはなく日々は過ぎて行きました。しかし、私の頭の中はその事よりも私の過去についてでいっぱいです。

DEM社の関係者の極わずかな人達。という事は、会った事は無いですが、十香ちゃん達を度々狙っているDEMの代表取締役のアイクって言う人やエレンさんみたいな偉い立場の人しか知らないって言うことなんでしょうか？

そんな、感じで過ごしている所に1件のメールが届きました。

『from. 本条二亜

to. 魂月千夜

件名: たすけて

たすけ
』

いや、どうしたんですか!?! 助けてって、しかも打ちかけですし……まさか! ま

た、捕まったんでしょいか？ だったらまずいですね……助けに行きませんと。

私は二亜さんのもとへ急ぎました。

「いや、助かったよ、本当に」

「心配して損しました」

二亜さんの家まで行くと、鍵が空いていて慌てて中へ入ると倒れている二亜さんが目に入りました。私は慌てて駆け寄り声をかけて最初に返ってきた言葉が『お腹空いた』でした。つまり……

「つまり、お腹が減って動けなかっただけと？」

「まあ、そういうことになるね」

「自己管理ぐらいして下さいよ……」

話を聞くと漫画の執筆の追い込みをして食べる事をしていなかった為力尽きたそうです。料理を作ろうとして冷蔵庫に何も入っていないのは驚きました。いや、入っていないのは食糧ですね。お酒は大量に入っていました。

「……ちそうさまでした」

「お粗末さまでした」

「いや、本当に美味しかったよ。ちーちゃん、ウチに嫁に来ない？そこそこ貯えあるから養えるよ？」

「遠慮しておきます」

「あら、振られちゃった。ちーちゃんは百合っ子ではなかったんだね」

「百合っ子はアイドルで間に合ってます」

「？」

それにしても、漫画家の部屋ってワクワクしますね。漫画を書く道具が沢山置いてありインクの独特の匂いがします。

「興味あるなら少し手伝ってくれる？」

「そう言って、自分が楽しみたいのですよね？やりますけど」

「結局、やるんだ。じゃあ、これのベタ塗りして、その後コレをゴムかけてくれる？」

「わかりました」

二亜さんから紙を受け取り指定された所を黒く塗っていきます。

「そういえば、二亜さんはアシスタントを雇わないんですか？」

「あくあたしって結構前に精霊になったんだ。だから、かなり長いこと、この姿のままなわけ。だから、不審がられるからアシスタントは雇えないんだよ」

「成程……」

話をしながらゆつくり丁寧に塗って行きます。はみ出さないように慎重に……

「そういえば、何かあったの？過去の事とかで」

「ぶっ!? あっ! はみ出した! ホワイトください」

「ちーちゃん、慌てすぎだよ。ほい、これ使って」

「ありがとうございます。で、なんでそんなこと知ってるんですか? ……あっ!」
思い出してみると、この人の天使は〈囁告^{ラジ}篇^{エル}帙

「天使の力ですか。二亜さんはなんでも知っているんですね」

「何でもは知らないよ。調べたことだけ」

どこかの委員長みたいな返しをしながら二亜さんはいらつ子ぽい笑みを浮かべます。

「それなら、もう答えは知っているじゃないですか」

「うん。知っているよ」

「なら、私の過去も?」

「うん」

「教えてくれませんか?」

「うーん……私は教えてもいいんだけど、本当にいいの？」

「……どういう意味ですか？」

「私知っているのは本来のちーちゃん知っている内容とは異なるんだよ。それに、これはかなりデリケートな問題だからちーちゃんが自分でしつかりと当事者達に聞いて思い出して欲しいな」

つまり、本来私知っているはずの内容は、時崎さんが言っていた土道達知っていると、困ったことがあったらお姉さんを頼っていいからさ、やるだけやってみない？」

「……わかりました」

「よし！じゃあ、お姉さんからのヒント1。まずは、幼馴染み君に聞いてみよう」

うっ……なかなかハードルが高いですね。土道は私に配慮して言わなかったんでしようから……

「が、頑張ります」

「相談があつたらなんでも言つてね」

そこまで、話し終え私達は漫画執筆に戻りました。

「次の日」

「千夜さん！デート行きましょう！」

「……はい？」

そう言つて私をデートに誘つてきたのは、精霊とデートをしまくっている幼馴染みの士道では無く、現役アイドルで精霊の識別名〈ディーヴァ〉の美九さんでした。

「今、はいつて言いましたね？なら、早速行きましょう！レッツツゴーですう！」

「いや、話の内容が理解できなくて聞き返しただけです」

「そうなんですかあ？でも、行くことは決定しているので行きますよお」

「拒否権は？」

「ありませんよお？それに、前にデートに行くつていう約束もしましたよねえ？」

「……あつ」

そういうえば、美九さんが士道と初対面の時にデートする代わりに士道を逃がしてあげるとつていう約束をしたような……。あれ？でも、記憶は消したはずですよ？もしかして、中途半端で切り上げたせいで変な所だけ残つていたのでしようか？

「あれ？そういうえば、いつその約束をしたんですか？」

「行きましょう！今すぐ!!」

折角消したのに思い出されては困ります。ここは素直に従っておきましょう。

私達は準備をして2人で駅前のデパートまで行きます。

「そういえば、デートって何するんですか?」

「それは、千夜さんの服をかうんです」

「え?」

「千夜さん、いつもパーカーとチノパンツばかりですよ?女の子なんですからもっとオシャレしませんと。いつもは何処で服を買っているんですか?」

「ユニ○口としま○らです」

「千夜さん……」

いいじゃないですか!ユニ○口としま○ら!安くて選ぶの楽なんですもん!

「今日は色んな服を着させますからね。私が全部買ってあげますから」

「いや、そこまでしていただかなくても……」

「お金なら大丈夫ですよ?私、人気アイドルなので」

そうでしたね。お金いっぱい持ってそうですね。

その後、次々と店をまわり、服を次々と着せられました。私はまるで着せ替え人形の気分です。だいたい、美九さんの買い方おかしいんですよ。ここからここまで全部くだ

さいなんて金持ちの買い物、びっくりしますよ。でも、よく思い出してみると土道とのデートでもそんなことしてましたね。

「今日はどうでしたかあ?」

「大変でしたよ。でも、楽しかったです」

「なら、いい気分転換になりましたかあ?」

「へ?」

「なんだか悩んでいるみたいだったので気分転換になればいいなと思ってたんです。千夜さんが何を抱えているかは私には分かりませんが、こうやって気分を変えてあげることぐらいは出来るんですよ?ですから、何かあつたら私を頼ってくださいね?」

「あ、ありがとうございます……」

「それでは、私はこっちなので」

「はい、さようなら」

美九さんに手を振りながら別れます。私はそのまま、自分の家に向かって歩き始めます。

本当に、年上って凄いですね……

私がかか悩んでいることを見抜きさうとフォローを入れてくる。二亜さんも美九さんも、普段はあんなんなのに……やっぱり、年の功ってやつなんですか

? 本当に、年上って凄いですね(2度目)。

「あら、千夜ちゃんじゃない」

声をかけられそちらをむくと、魔女のような格好をした女性、七罪さんがいました。ちようど、良かった。2段構造について聞きたかったんです。あつ、でもどうやって説明しましょうか。現時点では精霊とバレていないのにそれをバラすのはちようど……

今まで正体を明かした理由は、四糸乃ちゃんは信頼を得るため、時崎さんは身を守るため、美九さんは普通にバレて、二亜さんにも普通にバレたんですね。

折角、四糸乃ちゃんと美九さんの記憶をいじつたのにまたしないといけなくなるのは面倒ですね……そうだ!

「こんばんは、七罪さん」

「こんばんは、千夜ちゃん」

「ちようど、七罪さんに聞きたいことがあつたんですよ。実は、私は霊視つて言うんですか? 普通は見えない物が見えるんですよ」

霊能者みたいな能力がちよつとあるということでも切りましょう。

「へえ、そうなの。それで?」

「七罪さんの周りに力場? みたいなのが見えるんですけど、なぜか2段構造? みたいな

んですよ。何か力でも使っているのかなって思ったんですけど」

「そ、そう？ 気のせいじゃない？ わ、私は用事があるからまたね」

「あっ……いってしまいました」

何か都合が悪い事があったのでしょうか？ とりあえず、何か能力は使っているみたいですね。

私は能力がどんなものかを考えながら家に帰りました。

七罪サーチ

少女は鍋の味を整えた

10月15日の昼。

「さあ！食べてくれ、シドー！」

「遠慮はいらないよ。ほらほら〜」

土道の前には禍々しい色をした鍋が置かれていました。そこには普通の鍋には入っていないであろう具材が浮いており、これを本当に鍋と言っているのか怪しいレベルです。

「えつと……これは？」

「愚問。鍋です」

「土道さんに食べてもらおうと思ってみんなで作ったんです」

「いや、それは嬉しいんだけど……一体何が入っているんだこの色……」

「ふつ、贅の限りを尽くしそれぞれが好きな具材を全て投入したのだ！」

「ああ……」

なるほど、美味しい物×美味しい物_は美味しい物という公式を立てて作ったわけです

か。十香ちゃんがきなこパン、四糸乃ちゃんがアイスクリーム（コーン）、耶俱矢ちゃんが唐揚げ、夕弦ちゃんがフライドチキンですか。どれも、鍋に入れるものではありませんね……

しかし、これが今日の昼食ですか……ちよつと、気分が……

「よ、よかったわね、土道。こんなに美味しそうなもの作って貰えて。ほら、熱いうちに」
琴里ちゃんが土道に毒味をさせて危険性を示すためか、土道に向かって催促します。
「琴里と千夜も力をかすが良い。今ここに聖餐のピースを捧げよ！」

「えっ……」

これに、まだなにか加えるのですか!? つて! 琴里ちゃん!? なんで棒付キャンデー投入しているんですか!!?

棒付キャンデーはゆっくりと鍋の中へ沈んでいき、その熱で少しづつ溶けて来ました。

「おお! 琴里の具材も入ったぞ!」

「ますます美味しくなります」

「さあ! 千夜も好きな具材を入れるのだ!」

「期待。何を入れるのですか」

ええ……本当にどうしましょう。これ何入れたら美味しくなるでしょうか。土

道の希望の眼差しが痛いのです。そんな捨てられた子犬みたいな目で私を見ないでください。

さて、本当にどうしましょう。もう、強い味で全部かき消すぐらいしないと行けない気がします。

「よし、ちよつとこの鍋持っていけますね。向こうで加えてきますので。土道、冷蔵庫開けさせてもらいますね」

「千夜、頼んだ」

顔と声が本気なんですけど……さて、頑張りますか。

まず、具材を1回全部あげちゃいましょうか。ふやけたきなこパンにふやけたアイスのコーン、ふやけた唐揚げにふやけたフライドチキン、そして少し溶けた棒付キャンディーを鍋からあげます。

いや、キャンディーはもう溶かしきっちゃいましょう。キャンディーを鍋の中に戻して強火にかけます。その間に、きなこパンと唐揚げを適当なサイズに刻み、アイスのコーンは砕きます。フライドチキンは骨から外してから適当なサイズにしました。

鍋の中に残ったキャンディーの棒を回収して、切った具材を入れ直します。

そして、取り出したるはシチューのルー！頼みますよ、ハ○ス食品！

最後に牛乳を足して、クリーシチュー風に……うん、色はだいぶマシになりま

したね。まだ、若干青いですが。まあ、美味しい事を願うだけです。

「お待たせしました。私は牛乳を足さしてもらいました」

「おお……色がマシになってる」

「土道、私も怖かったので味見はしてません。あとは、頑張ってください」

「ああ、助かったぜ。あとは、俺に任せろ」

土道はクリーム鍋（？）を掬い取り皿にうつし、覚悟を決めて口の中に運びます。

「………美味い」

よかったです。土道が死なずに済みました。

そして、その後みんなでクリーム鍋（？）を食べ始めます。

「やはり、夕弦が入れたフライドチキンが味の決め手になったようだな」

そうですねー（棒）。骨付いてましたけどねー（棒）

「否定。それを言うなら耶俱矢の唐揚げです。あれで味がまろやかになりました」

そうですねー（棒）。揚げ物で脂が多いですからねー（棒）

「えー？夕弦のだしー」

「断言。耶俱矢のです」

いいや、私のです。味の決めてはシチューのルーだし、まろやかになったのは牛乳ですから、完全にMVPは私ですね。

「相変わらず仲がいいわね」

「まあまあ、何一つ欠けても成立しなかった奇跡のコラボって事で」

「テレビで鍋は何を入れても美味しいと言っていたが本当だったな!」

「確かにこの見た目からは想像できない味よね・・・」

誰ですか、そんな無責任な発言をしたのは!

「せっかくだから美九も来られれば良かったんだけどなあ。仕事じゃ仕方ないけど」

「ダーリン! 呼びましたかあ?」

土道がテレビに映っている美九さんを見ながら呟きました。すると、それに反応して美九さんの声が聞こえました。えっ? どこから?

「はあい、皆さんの寂しげコールをキャッチして精霊アイドル誘宵美九。定刻通りにただいま到着ですう」

「美九!」

「なら、今歌っているのは?」

「生っぽく見せた収録ですう。それより皆さんどうしたんですかあ? お揃いで何かのパーティーですか? ああ! そう言えば私、今日誕生日だった気がしてきました」

そんな訳ありますか。どんなに貴方の誕生日は都合がいいんですか!?

「プレゼントは皆さんの熱くいキッスでいいですよ?」

そんな戯言を言いながら美九さんは唇を尖らせて迫ってきます。そんな美九さんから逃げるため各々、距離をとったり、他人を盾にしたりとし始めます。

美九さん1人でここまで混沌とするとは……

最終的に琴里ちゃんや美九さんをひっぱたき落ち着きを取り戻しました。

その後、美九さんも加わり鍋の続きをしましたが、また美九さんのせいで全員が土道にキスをせがむ事になり大変でした。主に土道が。

まあ、それも空間震警報の発令によりおさまりました。

さて、今回の精霊はどんな精霊なのでしょう？……いや、靈力で分かっただけですね。

この時の私はまだ知りませんでした。あんなゲームに土道達が巻き込まれることになるとは……

少女は少年の奇行を見た

昨日の土道と七罪さんの接触は失敗でした。

最初は順調そうに見えたんですけど、何故か途中から物凄く機嫌が悪くなったんですよ。何ででしょう？

あつ、噂をすればなんとやら、土道がいますね。あれ？でも、土道は七罪さんの対策会議をするから学校遅れるって言ってますでしたっけ？

「おはよう、山吹」

「いいい五河君!?!ちよ!近いって!」

「なんだよ?そんなに照れなくてもいいだろ?全く山吹はかわいいな」

「かわっ!!?」

土道ってあんなのでしたっけ?同級生に壁ドンしながら挨拶するようなキャラでしたっけ?いや、デート中ならしそうですけど。

「こら!亜衣になにをしてるの!」

「まじ引くわー!」

「……ふっ」

「きゃー!?!」

次はスカート捲りですか。今日の土道は本当におかしいですね。熱でもあるのでしょうか？保健室送りにしましょうか？その前に警察に連絡した方がいいでしょうか？

「シドー！おはようなのだ」

あつ、十香ちゃんも登校してきたみたいですね。

十香ちゃんは土道を見つけるとうれしそうに駆け寄りました。

「おう、おはよう十香」

土道はいつも通りに挨拶を返し、そして流れるように十香ちゃんの胸を揉みました。——うん、ちよつと待とう。やっぱり、何かがおかしいです。

「土道！何をしてるんですか」

私は最大限の注意しながら土道に近づき注意します。私まで被害にあつてはシャレになりませんので。しかし、私を見ると土道は一目散に逃げて行ってしまいました。

これで、終わりかと思っていました。これはほんの始まりでした。

次の昼休み悲鳴が聞こえた隣のクラスに行く。と耶倶矢ちゃんがパンツを剥ぎ取られ。

また、次の昼休みには夕弦ちゃんが水浸しにされていました。

おかしい。絶対におかしいです。ちよつと、琴里^{保護}ちゃんに連絡しましょう。

「もしもし、琴里ちゃん」

『千夜姉? どうしたの?』

「いや、士道の事なんですけど」

『士道? 士道ならもうすぐ学校に着くと思うけど?』

「えっ? 士道って朝から学校に来てませんかでしたか?」

『何言ってるの? 士道はさつき七罪の対策会議を終えて学校に向かったばかりよ』

じゃあ、あの士道は偽物ということでしょうか?

「冗談じゃねえええええ!!」

あつ、本物らしき士道が登校してきたみたいですネ。

偽物の士道に何かされた皆から逃げてますね。あつ、隠れた。

そのまま、士道は十香ちゃん、折紙さん、耶俱矢ちゃんに夕弦ちゃん、亜衣麻衣美衣トリオにたまちゃん先生、殿町君から逃げ切つてました。いや、何人に手を出したんですか?! 追いかけれすぎですよ。

逃げ切つた士道は偽士道を見つけたみたいでその後を追っていきました。屋上に行つたみたいですネ。私も行きましょう。

「千夜! シドーを見なかったか?!」

「魂月千夜。士道を見ていない?」

屋上へ行くこうとした瞬間、十香ちゃんと折紙さんに士道の場所を聞かれました。

「士道なら屋上に行きましたよ。2人」

「2人？」

まあ、そういう反応になりますよね。

「とにかく、シドーは屋上へ行ったのだな？待っているシドー今行くぞ！」

「夜刀神十香は別の所へ行くべき。2人で同じところを探す必要は無い」

「なら、貴様が別の所へ行け」

2人は喧嘩しながら屋上へ向かい、そして扉を開けました。そこには、士道が2人立っていました。

「本当にシドーが2人いるぞ」

「どういう事？」

「十香、折紙聞いてくれ！」

「コイツは偽物なんだ！俺に化けてみんなにイタズラしていたのはコイツだったんだよ！」

「なっ!?!騙されるな！本物は俺だ！」

「何言ってるやがる本物は俺だ！」

2人の士道の言い合いを見て、十香ちゃんと折紙さんは顔を見合せた。

「つまり、どちらかが偽物というわけか」

「不可解な状況。しかし、であれば——」

「——貴方（お前）が偽物（だ）」

そう言つて、十香ちゃんと折紙さんは同じ土道に指をさした。いや、霊力を確認した所、合つてますけど。なんで、分かるんですか？

「お前はシドーでは無い。確かに土道そつくりだが何か匂いが違う」

「あなた一人ならあるいは騙されていたかもしれない。でも、本物の土道が隣にいるなら話は別。貴方は本物の土道よりも瞬きが0.05秒早く、体の重心が0.2度左に傾いている」

「間違いようがない」

「なんなのよ、この子達。どうかしているわ」

「まあ、それは否定しないが……」

否定出来ませんもんね……

「ありえないありえないありえない——ありえないっ！」

土道だった姿はたちまち七罪さんへと姿を変えて、手には箒のような天使を呼び出しました。

「貴様は！」

「許せない。秘密を見たばかりか私の完璧な変身まで見抜くだなんて。絶対、絶対認めないんだから！このままじゃ済まさないわよ！」

「お、おい！」

七罪さんはそのまま箒に跨り空へ飛んで行ってしまいました。

少女は魔女の対策を話し合った

七罪さんが土道に化けて悪さをしてから5日後。五河家に一通の手紙が届きました。中に入っていたのは12枚の写真と手紙。

写真の人物は十香ちゃん、折紙さん、四糸乃ちゃん、琴里ちゃん、八舞姉妹、美九さん、亜衣麻衣美衣トリオ、たまちゃん先生、殿町君で手紙には「—————」

「この中に私がいる。どれが私か当てられる？誰もいなくなる前に……ですか」
「言葉通りに取るならば、この12人の誰かに七罪が化けていて君がそれを当てない限り彼らは次々に消えていくという事になるが」

今、私は土道と琴里ちゃん、令音さんと七罪さんの手紙を読み、七罪さんの対策について話し合っていました。

「しかし、回答方法やタイムリミットは書かれてませんね」

「書き忘れた……訳ではないだろうね。こちらが戸惑うのを見越した上でこのゲームを支配するつもりなのかもしれない。いや、ゲームと呼んでいいかも分からないな。七罪に消された誰かが無事に戻ってくる保証はないからね」

「そうね、狂三の例もあるし七罪がただゲームを楽しむだけのお人好しとは限らないわ。

もしかしたら、この中の誰かは永久に……」

「いや、七罪はそんな奴じゃない。誰に化けているかさえ当てられれば必ず無事に帰ってくるはずだ」

「随分、七罪の事を信用するのね」

「琴里なら自分を信じてくれない相手に心を開こうと思うか？」

士道、本当に遅くなりましたね。主に女性関係で。

「でも確かにその通りね」

「うむ、いずれにしても対応を急ごう。悪いが琴里今回は指揮から外れて貰うよ」

なんでって、そうですか。琴里ちゃんも容疑者リストの中に入っていましたね。

「当然ね。私が七罪って言う可能性もあるんだもの」

「そこでシン。君の働きが重要となってくる」

「何をすればいいんですか？」

「さしあたっては、彼女達とデートする順番を決めてくれたまえ」

「成程、一人一人と時間をとって本当と偽物を見分けるのですか」

「ああ、七罪の変身を見抜くには本物との些細な違いを見逃す訳には行かないからね。

一人一人デートして違和感がないかチェックするんだ」

「分かりました。決まり次第連絡します」

「では、私はこれで」

令音さんは席を立ち、帰っていききました。

「さてと、千夜もそろそろ帰るか？送っていくけど」

「いえ、それより土道と少し話し合いたいことがあります。ちよつと、琴里ちゃん席を外して貰えませんか？」

「何よ？私には聞かせられない話だつて言うの？」

「友達から聞いた物凄く怖い怪談話ですが・・・聞きますか？」

「わ、私は先にお風呂いたたくわ」

そう言つて、琴里ちゃんは慌ててリビングから出ていきました。琴里ちゃんは本当にお化けはダメですね。

「ハハハ・・・で、本当はなんの話なんだ？」

「まあ、七罪さんの事です。実は私、七罪さんと会った事があるんですよ」

「七罪と!？」

「はい。その時の事なんですけど、私も土道と同じように何処が綺麗かを聞かれました」

「そう言えば、俺の時もどの辺が綺麗か聞かれたな」

「そうですね。何回も聞かれましたよね？まるで、確認する様に」

「・・・どういう意味だ？」

「何度も人に自分は綺麗かと聞いて、自分の容姿に自信がないのかと。でも、褒めるとやっぱりそうよねって、自分でも、そう思っているような事も言っているんですよ。自分の容姿に自信が無いのかあるのかがよく分からないんですよ」

「そうか？自分が綺麗って分かった上で聞いて、人から綺麗って言われただけなのかもしれないぞ」

「確かに、その可能性もありますが。土道が嫌われた理由を思い出してください」

「いや、それが分かったら苦労はしないって。何かを俺が見たらしいけどさ」

「そう、それです。七罪さんの天使の能力は多分変身ですよ。もし、私たちが知っている七罪さんの姿が変身後の姿だったら？」

「まさか、本当の姿を見られたから俺に仕返しをしているっていうのか？」

「その可能性があるって言う話です。まあ、七罪さん攻略に役に立てばいいかなって思っています、その可能性もあるって言うことを念頭に置いておいてください」

「ああ、ありがとうな」

「いえ」

私は話を終えて家に帰りました。

少女は偽物を探すデートを見届けた

1日目。今日、土道がデートするのは十香ちゃん、四糸乃ちゃん、殿町君、夕弦ちゃんです。

殿町君とデート？腐った方が喜びそうですね。

今、私は琴里ちゃんの変わりにフラクシナスにいます。変わりになるとは思えません
が……

さて、土道と十香ちゃんのデートを監視しましょうか。時間は1時スタートですね。土道と十香ちゃんは家の前で合流すると駅前噴水の近くまで歩いていきました。それにしても、土道は浮かない顔していますね。どうせ疑いながらデートしているのに
引け目でも感じているのでしょうか。

『どうかしたのかシドー？なんだか今日は元気がないぞ？』

『えっ？あつ、そうか？ふ、普通だぞ。普通』

ほら、十香ちゃんにも変だなんて思われてしまっています。

「落ち着きたまえシン。彼女が七罪だとして普通にしているのはボロは出さない。少し揺さぶりをかけてみようか」

令音さんの提案に土道がのり、七罪さんには分からないような質問を問いかけます。

『なあ、十香。こうやって2人で出かけるのはいつ以来だっけ?』

『ん?どうしたのだ急に?数日前にも一緒に買い物に来たのではないか』

『ああ、そうだったな』

『だが、お出かけは何度あってもいいと思うぞ。とても嬉しいし、楽しいからな』

『十香……』

うくん、本物にししか見えませんね。まあ、本物なんですけど。朝、霊力を確認した時は十香ちゃんのままでしたし。七罪さんの能力で霊力まで変化出来たらさすがの私も分からなくなります。

おっと、土道が違うパターンの揺さぶりを始めたみたいです。

『……ふん。本当に見事だな』

『?』

『十香そのものだ。なあ、七罪』

成程、見抜いたふりですか。でも、それ失敗した時の誤魔化しが大変では無いですか?まあ、大変なのは土道だけなので構いませんが。

あつ、十香ちゃんの顔が険しくなってきました。

『むう〜!』

『お前、まさか!』

『シドー、ナツミとは誰だ!』

『……えっ?』

『今、私を誰と呼び間違えたのだと聞いている!それはいったい何処の女だシドー!!』

まあ、本人ですから怒りますよね。

『いや、それはだな……あ、挨拶だよ、挨拶。南の島の。最近日本でも流行っているんだ。ナツミー、ナツミーって!』

いや、そんなので騙されるわけ……

『そうなのか』

……騙された!?

「すっごい嘘つきますね」

「逆に本当っぽいのでは?」

フラクシナスの面々もびっくりしているみたいですね。

『成程、挨拶だったのか。それでナツミーとはどういう意味なのだ?』

『えーっと、貴方が大好きですっとかかな……』

『えへへ、そうか。で、その前の十香そのものだというのはどういう意味だ?』

わー、十香ちゃん無意識で土道を追い込んでいきます。天然っ子、恐ろしい。

『いつ!? あ〜! 見ろ十香! あのレストランランチバイキングやってるぞ! これは食べなきゃ損だな! うん!』

『昼餉か。まあ、構わんが……』

多少無理やりでしたが土道は話を交えて十香ちゃんを昼食に誘いました。それよりも、十香ちゃんがランチバイキングと聞いて浮かない顔をしていた方が気になります。

土道と十香ちゃんはお店に入り各々食べたいものを取りに行きます。

「今のところ、七罪らしい反応ない。君の感覚ではどうか?」

『こつちも十香としか思えません。でも、昼飯に来たのにあの表情は……なっ!?』

『どうかしたのか? シドー』

えっ……十香ちゃんがご飯を山盛りにしていない……だと……

「そんな!? 十香ちゃんがあの量で!」

「まさか、体調が悪いの!」

「馬鹿な!? あの底なしのハングリーモンスターが!」

いや、私もびつくりしましたけど、めちやくちや言いますね。しかし、やつぱり変ですよね……十香ちゃんって、今日は体調が悪かったからご飯3合しか食べられなかったって言うような子じゃなかったですっけ? まさか! 私が会った後に七罪さんが入れ替わったのでしょうか?

『どうしたんだ、十香？』

『昨日見たテレビで……』

十香ちゃんの説明では昨日見たテレビで男子より沢山食べる女子はドン引きされると言っていて、土道にドン引きをされなくなかったそうです。

その後、土道の言葉もあり十香ちゃんはいつものペースで食べ続け、お店の食料庫を空にしたのでした。

良かった、いつもの十香ちゃんでした。

その後、四糸乃ちゃん、殿町君、夕弦ちゃんと土道はデートをして家に帰ってきました。

その後、五河家で話し合ってから自分の家へ帰りました。明日の自分のデートが楽しみで土道に早く休むように催促していた琴里ちゃんが可愛かったです。

このまま、何事も無ければいいと思っていた私の思いに反して、次の日に私は夕弦ちゃんが消えた事を聞かされることになりました。

少女は幼女になった少女達をみた

あの後、次々と日をまたぐ度に、12人の中の誰が消されていきました。

私は〈サリエル靈魂看守〉を全力で使い七罪さんを探し出します。土道は、みんなが無事に帰ってくるって信じているようですが念には念です。七罪さんから今の状況を確認しないと不安で仕方ありません。

「見つかりましたか。案内お願いします」

七罪さんを捜索に当たっていた〔ハ月喰狼テイ〕が七罪さんを見つけて帰ってきたので、案内を頼みます。

「こんばんは、七罪さん。月が綺麗ですね？」

「つつ!?!」

まさか、他の精霊が接触を計ってくるとは思っていなかったのでしょうか。七罪さんは驚き、一瞬で天使を呼び寄せ鋭い眼光でこちらを睨んできました。

「まあまあ、落ち着いてください。別にあなたを今すぐどうこうするつもりはありません」

「そんな言葉信じられると思う? 貴方は土道君のお仲間かしら?」

「そうと言えばそうですし、違うと言えば違います」

「?」一体どういう意味かしら?」

「まあ、私が一方的に士道の手助けをしているだけなので仲間と聞かれると微妙なラインなんですよ」

「そう。それで? そんなアナタは何しに来たの? 私を捕まえて士道君に突き出すつもり?」

「いえ、そんなことはしません」

士道がちやんとクリアして、七罪さんの心を開いていかなければ最終的に霊力封印が出来ませんからね。

「ただ、貴方が消した人たちの無事を確認しただけです。士道は全員無事だとあなたを信じていましたが、私はそうすんなり信じることが出来ないですよ」

「士道君は私を信じてるの? とんだ、お人好しね」

「私もそう思いますよ。それで? 答えを聞かせて貰えませんか?」

「教えるわけないでしょ? 〈贗造魔女〉!」

「あれ?」

七罪さんが天使を発動させると私がついていた〈靈魂看守〉が人形のようにもふもふした触感に変わりました。これでは、まともに攻撃できないでしょう。

「あらあら、武器が無くなっちゃったみたいだけど？」

「いえ、問題ないですね。喰らい尽くせ【月喰狼】」

外に控えていた【月喰狼】を呼び寄せ、〈靈魂看守〉に噛みつかせる。〈靈魂看守〉を変身させていた七罪さんの霊力を全て奪い取り元に姿に戻した。

「なっ!？」

「もう一度、聞きますよ？消した皆さんは無事なのですか？教えてくださいませんか？あなた自身にこの狼をけしかけますよ？」

「くっ……わかったわ、降参よ。一応、全員無事よ。眠ってもらっているだけ」

「そうですか。なら、いいです」

「確認しなくてもいいの？」

「大丈夫です。では、また会う日まで」

私はその場から立ち去りました。

士道と七罪さんのゲームの最終日。残ったのは、琴里ちゃん、耶俱矢ちゃん、折紙さん、美九さんの4人でした。

見事に演じるのが難しい人ばかり残りましたね。琴里ちゃんは二面性、耶俱矢ちゃんは中二病、折紙さんと美九さんは変態、これらを演じきるのは流石に大変でしょう。

今は、この4人と土道は地下の一室に集まっています。私は監視カメラでその様子を確認していききました。

そして、七罪さんが現れ土道が七罪さんが化けているだろう人を指名していきます。しかし、外れてしまい折紙さん、耶俱矢ちゃんが箒の中に吸い込まれていきました。絶対絶命かと思いましたが、美九さんの発言からヒントを得て何とか土道は七罪さんを当てる事が出来ました。

よしのんに化けるのはずるいと思います。

室内が光に包まれ、消された人が眠った状態で姿を表しました。そして、部屋の隅には小さな七罪さんがいました。

あれが、七罪さんの本当の姿!? えっ? 七罪さんじゃなくて七罪ちゃんだったんですか? 可愛い! 妹にしましょう!

そんなことを考えている間に七罪ちゃんは七罪さんへと姿を変えて天使をみんなに向かつて使います。部屋はまた光に包まれ、そのせいか監視カメラがダメになりました。

慌ててみんなが居る地下室に向かうと、そこにはパジャマ姿で倒れている、亜衣麻衣

美衣トリオにたまちゃん先生、殿町君。いつも通りの土道。そして――

「なんですか!?!コレは!?!」

――幼女化した、少女達がいたのです。

七罪チエンジ

少女は幼女の少女達の面倒を見た

今、五河家内の肉体年齢は著しく下がっていました。

「おなががすいたぞ、シドー」

「しどう、おしっこ」

「だーりん。だーりん」

「あの……しどうさん……」

「ちよつと、かぐや！それわたしのきやんでいじやないの？」

「ふつ、ちいさきものよ。さまつなことにこうでいするはおのがわいしようさをろていするにほかならんぞ？」

「しゅこう。ひとつぐらい、いいではないですか」

「ここは幼稚園でしたでしょうか？」

もちろん、違います。七罪ちゃんのせいで皆の体が小さくなって幼女になってしまっているのです。全く大変ですね……写真を撮るのが。

「千夜も手伝ってくれえええ!!」

それから数日間、七罪ちゃんによる土道への嫌がらせは続きました。そして、その間十香ちゃん達は幼女化したままでした。

初日は特に（土道が）大変でした。幼女化した十香ちゃん達が学校まで来てしまうんですから。それにしても、折紙さんはいつでも土道との距離を縮めようと策略を練っていますね。幼女化したことを利用して、土道との既成事実をでっち上げようとするとは……

あと、四糸乃ちゃん？なんでしれつと高校までついてきてるのかな？四糸乃ちゃんは雷禅高校の生徒じゃないですよね？

さて、これがいつまで続くことやら……
「と、思った矢先にこれですか……」

土道家に帰ると動物のカチューシャと尻尾を付けた、みんなが檻の中に入ってます。檻には【僕だけの動物園】と言う看板が……いや、これどっちでしょうか？「七罪ちゃんのイタズラ？それとも土道の趣味？これ、どっちでしょうか？判定が難しいですね……」

「七罪のイタズラだから！そこ迷わないでくれ！」

「いや、土道は前科が多すぎて……」

「うっ……とにかく！これは七罪の仕業だから！」

「分かりました。とりあえず、土道の性癖は置いといてこの檻をどうかにかしましうか」
「お、おう……なんか、釈然としないが……まあ、いいや」

檻をどうにかすると言う方向で話が纏まり行動に移そうとすると、令音さんから七罪ちゃんの霊力をキャッチしたと連絡がありました。檻をどうこうするより、転移装置で人だけフラクシナスに移動させた方が早いため、土道と精霊ズは転移していききました。折紙さん？お留守番です。

さて、私も七罪ちゃんの元へ向かいますか。令音さんの情報ではエレンさんと戦闘しているみたいです。部分霊装に幼女化だと分が悪そうです。

霊装を展開して霊力の元へ行くと、既に戦闘が始まっています。状況は七罪ちゃんがエレンさんにやられて、そこに土道達が助太刀に入った感じですか。

転移で逃げようにも、タイミングないって感じですね。

【月喰狼^{ハクタイ}】GO

「なっ!？」

「今だ！琴里！」

エレンさんから見えないところから、【月喰狼^ハテ^イ】をけしかける。こうすれば、士道達を転移させる時間を稼げるし、私も見つかってないからこの後の追いかけてつこがなくなつて楽でいいですね。

あれ？【月喰狼^ハテ^イ】がこつちに戻つて来てません？そういえば【月喰狼^ハテ^イ】は完全自立型でしたね。私の考え伝えとかないとダメでしたね。

どうもエレンさん。見逃してくれませんか？あつ、ダメですか。知ってました。結局、今回も追いかけてつこで終わりですか！

死神は落とされた人工衛星を破壊した

フラクシナスで七罪ちゃんの保護に成功し次の段階へ移行しました。士道による攻略です。

そして、何故か七罪ちゃんをみんなで変身させることになりました。えっ？本当になんぞ？

「士道が七罪に素のままでも十分魅力がある事を気づかせてあげたいそうだ」

令音さん、説明ありがとうございます。なるほど、幼女状態に自信が無かったから、大人に変身してたんですね。十分可愛いのに。

そして、士道と七罪ちゃんの勝負が始まりました。勝負の内容は士道陣営が出来る限りのことをして七罪ちゃんを変身させる。そして、七罪ちゃん自信が自分を可愛いと思うことが出来たら士道達の勝ちということらしいです。

七罪ちゃん変身プロジェクトは、美九さんのエステで始まり、八舞姉妹のヘアアレンジ、琴里ちゃんと四糸乃ちゃんの衣装コーディネート。最後に士織ちゃんの化粧と続きました。私は何をしたらって？十香ちゃんと一緒にみんなの邪魔にならないようにしてました。

七罪ちゃんは予想以上に変わった自分を見たことで混乱したのか、壁に激突し気絶してしまいました。しばらく、落ち着かせるために七罪ちゃんを1人にしておくと、七罪ちゃんは逃亡してしまいました。まあ、土道の胸ポケットにキャンディに化けて潜んでいるんですけどね。土道はそのまま外へ探しに出てしまいました。ちなみに現在、私はフラクシナスの司令室にいます。

「七罪の反応は？」

「ポイントA無しです」

「ポイントB同じく」

「不味いわね……もしこちらを警戒して姿を現さないなんてことになったら……」

「この反応は……?」

「七罪?」

「いえ、不審な反応が。高度と軌道を見る限り人工衛星か何かだと思います」

「妙ですね。何故、こんな物が?」

「司令、僅かですが魔力反応が……これはっ！爆発術式です!」

「拡大映像ですよ!」

「バンダースナッチ!」

わあお……何となくで居ただけなのにとんでもない情報知ってしまいました。も

しかしなくとも、あの人工衛星落とす気満々ですよね？念の為、待機しておきますか。私はフラクシナスを出て行き、落ちてくる（予定）人工衛星に向けて準備を進めました。

とは、言ったものの霊装を展開して待つてるだけですけど。幼女化は解けてますし、多分、みんなの力でなんとかなるでしょう。案の定、1機目を琴里ちゃんが、2機目を七罪ちゃんの協力の元壊すことが出来ました。

そして、安心したところで3機目が……どれだけ降ってくんですか!?!みんな、霊力がそこを尽きかけてるし、やるしかないですね。あつ、今思ったんですけど〈靈魂看守〉じやきつくはないですか？仕方ありません、まだ不安定ですが。

「【反転】〈生死叛徒〉」

石突きを自分に突きつけ、霊力を強制的に反転させる。それに伴い、霊装の姿を変え、痛みが体を襲う。

「くっ、さっさと終わらせませすよ!」クラフトボーン【変骨】!!」

空中に大量の骨を生成し、それを人工衛星に向けて飛ばし、そのまま覆う。骨は鋭く形を変え、人工衛星を粉々にしていく。

「くっ……間に合わない!」

地上までの落下時間、〈生死叛徒〉での活動限界、どちらの意味でも間に合いそうに無

かった。

そんな時、どこからともなくレーザーが放たれ、人工衛星を粉々にした。レーザーを放った主はASTではなくDEMの装備を纏った折紙さんだった。

あれ？助けられましたけど、これいいとこ全部持つてかれてませんか？

鳶一エンジエル

死神は精霊を襲う天使を止めた

七罪ちゃんの霊力が封印された次の日。

「えー出席の前に皆さんに悲しいお知らせをしなくちやいせません」

HRの前、教室に入ってきたタマちゃん先生が、そう話を始めた。

「なんででしょうか？デート商法にでも引つかかった？」

「えっ？どうしたのタマちゃん」

「お見合いがダメになったとか？まさか、結婚詐欺！」

「まじ引くわー」

君たち酷いですね（ブーメラン）。タマちゃん先生はそんなのに引つかからないです

よ。多分。きつと……

「実は、鳶一折紙さんが急な都合で転校することになってしまいました」

「転校!?!ちよつと、待ってください！折紙が!?!一体どういうことですか!?!」

「ちよつと、土道。落ち着いてください。折紙さんの転校先とかは分かりますか？」

土道を宥めながら折紙さんの行方について先生に質問をする。

「私も詳しい事情は分からないんですよ。突然、鳶一さんから電話があつて、転校する必要書類は後で送るつて……学校はイギリスの学校とだけ」

イギリス……DEM社の本社があるところですね。やはり、折紙さんはDEMについてのでしょうか？

「あーお腹がーお腹の調子がーちよつとー」

士道がかんりの棒読みで、そう言いながら教室を出ていった。多分、折紙さんを探しに行くのでしょうか。そんな事しなくても、十香ちゃん達の近くに居れば向こうから来るのに。

折紙さんの目的は精霊を殺すこと。それを確実にする為にDEMにいたのでしよう。ASTだと、精霊の《プリンセス》に攻撃が出来ても人間の夜刀神十香には攻撃出来ない。それにDEMの方が装備の質もいいですからね。

十香ちゃん達を囷にするのは心苦しいですが、折紙さんの好きにはさせません。

放課後になりました。私は十香ちゃん、耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃんの下校を見守りながら後を尾けていました。ストーリーカーじやありませんよ？3人が五河家の前で、何故か

来ていた美九さんと合流すると、案の定折紙さんが現れた。

「私はあなた達を倒す！」

「させない！」

折紙さんがDEMのCRユニットを纏い、十香ちゃん達を襲おうとする。その瞬間、折紙さんに飛びかかるが、折紙さんはぐるっと体の向きを変えて応戦してきた。

「ヘリーパー〜！ちようどいい、探す手間が省けた。貴方もここで倒す！」

折紙さんはブレードとレーザーを駆使して、襲いかかってくる。流星はDEMの装備。ASTの時とは比べ物にならないくらい速度与パワーです。

パワーでは勝てないので、速度で回避専門で立ち回ります。これだけ性能が良ければ、前の大きいASTの装備のように活動限界があるでしょうし、時間切れを狙っていきま

「止めるのだ！鳶一折紙！」

あれえ？十香ちゃん!?なんで来ちゃうんですか！せつかく、私が時間稼ぎをしていたのに！

そんな私の思いは届かず、耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんも折紙さんに突撃していきま

た。うーん……何とかして十香ちゃん達の動きを止めたい。かと言って、靈力を奪つ

て止めたら折紙さんが向かった時に対応が難しそうですし……

それに、上空からも戦闘音が響いてますね。フラクシナスも襲われているんでしょうか？あっちもこっちも大騒ぎですね。誰か、この状況をどうにか出来るレンズを教えてください。

「あれ？この霊力の量は……!?」

ちよつと目を離した間に、十香ちゃん以外やられて何故か十香ちゃんの霊力が完全に戻ってます。

流石に完全体の精霊になると、いくらいい装備でも折紙さんでは圧倒は難しいですね。それに、そろそろ……

「……ッ!!?」

時間切れですね。

折紙さんが動きを止め落ちていく。そこに、十香ちゃんが斬撃を叩き込んだ。いや、追い討ちしないであげて。

折紙さんを回収する為、飛ばされた方へ向きます。その時、覚えのある霊力を感じました。これ、誰の霊力でしたっけ？

何となく感じた覚えのある霊力を感じ、折紙さんの元へ向かう足を早める。私が折紙さんの元へたどり着くと、既にその霊力は無くなっていた。代わりに別の霊力を持った

存在がいた。折紙さんだ。

「精霊になったのですか……?」

「せい、れい?……それでも構わない。私はこの力を持って精霊を全て消し去る。

そして、最後には私自身も!〈絶滅天使〉!【光剣】!!」

「〈靈魂看守〉!【魂を喰らう者】!」

精霊となった折紙さんが、無数の細長い羽状のパーツを動かし、その先端から光線を放つ。【魂を喰らう者】で次々と吸収していくが、光線の量が多く数発吸収しきれず、霊装を貫き肉体を抉る。

「くっ!」

精霊になってから、ほぼ初めてとも言える痛み顔に顔を顰める。そもそも攻撃が当たる事が少なく、当たったとしても霊装に阻まれるため、肉体にダメージを受けたのは初めてだった。

「【天翼】!」

羽のパーツが翼のように折紙さんの背中に左右で浮かび、その先から光線が放たれる。その勢いを利用して機動力を上げた折紙さんが接近をしてくる。

痛みを抑えながら、空を飛び離脱を試みるが振り切れそうにない。最悪なことに更にそこへ十香ちゃんが出てきた。

「鶯一折紙！」

「夜刀神十香！私はこの力で、精霊の力で貴方たちを消す！」

折紙さんは標的を私から十香ちゃんへ変えて戦闘を始める。早く、十香ちゃんの加勢にいかないと。十香ちゃんを救えないなんてことになったら、士道が悲しむ。でも、折紙さんが死んでしまつてと士道が悲しむ。どうにか間に入って、戦いをやめさせるか、私にヘイトを向けさせないと。

十香ちゃんと折紙さんの戦いは一進一退。近距離高火力の十香ちゃんに対して、折紙さんは遠距離高火力。ただ、防御力は十香ちゃんの方が高いみたいで、何度も折紙さんの光線を受けているが、霊装がある程度防いでできるようで目に見える出血はない。フェイト・オブ・ライフ【生命の満欠の（盈月）グロウ】で成長を促し傷を防ごうにも効果は無かった。そもそも出来ないのか、自分には使えないのか傷は塞がらなかった。

自分の状態に手一杯になっている間に、戦いは最終局面になっていた。

〈サンダルフォン塵殺公〉！ハルヴァンヘレツ【最後の剣】！！

〈メダトロシ絶滅天使〉！アミテイリフ【砲冠】！！

十香ちゃんは王座を斬り、超巨大な剣を生み出し力を溜めはじめ。

折紙さんは羽状のパーツを全て束ね、中心にエネルギーを溜める。

高エネルギーが今にも放たれそうになっていた。あんな物がぶつかり合ったら、この

辺り一体が更地になってしまふ。今、こっちに向かっているであろう、士道が巻き込まれる可能性がある。

「……私がか止めない！」

痛む身体を奮い立たせ、垂れる血を省みず、自分に石突きを叩き込む。【反転】フォーレンで靈力を反転させ、反転体へと変化する。

反転による痛みも加わるが齒を食いしばり、行動を続ける。

「へ生死叛徒〈！〉！」

「やめろおおおおお!!」

「はっ!!」

士道の呼び掛けに、反応し2人は技の発動を中断させ士道に注目を集めた。

「どうしてだよ!どうしてこんな事になっているんだよ!十香!折紙!」

「くっ!」

「折紙!」

折紙さんは士道の静止を無視して、そのまま空へ飛んでいってしまった。

ひとまずは、一安心。

私は痛む身体にむち打って、治療をするため家へ向かったのだった。

死神は堕ちた天使と戦った

家に帰り怪我の治療をする為に、救急箱から包帯とガーゼを取り出す。傷口にガーゼを当てて包帯をぐるぐる巻きにしておいた。

ひとまずはこれでいいとして、あの霊力はどこで感じたんですか？あれが多分、精霊を生み出している犯人の「フアントム」でしょう。実際、折紙さんも精霊になっていたし。

既に、時間帯は夜になっており満月が空に浮かんでいた。何となく、月を眺めていると月が黒いモヤのようなもので遮られて行った。それと同時に膨大な霊力を感じた。

「……………反転した。」

「なっ!?反転してる!?それにこれは……………折紙さん?」

霊力は反転しており、マイナス値を示している。しかし、それは確かに昼間感じた折紙さんの霊力だった。

「どういふことですか?この短期間で何か反転する要素が?」

疑問は尽きないが、とにかく今は土道の元へ行くことにする。玄関を開き、外に出る。

そのまま、駆け出そうとするも意外な人物の登場に足を止めることになった。

「あら、千夜さん？そんなに慌てて何処へ向かうのですか？」

「時崎さん……悪いですけど、今はあなたに構っている暇はないんですけど」

「まあ、そう仰らない下さい。知りたくないですか？折紙さんがあなたの理由を」

「知ってるのですか？」

「いいえ、詳しいことは分かりません。ただ、そうなったまでの経緯は知っていますわ」

「……端的にお願いします」

端的に話を纏めると次の感じだった。

折紙さん過去へ行く↓過去で何かあった↓時崎さんの能力の効力がきれて現在に戻ってくる

つまり、過去で何あったってことしかわからないのだ。

さて、ここからどうしましょうか。〈反転〉^{フォーレン}を使えば無理やりにも、通常状態へ戻せるかもしれないけど、精神が正常には戻らない。

「何か、方法はないのですか？」

「ありますわ。それには士道に協力してもらおう予定ですわ。それは————」

時崎さんの影の影を伝って、土道の所まで向かいます。この空間は慣れませんね。慣れるほどはいつたことはありませんが。

「これは!？」

「お久しぶりですわね。土道さん」

土道は時崎さんの影に囚われて身動きが取れなくなっており、その背後から私たちは姿を表す。声は出せないので会釈だけしておきましょう。変声機? 電池切れです。

「狂三!? それにヘリーパー! どういうつもりだ!? こんな時に?」

「あら? 土道さんともあろうお方がワタクシの目的を忘れましたの? こんな時にとおっしゃいましたわね。むしろ逆ではございませんこと? こんな好機を逃すてはありませんわよね?」

あれ? 時崎さん? 予定と違うんじゃないですか?

「狂三! 頼む! 邪魔をしないでくれ! 俺は、みんなを! 折紙を助けなければならぬんだ!」

「ああ……無駄ですわよ。今の折紙さんには何者の声も届きませんわ。それが如何に土道さんの声でも……」

時崎さん? 遊んでないで、早くしてくださいよ? 私を騙したなら覚悟しておいて下さ

いよ?と意味を込めて、大鎌を時崎さんに向けると、時崎さんはやれやれといった様子で首を竦めた。

「分かっていますわよ。それでは始めますわ。〈ザフキエル〉【十二の弾】」

時崎さんがゆつくりと銃を土道のこめかみに近づける。

「さあ、土道さん。戦争を始めましょう」

そして、土道に【十二の弾】^{ユッド・ベイト}が放たれた。その瞬間、土道の姿はこの時間から消えていった。

「それでは、土道のサポートよろしくお願いしますね?」
「ええ、千夜さんもお気おつけて」

時崎さんの作戦は土道を過去に飛ばして、今を変えるところだった。

私は私^{いま}で現在^{いま}で今を変えるため戦いに身を投じるのだった。

鳶一デビル

少女は世界が改変されたのを知った

今日は11月の3日。

今日もいい天気ですね！土道が七罪ちゃんを封印して数日、今の所新しい精霊は出てませんし楽しいですね！時崎さんやへデビルも最近大人しいですし……いや、大人しくしてませんでしたね。七罪ちゃんの時、めちやくちや攻撃してきましたわ。

さて、学校へ行く準備を進めましょうか。外に出ると、既に十香ちゃん達、精霊組は外に出ており土道を待っているようでした。

「みなさん、おはようございます」

「おお！千夜、おはようなのだ！」

「今日も良い天気だな」

「挨拶。おはようございます」

そんなふうには、挨拶をかわしていると土道が出てきて、十香ちゃんにお弁当を渡しました。私は最近は自分で作っているんですよ？

学校につき、いつも通り席に着きます。席に着くと、土道がずっと左の、私から見る

と正面の空席を眺めていました。どうしたのでしょうか？今日の土道は妙に浮き足立ってますね。そういうえば、何故ここは空席なんでしょうか？別に私がここでも良かった気がするような……いじめ？いじめなの？いじめなら起訴も辞さない。

いつも通り、タマちゃん先生の出席確認をしてそれを終えると、突然土道が妙なことを言い出しました。

「先生、折紙はどうしたのですか？」

折紙？えっ？もしかして、千羽鶴を作ろうみたいな宿題ありましたっけ？いや、でもそんなはずは……

「折紙さん？それって、一体どなたですか？」

あつ、人名だったんですか。折紙……凄い名前ですね。

「折紙？何それ人の名前？」

「五河君が先生に千羽鶴プレゼントしたとか？」

「なあっ?!五河、まさかのタマちゃんルート突入か！だと？」

「まじ引くわー」

クラスメイトも疑問に思っているみたいですね。良かった、私だけ記憶がおかしくなったのかと思いました。

「シドー？どうしたのだ？どこか痛むのか？」

「いや、大丈夫だ」

そういう土道の後ろ姿は、酷く寂しげでした。

「それで、土道はどうですか？」

『どうもこうも、料理中も上の空で危ないったらありやしないわ』

夜、私は琴里ちゃんと土道の様子について電話をしていた。

「なんか学校でも元気がありませんでしたし」

『家でもそんな感じよ。まるで昨日までの記憶が無いみたいな感じだったわ。〈デビル〉についても忘れてるぐらいよ』

「〈デビル〉の事を!？」

それって、かなり重症なんじゃ……

『そつちでも何かわかったら教えてちょうだい』

「あつ! 面白いえば、朝変なこと言っていました。折紙さん? がどうかか」

『折紙? ASTの鳶一折紙の事?』

「ああ、そんな人いましたね。何か関係あるのでしょうか?」

『分からないけど、とりあえずこつちで探ってみるから』

琴里ちゃんとの通話を切り、ベットに体を預けて土道の事を考える。

土道は何故〈デビル〉について覚えていないのか、クラスに居ない折紙という少女が何故、クラスに在籍していると思っていたのか・・・まるで、違う世界から来たみたいだ。〈デビル〉がいなくて折紙という少女がクラスメイトである、そんな世界から。「記憶の操作なら・・・」〈破軍歌姫〉。でも、美九さんにする理由はないし・・・そうすると、一番怪しいのは・・・」

時崎狂三〈ナイトメア〉だ。

「接触してみますか」

家を出て、街まで出ていく。少し薄暗い路地に入って、呼びかけてみる。

「時崎さん。いませんか？話がしたいのですけど」

「あら、千夜さん？どうしました？」

「土道の変化の理由。鴛一折紙との関係、知ってますか？」

「あらあら、何故私わたくしが知っているとお思いまして？」

「むしろ、あなたが知らないとなると土道本人に聞くしかないと思っていますよ」

「それは買いかぶりすぎですわ」

「それで、知っているのですか？」

「ええ、知っていますわ」

「教えては？」

「いいですとも、どうせ早いか遅いかの問題ですし。そうですね、口で説明するのも少し時間がかかりますが、お話ししましょう」

時崎さんの話、過去を改変し改変した本人の土道とその手伝いをした時崎さん以外は本筋を覚えていないという事を聞き、私は耳を疑うことになったのでした。

少女は天使を取り戻すのを見届けた

まさか、世界改変されているとは思いませんでした。それに、鳶一折紙がうちのクラスに転校してくるなんて、二重でびっくりしました。

そして、土曜日に鳶一さんと出かけると聞いた時は、更にびっくりしました。だって、まだ精霊かどうか分かっていない段階で声をかけたということですよ。流石は士道、手が早い（褒め言葉）。

そして、土曜日。私はフラクシナスでデートを見守っていました。これ、久しぶりですね。それにしても、今まで見て中で一番デートっぽいデートの入り方ですね。お互いに初々しさがあっていい感じです。とても、ラブコメの波動を感じます。何故か無性にイライラしますが。

さて、最初の選択肢ですね。どこへ行くかの選択肢ですか。①が映画、②がシヨピング、③がラブホ・・・毎度毎度、なんで地雷を仕込んでるの？鞠亜ちゃんは。

まあ、ここは無難に②がいいでしょう。鳶一さんからしたら、ほぼ面識は無いようなものだから話がない空間に籠るのは不味いと思います。クルールの皆さんも概ね同じ意見みたいです。

「土道、②—————」

『ちよつと、待つてくれ。試してみたい選択肢があるんだ』

そう言つて、土道が鳶一さんを案内したのは③のラブホ……おい、土道。後で校舎裏な。

「感情値、安定しません！」

「鳶一折紙、動揺しています！」

「あつたりまえでしょう！何やってんのよ、土道！すぐに誤魔化しなさい！」

『わ、分かった。ごめん、ここじゃなかった』

『あつ……ここじゃ、無かつたんだ』

『折紙なら絶対ここだと思つたんだが……』

何故？Why!?

何？前の鳶一さんつてそんな変態だったの!?

土道は琴里ちゃんに言われて②のシヨピングに向かう。最初からそうすればいいのに。

「折紙の好感度はどうなっているの？あまり、下がつてなければいいんだけど……」

「それが……」

「感情値は大きく変動しましたが、好感度は僅かに上がっているような……」

何故? Why!?(2回目)

おっと、次の選択肢です。買い物はどこに行くか……ですか。①がセレクトシヨツプ、②がペットシヨツプ、

③が精力剤や媚薬が並ぶ裏通りの薬屋……だから、何故地雷を仕込む!

「総員、選択!」

『いや、これ③しかないだろ』

何故? Why!?(3回目)

なんで、そこで地雷を踏みに行く?それはただの蛮勇ですよ!?

「何言っているの土道!女の子と初デートで行く場所よ!」

『だって、折紙と言えば精力剤。精力剤と言えば折紙。みたいな所あるじゃないか』

おう、そうだな(自棄糞)

精力剤が似合う女の子、鳶一折紙……本当にどんな子だったの?逆に気になるんですけど……

そうこうしてるうちに、薬屋についてみたいですね。鳶一さん、目に見えて困惑しますね……

『ごめんなさい、五河君。このお店、私にはよく分からないみたい』

『ああ、そうか……折紙?』

『え、ええ!?なんで私こんな物を!』

鳶一さんは無意識に店に置いてあるものを手に取っていました。それも大量に。

それから、折紙さんの異様な行動は続きました。士道が服をプレゼントする事になり、士道が喜ぶ服というコンセプトで、スク水犬耳犬尻尾首輪付きになったり、レストランで士道の使ったスプーンを舐めようとしたり、水がかかった士道が服をたくしあげた所でヘソが見えた瞬間にスマホ連写をしたりとした。

おかしいな……最初は今までで一番デートっぽかったのに、何故か一番おかしな方向へ進んでいる気が……

私は頭が痛くなり、先にフラクシナスを降りる事になったのでした。

その後、戦闘も少しありましたが鳶一さんの霊力を無事封印することが出来ました。でも、これは予想外でした。いや、予想通り?

次の学校の日から鳶一さんはショートカットになり、変態行動が多発するようになりました。そして、それを見た十香ちゃんとよく衝突するようになったのでした。

私はその光景を見て、記憶にないはずなのに、何だか懐かしいと感じたのでした。

千夜メモリー

少女は失った記憶を思い出した

昨日、土道が精霊との霊力のパスが縮まってしまい、そのせいで暴走しました。なんとか、收拾が付きましたが、本当に肝が冷えましたよ。

そんな訳で、今は土道のお見舞いに来ています。

「土道、ちよつといいですか？」

「どうしたんだ、急に改まって」

いつもは、精霊の誰かしらが近くににいるし、土道も家事で忙しいため、今しか時間がなかったのです。

「私の過去について教えて下さい」

「なっ!?!」

土道は驚いた顔でこちらを見ましたが、すぐに真面目な顔へ変わりました。

「千夜、いいのか？千夜にとって辛いものだと思うが……」

「いいんです、覚悟は決まっています」

「そうか……なら、話すのは彼女の事だな。魂月千陽について」

士道の話を通して、少しづつ記憶の欠けたところ埋めて行きます。大火災の前に事故で死んだ両親の事、そして大火災で行方不明となった妹の事を……

「ツツーぐつがあああ!？」

士道の話を通り聞くと、激しい頭痛に襲われました。必死に耐えていると、5年前の大火災の記憶が蘇ってきたのでした。

「やーちゃん、早く逃げないと」

「はるちゃん……逃げるところどこに?」

「いいから、いくよー!」

幼い私は酷く臆病だった。双子の妹は私にとっては太陽のように眩しく、私はいつもその陰に隠れていました。

大火災の日も私は動けずにはいましたが、妹が私の手を引き避難を促してくれました。これでは、どちらが姉かが分かりません。

そして、その時はやってきました。

逃げる最中、家が私たちの方へ崩れてきたのです。とつさの事で、妹を突き飛ばしま

した。しかし、突き飛ばした方に大きな瓦礫が落ち、妹はその瓦礫に潰されてしまいました。

自分もつと早く避難していれば……

自分もつとちやんとお姉ちゃんをしていれば……

自分があの時、妹を突き飛ばさなければ……

後悔は次々と積み重なり、そして私はそのまま瓦礫に埋もれていきながら意識を失っていききました。

「はあ……はあ……はあ……」

「おい、千夜！大丈夫か!？」

「はい、ありがとうございます。全部、思い出しました。両親の事も、大火災の事も、そして……千陽の事も」

「そっかあ……」

何故、私が小さい子に甘かったのか？

それは、ただ千陽に出来なかつた分、いいお姉ちゃんをしたかつたから。

何故、今の私が昔とは逆に活発なのか？

それは、ただ千陽に憧れていたから。

色々な感情が胸の中を渦巻き、気持ち悪くなります。自然と目から涙が、口から嗚咽が零れます。土道はただ私を落ち着けるよう、黙って胸を貸してくれました。

しばらく、泣いてスッキリしてから、慌てて土道から離れます。

「すみません……」

「ああ、気にしなくてもいいぞ。また、俺の胸で良ければいつでも貸すぜ？」

「ぷっ……なんですかそれ」

「あははは」

土道が場を和ませようと、少しおちやらけた感じでそう言い、なんともない事で2人で笑ってしまいます。

ひとしきり、笑った後で私は荷物をまとめて帰る準備をします。

「千夜、すっかりと暖をとった方がいいぞ。お前の体、めちやくちや冷たかったから」

「冷え性なんですよ、多分」

冷えた体とは裏腹に、心は暖かい気持ちでいっぱいでした。昔の事を思い出した。それは、両親や妹のことだけではありませんでした。

「ありがとうございました、士道」

私は記憶と共に封じられていた、士道への恋^想心を思い出したのでした・・・

少女はこれからについて考えた

記憶を取り戻し始めてから数日、全ての記憶が完全に戻りました。取り戻してから、数日は色々なことで悶え苦しみましたよ。特に、土道とはまともに顔を合わせられません……。何故か、前の数百倍かつこよく見えるんですもん。そのせいで、最近はまだあまり五河家に夕食を食べに行っていないません。土道のご飯食べたいんですけどね……。

それに前に、下着姿を見られたのが今頃になってから、物凄く恥ずかしくなってきました。いや、別に恥ずかしくなかった訳じゃないんですよ？また、ちよつと違う恥ずかしさといえますか……もつと、可愛い下着の時がよかつたとか、太つてるとか思われなかつただろうかとか……それに、あの時緊急時とはいえ、土道とき、き、ききき……もう考えるのを止めましょう。死んでしまいます。死因が〈恥ずか死〉とかになつてしまつては笑えません。

他にも考えることがありますし、そつちを考えましょう。考える……いや、気になる点は全部で4点です。

1つ目は、1番どうでもいい事なんです、土道から昔の貰ったロケットペンダント

の行方です。いや、どうでもよくないですね。土道からの初プレゼントでしたし。それに、あの中には……今は関係ないですね。あのペンダントは精霊になる前まではつけていたんですが、どこに消えたのでしょうか？一応、病院の方へも掛け合ってみますか。

2つ目は、〈サリエル靈魂看守〉の【イヴァルグア邪視】が使えなくなっている事です。思えば、あの時無人島で土道とき、きき……こほん、あの時から使っていないのです。土道に靈力を少し封印されているのでしょうか？それともまた別の要因？

3つ目は、妹。千陽についてです。十香ちゃんがDEM社に連れていかれた時、私の前に立ちはだかった金髪蒼眼の少女は千陽なのでしょうか？発言や容姿から鑑みるにその可能性は高そうです。それに、二亜さんや時崎さんの発言も合わせるとほぼ100%の気もします。

そして、最後にあの少女が千陽として、おじいちゃんは何故私と千陽にそれぞれの生存を伝えていないのでしょうか？そうすれば、私がこんな風になることも、千陽がDEM社に行くこともなかったでしょうに。

以上4点が私が今、気になることです。

さて、順番はどうであれ、1つずつ解決に向けて動いていこうと思います。

「あつ、いまいいですか？」

私は、ポケットから電話を取り出して、目当ての人物へと電話をかけるのでした。

少女は思わぬ人物と対面した

さて、やって来ました、我が家！我が家と言っても、五河家の近所の今住んでいる家ではなく、おじいちゃんが住んでいるほうですけどね。

さて、約束した時間より早くついてしまいましたか・・・入ってしまったも、いいでしょうか？何故か家の前に黒塗りの高級車が止まっているんですけど・・・お客様でも来ているのでしょうか？来るとしたら、おじいちゃんの知り合いと言うことになりますよね・・・普通の知り合い？それとも、会社の方の取引相手？まあ、私が考えても仕方がありませんね。

敷地内に入ると、中居さんが掃き掃除をしています。悪戯心が働き、こつそり後ろから近づき、首元を触ります。

「ひゃっ!? な、な、なんですか!?!・・・ああ、お嬢様でしたか。脅かせないでくださいよ・・・とても冷たくてビックリしたんですからね?」

軽く謝りながら、自分の手のひらを見ます。土道にも言われましたが私ってそんなに体温低いのでしょうか？自分のほっぺを触ってみますが・・・うくん、分かりません。

「随分とお早いですね。お約束の時間より1時間ほど早いようですが」

「思ったより、電車が混んでいませんでしたから……あつ、そういえば誰か来ているんですか？」

「旦那様のお仕事関係の方が……ああ、あの方々ですね」

中居さんが向いた方に視線を向けると、白髪の男性とエレンさんがおじいちゃんと共に玄関から出て来ました。エレンさんを見た瞬間にDEMの関係者、しかもかなり偉い人物ではないかと考えます。そう考えると、自然と体が強ばりました。

「うん？ああ、君が千夜君かい？初めまして、アイザック・ウエストコットだ。よろしくね」

「魂月千夜です。よろしくお願いします」

アイザック・ウエストコット……確か、この前サイトで見た、DEM社の代表取締役の名前もそうでした。つまり、この人が黒幕ということですか。

「君とはいつか話がしてみたいと思っただよ」

そう私を見つめる、切れ長の青い瞳には光がなく、底知れぬものを感じました。まるで、全てを見透かされてるような気分でした。さらに本能が危険を知らせているのを感じます。

「アイク。次の予定が入っています」

「ああ、そうだったね。すまない、私達はこれで失礼するよ」

アイザックは軽くてをふり手を振りながら、外の車へ向けて歩いていきました。エレンさんも軽く会釈をしてその後が続いていきました。

2人が車に乗り、去っていくことで体の力が抜けました。私はしばらくその場から動くことが出来ませんでした。

少女は妹の事を問いたでした

アイザックとエレンさんが帰ってから、私は家の中に入ります。中居さんがお茶を持って来てくれ、私とおじいちゃんの前に置きました。

「で、どうしたんだ？急に会って話がしたいんだなんて」

「記憶を取り戻しました」

「……そうか」

おじいちゃんは私を言葉を聞くと、ゆっくりお茶を飲み、そして深くため息をつきました。

「実は聞きたいことがあるんですが……」

「千陽の事をじゃろ？その前に、ワシの会社とDEM社の関係を話そうか」

おじいちゃんの言葉に私は多少驚きます。前は聞いても教えてくれなかつた会社のことだけではなく、DEM社との関係まで教えてくれるのなんて、一体どういう風の吹き回しでしょうか？

「まず、ワシの会社の名前は魂月重工業という。工業関連の日本一の会社であり、そして対精霊装備の制作、実験もしておる会社じゃ」

「対、精霊……」

「うん？どうしたんじや？どうせ、記憶を取り戻したということは五河士道関連で思い出したんじやろ？なら、精霊の事は知っていると買ったのじやが？」

「いえ、精霊については知っています」

私が驚いたのは、まさかこんなに近く——身内の中に精霊と敵対している者がいた事でした。

「つまり、おじいちゃんの会社はASTやDEM社のCRユニットを作っているんですか？」

「いや、基本的にはASTのだけじや。DEM社とは共同開発をしておる。夏休みに海外に行ったのは実験の進み具合を実際に見るためじやな」

「今までの事が線となり、私の中で繋がっていきます。戸惑う私を余所におじいちゃんの話が続けます。」

「次に、千陽の事じやが。DEM社のウィザードとして精霊と戦っておる」

「なんで、私が生きている事を伝えていないのですか？」

「そこまで、知っているとは……そうじやの、簡単に言えば精霊への憎しみを持たせた方が戦わせるのに最適じやったからじや」

「……私に千陽の事を教えなかったのは？」

「教えるも何も覚えておらんかったじゃろ?」

分かりません。おじいちゃんが千陽を精霊との戦闘という、危険な場所へ送り込んだかが、私には分かりません。私の中のおじいちゃん像がどんどん崩壊していつています。

「千陽をなんでDEM社に、精霊との戦いなんて危険な事をやらしているんですか!」

感情のまま怒鳴りつける私を見ても、おじいちゃんは少しも顔を変えず淡々と返します。

「千陽が忌々しかつたからじゃ」

「……..は?」

私は、おじいちゃんの口から出た言葉に耳を疑いました。何故?おじいちゃんは孫に甘い、いいおじいちゃんではなかったのか?と私は、もう全てが訳が分からなくなっていました。

「いや、言い方が悪かったな。千陽の見た目が嫌いじゃったんじゃ」

「見た、め?なんで、それが理由になるんですか!」

「知らんだろうが、お前の父と母は恋愛婚じゃった」

「恋愛?その何が問題なのですか!」

「大ありじゃ!結婚は一種の契約じゃ、結婚相手次第で様々な繋がりが出来、会社はさら

に大きくなる！結婚相手もステータスとなる！生半可な相手を選んではその後の契約や会社の運営に影響が出るのじゃ！それなのに、アイツはあんな女に誑かされようつて……」

この瞬間、完全に私の中の優しいおじいちゃん像が崩れました。つまり、おじいちゃんはお母さんの事が嫌いだったという事です。そして、お母さんの見た目を引き継いだ、千陽の事を排除しようとしていたのです。

今、思い返せばお父さんとお母さんが生きていた時に、おじいちゃんと会った記憶がありません。私が初めておじいちゃんと会ったのは、大火災の後でした。

「これで、知りたいことは全てかの？」

「……最後に、何故この事を私に話したんですか？前みたいに適当に誤魔化せば隠せたじゃないんですか？」

「おお！そうじゃった、そうじゃった。忘れるところじゃったわ。実はお前が高校を卒業したら、ワシの秘書になって貰おうと思つてな。そして、ゆくゆくは魂月工業の社長なつてもらおう」

「なにを……言つて……」

「その為にも、色々準備は必要じゃから、高校を卒業したら色々なことを教えてやろう」
「……黙つて」

「それに、結婚相手の事じゃが、中々いい男がおつてな、家柄もバツチリじゃ！ゆくゆくはその男と結婚してもらおう」

「黙って」

「五河士道なんて家柄も能力もない男なんて放っておいて、少しでも女を磨くといい」
「黙れ！」

士道の事を馬鹿にされた事が最後の引金となつて、私は反射的におじいちゃんに手をあげようと思いました。しかし、その瞬間に誰かが私の前に入りこみ、その手を受け止めました。

「中居、さん？」

物凄い勢いで私の前に飛び出てきたのは、中居さんでした。

「驚いたじゃろ？これが、わしらが作っているものじゃ。完全に発動しておらんでも、ここまで出力が出る」

目には見えてませんが、魔力を使った装置を中居さんは発動しているようです。

「改めまして、お嬢様。魂月工業の社長秘書兼社長護衛をしております、中居です。よろしくお願いたします」

「高校を卒業したら、中居君に色々と教えてもらおうといい」

「……………今日は帰らせて頂きます」

私は魂月家を出ていきました。私の帰るときの足取りは、とても重いものでした。

二亜クリエイション

少女は修道女との接触を知った

『あつ、ちーちゃん？アタシ五河士道少年とデートすることになったよ』

「……………は？」

おじいちゃんや妹のはるちゃんの事で頭がいっぱいになっていた私のところに1本の電話が来ました。その内容に私の頭の中が1度リセットされることになりました。

「二亜さん、士道に会いに行っただんですか？」

『そういうことになるね。こつちも落ち着いたし天使の力を封印して狙われなくなるならそつちの方が良いしね』

「それにしても急ですね……………」

『まあ、ちーちゃんが最近メシスタントに来てくれないからそのついでにね。じゃあ、少年によろしく言つといて』

確かにここ1週間、二亜さんの所に手伝いに行っていないんですけど……………

私は1度自分の家庭問題のことは頭の隅に置いておくことにしたのでした。

二亜さんも封印に前向きでありどうすればいいかを知っている状況だった為、今回は比較的スムーズに進むのではないかと思っていました。大きな問題にぶち当たりました。その問題とは――

「2次元にしか恋をしたことが無いと」

いや、そう言えばそんな話をしていた気もしますね。それにしても、これは美九さん並に難題ですね……

士道達は2次元にしか恋をしたことが無い二亜さんに対して、アニメキャラになりきってみたりしたそうですが、やはりそのキャラとの相違点などが出てしまうため失敗したそうです。その後、いつもと同じメンバーで話し合った結果、士道の今までの精霊との関わりを物語に落とし込むという話しになりました。

いやあ、折紙さんの意見にはびっくりしました。2次元にしか恋をしたことがないなら、士道その物を2次元として描く、逆転の発想ですね。確かに精霊関連の事を本にすれば中々内容のある物になりますし、士道の魅力も伝えられると思います。ただ、その本を作って読ませる為の条件というのが中々厳しそうですね。厳しい理由は2つあります。

1つ目は、本条蒼二。つまり、二亜さんに本の売上で勝ち、その本に二亜さんが読むだけの価値があると証明しなければならぬ。あちらが既に有名なのに対して、こちらは無名。この時点で中々厳しい戦いになります。普通にやったら絶対に勝ちようがないですが、話題性をどうにか上げて食らいつくしかありません。

2つ目は、本を作るまでの期間。決戦となるコミコの日まであと2日しかありません。0から作る必要がある上にこちらは素人ばかり。七罪ちゃんや折紙さん、八舞姉妹と絵が上手い子達が頑張っているようですが間に合うでしょうか。二亜さんに私から裁量の余地をお願いしてみましたが一——

『嫁や私の乙女心を弄ばれたんだよ？いくら、ちーちゃんのお願いででもそれは聞けないな——』

と、一蹴されてしまいました。「男なのに嫁なのか」や「乙女心っていう歳でもないですよね？」と口を滑らせなかった自分を褒めたいです。

それはさておき、私は私でみんなの助けになるように作業を始めますか。

私は、大量の布をに向き合い作業を始めました。

少女はコミコに参加した

12月31日。いつもなら本家に戻り、色々挨拶をしている時ですが、今年はすっぱかすことにし、私はコミコの会場にいました。

私達が会場入りした時には既に大勢の人が、開始の準備を進めていました。

「……うん？やあ、少年。ちーちゃんから来るのは聞いていたけど、まさか横のブラスに来るとはねえ」

「ちーちゃん？」

「いや、こつちの話だよ。で、アタシと同じ部数をアタシより早く売ると……中々考えたもんだねえ」

「……色々突っ込みたい所があるけど、話が早くて助かるわ」

二亜さん何してくれてんの？あだ名だったから分からなかったけど、下手したらバレちゃいましたよ。これ以上、巻き添えをくらい前にこつちの準備を始めましょうか。

「みんな、準備を始めるのでこつちに来て下さい」

「準備？一体なんのことであるか？」

「疑問？夕弦たちは何も聞かされてません」

「……なんか嫌な予感がするんだけど」

「そういえば、千夜姉に任せていたわね。とにかく、みんなはこっちに来て。土道、すぐ戻ってくるから、それまで川越たちと一緒にスペースの準備してて」

琴里ちゃんらの先導で私たちが移動し向かったのは更衣室です。そこで私は、この2日間作っていたものを袋から出して、それぞれに渡します。

「じゃあ、みんなこれを着て下さい」

「これは……!?!」

「凄い……ですっ!」

「まるで、霊装のようでは無いか!」

「驚愕。まさか、千夜の手作りですか」

「流石に、全員分のコスを作るのは大変でしたけど、話題性としては普通の衣装よりもこっちの方がいいと思いましたので」

私が2日間作っていたものをそれは全員分の霊装のコスプレです。流石に8人分作るのは骨が折れました。死神を召喚して手伝えなければ間に合わなかったですね。

「任せて置いてなんだけど、本当に凄い完成度ね……折紙のその頭のどうなっているの?」

「ピアノ線で止めてある。だけど、凄い安定感」

「うう、なんで私の分もあるのよ……」

「大丈夫ですよお、七罪さん！とおくつても可愛いですから」

みんなで、霊装のコスプレに着替え売り場に戻ります。えっ？私？私は私服です。流石にヘリーパーやヘスペクターの格好はバレル可能性があるので作りませんでした。決して、みんなのに力を入れすぎて忘れていた訳ではありません。……本当ですよ？

「お、お前らその格好は!?!」

「うむ！売り子と言うらしい！」

「……お姉ちゃんが、作って……くれました」

まあ、突然完全霊装状態で現れたらびつくりしますよね。それに、周りの反応も上々です。

「なんだあのサークル……すげえ可愛い子ばつかじゃねえか」

「それに、あのコスプレ……何のコスか分かんねえけどクオリティめちやくちや高え」

「あれ？カタログになかったぞ、あんなの」

「ていうかあの中にあるの、誘宵美九じゃね」

「おい、その奥のメガネにグローブの男って、伝説のへ妹々かぶり」の代表、MUNEC

H I K A だ！」

中津川さん!?あなた何者ですか!?

『ーーーーーただ今より、コミックコロシウムを開催いたします』
こうして、私たちのコミコデーが始まりました。

少女は自主制作本を売りきった

二亜さんとの売上勝負は、現状としては何とか引き離されないようにするのが精一杯でした。

「やつほー！十香ちゃん、きたよー」

「すごい人の数だねー」

「コンゴの湿地戦を思い出すわー」

クラスの友達を呼び。

「あつ、いた。折紙！一体何なのよ、きゆうによびだしたりして」

「折紙さん！お久しぶりです！」

「あー、もしかして髪切りました？思い切りましたねー」

かつての同僚を呼び。

「ーーーここか？カタログにないサークルっていうのは」

「しかし、新興にしていきなり壁ってのはどういう理由だ」

「ああ・・・なんでもあの名伯楽、MUNECHIKAがいるらしい」

「まさか！彼が目を付けたサークルは全て超大手にのし上がり、イチオシされた作家は

商業での大成功を確約されたも同然と謳われた、あの!？」

「何だって!?! 萌えアニメ選手権伝説の7代目チャンピオン、MUNECHUKAが!？」

「超銀河大番長MUBETCHIKAが復活したって!？」

その他の話題性により、何とか二亜さんのサークルの売上量にくらいついていました。折紙さんのAST時代の同僚が現れた時は、ヒヤヒヤしました。みんな精霊の格好をしていますし……まあ、折紙さんが有無を言わさぬ調子で対応してくれたので何とか耐えましたけど。

あと、中津川さん? あなた本当に何者ですか？

「ふっ、今の私はない機関員でござりますよ」

……まあ、中津川さんの事は置いておいて、問題はそろそろペースが落ちてきてしまうことです。サクラもほとんど来てしまいましたし、話題性も一時的なもの。5000部なんて量を捌こうと考えると、まだまだ足りない。実績がある二亜さんに勝つには尚更です。

「し、シドー……人が途絶えてしまったぞ」

「……ど、どうするのよ、一体」

「何か……何か手は無いのか!……このままじゃ……」

恐れていたことが始まりました。結構な量を捌くことは出来ましたがやはり足りま

せん。くつ、せめてもう一回起爆剤があれば……

「うふふ、諦めるなんて、だーりんらしくないですよ？まだ、勝負は終わってません。むしろ、これからです」

その声をあげたのは美九さんでした。一体何をするつもりなんでしょう？

「さあ二亜さん、勝負です」

「……何をするつもりかわからないけど、さすがにここから換回するのは難しいんじゃない？」

「うふふ、それはどうでしょうねえ。ねえ、二亜さん。長い間DEMに捕まっていたらしいですけど、SNSっていうのはご存じですか」

「ソーシャル・ネットワーキング・サービスでしょうか？一応、知ってるよ。仮にも全知の天使の宿主だからね」

「……でも私のことは知らなかったんですねー。調べるような興味もなかったですかー、そうですねー」

「……いや、ごめんって」

「とにかく！今SNSは、国民の半数以上が使用しているサービスなんです！そして、今この会場にいる人たちの年齢層だと、その割合はもっと上がるんじゃないですかね」

・・・あつ、まさか!

私は慌ててスマホを取り出し、アプリを起動させます。そこには――

『Miku Izayoi: お友だちのサークルのお手伝いでコミコに来てまーす! 今東A-20・5サークルへラタトスクで本の受け渡し会を実施中! 写真もOKですよ!』

――とコメントが表示されていた。

「だーりんや皆さんが必死になって頑張っているのに、私だけ全力を出さないなんて、我慢できません。私だって皆さんの力になりたいんです」

美九さんの男性嫌いは緩和されたとはいえまだまだ健在。そんな状況でも土道の為に、皆の為に変わろうとし行動を起こしたのでした。

「さあ、見てせあげますよ二亜さん。あなたが知りもしなかった女の力を。そして、心に刻んであげます。この私――誘宵美九の名を! It's show time!」

美九さんが手を掲げ、指をパチンと鳴らすと、それに応じたように会場におびただしい数の足音と共に人々がへラタトスクのブースに目掛けてやって来ました。

「わっ! ホントに美九たんじゃん!」

「マジか、本物!? なんでこんな所に・・・!」

「あ、あの、お渡し会やってるって聞いたんですけど、本当ですかね？」

本当に凄い人気ですね・・・おっと、ぼーつとしている暇はありませんね。ここから追い上げるために、準備をしませんといけません。

「耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃん、列の整理を！土道以外の男性陣は私と本の補充と、お金を払った参加者の誘導をしますよ！琴里ちゃん、料金の回収のチームのまとめはお願いします！」

「つつ、了解！土道、十香、折紙、四糸乃は私と一緒に料金の回収をするわよ！七罪は販売をしつつ美九が疲れたら体力回復のために抱きつかせてあげて！」

「なんか私だけ役割おかしくない!？」

そこから、〈ヘラタトスク〉の怒涛の追い上げが始まりました。そして――

〈本条堂〉 完売です！

二亜さんのサークルと同時に5000部売り切りました。

死神は体を負傷した

さて、二亜さんに士道達の本を読んでもらえることになりましたが……それだけでは上手くいく気もしませんし、ここからどうしましょうか。

今回は、二亜さんが暴れる心配もないのでASTと戦う心配もありませんし、何故かDEM社も大人しいです。つまり、1番のデートを邪魔する要因の排除がほぼないので。もう、今回は帰っても大丈夫ですよね？

そう思い、帰路につこうとした私は嫌な靈力を感知しました。

「な、なんで……？この靈力は……反転？」

私は〈靈魂看守〉を顕現させ、全力で靈力の発生源へ向かっていました。

なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでっ!?

二亜さん自身に異常はなかったはず！士道達がやらかした可能性も低いと思いますし、むしろいい方向に向かっていたはず……なのに何故?!

「……DEMが何か仕組んでいた？」

そう考えると今回、いや二亜さんが脱出してから殆どDEM社が干渉して来なかったことに説明がつきます。

しばらくすると目的地までたどり着くことが出来ました。精霊組はそれぞれ状況に対応するため天使を顕現させています。それを邪魔するのが2人のウイザードと1人の男。ウイザードの片方はエレンさん。片方は見た事はありませんがエレンさん並の力を持っていると思われるウイザード。そして、その2人に守られるように立っている男、アイザック・ウエストコットがそこにはいました。

そして、私はあることに気がつきました。

「……嘘でしょ?……二亜さん?」

二亜さんには殆ど霊力は残っておらず、二亜さんの霊力だった物らしき宝石はアイザックの手の中に取りました。あの宝石を取り返さないと二亜さんが危ない、そう本能的に感じた私は考えるよりも先に飛び出しました。

「それを返してええええ!!」

アイザック目掛けて大鎌を振り下ろしますが、テリトリーに阻まれ届かず押し戻されてしまいます。更にそこへ追撃を受けますが何とか防ぎきることに成功しました。しかし、私への攻撃はそこで終わっていませんでした。

私の左腕が切断されたのでした。

「……………つつ!?!」

「ちえ……………避けられちゃったかあ」

「あああああああああああああ!?!」

後ろからの第4の敵の存在。普段の私なら気が付かない事はありませんでしたが、二亜さんの反転への動揺や精霊が集まったことにより周りの霊力反応が密集によって、人1人の霊力を見落としてしまっていたのです。ギリギリで感じた殺気で致命傷は避けられましたが、斬られた左手は地面に落ち、切断面からは血がポタポタと大量に流れ落ちていました。

〈サリエル霊魂看守〉で精神に干渉し、無理やり心を落ち着けさせ、次の一手を考えます。

「フエイト・オブ・ライフ生命の満欠」(盈月)」

生命体を成長させる能力を使い、傷口だけでも塞ごうとします。しかし、何故か傷口が塞がることはなく血は垂れ流しとなってしまいました。

「くっ!……………!?!は、はる……………ちゃん?」

解決を諦め、敵を見定めるとそこに居たのは妹の千陽でした。はるちゃんは私が名前を呼ぶと心底不機嫌そうな顔と声色で返事を返してきます。

「だ・か・らっ!!その顔とその声で私を呼ばないでくれるかな?!」

「はるちゃん、私だよ？やーだよ？」

「うるさいっ！やーちゃんを侮辱するのも大概にしてよ！やーちゃんはもう居ないんだよー！」

「それは、おじいちゃんが嘘を！」

「うるさいうるさいうるさいっ！」

話を全く聞いてくれません。それに、はるちゃんに拒絶されたのに心が痛みます。おじいちゃんが嘘をついていた事、私は生きていた事をそれを伝えれば、はるちゃんは分かってくれる。そう思っていたのですが……

「千陽、落ち着いてください。1度撤退します」

「なんで!？」

「アイクの命令です。それに、今のままではあなたの願いは達成できませんよ？」

「……ちっ、わかったよ」

空へと消えていく、はるちゃんに私は手を伸ばす事が出来ませんでした。

少女は自身の体の状態を理解した

斬られた左手からは、血がもう残ってないのか、流れることが無くなりました。しかし、断面は依然として生々しいままでした。

「血が固まって瘡蓋にならないし、血が大量に流れたのに異常は無い……私の体は一体どうなってますか？もしかして……いや、でもまさかそんな事があるのでしょうか……？」

とりあえず腕には包帯を巻いておきましたが無さそうですね。さて、このままだと絶対に士道達にバレてしまいますね。左手が無いのも不便ですし……

「……仕方ありません、あの人を頼りますか」

「ふむ……リアライザ顕現装置でもダメそうだね」

「すみません、令音さん。ご迷惑をおかけします」

私が頼ったのは令音さんです。困った時はこの人に頼ればだいたい何とかなる気が

します。でも、千切れた腕でも1日で治る顕現装置でもダメなら、やはり私の予想は正しい可能性が高いですね。

「令音さん、やつぱり私の体は……」

「ああ、随分前からだが……君の予想どおりだよ。少なくとも、君が〈スペクター〉になった時に検査をしたが、既にそうだったよ」

「それを土道達には……」

「もちろん伝えてはいない」

「お気遣い、ありがとうございます」

因みに私は今、フラクシナスの治療室で診察中なのですが、隣の部屋では土道達が二亜さんのお見舞いに来ているのでバレそうで怖いです。

そう、二亜さんは助かりました。二亜さんはアイザックに殆どの霊力を持つていかれたようですが、少しだけ体に残っていた事で一命を取りとめたそうです。土道の呼び掛けで、二亜さんが少しだけ正気を取り戻し、反転していた霊力の一部が正常になり、その正常な霊力だけが残ったそうです。流石土道、いい仕事をします。

しかし、問題もあります。アイザックが二亜さんの霊結晶を取り込んだ事で、二亜さんの天使【囁告篇帙】が反転した姿、【神蝕篇帙】を使えるようになった事です。かなり、不味いのが敵の手に渡ってしまいました。

「それで、その左手だが……やはり再生は見込めない。こちらで、義手を用意するから少し待ってくれ。ああ、心配しなくても琴里にもバレないように用意するよ」

1週間後、私の左手に義手が取り付けられました。見た目や触った感じは殆ど本物と相違なく、動かすのも違和感がありませんでした。

「かがくのちからってすげー!」

私は思わず、そう叫びました。

ですね。早生まれの人は17歳かもしれませんね。先生が誕生日3月なんですけどね、何歳になると思います?」

来禅高校の名物教師のタマちゃんといえば、崖つぶち乙女29歳。それは、クラス全員に認知されてる事です、それを口にする人はいませんでした。

「私……今年ついにアラサーを卒業してサーになるんですよ。うふ……ふふふ……凄いでしょ?」

ダメですね。完全に目がいつてます……

「た、タマちゃん……」

「シャラップ。これから私に話しかける時は言葉の前と後にサーをつけてください」

「さ……サー・イエス・サー……サー・タマちゃん、何かあったの?……サー」

居た堪れなくなった亜衣さんがタマちゃん先生に話しかけようとする、タマちゃん先生はメガネを光らせわけがわからない事を言い出しました。それに対して、亜衣さんは気圧されながら敬礼をします。そして、改めて亜衣さんがタマちゃんに質問します。

「別に何もありませんよ?大丈夫です。ただ喜ばしいニュースがあります。小学校からの同級生で、親友のエリちゃんが来月結婚するそうです。うふふ、嬉しいなあ。エリちゃんはとってもいい子ですから、きつといいお嫁さんになりますよ。誕生日やクリスマス

マスは毎年一緒に休んでくれましたし、バレンタインなんかはお互いにチョコを交換し合ったりしてました。お酒が入ると泣き、上戸になつて、『うがー、もし結婚できないまま30になつたら、私を貰つてくれタマー』と叫びながら抱きついてきたりしましたっけ。

(中略)

ふ……ふふふ、また、また一人同級生結婚しちゃった……くそつ、くそつ、結婚しちゃもうのはいい奴ばかりだ。みんな、みんな俺を置いて出ちゃった……教えてくれ……俺は一体、あと何回お前らの結婚式に出ればいい……!? 待たててくれよ、みんな俺もすぐそっちに……は、は、は、また売れ残っちゃったな。どうやら俺は縁結びの神様に嫌われているらしい……

……はい、では出席を取りまあす」

本当に誰か貰つてあげて! タマちゃん先生はいい人なんですけど、何でも結婚出来ないのでしょうか?

「サー・全然大丈夫じゃないじゃん・サー!」

「サー・ちよつと休んだ方がいいよ・サー!」

「何言ってるんですか。大丈夫ですよー……ただ、もし今日の前に悪魔が現れて私の命と引き替えに1つだけ願いを叶えてくれると言つたら、来月あたり日本に巨大隕

石でも落としてくださいって言うかもしれないくらいです」

全然、大丈夫じゃー……じゃーん？

「サー・だからそういうところ！サー！」

「サー・完全に、休み明け前の小学生みたいな思考になってるじゃん・サー！」

「うふふ、冗談ですつたらあ。ちちんぷいぷい隕石落ちろー」

タマちゃんがチョークを一本持ち、くるくる回して窓の外に向かってえいっと掲げると、同タイミングで校庭から爆音が鳴り響き、教室を物凄い衝撃波が襲いました。校庭を見ると、黒い機械の1部のような塊がクレーターを作っています。

「……い、隕石？」

「……はうっ」

「う、うわああああ！タマちゃんが隕石を呼んだああああ！」

「知らず知らずのうちに悪魔と契約を!？」

「タマちゃあああん！死んじやいやああああ！」

教室内はタマちゃんが悪魔と契約して本当に隕石を落としたのかと阿鼻叫喚となっていました。私も突然の事に驚いていましたが、隕石飛来以上に気になることがあります。

「今の靈力は、いったい……」

私は今まで感じたことの無い、未知の精霊の霊力を感じたのでした。

少女は精霊の出現の理由を知った

隕石の飛来から数時間、私達は巨大な輸送ヘリに乗って空を飛んでいました。

隕石だと思われていたのは、バンダースナッチの1部出そうで、DEMが精霊を狙って返り討ちにあつた結果だつたそうです。アイザックが二亜さんから奪つた天使の能力を使い見つけ出した、未だ発見をされていなかった精霊を見つけ出し襲つたようです。まさか、宇宙で漂っているとは思いませんでした。流石に私の霊力感知も宇宙までは届きませんし。

宇宙まで行くのは流石に難しいため、土道を立体映像として宇宙にいる精霊、ヘゾディアックに接触をしましたが、失敗に終わりました。

分かつたことは、名前が六喰ちゃんという事と、天使の名前と能力だけです。天使の名前は「封解主」、全ての物の開閉を可能とする力です。その力を使い、六喰ちゃんは自身の心を閉じてしまっており、土道がいくら口説いても心が動くことはありませんでした。

六喰ちゃんは接触さえしなければ何もする気は無いと言っていました。DEMが

放っておくはずがありません。となると、六喰ちゃんが脅迫で言っていた、地球の巡りを止める、つまり自転を止められかねません。そんなことされたら、地球が滅んでしまいます。

という事で、ラタトスクとしても放置は出来ないわけで、現在はそれをどうにかするために場所を移動中なのです。

しばらくして着いたのは格納庫のような場所でした。琴里ちゃんと言うには、ラタトスクの技術の中核と言える場所らしいです。ヘリを降り、先行する琴里ちゃんの後を歩いて行くと、巨大な空中艦が止まっていました。

「フラクシナス……！」

士道がそう呟いて、やっと私も気がつきません。それは、ラタトスクの空中艦フラクシナスでした。形が違いため気づくのが遅れました。

「よく気がついたわね。そう！これは今までのフラクシナスじゃないわ。ラタトスクの最新鋭の顕現装置リアライザを搭載し、あらゆる性能をグレードアップした改良型……その名もフラクシナス Eエクス・ケルシナル X！」

フラクシナスは折紙さんとの戦闘で損傷し修復中とは聞いていましたが、まさかグレードアップしていたとは知りませんでした。

まだ、発艦には時間がかかるそうで、私達は手持ち無沙汰になってしまいました。そ

ここに鞠亜ちゃんから連絡が入りました。

『秘密基地内に琴里たちと面会を希望してる方がいらつしやるのですが、いかがいたしますか』

「面会希望？ 一体誰よ？」

『はい。エリオット・ウツドマン議長です』

「……は？」

エリオット・ウツドマン議長……議長って言われているので、琴里ちゃんの上司のでしょうか？

「ウツドマン卿は、ラタトスクの意思決定機関である、円卓会議の議長よ……実質的なラタトスクのトップにして創設者。彼なくしてラタトスクは生まれなかつたといつてもいいわ」

ラタトスクのトップですか……それは、とても興味深いですね。一体何を思つて精霊の保護なんてことをする組織を作つたか聞きたいですね。アイザックのように精霊を利用するためだつたら、ラタトスクとの付き合い方を考えないと行けませんし。

「さ、入って」

目的の場所に着いたようで、琴里ちゃんが扉の横のインターホンのようなもので来訪を伝えてから扉を開き私たちを中へと誘導します。中は書斎のような部屋で壁には本がびっしりと詰められた本棚が並んでおり、奥には大きな職務机と車椅子に座った少し年老いた男性、スーツ姿の女性がいました。

「え……?」

「む?」

その姿を見て声を上げたのは、土道と十香ちゃんでした。どうやら、七罪ちゃんと出会う少し前に2人はこの人物と会っていたそうです。琴里ちゃんに迂闊に行動したことをたしなめられています。笑って誤魔化しました。ラタトスクのトップがこんなので大丈夫でしょうか? いや、大物感がありますけど。

「さて、今日は突然すまなかつたね。本来ならこちらから出向かねばならなかつたのだ
が……」

「いえ、そんな」

話している感じはただの気のいいおじいさん程度です。しかし、むしろそれが余計に気持ち悪く感じます。この人が何を思っているのか、全く見当がつかないです。

「1ついいですか？」

「君は……魂月千夜だったね？それで、何かな？」

「あなたは何の為にラタトスクを作ったのですか？」

「それは、君も知っているだろう？ラタトスクの活動目的は精霊の保護だと」

「はい、知っています。ただ、精霊の保護というあなた自身にんのメリットもない事に資金を使う理由はなんですかと聞いています」

大人は信用出来ない。一見良さそうな人でも裏では何を考えているのかが分からない。この前、おじいちゃんて学んだばかりです。

「……困ったな」

やっぱり、この人は敵なのでしょうか？

「精霊を救うこと、それ自身が私の最大の目的なんだ。それ以上でもそれ以下でもなく。だが、君はそれでは納得いかないらしい」

「さっすがに……聖人君子すぎるんじゃない？ちーちゃんの懸念ももつともだよ」
私との会話にそう口を挟んで来たのは二亜さんでした。その声はいつもの陽気なおちやられた声ではなく、かなり真剣なものでした。

そして、私は二亜さんの次の発言に耳を疑うことになりました。

「エリオット・ポールドウィン・ウッドマン。それがあんたのフルネームってのは、間違

「いないよね？」

「ああ、間違いない」

「じゃあ改めて聞くけど……」

DEMインダストリー発足メンバーの1人で、30年前初めてこの世界に精霊を出現させたあんたが、どの面下げてそんなキラキラした綺麗事を言ってくれてん

の
？
」

少女は価値観の違いに困惑した

「DEMインダストリー発足メンバーの1人で、30年前初めてこの世界に精霊を出現させたあんたが、どの面下げてそんなキラキラした綺麗事を言ってくれてんの?」

「な……!!?」

二亜さんの言葉に私だけでなく、土道や他の精霊組も息をつまらせませす。それにしても、二亜さんはいったいどうやって、そんな事を知って……あつ……

「……〈囁告篇帙〉」

「そつ、先月のまだあたしが完全な状態の〈囁告篇帙〉を保有してた頃、ちよつと調べる機会があつたんだよね。この世界に、原初の精霊が現れた時の状況をね。んで、そんな時に分かつたの、アイザック・ウエストコット。エレン・メイザース。そして……エリオット・ウッドマン。DEMインダストリー社の創設メンバー3人が、原初の精霊を出現に関わっていたことが」

「そうか、君の天使は全知の〈囁告篇帙〉だったね。別に隠すつもりもなかったが、それ

精霊を目の当たりにした時、私は変わってしまった。それまでの目的を捨て、DEMを出奔してラタトスクという組織を作って、精霊の保護に自分の人生を使うことを決意した……かつての同士に背を向けてでもね」

「……その理由とは？」

一体何が彼をそこまで突き動かしたのか、私には見当がつきませんでした。

「……恋をね、してしまったんだ」

えっ？恋？Love？いや、確かに見当がつかなかったですけど……えええ……
恋、恋かあ……

「初めて原初の精霊と見えた瞬間、私は彼女に心を奪われてしまった。どうしようもないくらいに、彼女に焦がれてしまった。彼女の力を奪い取ろうとしていた自分が許せなくなってしまった。だから、彼女と同じ存在である精霊が、辛い思いをしているのが耐えられない。馬鹿げた理由と笑われるかもしれないがね、私が精霊を救おうとする理由は、それが全てなんだ」

私が呆気に取られている間に、土道が1歩前に出て言葉を返しました。

「馬鹿げてなんて……いません。むしろ、何えいうか……俺はあなたが、ラタトスクを作った人が、そういう人でよかったです」

「ありがとう。君は優しいね。私も……霊力を封じる力を持っていたのが君のような少年であったことを嬉しく思うよ」

「いえ、そんな……」

確かに恋愛は人を変えるって言いますが……これは信じてもいいのでしょうか？ うくん……

私がそう悩んでいると、折紙さんがカレンさんの方に視線を向け質問を投げかけました。

「では、あなたは一体なぜそんな彼についてDEMを離れたの？」

「……私はエリオットに惚れていますので」

「……………ぶっ!」

「またもや発せられた予想外の答えに私と土道が吹き出します。もうヤダ、この人たちと話していると頭がおかしくなりそうです。」

「そ、そうなんですか?でも、ウッドマンさんはその原初の精霊に……………」

「相手に想い人がいるからといって諦めねばならない道理はありません。もしも彼が心変わりをしたとき、側にいなければ選ばれようがないではありませんか」

「そ、それは……………そうかもしれないですけど」

「言っている事は間違っていないんですけど……………まあ、一途な人なんでしょうね。」

「もつとも、欲を言えば、生殖行為が可能ならちに胤をいただきたいところですが。エリオットの気持ちは最大限尊重するつもりですが、彼の血を後世に残さないのは世界の損失です」

「……………っ!?!は、はあ……………」

「……………やつぱり、変な人でした。」

「はは……………これは参ったな」

「あなたが参る必要はありません、エリオット。私が勝手にしていることです」

そこで、カレンさんの話を真剣な様子で聞いていた折紙さんが、彼女の元へ歩み寄り、

右手差し出しました。

「深く理解した。あなたの気高い決意に、賞賛と喝采を」

「こちらこそ、感謝を。私の考えに賛同を示してくれたのはあなたが三人目です」

そうして、2人はがっしりと握手を交わしました。

そんなヤバい人があと2人はいるんですか!?!そして、あなた折紙さんの同類でしたか!?!いや……無理やり襲わないあたり折紙さんより良心的では……?!

今日何度目か分からない困惑をしていると、ウツドマン氏にかけていたメガネの位置を直しながら、軽く身を乗り出しました。

「すまないが五河士道。顔をよく見せてはくれないかな。最近、視力の衰えが激しくてね」

「えっ? あ……はい」

士道は言われるままに、ウツドマン氏の方に近づいて行きました。そして、ウツドマン氏がまじまじと士道の顔を覗き込みます。

「……なるほど、やはり、似ているな……あのときの少年に」

その言葉の意味を士道が聞こうとした、次の瞬間。激しい揺れが部屋を襲いました。

「……………っ!?!」

近くでなにか爆発したかのような衝撃が部屋を揺らし、本棚の本が床に散らばりまし

た。

「だ、大丈夫かみんな！」

「うむ……問題ない。しかし、一体何が起こったのだ!？」

「まさか……六喰さん……ですか?」

「ええ!?ここに隕石落とされちゃったってことお?」

四糸乃ちゃんが六喰ちゃんが隕石を落としたのではないかと危惧しますがそれは違います。確かに、外に霊力の反応がありますが、これは六喰ちゃんのものではありません。この反応は、反転体のもの。つまり……

『襲撃です!基地上空に空中艦の反応を確認!これは……DEMです!』

ラタトスクの基地にDEMが襲撃を仕掛けてきたのでした。

死神はDEMの襲撃に対応した

DEMの急な襲撃に慌てますが直ぐに落ち着きを取り戻し、避難を始めました。そもそも、何故この基地の場所がバレたのか、内部に間者が居たのかと思いましたが、DEM側はそんな煩わしいことをしなくても、調べれば分かってしまうのです。何故なら、DEMには全知の魔王〈ベルゼバブ〉があるからです。二亜さんが多少残っていた〈ラジエル 囁告篇帙〉で検索の妨害をしていたようですが、時間稼ぎぐらいにしかならなかったみたいです。

現在、私は士道を含めた精霊組とフラクシナスを目指し避難を進めています。DEMが襲つて来た理由は分かりませんが、恐らく精霊組かウッドマン氏のどちらかでしょう。私的には、DEMの最終目標が原初の精霊であるなら、ウッドマン氏の方が確率が高いと思います。

ちなみに、現在ウッドマン氏とカレンさんは消さなければならぬ情報を消してから避難すると言って別行動をとっています。ウッドマン氏が狙われていると踏んでる為、士道が狙われる確率が減ると考えれば、ありがたいのですが……大丈夫でしょうか

?

既にバンダースナッチやウイザードがかなり侵入してきているようで、先程からひっきりなしに襲ってきますが、折紙さんや十香ちゃんを筆頭とした精霊組が蹴散らし、順調にフラクシナスに向かえています。

「ooooooooっ！みんな下がって下さい！」

突然そう叫んだ私に驚きながら全員が動きを止め、それと同時に、通路の壁が破壊され私たちの前に男が現れました。

ウツドマン氏狙いだという予想はハズレのようではすね。出来ればハズレて欲しくはなかったですが……

「アイザック・ウエストコット……」

私たちの目の前の壁を突き破り現れたのは、〈神蝕篇帙〉^{ベルゼバブ}の持ち主、アイザック・ウエストコットでした。

アイザックの姿を確認するやいな、折紙さんが〈絶滅天使〉^{メダトロ}により、光線を放ちます。しかし、光線はアイザックに当たることはなく、途中で現れたの古びた本の1ページのようなものに包まれて消失しました。

「素晴らしい。迷いのない、そして、正確な一撃だ」

「……ち」

アイザックは、折紙さんの攻撃を難なく受け止め、不敵な笑みを浮かべます。

「だが、残念だな。限定された天使の力程度では傷を付けられない。」

「—————」ベルゼバブ
〈神蝕篇帙〉

アイザックの呼び掛けにより、1冊の禍々しい本が現れます。それを見て、今まで天使を解放していなかった子達も限定霊装や天使を顕現させました。

「はあっ!!」

最初に飛び出したのは十香ちゃん。地面を力強く蹴りサンダルフオン〈塵殺公〉を振り上げ、アイザックに勢いよく斬りかかります。しかし、アイザックの横に控えていたウィザードに防がれ、その刃はアイザックに届きませんでした。

「邪魔をするなああー!」

十香ちゃんはウィザードを力任せに薙ぎ払い、アイザックを睨みつけました。しかし、こんな状況でもアイザックは笑みを浮かべていました。

「勇猛なり。素晴らしきかなへプリンセス—————しかし、残念だ。本当ならば、相手をしてあげたいところだが、今日の目的は君たちではないんだ」

なら、帰ってくれませんか？

「ただ、君たち、放置していたら、何かと厄介そうだしね……そうだな。ちようどいい。君の力を見せてくれ」

アイザックはこのまま帰る気はなさそうで、空中に浮かんだ本に語りかけるようにそ
ういい、魔王の力を行使しました。

「〈神蝕篇帙〉——」ベルゼバブ【幻書館】アソコフイリア

「十香ちゃんっ!」

「……っ!十香!」

私は靈力の動きを読み取って、土道も何かを感じたのか十香ちゃんに危険を知らせよ
うと声を上げます。次の瞬間、十香ちゃんの足元の空間が歪み、そこに巨大な開かれた
本が現れます。十香ちゃんは咄嗟に飛び退こうとしますが、まるで十香ちゃんを飲み込
むように勢いよく本は閉じ、そのまま十香ちゃんごと姿を消してしまいました。

「きゃ……!」

「な、何よこれは!」

「く……!」

「ちっ、〈囁告篇帙〉!」ラジエル

「わ、このっ!」

「し、土道、さ——」

十香ちゃんを飲み込んだ本は次々と私たちの足下に姿を現し、1人また1人と飲み込
んで行きます。私は靈力の動きをみて、躲していましたが限界は近そうです。

「くそっ！てめえ、みんなをどこにやった！」

「はは。そう、鼻息を荒くしなくても大丈夫だよ。すぐに会える」

そう言うときアイザックは、ついに士道の足元にも本を出現させて飲み込もうとした。

「くっ！〈靈魂看守〉—————【魂を喰らう者】」

「千夜!」

ついに天使を顕現させ、自分の足元にも鎌を突き立て本の靈力を奪い、そのまま士道の元へ駆けつけました。士道に思い切り見られています、出し惜しみしている余裕はありません。出せる限りの力を出し、士道へ向かって駆けました。しかし、あと一歩のところまで間に合わず、士道を飲み込んだ本はその姿を消してしまいました。

「士道をつ！………士道をどこにやったのですか!」

「そう睨まないでくれへリーパー」。彼らは無事だよ。ただ少しの間、幻想の世界の中で惑ってもらっているのさ」

「御託はいいので士道を返して貰えますか?」

「それは了承しかねるな」

「なら、力づくできかせるまでです」

大鎌を振り上げ、アイザックに向けて振り下ろします。しかし、アイザックを守るよ

うにウイザード達が攻撃を防ぎました。エレンさん程の出力がないため難なく吹き飛ばすことが出来ますが、アイザックには届きませんでした。

「ちいー！」

「いいのかい？こんな所で油を売っていても。今はこの施設内にはフラクシナスがあるんだろ？それを我々が占拠してしまえば、ソディアックの所へ行く手段が失われてしまうが」

「結局、土道がいなければ同じですよ」

「それもそうだー！ー！君たち後は頼んだよ。私はこの後古い友人に会いに行くからね」

「「「はっ！」」」

立ち去ろうとするアイザックを追おうしますが、その行く手をウイザード達が塞ぎます。鎌を振り回しウイザード達を次々と蹴散らしますが、全員倒しきった時にはアイザックの姿はどこにもありませんでした。

霊力で探ろうにも反応はなく、完全にアイザックを見失ったことになりました。もし、【未来記載】で会わないようにされたら最悪です。

そんな事を考えている間にも、施設の破壊は進みます。あちらこちらから爆音と悲鳴が聞こえてきました。

「迷っていても仕方ありませんね……アイザックを探しつつ、他の人の救出をしましょう」

救出するのはいいとして、死神達や【月喰狼】^{ハテイ}では誘導がしづらいし……仕方ありません。まだ、未完成ですがあれを使いましょうか。

【魂の記録書】【受肉】^{ソウルログ インカーネーション}

霊力を大量に消費し、私の目の前には3人の少女が現れました。

「お待たせしました。凜音、万由里ちゃん、鞠奈さん」

「やっそこつちで会えたね、千夜ちゃん」

「はあ、本当にやっつとよ……時間かかりすぎじゃないの？」

「まあ、こつちに來れたことは感謝してるわ」

私は、【魂の記録書】^{ソウルログ}から3人の記録しておいた魂をとりだし、【受肉】^{インカーネーション}で肉体を作ったのです。私はついに3人に肉体を授ける事ができるようになったのです。

「状況は見ての通りです。みんなはラタトスクの人たちとフラクシナスの保護をお願いします。私はアイザックを探して土道救出に向かいます」

「うん、分かったよ。気をつけてね」

「ちゃんと土道達を助け出してきてよね」

「こつちの事はあたし達に任せなさい」

「〈凶禍樂園〉！」

「〈雷霆聖堂〉！」

「〈電界樹〉！」

「……凛音は土道の願いを歪んだ形で叶えようと世界を繰り返し返した天使を。」

「……万由里ちゃんは精霊の力を持つのに相応しい者か見極めるための世界のシステムの天使を。」

「……鞠奈さんは電子世界で生まれ、土道をゲームの世界に閉じ込めた天使を。」

それぞれが馴染みのある天使を顕現させました。

「それじゃあ、行きますよ！」

「うん！」 「ええ！」

私たちは、それぞれの役割を果たすため動き出したのです。

六喰フアミリー

少女は死神である事を認めた

アイザックを探して動き回っていましたが、結局見つける前に士道たちは脱出したよ
うで、そのままフラクシナスに乗って六喰ちゃんの封印へ向かいました。

結果は〈贗造魔女〉で〈封解主〉使い、〈封解主〉で閉じられていた六喰ちゃんの心に
開くことが成功しました。封印を解いた時に士道と六喰ちゃんが宇宙から墜落し大気
圏に生身で突入するというハプニングがありました。士道は無事でした。全く、変な心
配をかけないで欲しいですね。

六喰ちゃんは士道を回収する時には姿はなくどこかに行ってしまったらしいです。
まだ、心を開けただけで霊力の封印は出来ていない為、無事でしょうけど何処に行つた
のでしょうか？

これまでの過程はさて置き……

「それじゃあ、千夜姉。納得の行く説明をお願いできるかしら？」

「千夜……やっぱり、お前が〈リーパー〉だったんだな」

「……………これをどうしましょうか。」

まあ、士道の目の前で霊装を纏いましたし、ラタトスクの基地で職員を守るために色々やりましたから当たり前といえは当たり前ですが……………

ここまで、大人数にバレてしまつては仕方ありません。多分ラタトスクの多くの職員やデータとして記憶・記録されているでしょう。記録の方は鞠亜ちゃんに頼めば何とかなりそうですが、記憶を弄るのは流石にこの人数となると無理ですね。

「そうです。私が〈ヘリーパー〉です……………つと、四糸乃ちゃん。美九さん。ちよつと、こつちに来て私の手を握つて貰えますか?」

「私……………ですか?」

「いやーん!千夜さんにご指名されちゃいましたあ、ぺろぺろしていいですか?」

「ダメです。それでは、〈^{サリ}^{エル}靈魂看守〉」

「なっ!?!千夜!?!」

「何するつもり!」

四糸乃ちゃんと美九さんの手を繋ぎ、そのまま天使を顕現させます。士道と琴里ちゃんが警戒して声を上げますが、別に危険なことをする訳では無いです。

「大丈夫ですよ。【^コ魂^ネの^ケ接続】【^ソ魂^ウの^ル記録^ロ書】」

「……………え?えっ!?!」

「これは……っ!?この記憶は……どういう事ですかあ?千夜さん」

「今まで奪っていた2人の私との記憶です。2人は前々から私が精霊だと知っていましたから」

「つまり、四糸乃と美九。2人は何らかの理由で千夜姉が精霊であることを知っていた。でも、それを私たちにバレないように千夜姉が記憶を弄っていたってこと?」

「その通りです、琴里ちゃん。2人には申し訳ないことをしました」

「私は……大丈夫ですっ!」

「私もちゃんとした千夜さんとの思い出が取り戻せたので全然気にしていませんよお」

私が頭を下げると、四糸乃ちゃんと美九さんは快く許してくれました。天使かな?精霊でした。

「なんで、千夜は精霊って事を隠していたのだ?」

「疑問。ラタトスクを信用してなかったのでしょうか?」

「確かに夕弦ちゃんの言う通り、ラタトスクと言う組織が胡散臭いとは思っていましたが……でも、理由はそうではありません」

「胡散臭いとは思っていたのね……」

「耶俱矢ちゃんと夕弦ちゃんの質問に答えると、琴里ちゃんが微妙そうな顔をしました。まあ、自分が所属する組織ですし仕方が無いといえれば仕方が無いですが。」

「別に琴里ちゃんのことを疑ってた訳じゃないですよ？少なくともフラクシナスのメンバーは信頼しています」

「じゃあ、なんでよ？あんたは士道の近くで精霊が危険な目に遭ってきているのを見てきたんでしょ？それなら保護を求めるものじゃないの？」

「まあ、確かに七罪ちゃんの言う通りなんですけどね。私が士道達に精霊であることを隠していた一番の理由は士道を守るためなんです」

「俺を……守る？」

士道はキョトンとした顔をして聞き返してきました。

「そうです。時崎さんや未知の精霊、DEMから士道を守るためです。士道が他の精霊の子たちの事を思って危険なことをしていたのは知っています。その士道の気持ちを否定したり行動を邪魔したりするつもりはありません。それを決めたのが他でもなく士道なら私はそれを受け入れます。そして、私は少しでも士道の危険を減らせるように動くだけです」

「俺は……千夜にも危険なことをして欲しくはないんだが……」

「知っていますし、分かってもいます。でも、それだけは領けません」

「なんで！」

「士道を守る人がいなくなるからですよ。私は士道が傷付くのは極力見たくはないん

です。だから、もし士道に嫌われるようでも霊力は士道が安全と分かるまで封印はさせられません」

「それでも、俺は……っ!」

そこまで言うとう道はすっかり押し黙ってしまいました。今後、士道が口を挟んでくる可能性はありますが、今日はもうないでしょう。

「私達ではシドーを守れないというのか!」

「士道を守るのは私で十分。故に魂月千夜が完全体の精霊である必要性がない」

そう十香ちゃんと折紙さんが封印を促して来ますが頷くことは出来ません。

「不十分だからこうしているんです。十香ちゃん、折紙さんが襲って来た時に完全体にならず折紙さんを止められましたか?折紙さんも今のアイザックに有効となる攻撃を放てましたか?無理でしたよね?」

「うぐっ……それは……」

「……」

十香ちゃんと折紙さんはそれ以上反論できないのか、言葉を詰まらせました。

『士道、私は千夜の意見に賛成です』

「悪いけど少年。あたしも賛成だわ」

そこで、私の意見に賛成する人が現れます。鞠亜ちゃんと二亜さん。私の正体を今の

今まで士道に隠していた2人です。

「2人は千夜が〈リーパー〉だって事を知っていたのか?！」

『はい。千夜から口止めをされていましたし、私自体それが有効的だと考えていましたから』

「そもそも、あたしをDEMから助け出してくれたのはちーちゃんなんだよね。あたしは、ちーちゃんの事を〈囁告篇帙〉で調べて考えた結果だよ」

「何を調べたんですか……」

本当に権利の侵害ですよ、その天使……

「それで千夜姉をそのまましておいた方がいいと結論づけた理由を教えてくださいませんか」

「んー、ぶっちゃけちーちゃんの〈靈魂看守〉は対精霊だとほぼ最強なの。霊力での攻撃は全てそのまま跳ね返したり、吸収して自分の力に出来たり……アイザック・ウエストコットの〈神蝕篇帙〉対抗手段としてかなり有用なの」

『さらに、死神のような物を生成して戦わせる事でバンダースナッチやウイザード達の量にも対抗出来ますし、エレン・メイザースのような質の高い相手にも戦えます』

「確かに、かなり有用ね……」

琴里ちゃんは今までの私の戦いを思い出しつつ、そう呟きました。そして、少し悩む

ような仕草をした後に決心したような顔になりました。

「……わかったわ。千夜姉の封印は一番最後にしましょう」

「琴里!？」

「諦めなさい、士道。千夜姉は戦いが終わったあとでも大丈夫よ。絶対に逃げたりしないから」

「なんでそんなことが分かるんだ？」

「そりゃあ、千夜姉はあんたの事「わあー! 琴里ちゃんストップストップ!」おっと、ごめんなさいね」

「ん? 俺がどうかしたのか？」

「なんでもないです! いいですね!」

「あつ、はい」

士道を黙らせることに成功しました。まったく、琴里ちゃんはなんてことカミングアウトしようとしてるんですか。ニヤニヤしてますし絶対故意でしょ! というかなんぞ知っているんですか!

『私の本体の解析結果です』

「どうも説明ありがとう!」

私は鞠亜ちゃんの答えにやけくそ気味に答えたのでした。

死神は星獣に記憶を閉じられた

私の処遇が決まった後に六喰ちゃんが現れて土道とのデートをしたそうで、今日は土道と六喰ちゃんがデートをしました。

結果は上々。まずまずと言ったところです。

土道への六喰ちゃんの好感度は高い方でデートも六喰ちゃんが突拍子のない事をした事以外は特に問題なく進みました。突拍子のない事とは六喰ちゃんが外を霊装でうろついたり、人前で天使を使ったり、土道の前でなんの恥じらいもなく裸になったりしたことです。

六喰ちゃんについて今回分かったことは、髪を切る事をかなり嫌がるということぐらいでした。

そう言えば、鞠亜ちゃんが出している選択肢は本命と対抗と大穴の3つで構成されているらしいです。毎回地雷を仕込んでいるなどと思ったら、大穴でしたか。・・・大穴すぎませんか？

六喰ちゃんの霊力は今回は封印することが出来ませんでした。突然、六喰ちゃんが帰ってしまったのです。また会おうと言っていたあたり、土道がやらかしたという訳で

はなさそうです。

ただ、心配なことがあります。六喰ちゃんが帰る前の会話は六喰ちゃんと付き合う上で他の精霊に会うなどというものでした。まあ、土道はそれを拒否しましたけど。怖いのはその後、六喰ちゃんは土道に任せておけと言ったことです。言いたい何をしでかすのでー！ーっ!?!

「むん。気づかれてしまったか。他の者達は簡単にいったのじゃがな」

「六喰ちゃん？」

急な霊力を感知し飛び退くと、そこには六喰ちゃんが〈封解主^{ミカエル}〉によって開かれた扉から出て来ました。

「何しに来たんですか？お茶しに来た……って、雰囲気ではありませんね」

「うむ。主様は優しいからな。うぬらを放っておけないそうなのじゃ。だから、うぬらにはむくと主様の為に主様の記憶を閉じさせてもらうだけじゃ」

「他の者達は簡単だったって言いましたけど……まさか!」

「むん。うぬの考えている通り、うぬで最後じゃ」

という事は、他の精霊の子達は少なくとも記憶を閉じられてしまっているわけですね。もしかしたら、精霊と関係がない人でも土道と関係がある人は全員記憶を閉じられている可能性があります……

「むふん。それではうぬの記憶も閉じさせてもらおうぞ」

「させると思いますか? 〈靈魂看守〉!」

天使を顕現させ家の外へ飛び出ます。六喰ちゃんも〈封解主〉を使い外への扉を作り出し、私に続いて出て来ました。

「閉」

「さません、〔魂を喰らう者〕」

六喰ちゃんが記憶を閉じようと集めた靈力を奪いその行動を防ぎます。六喰ちゃんは少し煩わしそうな顔をしました。

「むう……まず先に動きを止めねばならんようじゃな。〔開〕〔閉〕」

「えっ?……逃げた?」

六喰ちゃんは空間に扉を開けその中に消えていきました。そして、靈力反応が感じられなくなっていました。

本当に逃げたのでしょうか? いや、私の土道の記憶を閉じなければ六喰ちゃんのは達成出来ないはず。なら、その理由は……

「わざと逃げたように見せかけた……? まさか!」

気がつくくと漏れ出す靈力を閉じた六喰ちゃんが鍵型の天使、〈封解主〉を後ろで構えてました。

「このっ！」
【閉^{セクツア}】
「月喰^ハ狼^{テイ}】！！」

六喰ちゃんが鍵を閉めるように捻った瞬間、私は意識を失ったのでした。

少女はおかしな状況にため息をついた

はあ……六喰ちゃんに1杯食わされてしまいましたね。私はいつも通り目を覚まし昨日の夜のことを思い出します。

私の記憶が閉じられていないのは解除したからです。確かに1度【閉】セクワアで記憶を閉じられましたが、直前に呼び出した【月喰狼】ハテでかかっていた鍵を靈力ごと吸収して消したのです。

さて、これからどうしましょうか。みんなの記憶のロックを解いてもいいのですが、六喰ちゃんが気がついたらまた鍵をかけられてしまいそうですし、そうなるとイタチごっこになってしまいます。みんなの記憶に鍵をかけるのに時間を使わせるより、少しでも土道とのデートをして土道にどうか説得してもらった方がいいでしょう。

うーん……今日は普通に学校ありますけど、こんな状況ですし休みましょうか。あとは、土道にメールをしておきましょうか。直接会うと六喰ちゃんに記憶が閉じられていない事がバレてしまいますし。

私は土道に現状の予測と、自分と接触しないことをメールに書き込み発信したのでした。

次の日の休日。

「本当になんでこうなったのでしょうか……」

私は目の前で繰り広げられている状況に頭を悩ませていました。

「あーん、だ。口を開けろ。開けなければ代わりに頬に風穴を空けるぞ」

「そんな奇っ怪な女の言うことなど、耳を貸すつてないぞ、主様。言動から見てもまともな頭を持っていないことは明白じゃ。それよりほら、むくの方を向くのじゃ」

「なんだと、貴様」

「なんじゃ」

場所はメイド喫茶。その一角にいるのは私と1人の少年と3人の少女。土道に六喰ちゃん、十香ちゃんに折紙さんです。

ただし、折紙さんはこの世界のキレイな折紙さんで、十香ちゃんは反転している状態なのです。折紙さんは記憶を閉じられた為、普段表に出ている元の世界の折紙さんとチャンネルを切り替え、土道の記憶を閉じられていないこの世界の折紙さんが出てきているそうです。

十香ちゃんの方は折紙さんの憶測ですが、記憶を閉じられたことで、士道を失ったという感情が無意識化にたまった結果、反転してしまったのでは無いかと考えられています。

士道を奪われるのを嫌がる六喰ちゃんと、士道に前回の顕現の際の雪辱を晴らしたい反転十香ちゃんが喧嘩を……いえ、精霊同士の戦いなのでそんな可愛いものではありませんでしたが。とにかく、戦いを始めてしまったのですが、裏の折紙さんの説得により、現在のような状況になっている訳です。

六喰ちゃんには士道は争い事が嫌いだと教えて、反転十香ちゃんには士道に力で勝つたとして、力で勝った訳では無い士道にそれで勝つたと言えるのか？とさとして、力ではなく士道の心を手に入れた方が勝ちとするように仕向けました。

裏の折紙さん優秀すぎませんか？もうずっとそっちでいいんじゃないですか？

「なんじゃ。てつきり主様にあーんをしていたのかと思うたが、むくに食べさせようとしてくれていたようじゃの。むん、まさかむくの唇でも狙っておるのか？」

「その言葉、そのまま返そう。私の前で果実を無防備に晒すとは、私に献上してるのと変わらんぞ」

さて、心を手に入れるにはどうしたらいいかという質問に裏の折紙さんが……いい加減長いですね。裏紙さんでいいですか。チラシ裏の再利用みたいですけど。

裏紙さんが「あーん、をするとか・・・?」といったせいです。それによって六喰ちゃんと反転十香ちゃん、略して転香てんかちゃんが土道にアーンをしようとしているのです。ちなみに私も土道の護衛として近くにいます。この2人がいつ土道に危害を加えるか分かりませんからね。近くにいないと対処が出来ないのは明白ですし。・・・にしても、さつきからこの2人ホント仲悪いですね。

「さあ、一緒に！美味しくなあれ！萌え萌えきゅん！」

「美味しくなあれ、萌え萌えきゅん」

私はメイドさんに従って手でハートを作りながら、困惑しながらする六喰ちゃんと無表情のままする転香ちゃんを見ながらため息をついたのでした。

死神は精霊の真実を知った

メイド喫茶の後、裏紙さんに先導され、映画館にゲームセンター、ショッピングモールと様々なデパートスポットを回りました。

そして、次に来たのは天宮タワー。凜音の時にチラホラ名前が出ていた、30年前の南関東体育祭の後に建てられた総合電波塔です。内部には展望台があり、タワー周辺には様々な商業施設が立ち並んでいるため、観光地として認知されており、休日ともなればカップルや家族連れでよく賑わっている場所です。

いざ行こうとした時、何故か六喰ちゃんが強く拒否反応を示しました。転香ちゃんに煽られて展望台に上がったものの、どンドン体調が悪くなり裏紙さんに連れられて女子トイレに行ってしまいました。

私は六喰ちゃんの事は裏紙さんに任せて、土道と転香ちゃんと一緒に残ることにしました。土道はというと、落ち着かないのかチラチラと転香ちゃん見ていました。

「おい」

「な、なんだ?」

その視線に気づい為か否か、転香ちゃんが土道に話しかけました。

「先程から……いや、以前から気になっていたが、貴様らが言う十香というのは私の名か」

「ああ……そうだけど」

「私が……いや、こちらの私が自分でつけたのか？」

「いや。それは……俺が」

「……」

士道が素直に応えると、転香ちゃんは士道の足を無言で踏みつけました。十香ちゃんの名前って士道がつけたんですね。知りませんでした。

「うあたっ！な、なんだよいきなり……」

「なんとなくだ」

「ええ……お前には別の名前があるのか？」

「いや。だから不本意だがその十香という呼び名で構わん」

「そっか。じゃあ、十香」

士道が名前を呼ぶとまたもや転香ちゃんは無言で士道の足を踏みつけました。

「な、なんでだよ……」

「なんとなくだ」

「これは、酷い……傍若無人とはこのことですね。」

「……なあ、十香。お前は一体何者なんだ？反転っていうのは一体何なんだ？っていうか、そもそも精霊っていうのは……」

「反転、か。つまり、こちらの私から、私に変わる現象のことをそう呼んでるわけだな」
「ん……まあ、そう……なるな」

たしかに気になりますね。反転すると何故人格が変わるのかや反転とはそもそもそんなのか……。私が反転について知っている事は多くないですし。あれ？そもそも反転したら普通人格が変わるものなのでしょうか？私の場合は特殊だとしても、折紙さんと二亜さんの場合は人格が変わった感じはしませんでしたけど。

「……その言い方は好かぬ。元はと言えば私こそが^{セフィラ}霊結晶の化身たる精霊なのだから」

「え……。？ど、どういうことだ？」

「始原の精霊が己の力を分割し^{セフィラ}霊結晶を創り上げた時、その属性は貴様らの言う反転状態であったということだ。しかし、始原の精霊がそれを変形させ、今の状態にした。つまりは前提が逆なのだ」

「そんな、一体なんのために……？」

「こちらの世界の人間に適合しやすい形にする為であろうよ。もともと^{セフィラ}霊結晶は現世のものではない、そのままの状態では人間の体を蝕みすぎるからな」

つまり、反転した姿が本来の姿で普段の姿が人に合わせるためのセーブした姿という訳ですか。反転体の〈神蝕篇帙〉^{ベルゼバブ}を使っているアイザックは化け物ですか……まあ、人のこと言えないですけど。

「ち、ちよつと待つてくれ。理解が追いつかない。始原の精霊が人間に適合しやすいように？ どういうことだよ、それ！」

衝撃の事実^に士道は思わず、転香ちゃんの肩を掴み問い詰めるようにしてしまいました。それを不愉快に思ったのか転香ちゃんは士道の胸ぐらを掴みあげました。

「ぐ……つ、あ……つ!？」

「調子に乗るな、人間。私が言葉を発したのは、貴様に請われたからではない。ただの気まぐれだ」

「転……十香ちゃん、流石にこれは許容範囲外です。士道を離してください」

「貴様に命令される筋合いはないが？」

「腕ごと落とさなければ分かりませんか？」

数秒間の睨み合いの末、転香ちゃんは士道を離しました。本当ならばこのまま終わるはずでしたが、タイミングが悪くその一部始終を六喰ちゃんに目撃されてしまいました。

「何のつもりじゃ、主様に手をかけるとは……」

「……ふん、貴様には関係あるまい」

「なんじゃと!？」

「ま、持つてくれ、六喰!俺なら大丈夫だから」

土道が何とか静止させようとすることも六喰ちゃんの耳には届いていないようで、六喰ちゃんはそのまま転香ちゃんに詰め寄ります。

「うぬは、むくから主様を奪おうというのじゃな?むくの愛する人を、むくを愛する人を、奪いおうと言うのじゃな!」

「知ったことか。鬱陶しい。離れんか、貴様」

転香ちゃんはそういうと右手を手刀にして払います。六喰ちゃんの頬に傷が付き、そして前髪が一房切れて空気に舞いました。

「————」

六喰ちゃんは息を詰まらせ転香ちゃんから離れます。六喰ちゃんは切れてた頬を気にする素振りはなく、ただただ切られた金色の髪を見していました。

これは、不味い!

「あ————あ、あ……っ!貴……ッ、様アアアアアアアアッ!!!」

咄嗟に土道の前に飛び出て霊装を展開させます。目の前では転香ちゃんが吹き飛ばされ展望台のガラス窓を突き破り外へ飛ばされました。

ガラスが割れた事で、パニックに陥った観光客が一斉にエレベーターに殺到します。吹き飛ばされた転香ちゃんはというと、なんともないように展望台の外壁に立っていました。

「貴様」

「……………許、さぬ……………許さぬ、許さぬ、許さぬ……………つ!!むくの髪を……………切ったな。主様が、……………さまが……………褒めてくれた、むくの……………髪をっ!!」

「……………六喰!やめるんだ!十香はそんなつもりじゃ」

土道が慌てて声をかけますが聞いておらず、六喰ちゃんは霊装を身に纏い、天使を顕現させました。そして、六喰ちゃんは〈封解主〉の先端を自らの胸に向けて突き刺し力チリと回します。

「〈封解主〉……………【放】!!」

それとともに、霊装と〈封解主〉本体が姿を変えました。〈封解主〉は鍵のような杖から長大な戟へと変化します。見た目の変化に伴い霊力の量が爆発的に増え、まるでリミッターを外したようでした。

そんな六喰ちゃんを見てか、転香ちゃんも不敵に笑うと霊装を展開し天使を顕現させました。

「もはや、もはや、許さぬ。塵も残さず無と消えよ！」

「いいだろう。かかってこい。その素っ首、落としてくれる」

そして、強力な力を持つ精霊と反転した精霊が戦いを始めたのでした。

死神は鍵を解き放った

「裏紙さん！琴里ちゃんにサポートして貰えるよう連絡してください！」

「う、裏紙!?わ、わかりました」

あの戦いの中に土道を突っ込ませる事は流石に出来ません。全力の精霊同士の戦いではいくら土道でも体が持ちませんので、フラクシナスで最大限サポートしてもらわねば今回の封印はかなり難しいです。なんで自分で電話しないかというところ、昨日から土道達を見張っていた為、充電切れしてるんです。

『折紙！あなた一体何をしていたの!?十香は……それにあの精霊は何者?!』

「すいません、後で説明します！時間がありません！手を貸してください！このままじゃ歯が立ちません！フラクシナスのテリトリーで2人の動きを少しでも抑えられませんか!?!」

『それは……可能だとは思いますが、あのレベルの精霊を完全に抑え込むことは不可能よ。せいぜい体が重い程度に感じるぐらいだが、それだけじゃ——』

「そこからは、俺に任せてくれ……!」

『な……っ!?何言っているの。そもそもあなた……』

「詳しく説明している時間はないけど、俺はあいつらを止められる方法を1つだけ持っているんだ。だから頼む。俺を信じて力を貸してくれないか!」

『……わかったわ。こちらでやれる事はやるつもりよ。あなたの健闘を祈るわ』
ほっ……よかった。もし、納得して貰えなかったら、1度フラクシナスまで解除しに行かないと行けませんでしたし、納得してもらえてよかったです。

さてさて、裏紙さんも準備万端のようですね。

「琴里ちゃんに変わって、コホン……ooooooooooさあ、私たちの戦争デイトを始めましょう」

さて、封印するためにまずはあの2人の戦いを辞めさせる、もしくは分断させなければなりません。土道は封印出来る可能性が高い六喰ちゃんを任すのがいいでしょう。その間、転香ちゃんを足止めしなければならぬのですが私と裏紙さんと2人がかりなら十分やれます。

私は霊装とCRユニットへブリュンヒルデを同時に纏った裏紙さんと共に転香ちゃ

んに向かつて行きます。

「ふんっ！」

転香ちゃん（サヘマー）が「暴虐公」を振るうたび1つの災害に匹敵する力が私たちを襲ってきます。十香ちゃんと戦った事は2度程ありますが、ここまでの出力はなかったと思います。やはり、転香ちゃんが先程言っていたように精霊の本来の姿として100%の力を出せているおかげなのでしょうか？

ですが、目には目を歯には歯を反転には反転です。

「【反転】」

私は石突きを自らに叩きつけ、強制的に反転をします。流石に力では勝てませんが、速さや手数を合わせれば同格にはなれているはずですよ。

「〈生死叛徒〉！【変骨】（浮遊武器）！！」

骨で出来た鏃のような武器が生成され次々と転香ちゃんに向かつて射出されます。転香ちゃん（クラフトボーン）は身を翻して躲しますが、これの真骨頂はここからです。

「追尾持ちか……小賢しいっ！！」

転香ちゃんに躲された鏃は向きを変えて再び転香ちゃんに襲い掛かります。ですが、転香ちゃん（フロートウェポン）は難なく、一つ一つ確実に壊してしまします。

「裏紙さん！」

「はい！はあああつ！」

「ちいー」

ダメージを与えることよりも攪乱目的で放った鍬はその役目を十分に発揮し、転香ちゃんの背後をとった裏紙さんがブレードを振り下ろしました。

大剣で防ぐのも回避するのも出来ない確なタイミングで飛び込んだ裏紙さんでしたが、転香ちゃんは左手でブレードの側面を殴り軌道を変えて難を逃れます。

十香ちゃんの〈塵殺公〉^{サンダルフォン}もですが、〈暴虐公〉^{ナヘマー}って特殊性がないですがとにかく力と防御力が高いですね。

そんな事を考察していると、急に地震が起きました。日本なら地震ぐらいならよくあることですが、地震は収まる様子はありません。さらに、地球自体に霊力による干渉を感じます。さらに、精霊組が6箇所で霊力を発しているのを感じ取りました。

「裏紙さん、後は頼みます！死神数体置いておくので！指示すれば裏紙さんの言うこと聞きますので！」

「えっ!?嘘ですよね!?!ちよつとお!!」

悲壮な声を上げる裏紙さんを置いて、私は一番近い二亜さんがいる場所に向かい現状の確認に移ります。

「二亜さん！琴里ちゃんに連絡つきますか！」

「ちーちゃん!? OK、ちよつと待つてね」

しばらくすると、テリトリリーによる回線が設立できたようである。琴里ちゃんが通信に出ます。

「琴里ちゃん! 現状は!」

『千夜姉!?! 今までなにをしてたのよ!』

「それは後でお願いします。六喰ちゃんが地球の自転を閉じたんですか?」

『そ、そうよ。今は、四糸乃、耶俱矢、夕弦、美九、七罪、二亜に世界樹の葉を起点とし

て靈力を送り込んで、侵食を防いでいる状況よ』

「やっぱりですか・・・」

地球の自転が止まったら大変なことになる事だけは予想がつきます。何とかして止めませんと。

「琴里ちゃん、世界樹の葉を一機回せますか? 鍵を破壊します」

『そんなこと出来るの!?!』

「何とかします」

『わかったわ。千夜姉、頼んだわよ』

通信が切れてしばらくすると一機の世界樹の葉が飛翔してきます。自転を止めようとしている(封解主)の靈力に干渉しやすいように、世界樹の葉を地面に突き立て手を

添えます。

「**魂の接続**！」

自分の霊力と**【閉】**の霊力を繋ぎ無理やり吸収して行きます。

【放】で力を解放した

せいか、単純に地球の自転という巨大な物を止めようとしているせいか、六喰ちゃんの**〈封解主〉**の力は前よりも強力で、気を抜くと弾かれそうになりました。

「開つけえええええええ!!」

私は全力を尽くして自転を妨げた霊力を全て取り込み、ロックを解除しました。それと共に地震は収まりました。

その後、土道の活躍により無事に六喰ちゃん、転香ちゃんを封印することが出来たのでした。

狂三リフレイン

少女は悪夢の企みを考えた

六喰ちゃんの封印を終えた数日後。時崎さんが私たちの前に現れました。それは、いつもの裏路地や戦地ではなく、雷禪高校の2年4組……つまり、私たちのクラスの教室でした。

「狂三、お前は一体」

「うふふ、怖いお顔をしないでくださいまし。……わたくしは、士道さんとの学生生活を謳歌しに来ただけですわ」

困惑しつつも、時崎さんの企みを探ろうと士道が質問を投げかけますが、時崎さんの真意が全く分かりません。いったい何を企んでいるのでしょうか？

そんな疑問を持ちつつも、1日は淡々と過ぎていき、ついには放課後になってしまいました。その間、時崎さんには別段変わった動きは無く、ただ学生生活を送っているだけでした。

「……じゃあ、そろそろ行ってくるよ、みんな」

士道は、時崎さんと改めて話をするため、彼女の指定してきた学校の屋上へと向かお

うとします。

「むう……大丈夫かシドー、やはり私たちもついて行った方がいいのでは……」

「十香の言う通り。危険すぎる」

「闇を纏いし漆黒の精霊を相手取るには、我らの力が不可欠だろう」

「同意。夕弦たちもお供します」

「私も時崎さんの企みを知るまでは一緒に居るべきだと思います」

「私たちが時崎さんを警戒してついて行くことを提案しますが、士道は苦笑いしつつも決意を決めたように言います。

「ありがとな、みんな。でも、大丈夫だ。確かに狂三は危険な精霊かもしれないけど……自分の言葉を翻したりはしない。……それに、これから狂三の霊力を封印をしようって男が、一对一で会話も出来ないようじゃ、先が思いやられるつてもんだろ？」

「シドー……うむ、分かったぞ。武運を祈る！」

「ああ」

士道は力強く頷くと、私たちを残して教室を出ていき屋上へ向かっていきました。

士道が帰って来るまで、何をしてようか考えていると、妙な霊力を感じます。それは、二亜さんの霊力に似ていますが、おかしな点がありました。まるで、時崎さんの分身の

ように数が多いのです。

不審に思い、外に出ると上空で真奈ちゃんとエレンさんが戦っており、エレンさんの後ろには同じ顔をした二亜さんの霊力を持った少女達がいました。

「なんなんですか……とりあえず、加勢しに行きますか。〈サリエル霊魂看守〉【フエイト・オブ・ライフ生命の満欠】
(望月^{パリス})」

とりあえず、数に対応出来るように頭数を増やして突撃します。私が、その場に着くと時崎さんが霊装を纏い既に戦っていました。

過剰戦力かと思いつつも、私はその戦いへ身を投じました。

少女は悪夢と手を結んだ

真奈ちゃんと時崎さんとの共闘を終え、五河家へ戻り琴里ちゃんから土道と時崎さんの話の内容を聞きました。

内容を一言で表すと、デレさせた方の意向に従うというものでした。つまり、土道と時崎さんがお互いにお互いをデレさせようとし、土道が先にデレてしまえば時崎さんの勝ちで靈力を全て奪われ、時崎さんが先にデレれば土道の勝ちで靈力を封印を出来るという勝負です。

相変わらずの事ながら土道は無茶をしますね。全靈力を奪われる＝死つてちやんと分かっているのでしょうか？

それにしても、時崎さんはどうやってエレンさんの襲撃を知ったのでしょうか？あの場にいた真奈ちゃんも昨日、時崎さんがやってきて教えてくれたって言ってましたし、確実に何かあるはずですが……

DEMに忍び込もうとしても、今はアイザックの元に全知の魔王〈ベルゼバブ神蝕篇帙〉がありますし、いくら時崎さんでも難しいもののはずです。

「うーん……よしー」

「だからって、本人に聞きに来るのはどうですか?」

「考えても仕方が無いと思ひまして」

「で、わたくしが教える?」

確かに、そうなんですけど……でも、土道の事なので教えてもらわないと困りますし、嫌な仮説も立ってしまってますから。

「時崎さん……多分ですけど、土道の身になにか起きたんじゃないんですか?」

「……何故、そのようなお考えに?」

「だって、時崎さんがDEMの動きを完全に掴んでいるとしたら、アイザックの天使の使い方がよっぽど下手か、ザフキエルで襲撃後に時間を襲撃前に戻したのしか考えられませ
ん」

琴里ちゃんと言うには、エレンさんの襲撃は本当に直前まで完全なステルスが働いていて、気がついてからでは対応が出来ない程だったらしく、真奈ちゃんが足止めしていなければ土道がかなり危険だったそうなのです。

アイザックが時崎さんという脅威を見過ごすとは思えませんし、襲撃されても撃退出来れば時間を戻す必要性はないはずです。よっぽどの事が起きなければ……例え
ば—————

「時崎さん、未来で士道が死んだんですか？そして、あなたはその未来を変える為に、ザフキエル〈刻々帝〉を使い自分の記憶を過去に飛ばしたのですよね？」

「はあ……その通りですわ。これまでで9回士道さんはDEMの手で殺されていますわ」

うつ……予想していたとはいえ実際に聞かされると、こう心にくるものがありますね。すでに9回も士道が死にやり直しをしてるなんて……その時間軸の私は何をやってるのでしよう。

「そういうことなら、私にも協力させていただけます。士道の護衛の精度を上げ、もし襲撃を許してしまったのなら事前に教えてください。まあ、これからは許す気はありませんが」

「嫌ですわ」

「は？」

えっ？……この人、何を言ってるんですか？協力して士道守ろうと言っているのに嫌？

「なにをつ!!？」

「知つての通り、わたくしと士道さんは勝負の真つ最中ですわ」

「それとこれとなんの関係が？」

「あなたが動けば確実に士道さんは何かあると気がついて、そしてわたくしに負い目を感じてしまいます。あの方はそういう方ですから。わたくしはこの勝負をフェアなまま戦いたいのですの」

そういう時崎さんの目は決意に満ち溢れていました。確かに、私が学校生活をほっぱり出して護衛をしていたら士道に気が付かれるでしょう。士道が気が付かなくても、琴里ちゃんや折紙さんが気がつくかもしれません。

「分かりました。つまり、士道に悟られなければいいんですよ？」

「はい?」

「**【霊体偽造】**」

〈**サリエル**の能力を発動させます。すると、霊力が人の形を形成しやがて私と瓜二つとなります。〉

「なっ、千夜さんが2人に!?!」

「分身はあなたの専売特許ではないんですよ、時崎さん」

これは、**【魂の記録書】**に自分を保存し、**【受肉】**でその魂に肉体をつけたものです。さらに、**【生命の満欠】**の**（望月）**で生み出した死神の戦闘経験を記録させているので私よりも戦闘技術は上です。しゅ、出力は私の方が上ですからね!

「これを、士道の護衛に付かせます。それならいいですね?」

「はあ．．．分かりましたわ。ご協力感謝しますわ」

「あっ！何回も時間を戻してることとは、だいぶ靈力を消費してますよね？今回は多めに渡しておきますね」

こうして、私は時崎さんと秘密裏に手を結んだのでした。

少女はチョコ作りに勤しんだ

時崎さんと手を結んだのが2日前。その間様々なことが起こりました。まず、へ二ベルコルというへ神蝕篇帙ベルセバブによって生み出された、精霊に近い存在が何度も士道を襲いに来ました。悔しい事に、私の警護だけではどうにもならなかったようで、何回も時崎さんが襲撃を伝えてくれました。

士道と時崎さんの勝負は未だ着いておらず、お互いにお弁当を食べさせあったり、通学デートをしたりとしています。そして、勝負は2月14日の放課後デートに持ち込まれる事になりました。

フラクシナスと精霊組の動きとしては、時崎さんの大人の余裕に士道が負けないように、大人組（笑）の二亜さんや美九さん、折紙さんの3人がベットに潜り込んだり、四糸乃ちゃんや琴里ちゃん、七罪ちゃんがへ贗造魔女ハフェルで変身して大人の姿になり、士道を誘惑したりしていました。結局全部空回りでしたけど……

あとは、バレンタインに向けてみんなでチョコを作ることになりました。士道はホワイトデーのお返しが大変になりそうですね。10人以上の女の子に返さないといけませんし、ホワイトデーは3倍返しですしね。……良く考えれば、なかなか酷い

制度ですね。1ヶ月で3倍。1年で36倍……闇金の方がまだマシでは？

さて、今は何故か時崎さんも一緒にバレンタインに向けてチョコ作りをしています。

「千夜さん。常温でもトロトロしていて固まらないチョコが作りたいたいですけどお……あ、でも完全な液体じゃない感じでえ、私の体に塗れるぐらいの粘度が欲しいんですけどお」

「食べれるローションにパウダーチョコでも混ぜれば……って、何しようとしてるんですか!? 勿体ないからやらないでくださいね! そんなの土道は受け取ってくれませんかよ」

「ちーちゃん。1粒食べたら少年の少年が元氣1000倍になっちゃうようなやつが作りたいんだけど、何入れればいいかな? やっぱリスッポン?」

「折紙さんじゃあるまいし、私を知るわけじゃないじゃないですか。チョコレート自体が媚薬みたいなものなのでそれで我慢してください」

「折紙さん? そのシリコンは何に使うんですか?」

「型取り」

「……何の?」

「私」

「さすがに土道でも引きますよ! あと、絶対お腹壊します、量を考えてください!」

「確かに、ならばクオリティを保ったままのダウンサイジングは手作業では困難。至急3Dプリンターを用意しなければ」

「……もういいです」

「むぐむぐ……」

「十香ちゃん、そんなに食べたなら土道の分がなくなりますよ!」

「はっ!いつの間に!?!お、おのれ狂三……なんと恐ろしい攻撃を……むぐむぐ」

「いや、関係ないですよ!」

「うふふ、どうやら効いてきたようですわね」

「時崎さん!」

「チョコレート……どうやって溶かすのでしょうか?」

「むん……焼けばいいの?」

「要は溶ければいいんですよ?簡単よ」

「琴里ちゃん!チョコをお湯に直接入れないで!」

「これ、私が作る暇あるのでしょうか……?」

狂三ラグナロク

少女は悪夢の過去を知った

2月14日、バレンタインデーであり放課後に士道が時崎さんとデートをする日。なんとか完成させたチョコレートチョコレートを士道に渡し、時崎さんとのデートとを監視しました。途中、へニベルコルヘニベルコルの襲撃や時崎さんによるフラクシナスの監視妨害などがありました。が、士道は無事回収し一息付く間もなくこれからの事を話し合います。

士道はフラクシナスに回収されてから直ぐに、精霊組に招集をかけるように琴里ちゃんに頼み、集まったメンバーにこれまでの事を話し始めました。

時崎さんが倒れたことや、時崎さんが士道が何回も死んでいる事を伝えたことも驚きましたが、私が一番驚いたのは時崎さんの過去についてでした。どうやら、士道は時崎さんのザフキエル〈刻々帝〉で時崎さんの過去を追体験したようです。

時崎さんは正義の味方を自称するたかみやみお崇宮藩たかみやみおと言う人物から力を受け取り精霊となったこと。

崇宮藩に騙され、反転した精霊になってしまっていた友達を自分の手で殺してしまつたこと。

精霊とは、崇宮滯によつて霊結晶セフィラを与えられた者であること。

そして————

————時崎さんの真の目的は、30年前に現れたまだ誰にも霊結晶セフィラを与えていない崇宮滯を殺し、全てを無かつたことにすること。

それぞれが、時崎さんの行動や思惑に困惑しながらも土道の話を聞きました。時崎さんの過去に思うこともありますが、それよりも気になったのは「崇宮滯」という存在です。

”崇宮”は真奈ちゃんの苗字と同じ、つまり土道の前の苗字と同じなのです。更に、”滯”は前に土道が霊力を暴走させた時に、意識が朦朧としていた状態で口走つた名前なのです。何らかしらの関わりがあると考えて、六喰ちゃんの〈封解主ミカエル〉を利用し思い出そうとしましたが収穫は無しでした。関わりがある事は分かっているのですが、それ以上は分かりませんでした。土道が記憶の中で何かを見たのは覚えているのに、何を見たかを覚えていられなかつたのです。

さて、時崎さんの過去を知つて1つ疑問が出てきました。霊結晶セフィラを崇宮滯に与えられた人間の事であると結論づけられました。

なら、私は？

私は靈結晶セファイラを受け取っていません。こう考えると私はどうして精靈になったのでしょうか？凜音のように靈力の集合体でもないし、万由里ちゃん見たいなシステムの産物でもない。鞠亜ちゃんや鞠奈さんのような人工精靈でもない。体もこんな状態でも動きますし、本当に私って何なんでしょう？

結局、考えても考えてもその答えが出ることはありませんでした。

少女は最終決戦に備え始めた

最終決戦の日が決まりました。4日後の2月20日にDEMがその総力をもつて土道を殺しに来るそうです。時崎さんの分身体が本体の決断を破って伝えてくれました。それにより、フラクシナスでは緊急会議が開かれました。

会議では、逃避・交渉・対立のどの対応をするかという既に答えが出ているような事から、大量に襲って来るであろうバンダースナッチやニベルコルの対処方法についてでした。バンダースナッチは折紙さんが、ニベルコルは鞠亜ちゃんが対応方法を考えついたりしたいので一安心です。〈神蝕^{ベルゼバブ}篇帙〉でバレないようにするために、まだ教えて貰っていませんが、どんな方法でしょうか？

二亜さんが止めてくれていなければ敵に対処方法がバレてしまい対策をはられていたかも知れませんが、珍しく二亜さんがいい仕事をしましたね。それにしても、人の思考と未来の事象は検索出来ないなんて知りませんでした。〈囁告^{ラジエル}篇帙〉の使い手だからこそ気づけたでしょうね。

会議後は各々が最終決戦に向けて準備を始めました。

私は、1日かけて鞠奈さんのデータをフラクシナスに移行していました。今回の戦

い、フラクシナスもかなり襲われるでしょうし、機体の計算スペックを少しでもあげておいた方がいいと思いましたが。鞠亜ちゃんは私一人でも十分ですって言っていましたけど、人手は多いに越したことはありません。ついであつたので、凜音や万由里ちゃん、あとは安定化させるだけの凜緒ちゃんもフラクシナスのデータへ移しておきました。これで、一安心です。

折紙さんと真那ちゃんは最終決戦当日にDEMの要請で戦場に出てくる可能性がかなり高い、ASTに当日はDEMの要請を無視して欲しいと釘を刺しに行きました。これで、ASTが引き下がってくると、ASTの相手をしたり守ったりしなくていい分少しだけ楽になります。折紙さんと真那ちゃんに期待しましょう。

十香ちゃんや四糸乃ちゃん、七罪ちゃんに六喰ちゃんは、みんなの差し入れのおにぎりを作っていました。いい子たちですね。

そんないい子たちと比べて、八舞姉妹と美九さんと二亜さん……何やつてるんですか？このタイミングで古今東西エロくないのにエロく聞こえる言葉って……。リラックスしているのはいいと思いますが、小さい子立ちを見習ってください……。深夜。

私は、美九さんのせいで目が覚めてしまい、フラクシナス艦内を散歩していました。寝てる状態で人のベットに潜り込んでくるなんて、どうなっているのでしょうか？他の

子に危害が行かないように縛り付けておきましたが、美九さんだったら寝たまま抜け出しそうなのが怖いです。

散歩の終着点のフラクシナスの休憩エリアには既に先客がおり、紙コップを片手に星空を見上げていました。

「土道？」

「おう、千夜。どうした？眠れないのか？」

「美九さんの寝相の被害に会いました……というか、それをいうなら土道こそどうしたのですか？明後日……いや、日付は変わっていますから明日は決戦ですから早く寝て体を休めないといけないよ？戦いが近くて緊張するのは分かりますが」

「ああ……いや、それもあるんだが」

「他に心配事でも？」

「狂三のことを……な」

土道は時崎さんの過去を迫体験していたと言っていましたし、なにか思うことでもあったのでしょうか？

「狂三は……俺が絶対に救ってみせる。それが、狂三に何度も命を救われた俺の責任であり、使命だ。でも、俺の思う『救い』が、本当に狂三にとつての『救い』になるのか……正直なところ、わからないんだ」

追体験により土道は時崎さんの過去を、そしてその覚悟を間近で感じ取ってしまった故にこうした迷いが生じてしまっているのでしょうか。でも————

「はあー……土道。今更、何を言っているんですか？」

「何って……俺は真剣に」

「確かに、土道がやろうとしていることは時崎さんにとつて余計なお節介かも知れませんが、でも、土道の余計なお節介は今に始まったことではないでしょう。そして、その余計なお節介によつて何人もの娘達が救われているんですよ。なら、今まで通りに土道は余計なお節介を焼き続けなければいいんですよ」

「だけど……」

「なら、全部総取りすればいいんですよ、八舞姉妹の時のように。土道が、時崎さんのしたい事を代わりにやつてしまえばいいじゃないですか。例えば、最悪の事態だけを土道が過去に飛んで回避させるとか。とにかく、土道はそのまま余計なお節介を焼き続けなければいいですよ」

「余計なお節介って言い過ぎだろ……でも、ありがとうな。上手くいくかは分からないけどやってみせるさ。あと、狂三の後はお前だからな、千夜。お前も俺が絶対に救つてみせるからな。じゃあ、おやすみ」

そう言い、土道は吹っ切れた様子で立ち上がり、私を残して休憩エリアを出ていった

の
で
し
た。
。

死神は最終決戦に身を投じた

決戦当日。

朝から天宮市内は静かでした。空間震警報により民間人は避難を終えているからでしょう。そんな中、敵は空からやって来ました。巨大な空中艦が30機。ラタトスクが把握しているDEMの空中艦、ほぼ全てです。この時点でDEMの本気度が伝わってきます。

「DEMご一行様ご案内。全員あなたをご指名よ、土道。モテモテじゃない」

「ああ……ありがたくて涙が出るな。でも生憎、俺の好みじゃなさそうだ」

「あはは、じゃあ仕方ないわね。丁重にお帰り頂きましょう」

「琴里ちゃんはその言うのと、艦長席から立ち上がり肩がけたジャケットを翻しながら、声を上げました。」

「フラクシナス艦長、五河琴里よ。まずは、皆の協力に心より感謝を。さて、皆のモニタにももう映っているかしら？ 私たちの街に、不躰な来訪者が現れたわ。粗野で粗暴なやり方で以て、精霊の力を奪い取ろうとする最低最悪なDV男よ。ああ、嫌ね。見苦しいったらないわ。こういう女を力で支配したがる男に限って捨てられると女々しく追

いすがるのよ。散々やりたい放題しておいて、どうして嫌われないなんて思うのかしらね。理解に苦しむわ。女がみんな優しいママにでも見えてるのかしら？

さあ、礼儀を知らない乱暴者どもに教えてあげましょう。

正しい女性の扱い方を。

優雅なエスコートの仕方を。

—— 私達の戦争^{デイト}のやり方を」

『了解』

こうして、私達の最後の戦争^{デイト}が始まりました。

さて、お待ちかねニベルコルとバンダースナッチへの対応です。

まずは簡単なバンダースナッチの方からです。バンダースナッチはDEMの新型のリライザ、アシクロフト β によって稼働しているらしく、その詳細な構造がわかれば、ジャミングして行動を阻害できるそうです。そして、アシクロフト β はウィザードのアルテミシア、二亜さんを襲ってきた時にいたウィザードの脳をモデルに作られているそうです。そのため、アルテミシアさんを倒して捕まえれば、アシクロフト β へのジャミングコードを作れるようです。

次にニベルコルの対処方法です。ニベルコルは〈神蝕篇帙〉^{ベルゼバブ}によつて生み出された疑似精霊。そう、精霊なのです。精霊ならば土道の力で封印することが可能となります。好感度の問題が出てきますが、鞠亜ちゃんの見解では、ニベルコルの封印可否は大元の〈囁生篇帙〉^{ラッセル}をもつていた、二亜の好感度と連動しているそうで問題ないそうです。

実際に土道のキスによつてニベルコルは消失しました。絵面が酷いことになってましたけど。

さて、私は私の役割を果たしますか。

遠くからでも目立つ金髪を翻しながら飛んでくる一人のウィザードを視認してから覚悟を決めます。

「待つてましたよ。はるちゃん」

「殺してあげるよ。ニセモノ」

さあ、姉妹喧嘩をしましょうか。

死神は姉妹喧嘩を始めた

「はああああああああ!!」

「りやああああああ!!」

はるちゃんのプロードと私の大鎌が激突し辺りに衝撃波が吹き荒れます。相変わらず物凄い出力ですね・・・というか、出力上がってませんか？

「はるちゃん！いい加減にして下さい！」

「いい加減にするのはそっちだよ！ニセモノ！」

鏢迫り合いに押し負け声をかけるも聞いて貰えません。1番初めに再会した時よりは、いくらか話を通じているみたいですが・・・

〔サリエル霊魂看守〕〔フレイト・オブ・ライヴ魂迎えの夜〕！〔パース生命の満欠〕（望月）！

とりあえず普通の出力では勝てない事は、前回戦った時点で分かりきっているため、私も出力を上げていきます。さらに、死神軍団を生成して次々とけしかけていきます。

「こんな奴！なっ?」

前回は楽に倒せたみたいですが今回はそうは行きませんよ。私の死神は戦闘を繰り返す程強くなっていきます。あれから、既に5ヶ月以上過ぎてきますし、その間戦闘も

数多くしてきました。あの頃のままと思つたら大間違いなのです。

「ああ!!もう、鬱陶しい!!」

はるちゃんの持つブレードが肥大化し死神軍団が一瞬で蒸発します。そのまま、私に目掛けて突っ込んで来ました。

普段なら躲すことが出来た攻撃でしたが、私は予想外の出来事に気を持って行かれていた為、義手を持っていかれてしまいました。

「そんな……嘘ですよね?時崎さん?」

その予想外な出来事とは時崎さんの本体の霊力が完全に消失したのです。隣界へ行ったのかと考えましたが、その時の消え方と違い、一瞬で消えず、ゆっくりと消えていったのです。さらに、時崎さんが消える前、少し覚えのある霊力の反応が出現していません。

私のはるちゃんとの戦いをほっぽり出して、その現場へ向かおうとしますが、はるちゃんがそれを許しません。

「どこに行こうとしてるのさっ!」

はるちゃんを早く倒そうとする焦りのせい、義手を失った事での体感のズレせいか、はたまたはるちゃんの出力の上昇したせい、はるちゃんに押され気味になります。

そうしている間にも耶俱矢ちゃん、夕弦ちゃん、六喰ちゃん、四糸乃ちゃん、折紙さ

んと次々と精霊の子達の霊力が消失していくのです。

「ああああああああああああああああああ!!」
フオオオオオオオオオオ「反転」!!」

自分に石づきを叩きつけ、反転させ出力を上昇させます。〈生死叛徒〉は相手を死に追いやる可能性が高い為使いたくなかったのですが、そんな悠長なことを言つてられませぬ。

「〈生死叛徒〉!!」〔彼岸の園〕!!」

あらゆる物の生命を吸収する結界を展開し、はるちゃんに突撃をしていきます。和解をしようと試みていましたが今はそんな余裕はありません。全力で叩き潰して、全てが終わってからも和解は出来ませぬ。

流石に、ただの人間であるはるちゃんには「彼岸の園」内はかなりきつい様でかなり動きが鈍っていました。

「今は眠って貰うよ、はるちゃん!」

「くっ………そお………」

はるちゃんを地面に叩きつけ、意識を完全に失ったのを確認し「彼岸の園」を解除します。それと同時にフラクシナスから爆発音が聞こえ、琴里ちゃんと二亜さんの霊力が消失しました。

私は「月喰狼」に、はるちゃんを任せ全力で足を走らせました。

滯ゲームオーバー

死神は神と対峙した

私が士道がいる場所を目指して飛んでいると、辺りの風景がその姿を急に変化させました。乱戦によって破壊された天宮市の街並みが一瞬にして消え、白と黒で構成された幾何学的な空間に変貌したのです。さらにそこには、10のよく知る少女の死体と士道。そして、その中央には見慣れた女性が立っていました。

「……………来たか魂月千夜。君が最後だ。さあ、私の力、返してもらおうよ」

「令音……………さん?」

「……………うん、それも間違えではないけど、私にはシンにつけてもらった滯って名前があるんだ」

始原の精霊〈デウス〉、そして精霊を生み出していた存在〈ファントム〉、そして士道の夢に出てきていた謎の少女、この全ての正体は令音さんだったのです。正確に言うなら、令音さんの正体が滯という少女だったということになります。

私なら、この最悪な状況を変えられたかもしれないと、私は自責の念に押しつぶされそうになります。私は令音さんから感じた霊力を口外せずにそのままにしていました。

最初は自分の正体を隠すためでしたが、ヘリーパーンである事がバレてからも誰にも言うことはありませんでした。どこかで、土道とパスが繋がっていることに安心しきつていたのでしよう。土道に惚れているなら大丈夫と決めつけていたのでしよう。しかし、その結果がコレです。もし、私が誰かに相談していたら？もし、私が令音を怪しんでいたら？そんな、考えが押し寄せてきます。

「千夜!!」

「っ!」

土道の呼びかけにハツとし、いつの間にか迫ってきていた光の帯のようなものを避け土道の方へ駆けていきます。完全ではないにしても、精霊を10人殺した存在。そんな相手と戦いながら土道と戦うなんてことは無茶であると考え事、その場を離脱しようと考えたからです。明らかに殺意を持って伸びてくる光の帯を「フォールン反転」で弾き土道へと手を伸ばします。

「させないよ……っ!」

逃がさまいと手を伸ばし光の帯を差し向けてきた令音さんが急に驚きの表情を見せ動きを止めました。令音さんの纏う霊装に輝く10の星の1つに突然亀裂が入ったのです。

『—————おおおおおおおっ!』

そして、令音さんの霊装の1部が内部から切り裂かれるように弾け飛んだと思うと、その中から〈塵殺公〉サシダルフオンを携えた十香ちゃんが飛び出しできたのです。

思い返してみると、倒れていた死体の数は10人。1人分足りなかったのです。まさか、取り込まれていたとは思いませんでしたけど・・・

十香ちゃんは、私の隣で土道を守るように令音さんに立ちほだかります。

「シドー！千夜！無事か！」

「十香・・・!!？」

「十香ちゃん・・・」

「まだ終わってはないぞ。ーーーさあ、立つのだ、シドー！行くぞ、千夜！」

十香ちゃんの言葉に私たちは力強く頷くのでした。

死神は自身の力の根源を知った

「……やはり、君もか——十香。……ああ、そうだろうね。もしも私に立ち向かうものがあるとするとするならば、それはきつと君か千夜だと思っていたよ」

「……何？」

「私も……ですか？」

令音……いや、濡さんの言葉に私と士道が困惑します。すると、十香ちゃんがそれに応えるように言ってきました。

「詳しくは私も分からないのだが……私は皆とは違う精霊らしい」

「違う精霊？」

「……私は自分の力を10の^{セファイラ}霊結晶に分け、人間に与えて精霊を造った。……けれど、なんの因果か、その中の^{セファイラ}霊結晶の1つに自我が芽生えてしまったのさ。あたかも、私が生まれたその時のようにね」

「っ、まさか、それが……？」

「……十香ちゃんって事ですか」

まさか、十香ちゃんが本当の意味で精霊だったとは……あつ、だから十香ちゃ

んは名前が最初なかつたんですね。

「なら、私は？」

「憶測の範囲から出ない話だが……君は私が造った^{セファイラ}霊結晶を持つていない。だが、^{セファイラ}霊結晶自体はその身に宿している。それは推察するにシンが生み出した物だろう。つまり君はシンによって生み出された精霊とも言えるだろう」

「「なっ!」」

私が土道に生み出された精霊? 土道が^{セファイラ}霊結晶を生み出した? 困惑している私たちをよそに滯さんは言葉が続けます。

「シンがその^{セファイラ}霊結晶を生み出した時、シンの中には2種類の霊力が宿っていた。1つは私の天使、もう1つは琴里に宿っていた^{カマエル}灼爛殲鬼だ。土道の願いが、”条理を捻じ曲げ”て^{セファイラ}霊結晶を生み出し、”万象を殺める力”と”消滅させる力”、そして”再生させる力”を込めたんだ」

「まさか!」

私はその^{セファイラ}霊結晶に覚えがないですが、土道には心当たりがあつたようです。

「俺があげたロケットを覚えてるか?」

「ああ、今はどこにあるか分かりませんが、薄い紫色の宝石が……って、まさか!」
「その宝石なんだがな、気がついたら持っていたものだったんだ。それをはめ込んで千

夜にプレゼントしたんだ」

士道が私が引越しをする前にくれたロケットについていた宝石がセファイラ靈結晶だったなんて……だから、どこにも見当たらなかったんですか！

慌てている私を見かねてか十香ちゃんが声をかけてきました。

「千夜、いけるか？」

「十香ちゃんこそ、困惑してませんか？」

「——困惑は、ある。名を持つていなかったことに苦しんだことも、ある。だが私は今、その事実に感謝している。私は名を持つていなかったから、シドーに名をつけてもらうことができた。私は人間ではなかったから、こうしてシドーの前に立つことができた！」

「ええ、私もです！この力があつたからこそ士道に再会出来ましたし、十香ちゃん達と友達になれました。そして、なによりも今こうして士道を守ることが出来る！」

すると、今まで後ろにいた士道が立ち上がり私と十香ちゃんに肩を並べるように前に出ました。

「シドー？」

「士道？」

「まだ、何か手があるかもしれない。もう、諦めたりしない。——一緒に戦わせてくれ

！

「うむ！」

「はい！」

私たちは士道の言葉に力強く頷くのでした。

死神は神の力を見た

「……………少し予定が狂ってしまったが、まあいいだろう。結末は何も変わらない」

滯さんの声に答えるように、滯さんの背後に無機質な大樹が姿を現し、それに合わせ、異空間が膨張していききました。さらには、頭上には花のような天使が姿を現します。

「……………十香、あれは？」

「うむ——〈輪廻樂園〉と〈万象聖堂〉……………と言っていた。気をつけろ。この空

間内では、すべての法則は滯の思うままだ。あと、あの花から出る光を浴びると死ぬ。霊力を持っていないと近くにいただけで死ぬ」

十香ちゃんの簡潔な説明を受け、私と土道は汗を滲ませます。

「……………何ですかそのチート性能？」

「……………それって、滅茶苦茶ヤバくないか？」

「ああ、ヤバいぞ。——諦めてしまったか？」

「まさか」

私たちの返事を合図にするように、十香ちゃんが地面を蹴り、〈塵殺公〉サンダルフォンを勢いよく振り下ろします。それは、衝撃波となり滯さんへと迫って行きました。滯さんは、動くこ

となくそれを受け止めようと思いました。しかし——

「……………」

十香ちゃんの剣撃が触れる瞬間、滯さんは何かを感じとったのか体を反らしました。そして、その剣撃は僅かですが霊装の一部を切り裂きました。

「——おおっ！ やったぞ！ 攻撃が通ったぞ！」

「ああ……………って、全然ダメージはなさそうだが」

「何を言う！ 先ほどまで【最後の剣】ですら傷一つ付かなかったのだぞ！」

「何だって……………？」

何それ硬すぎませんか？ 【最後の剣】って、十香ちゃんの必殺技みたいなものですよね

？でも、今は普通に攻撃通るみたいですし、なにか違いが？

「……………よもや君が私の力を奪うとはね」

どうやら、滯さんの力を十香ちゃんが得ているようです。滯さんの中から脱出する際に奪ったのでしょうか？でも、滯さんの力があれば滯さんを傷つけられるという事は私にも可能という事ですな。

〔輪廻楽園〕——〔枝剣〕

滯さんがそう唱えると、何も無い場所から剣のように鋭い〔輪廻楽園〕の枝が現れ、私と十香ちゃんを狙い伸びてきました。それぞれが枝を振り払い滯さんへと肉薄します。

その間、士道は〈破軍歌姫〉^{ガブリエル}を以て、私たちに力を与え続けていました。

「――〈塵殺公〉！」^{サンダルフォン}

十香ちゃんの呼び声に応ずるように、地面から巨大な玉座が姿を表します。それを、目にした滯さんは両手を前に突き出しました。

「〈万象聖堂〉――」^{アイン・ソフ、オウル} 【蓄砲】^{ヘネツ}

攻撃が通るようになった十香ちゃんの「最後の剣」^{ハルヴァンスレグ}を受けるのは流石にまずに思ったのか行動を起こし、虚空に手の平大の球体を顕現させました。そして、その球体は一瞬で花開き十香ちゃん目掛けて光を放ちます。

私はそれを見て慌てます。いかに「最後の剣」^{ハルヴァンスレグ}が強力な攻撃と言っても、そこに至るまでに複数のプロセスが必要となります。滯さんはそこを狙ったのでしょうか。

いくらか十香ちゃんが滯さんの力を持つとはいえ、アレを浴びればタダではすみません。私は十香ちゃんのもとへ行こうとしますが、〈輪廻楽園〉^{アイン・ソフ}がその行く手を阻みました。間に合わない、そう思いました。しかし――

「――」^{レトリクシュ} 【装】

十香ちゃんは王座の破片を剣ではなく鎧のようにその身に纏わせ、光線を身を捻り避けそのまま滯さんへ向かって行きました。そして、予想外の行動に反応が遅れた滯さんを十香ちゃんは斬り裂いたのです。

「……見事だ、十香。……その気高き心に、思いに、最大限の敬意を表する。
——私も、それに応えよう。」

——
　　^ア
　　^イ
　　^ン
　　^ン

瞬間、世界が光で包まれました。そして、十香ちゃんが一瞬で消失したのでした。

死神は未来を少年に託した

「十香ちゃんの霊力……いえ、存在そのものが消えた？」

「は……？何を——」

私の眩きを聞いた、土道が訳が分からないといった感じに聞き返します。それに答えるように滯さんが答えました。

「——千夜の言ったとおりだ。もう、いないんだよ。どこかへ飛んだわけでも、死んだわけでもなく——消えて無くなったんだ」

「……何、を……」

「無の天使へ^{アイン}は、あらゆる条理を無視し、全てのものを『消滅』させる。——

もう一度言うよ。十香はもういない。この世界のどこにも。——さて、千夜。次は君の番だ」

「っ!?逃げろ!千夜!」

滯さんはゆっくりと私をその目でとらえ、手を伸ばします。土道が慌てて声を上げますが滯さんは残酷にもその天使の名を呼ぼうとします。しかし、その名が呼ばれることはありませんでした。再び、^{アイン}を呼びだそうとした滯さんの手に銃弾が撃ち込ま

れたのです。そして、それと同時に聞き覚えのある笑い声が聞こえてきました。

「——きひひ、ひひ」

黒と赤のドレスのような霊装。左右不均等に結ばれた黒髪。そして、左目に金色く輝く時計の文字盤。そう。そこに居たのは——

「狂三……!!?」

「時崎さん……!!?」

時崎狂三、その人でした。

「な……ど、どういうことだ!?お前は濡に殺されたんじや……」

いや、よく見ると時崎さんですけど時崎さん本人では無いです。この時崎さんは、分身の時崎さんなのです。

「……【^{ユッド・アレフ}一の弾】か」

「——ご名答ですわ、濡さん。わたくしはおよそ1時間前の過去から未来を託された、時崎狂三の分身体。あなたを殺すために遣わされた、最後の刺客ですわ」

時崎さんは、【^{ユッド・アレフ}一の弾】。土道を5年前に送った【^{ユッド・ペルト}一二の弾】の反対の弾。対処を未来へ送る弾を使い、過去からやって来たようです。

「狂三、おまえ、一体何を——」

「先程申しましたでしょう。濡さんを倒しに来たのですわ。——ああ、でももう一つ。

——土道さんとのキスの感触が忘れられなかったのかもしれないわね」

「なっ!？」

土道つてば、いつの間に時崎さんとキスをしたんですか!？つて、あれ？それなら、まさか……

私はまさかと思い、時崎さんを見ると目が合いました。すると、時崎さんはニツと唇の端を歪めました。

「なるほど。——時崎さん！私が突っ込んで行くので援護をお願いします！」

「分かりましたわ！」

時崎さんの横を通り過ぎ、滯さんへと大鎌を振り下ろします。私の攻撃は十香ちゃんと同じく、滯さんの力を含んでいる為、当たればそこそのダメージになる筈です。それを分かってか、滯さんは淡々と私の攻撃を躲しています。

私の攻撃は当たりませんし、時崎さんの攻撃はそもそも通じていません。でも、それでもいいのです。これは、単なる時間稼ぎにすぎません。あとは、土道が気づいて行動を起こすだけなのです。

滯さんは虚空から現れる枝や根、光の帯を放つてき、私は1つ1つ対処していきますが、手数が足りません。やはり、片手を喪っているはかなりキツイです。私が滯さんの対処におわれていると、背後から苦痛に満ちた声が聞こえました。

「……く、は……!」

「時崎さん!!——がつ!」

後ろを振り返るとそこには、地面から伸びた光の帯身体中を貫かれている時崎さんの姿がありました。そして、時崎さんに気を取られた瞬間、私の体を光の帯を貫きました。

「くっ……こんな、……もの!」

鎌を薙ぎ払い光の帯を切断していきませんが、それを上回る量の光の帯が私を襲い、貫きました。痛みで気が遠くなりそうでした。しかし——

——待ちに待っていた、その時が来ました。士道がその天使の名前を呼んだのです。

「——〈刻々帝〉——【六の弾】!」

瞬間、士道の影が蠢き、手の中へ集まり短銃を形作りました。それと同時に士道の左目が金の時計の文字盤へと姿を変えました。

それを見た滯さんは慌てて根を伸ばします。しかし、根は士道に届くことなく、その場で静止する事になりました。原因は士道の赤く染まった右目にありました。

「——〈靈魂看守〉——【邪眼】(麻痺)」

私の使えなくなっていた能力、【邪眼】。恐らくはあの無人島の時に時崎さんと同じように1部封印されてしまっていたのでしよう。

「未来は託しましたよ。士道」

そして、ザフキエル〈刻々帝〉の引き金^がが引かれ、パツアンと甲高い銃声聞いたのと同時に私の意識は途絶えました。

千夜タイムリミット

少女は起こってしまつた未来を知つた

——2月19日。

士道とフラクシナスの休憩スペースで話した後、部屋に戻ろうとすると、廊下に佇む白髪の少女がいました。

「あれ、折紙さん？こんな時間に、どうかしましたか？」

「——大事な話がある。来て」

深刻な雰囲気醸し出す彼女の後を私は素直に追いました。彼女についてきてたどり着いたのは、第2仮眠室。少し前まで、美九さんが騒ぎの元凶となっていた場所です。そこには、精霊のみんなが集められていました。

「これを」

そう折紙さんが取り出したのは通信機器のようでした。そこから聞こえてくるのは、士道と琴里ちゃん、そして鞠亜ちゃんの話し声です。そして、その内容は私達を驚かせるには十分すぎる内容でした。

今の士道が〈刻々帝〉^{ザフキエル}を使って未来から来たこと、未来で私を含めて全員が死んでし

まったこと、そして――

――令音さんが始源の精霊であること。

未来の私は酷く後悔したでしょう。令音さんと土道とのパスのような繋がりを感じ取つていながら、その事を誰にも言わず、土道に惚れているだろうから大丈夫だろうという甘い考えをしていた事を。――でも。

「話は聞かせてもらつた」

『へ……?』

――それはもう起こってしまったことで。

「そういう事ですから、精霊一同協力しますよ」

「村雨令音とのデートプランの作成の為、ブリーフィングルームの使用許可を」

――まだ、変えられること。

「そういう事なので、令音さんにバレないように行いましょう。詳しくは集まってから」
『……つ、まさか折紙の盗聴?! やつてくれたわね……』

――未来をより良くするために

『さつそく動きましょう。ブリーフィングルームに集合よ。令音は仕事だから廊下で

鉢合わせる可能性は低いと思うけど、万一の時の言い訳が効くように、念の為一人ずつ移動してちょうだい』

——土道の為に私は動きましょう。

着々と話し合いは進み大まかなデートプランは決定しました。ここで、一つ心配なのはDEM、アイザックの行動です。私たちが行動を変えることで、〈神蝕篇帙〉を持つ彼が行動を変えないかです。〈神蝕篇帙〉は未来と人の思考は読めませんが、土道がみんなに説明する上で言葉にしてる以上、検索は可能です。いくら、二亜さんの〈囁告篇帙〉で妨害していても防ぎ切れる訳ではありません。

私が出ることといえば、他で騒ぎを起こして注意を引かせるぐらいでしょうか。アイザックも一応人間であるため、処理速度には限界がありますし、〈囁告篇帙〉の妨害のおかげで一つ一つの検索時間も長くかかるので調べることが多ければそれだけで妨害にもなります。

「琴里ちゃん、どうかかな？」

「確かに千夜姉が言うことも一理あるけど……それだけじゃないよわよね？」

「うっ……」

「千夜姉が千陽姉と決着をつけたってことは知ってるから。素直に言えばいいのに」
「ごめんなさい……」

そう、ぐだぐだと理由を付けていましたが確かに私にはその気持ちがありました。限界も近そうですし、それに土道のために頑張るって意気込んだ先にコレですから……少しカッコがつかないじゃないですか。

「千夜、こっちは大丈夫だから。お前はお前のやりたい事を、やるべき事をやってくれ」
「土道……」

「千陽を救えるのは俺や他の誰かじゃなく、千夜だけなんだと思う。だから、千陽の事を頼んだ」

「はいっ！はるちゃんの仕事は私に任せてください」

そして、私の本当に最後の戦争デイトの日が始まりました。

少女は妹との和解を目指した

土道と令音さんがデートをしているであろう時間に、私はデートで行く予定である旅館から幾分離れた小島の海岸に立っていました。

私と向かい合うように立つのは、まるで鏡に映したかのようにそっくりな少女。私の妹であるはるちゃんです。はるちゃんの青色の瞳には、イラつきと少しの歓喜が読み取れました。

「夜中に急にヘナイトメアが来たと思ったら、貴女が話をしたいとか言ってるって聞いたんだけど？」

実は時崎さんに頼んで、はるちゃんに伝言を頼んだのです。内容は端的に、『ヘリーパー』が魂月千夜について話したい』です。はるちゃんには私が偽物かなにかと思っ
ているようなのでこういう言い方をした方が良いと判断しました。ちなみに伝えに行
った時崎さんは尊い犠牲になりました（合掌）。

「はい、まず一つ目の質問です。はるち……アナタは誰かに魂月千夜が死んだと教
えられたのですか？」

「相変わらず癪に障る顔と声をしてるね。まあ、いいや今日どうせ死ぬだろうし答えて

あげる。あのクソジジイに教えて貰ったんだよ」

やはり、おじいちゃんの入れ込みでしたか。

「なら、魂月千夜の死体は確認したのですか?」

「したよ……って言っても崩壊に巻き込まれたせいで、顔がぐちゃぐちゃで判別できなかつたけどね。一応DNA鑑定した結果らしいよ」

「それなら、周りが偽装しようとしたらいくらでもできることですよね?」

「そうだけど……なに? 未だに自分がヤーちゃんだつて言いたいのか?」

「そうです。はるちゃんはおじいちゃんに騙されていたんです! だから——」
「言いたいことはそれだけでいい?」
「つつ!」

次の瞬間はるちゃんから恐ろしいほどのプレッシャーが放たれます。しかも、これは……いや、そんなまさか——

「〈^バ神^ア蝕^ル断片〉」

はるちゃんが悪魔の名前を告げると、その体にまとわりつく様に電気が走りその姿を変容させます。着ていた服は、祭司のような白い服へと変化し、首にはストラと呼ばれる首掛け布が現れます。紫のストラには金色の蠅の刺繍が施されており、風神の袋のように広がって浮かび上がり、雷神の太鼓のように雷を纏っていました。手には金色の権杖を携え、そして私を見下ろすように浮かび上がりました。

やはり、勘違いではなかった。このプレッシャーは靈力によるもの。つまりこれは――

「――魔王」

はるちゃんも精靈の力を手に入れていたのです。土道から聞いた話ではそんな話は無かったはず。つまり、未来が変わりつつあると言うことです。これがいい変化に繋がるか、悪い変化に繋がるかわかりませんが、私にとっては確実に悪い変化と言えるでしょう。

「【アイヤムル
撃退】」

「〈サリエル
靈魂看守〉!!」

はるちゃんが権杖を掲げると、空中に雷で出来た無数の槍が生成され放たれます。私は慌てて天使を顕現させ回避を試みます。

「追尾持ちですか! 【魂を喰らう物】!!」

雷の槍を吸収し一息着きます。完全に二亜さんの天使〈囁告篇帙〉の反転体の〈神蝕篇帙〉に關係あるはずでしょうが、まさか雷を利用してくるなんて予測外です。

「その力、〈神蝕篇帙〉由来のものですよね? どうやって手に入れたのですか?」

「私もよく知らないけどね。なんか、〈シスター〉の研究と人工精靈のデータ、後は〈ニベルコル〉を利用して力の一端を一時的に使ってんだって。アイクが持ってけって言う

から貰ってきたけど当たりだったみたいだね」

つまり、今のはるちゃんも人工精霊に近いものということですか。DEMの研究はそんなところまで進んでいたのですか。

【追放】

私が思考を巡らせているとはるちゃんがまた雷の槍を放ってきます。

【魂を喰らう物】——っ!!」

もう一度【魂を喰らう物】で吸収をしようとした瞬間、接触と同時に爆発をしました。どうやら吸収する前に爆発するみたいです。【反転】でも弾けるか微妙ですね。

「ほらほら、【撃退】!」

【撃退】と【追放】2つが入り混じることです下手に吸収する事が出来ず回避に専念します。そして、攻撃の切れ目を見計らって、はるちゃんに向かって飛び込んでいきます。

「やあああああっ!!」

「ちっ!」

大鎌を振り下ろすとはるちゃんは権杖でそれを受け止めます。精霊になったせいかわし切れることはできそうにありません。が——

【霊体偽造】

「なっ!?!」

鏢迫り合いをしていたはるちゃんの後ろに私の分身体が現れます。まずは無理やりにも動きを止めて話を聞いてもらわないといけません。私の分身体は寸分違わずはるちゃんを切り裂きました。

——切り裂いたはずでした。

「……………えっ?」

気がつくくと分身体は私の義手を切り落としていたのです。まるで、最初からそうだったかのように切られたのがはるちゃんから私に変わっていたのです。

【エリヤ曲解】

はるちゃんの方を見ると、何が起こったか分からず混乱している私をニヤニヤしているのです。

少女は妹と心を繋げた

「一体何が……」

「分からないようだから教えてあげる。【曲解】は未来を曲げる力。私が切られる未来を、貴女が切られる未来にねじ曲げたの。まあ、本家の【未来記載】みたいななんの脈絡が無いことは起こせないけど、ちよつとした出来事の”誰が”や”どうなった”ぐらいは曲げることが出来るの」

なんですか、そのチート。つまり、多人数で攻撃をした場合に自滅させ合ったり、攻撃を靈力が尽きるまで永遠と避けることが出来るということじゃないですか。

「なに？絶望しちゃった？なら、さっさと靈結晶セフィラを置いて、そのまま死んでよね！【撃退】アイヤムル！【追放】ヤグルシユ！」

はるちゃんが絶え間なく放つ、〈神蝕断片バァル〉の雷槍を避けながら私は思考を巡らせません。【曲解】エリヤを攻略するには一撃で決着を決める必要があります。後出しの能力の為、発動させる前に意識を狩り取ればいいのです。でも、問題があり私にはそこまで高火力な技は殆どありません。基本的に物量と弱点突きですし、出せる高火力は〓死と極端な物しかないのです。しかし、方法が無いわけではありません。

はるちゃんの心の中はうす暗くベトベトした黒いヘドロのようなものが床を覆っていました。その中心で金髪の小学生ぐらいの女の子が泣いていました。はるちゃんです。

「はるちゃん?」

「お姉ちゃん誰?」

小さなはるちゃんは目をうるうるさせながら私の方を見ながら首をコテンつと傾けました。

「そうですね・・・通りすがりの死神のお姉ちゃんです」

「死神のお姉ちゃん?」

いつかの凜緒ちゃんの時の名前を使います。私はそつと小さなはるちゃんの隣に断りを入れてから座りました。

「それで?どうして泣いてるのですか?」

「私ね?お姉ちゃんがいるの。お姉ちゃんはわたしが居ないとダメダメだからいつも引つ張つてあげてたの。でもね、そのせいでお姉ちゃんが死んじゃったの・・・わたしを外に出ようって、みんなのところに行こうって、お姉ちゃんを連れ出したから。お姉ちゃんはどうって言ったのにわたしが・・・うう——」

そこにはいつも明るくてどんな時でも前向きな私の憧れで特別だったはるちゃんは

居らず、ただ一人の普通の少女がいるだけでした。

「そうですか……はるちゃんは、そんな風に思っていたんですね。でもね、はるちゃんのお姉ちゃんはそうだったのが、はるちゃんのせいとは思っていませんよ?」

「……え?」

「むしろ、いつも引つ張つてくれてありがとう。私もはるちゃんみたいになりたいなつて思っていたんです」

「でも、やーちゃんは私のせいで……」

「だから、今回は君のお姉ちゃんを連れて行くのは止めましょう。忘れましたか? 私は死神のお姉ちゃんですよ? 死神は魂を運ぶ存在です。今回は、はるちゃんのお姉ちゃんも生きていますよ。だから、安心してください」

「本当に? やーちゃんは、怒つてないの? 死んでないの?」

「はい。だから、はるちゃんはいつても通りの笑顔で迎えてくれればいいんです。はるちゃんが悲しそうだとお姉ちゃんも悲しいです」

「うん!」

はるちゃんがいつものような笑顔を取り戻すと、次第に周囲が明るくなり、ヘドロのようなものが段々と消えていきました。そして、私の意識は現実へと戻されます。現実に戻ってきて始めに目に入ったのは、はるちゃんの顔でした。その顔は、先程までの負

の感情溢れる顔ではなく、安堵と歓喜。そして、少しの怒りが混じった顔をしていました。その瞳からは温かい涙が流れ落ち、口をわなわなと震えさせていました。

「……遅いよ」

「はい」

「どれだけ待ったと思ってるの?」

「ごめんなさい」

「本当に……本当に良かった。生きててくれて良かった」

はるちゃんは、権杖を投げ捨て私に抱きついてきます。私はしっかりと受け止め、子供をあやすように優しく背中を叩いてあげます。

「ほら、そんなに泣かないでください。笑顔ですよ、笑顔」

「うっさいな……やーちゃんだつて泣いてるじゃん」

はるちゃんに指摘されて、私の頬にも涙か滴っていることに気がつきません。止めようと思っても止まらず、次から次へと流れ落ちていきます。

「おかえり、やーちゃん」

「ただいま、はるちゃん」

こうして、私達の5年もの間止まってしまっていた時間は、再び動き始めたのでした。

少女は祖父と対立した

「つて！やーちゃん大丈夫!? 思いつきり心臓ぶち抜いちやっただけ。早く治療しないと!!」

「ああ、それは問題ありません」

「本当に? ならいいけど・・・」

さて、はるちゃんとの戦い^{ケンカ}で気が回ってませんでした。DEMが大々的に動き出していたみたいです。はるちゃんが〈神蝕^バ断片^ア〉という札を切ってきた時点で未来が変わっていることは容易に予想は出来ていましたが残念です。この感じだと令音さんの封印も失敗しているみたいです。早く土道の手助けに行きましょう。

「はるちゃん。土道を助ける為に力を貸してくれませんか?」

「いいよ、やーちゃん! 私に任せておいて!」

『いや、ダメでしょ? おとーさま裏切るなんて』

そんな声がどこからとも無く響きました。それと同時にヒラヒラと無数の本のページが空から落ちてきます。そして、そのページ一枚一枚からは霊力が放たれていました。

「ばあ!!」

「あははは、お父様を裏切るなんて馬鹿だよね」

「せっかく力を貰ったのに、それを手放すことになるなんて」

本のページの一枚が変化し、修道服を纏った女の子になります。そして、次から次へと本のページは女の子に変わり、あっという間に私達を包囲しました。奇妙なことに全員が同じ顔をしていおり、いたずらっ子のような笑みを浮かべながら話しかけてきます。彼女達の名前はニベルコル——〈神蝕篇帙〉の能力によって生み出された疑似精霊です。

「じゃあ、返してもらおうよ」

「——っ!?!あああああ!?!」

「はるちゃん!?!」

ニベルコルの一人が手をかざすと、突然はるちゃんが苦しみ始めました。霊力を見るとはるちゃんの中にあつた〈神蝕篇帙〉^{ベルゼバブ}の霊力が外に出よと動いているようです。

「あああああああああああ!!」

私がかどうにか解決に動こうとしたのも束の間、はるちゃんの体から大量の古びた紙が溢れだしました。それは、つい先程ニベルコルへと姿を変えた本のページと全く同じものでした。そして、本のページはニベルコルに変化しその数を増やしていききました。

「はあ……はあ……ちっ！」

「はるちゃん、大丈夫？」

「ちよつとダルいだけだから問題ないよ」

「ふむ、見るに耐えんな」

辛そうなのはるちゃんの介抱しようとする、聞き覚えのある声が聞こえました。それから目を向けると、老人と女性がこちらに向かつて歩いてきました。

「おじいちゃん……」

「クソジジイ！よくも、やーちゃんが死んでるって騙したな！」

「相変わらず喧しいの。おっと、今はお前に構っている暇はないんだったな。千夜、この戦いが終わればアイザック・ウエストコットに逆らえるものはいなくなる。そうすれば、彼らに協力していたワシらも安泰と言うわけじゃ……千夜、今からでもこちら側に来ないか？」

「クソジジイの元になんて行かせるわけないでしょ！認証、魂月千陽！へランスロット展開」

はるちゃんは、CR—ユニットを起動させおじいちゃんに突っ込んで行きます。しかし、それはニベルコル達に邪魔をされています。

「くっ！邪魔！」

「私達と遊びましょう」

「お父様を裏切ったんだから」

「それ相応の覚悟をしてもらうよ」

はるちゃんはニベルコルに段々と進路を変えられてしまい、だいぶ離れた所へ行ってしまうっています。

「邪魔が減ったな。中居、お前も千陽の相手をしてきなさい」

「かしこまりました。認証、——〈カグツチ〉起動」

中居さんはCR—ユニットを纏うと、そのままはるちゃんの方へ飛んで行ってしまいました。

「さて、もう一度提案するぞ。千夜、ワシと一緒に来い。なんなら千陽も連れてきてもいい。代表には無理だがお前の秘書ぐらいにはなるじやろう」

おじいちゃんが私に向けて手を差し伸べてきます。温かったおじいちゃんの手。その思い出が全て嘘で出来ていたようで無性に悲しく感じます。そして、私はその手を弾きました。

「これが、私の答えです。最後に一つだけ……クソ喰らえです！このクソジジイ!!」
「うむ、ならば無理やりにも連れていくまで。まずは言葉の矯正からじゃな。」

——認証、魂月国親たまつきくにちか〈エイザナミ〉展開」

おじいちゃんの体はC R—ユニットに包まれ、さらに顕現装置リアライザの効果でか若返り、20歳ぐらいの青年へと変化します。

「躰の時間だ」

こうして、私はおじいちゃんとの戦いをはじめました。

少女は祖父を打ち倒した

「ヤオヨロズ、展開」

おじいちゃんがそう呟くと、CR―ユニットヘイザナミの背中から無数の小型無人機が浮かび上がり、そのまま私に向かってレーザーを放ちます。

「^ハ月^{テイ}喰^{テイ}狼^{テイ}」はるちゃんをよろしく！」

とりあえず、^ハ月^{テイ}喰^{テイ}狼^{テイ}を召喚しはるちゃんの援護に向かわせます。流石にあの数を相手にするのはキツイでしょうから、ニベルコル対策として送り込みました。中居さんに聞かしては、はるちゃん自身に頑張ってもらえないですけど。

さて、こっちはこっちでどうしようか・・・私の天使は精霊以外にはめっぽう弱くなります。とりあえず、飛んでる無人機を落としたいのですが、なにぶん数が多いです。それにこの無人機、バンダースナッチに比べすばしっこく回避性に優れています。ただでさえ小さくて攻撃が当てにくいため、一機落とすのに時間が凄くかかります。死神の生成も考えましたが、撃ち落とされ霊力の無駄になる未来しか見えないのでやめました。となると・・・

「^フォール^ン」
「^ハ反^ン転^ン」

石突を身体に叩き込み霊力を反転させます。私の霊装は、黒い軍服とコートから骨のような色をした軽装備へ変化します。

〔サリエル生死叛徒〕！〔クラフトボーン変骨〕!!〕

私の声と共に生成された、背骨のような蛇腹剣は一振りすると分解し、無人機を追尾しながら少しずつですが、破壊していきます。

「なるほど、ならこれはどう対応する？ 認証、魂月国親。〈エイザナミ〉変更、〈エイザナギ〉展開」

少しづつですが無人機に対応しつつある私への対策か、おじいちゃんはC R—ユニットを入れ替えました。そして、また無人機を展開します。今度は先程のように小型が無数ではなく、バンダースナッチ程の機体が3機だけでした。

「行け」

おじいちゃんが指示すると、まず刀のようなブレードを持った機体が飛び出してきました。刀と打ち合うように武器を振り下ろすしますが、無人機の武器の軌道が一気に変わりました。慌てて、武器を生み出し攻撃を防ぎますが、防戦一方となり反撃ができません。

「どうだ？ その機体には、エレン・メイザースやアダプタス2等の強者のデータをインプットしてある。まあ、データが膨大すぎてその機体には近接武器のデータしか入って

ないがな」

エレンさんの戦闘データって、そんなの強いに決まっていますよ!!

そして、何とかギリギリを保っていた私に新たな敵の攻撃が始まります。3機の内の一機が円盤のような羽を広げ、その先々から光線を放ってきました。近距離の対処で一杯な私は回避できず、光線は私のみを削ります。

「くっ！【霊体偽造】！」

遠距離型をどうにかするため分身体を生み出し、攻撃されるが残った最後一機、刀と光線を放つ羽を携えた3機目がそれを邪魔します。私も分身体も攻めあぐねていると、遠距離型が円盤の中心にエネルギーを貯め始めました。そのエネルギーは肌で感じ取れるほど膨大でいくら精霊の私でもひとたまりもありません。そして、残酷にもそのエネルギーは私へと照準を定め放たれる——

——事はありませんでした。

遠距離型の胸を剣が貫いたのです。遠距離型はスパークをはじけさせながら、そのまま落下していききました。

「やーちゃん、無事!?!」

「はるちゃん！」

遠距離型の胸を貫いたのはニベルコルとの戦いを終えた、はるちゃんでした。

「ここからは私も相手だ、クソジジイ!!」

「申し訳ありません！千陽お嬢様を逃しました」

「なにをしてるんだ！くっそ！お前が前に立って戦え！ヤオヨロズで援護する！認証、

魂月国親。ヘイザナミ〉変更、ヘイザナギ〉展開」

「はっ！」

はるちゃんを追うように戻ってきた中居さんとおじいちゃんに対して、私とはるちゃんのは向き合い戦闘に備えます。しかし、そこから戦闘になることはありませんでした。

「なっ!!——何をしている!!中居!!」

中居さんが後ろからおじいちゃんを貫いたのです。突然の裏切りには目を白黒させてしまいます。中居さんの持つ刀型のブレードからは炎が吹き出しておりおじいちゃんを段々と焼いて行きました。そして、中居さんが刀を抜くとおじいちゃんには力なく地面に落ちていきました。私は謎の行動をとった中居さんから目を逸らさず警戒を続けました。

「大丈夫だよ。やーちゃん」

「はるちゃん？」

警戒を解くように促したのは、まさかのはるちゃんでした。そして、困惑している私に中居さんが近づいて来ます。中居さんは私達の近くまで来ると、CR—ユニットを除し、それと同時に何かの端末を取り出し操作します。すると、中居さんの顔がみるみると変化し、はるちゃんにそっくりな金髪蒼眼になりました。

「あ、貴女はいったい……」

私が恐る恐る、問いかけると中居さんは優しい笑みを浮かべながら答えました。

「私の名前は、フレア・ステュアート。ラタトスクのメンバーで魂月重工の潜入スパイ。それから、貴女の叔母にあたるわ」

「は？へえ？ええ?!?!」

突然の情報に頭がついていかず変な奇声を上げてしまいました。気がしませんがそんな事よりも、お母さんの姉妹?!中居さんが？それにラタトスクのメンバー？一体全体どうなってるんですか!?

「ねー、私もビックリしたよ」

「それで済ましていい問題じゃないですよ!」

「でも、この人私に似てない?」

「確かに……そうですけど……」

「ぶっ、くくく——」

はるちゃんと言い争いをしていると、中居さんもといフレア叔母さん？が笑いだししました。

「あく、ごめんごめん。なんか2人の両親。姉さんと義兄さんを見てみたいで」「お父さんとお母さんをですか？」

「うん、2人とも顔は姉さんにそっくりだし、千陽ちゃんに至っては瓜二つ。性格は千陽ちゃんは義兄さん似で、千夜ちゃんが姉さん似かな」

フレア叔母さんが懐かしむようにした後、直ぐに切り替えた顔し、私たちに向き直ります。

「さて、千夜ちゃん、それに千陽ちゃん。現在、ラタトスクはDEMとの戦闘中でアイザック・ウエストコットがフラクシナスに乗り込んでからは通信が出来てないわ。一刻を争う状態だから加勢に行つて欲しいのだけど」

「分かった！フレア叔母さん！」

「おぼっ！……フレアさんつて読んでちょうだい？」

オバサンと呼ばれたのがよっぽど嫌だったのかフレアさんは訂正を求めてきました。顔は笑顔のようですが物凄く怖いです。

「わ、分かりました、フレアさん。あと、はるちゃんとおじいちゃんをお願い出来ますか？」

「やーちゃん!? 私もまだ戦えるよ!——いでえ!」

詰め寄ってくる、はるちゃんの額にデコピンをいれます。度重なる戦闘に初めての精霊化、精霊化の無理やり解除。これだけの事があって、まだ戦えるわけがありません。

「大人しくしてなさい。お姉ちゃんの目は誤魔化せませんよ」

「姉と言っても数秒——痛いっ!分かった!わかったからデコピン止めて!」

ひいーとおデコを押さえながら、はるちゃんはフレアさんの後ろに隠れてしまいました。

「それでは、行ってきます」

私は浮かび上がり、土道の元へ向かうのでした。